

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第490集

平成17年度発掘調査報告書

釜沢館跡	下大谷地I遺跡
川口I遺跡第1次調査	宮古道路関連可能性あり①
宮沢遺跡第11次調査	宮古道路関連可能性あり②
本宮熊堂B遺跡第30次調査	宮古道路関連可能性あり③
本宮熊堂B遺跡第31次調査	宮古道路関連可能性あり④
中村遺跡第1次調査	宮古道路関連可能性あり⑤
道上遺跡第1次調査	宮古道路関連可能性あり⑥
十文字遺跡	宮沢原下遺跡
八木沢II遺跡	山の神遺跡
八木沢駒込II遺跡	岩洞堤遺跡
賽の神遺跡	北丑転遺跡
八木沢III野来遺跡	ほか調査概報

2006

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

平成 17 年度発掘調査報告書



写真1 二戸市釜沢跡発掘調査前の状況



写真2 奥州市前沢区道上遺跡航空写真



写真3 二戸市川口1遺跡出土近世陶磁器



写真4 花巻市石鳥谷町中村遺跡出土縄文土器

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、平成17年度に当センターが発掘調査をした遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊したものです。全県下で41遺跡47件、179,413m²が調査され、旧石器時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。奥州市衣川区において、奥州藤原氏の時代の遺跡群が発見されたことをはじめとして、各地の調査で地域の歴史に新たな…ページを書き加えることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました委託者をはじめ、地元の教育委員会及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成18年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 合田 武

目 次

序

平成 17 年度の調査結果について

I 発掘調査報告

(1) 釜沢館跡 (二戸市).....	5	(5) 本宮熊堂B遺跡第 31 次調査 (盛岡市)	57
(2) 川口 I 遺跡第 1 次調査 (二戸市).....	25	(6) 中村遺跡第 1 次調査 (花巻市).....	67
(3) 宮沢遺跡第 11 次調査 (盛岡市)	47	(7) 道上遺跡第 1 次調査 (奥州市).....	93
(4) 本宮熊堂 B 遺跡第 30 次調査 (盛岡市)	53	(8) 十文字遺跡 (藤沢町).....	127

II 試掘・確認調査報告

(9) 可能性あり① (宮古市).....	149	(17) 八木沢Ⅲ野来遺跡 (宮古市).....	161
(10) 可能性あり② (宮古市).....	150	(18) 八木沢駒込 II 遺跡 (宮古市).....	164
(11) 可能性あり③ (宮古市).....	151	(19) 八木沢 II 遺跡 (宮古市).....	166
(12) 可能性あり④ (宮古市).....	154	(20) 宮沢原下遺跡 (奥州市).....	171
(13) 可能性あり⑤ (宮古市).....	155	(21) 山の神遺跡 (奥州市).....	175
(14) 獅の神遺跡 (宮古市).....	156	(22) 岩洞廻遺跡 (奥州市).....	179
(15) 可能性あり⑥ (宮古市).....	158	(23) 北壯軒遺跡 (奥州市).....	183
(16) 下大谷地 I 遺跡 (宮古市).....	159		

III 発掘調査概報

1 国 間 係

(24) 野中遺跡 (-戸町).....	187	(29) 宮沢原下遺跡第 1 次調査 (奥州市).....	192
(25) 野里上遺跡 (-戸町).....	188	(30) 六日市場遺跡 (奥州市).....	193
(26) 野里上 II 遺跡 (-戸町).....	189	(31) 繪田遺跡 (奥州市).....	194
(27) 中屋敷上遺跡 (-戸町).....	190	(32) 接待館遺跡 (奥州市).....	195
(28) 飯岡才川遺跡第 7 次調査 (盛岡市).....	191	(33) 衣の関道遺跡 (奥州市).....	196

2 独立行政法人関係

(34) 千足南遺跡 (田代畠村).....	199	(36) 細谷地遺跡第 9 次調査 (盛岡市).....	201
(35) 飯岡才川遺跡第 8 次調査 (盛岡市).....	200	(37) 向中野館遺跡第 7 次調査 (盛岡市).....	202

3 岩手県・市関係

(38) 板子屋敷 3 遺跡 (輕米町).....	205	(43) 本宮熊堂 A 遺跡第 29 次調査 (盛岡市)	210
(39) 館 II 遺跡 (二戸市).....	206	(44) 野古 A 遺跡第 29 次調査 (盛岡市)	211
(40) 飯岡才川遺跡第 9 次調査 (盛岡市).....	207	(45) 新平遺跡 (北上市).....	212
(41) 細谷地遺跡第 10 次調査 (盛岡市)	208	(46) 芦蒿遺跡 (北上市).....	213
(42) 向中野館遺跡第 8 次調査 (盛岡市).....	209	(47) 里古屋遺跡 (住田町).....	214

平成 17 年度の発掘調査結果について

今年度は、37 遺跡 43 件 155,498 m²で発掘調査を開始し、最終的には 41 遺跡 47 件 179,413 m²の調査を終了した。そのうち、試掘・確認調査は 15 遺跡である。遺跡の所在地は県内 4 市 8 町 2 村（発掘調査時の市町村名による）に及んでいる。

旧石器時代の調査はなかった。縄文時代では、後期の集落遺跡として軽米町板子屋敷 3 遺跡（38）がある。山間にある小規模な遺跡ながら、竪穴住居跡 8 棟や土器埋設遺構・土坑などが見つかっている。後期の中でも時間を異にする集落がごくわずかに場所を変えながら短期間営まれたものと考えられる。一戸町野里上 II 遺跡（26）は中期末～後期初頭と晩期の小規模な集落遺跡で、それぞれ 2 棟の竪穴住居跡を調査している。盛岡市細谷地遺跡（36・41）では、これまでに周辺では発見例のなかつた晩期前葉の竪穴住居跡 1 棟が見つかり、廃絶後は墓として転用した様子が観察された。58,700 m²という広大な面積を調査した奥州市（旧胆沢町）宮沢原下遺跡第 1 次調査（29）からは溝状や椿円形・円筒形の陥入穴状遺構 208 基が検出された。大部分は縄文時代に属するが、一部の遺構の埋土最下部に十和田 a 降下火山灰が堆積していることから、平安時代に属するものもあることが判明した。

次の弥生時代は土器がいくつかの遺跡で散見されるが、細谷地遺跡で焼土遺構 1 基が見つかっている以外に遺構はなく、古墳時代の遺構や遺物は皆無だった。

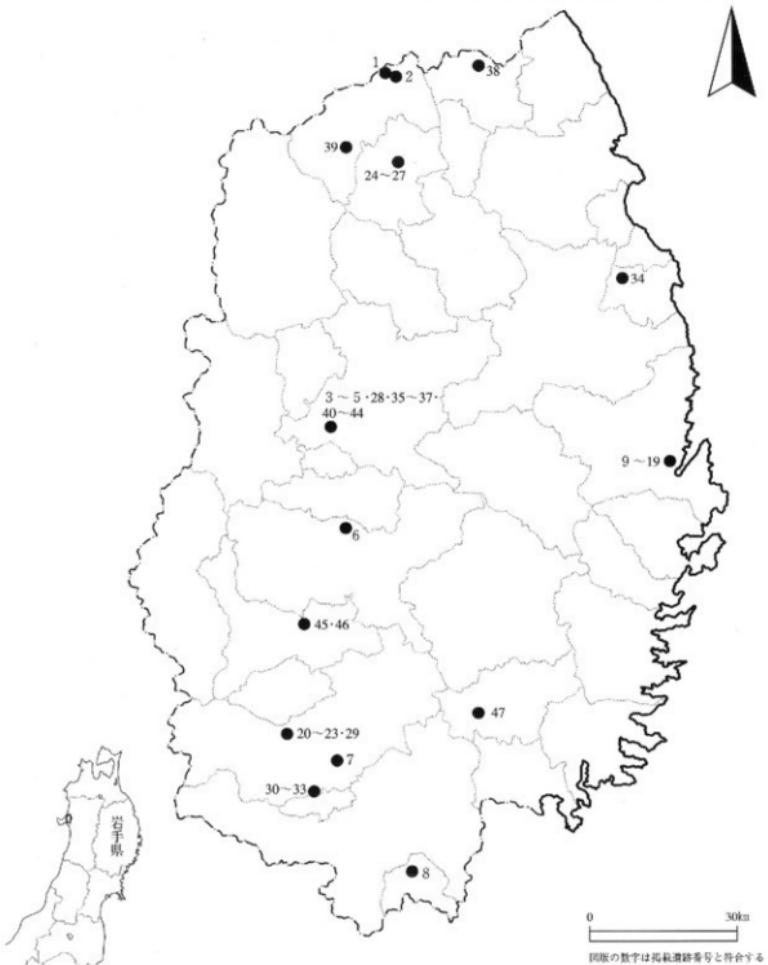
奈良時代の集落遺跡としては細谷地遺跡ほかがある。細谷地遺跡は平安時代の集落と複合しており、埋没した旧沢跡に沿い、あるいは重なって 11 棟の竪穴住居跡が検出された。一戸町野里上遺跡（25）では奈良時代末～平安時代初頭の竪穴住居跡 2 棟を調査し、内 1 棟は一辺が 8 m を超える大型のものであった。盛岡市野古 A 遺跡（44）でも竪穴住居跡 1 棟が見つかっている。

平安時代では、上述の細谷地遺跡から竪穴住居跡 46 棟と掘立柱建物跡 1 棟・墓塚 1 基などが検出された。大部分が 9 世紀に属するもので、10 世紀の遺構は少数である。遺物の中には内外黒色処理の壺の外面に樹木と推測されるものを細線によって描いた「刻画文」のような特殊例がある。過去の調査と併せると 100 棟を超える竪穴住居跡を調査したことになり、台太郎遺跡や本宮熊堂 B 遺跡など、周辺の同時代の大規模集落遺跡との関係が注目される。そのほか、同一事業に連絡して調査され、近接した位置にある向中野館遺跡（37・42）や飯岡才川遺跡（28・35・40）・野古 A 遺跡も平安時代の集落遺跡である。

衣川左岸築堤工事に関連した奥州市（旧衣川村）六日市場・細田・接待館・衣の関道の 4 遺跡（30～33）はマスコミ等で大きく報道され話題になった。低位段丘縁で、東から西へ六日市場・細田・接待館と連続する遺跡は東端が南北に延びる六日市場遺跡の溝で限られ、それより東には遺構が存在しない。現在のところ、六日市場・細田・接待館の 3 遺跡で併せて 84 棟の掘立柱建物跡を復元しているが、12 世紀に属することが明確なものは少なく、中・近世の遺構も含まれていることが予測される。なお、接待館遺跡の一画は幅 7～8 m、深度 2 m の堀に囲まれていることが推測でき、東西での幅は 120m に及ぶ。内側の中央付近には方形の区画溝も存在し、両者が時間差をもって存在したのか、あるいは同時存在なのかが注目される。衣の関道遺跡は上述の 3 遺跡より一段低い沖積段丘に立地する遺跡で、やはり 12 世紀に属すると推測される掘立柱建物跡や池状遺構・テラス状遺構ほかを調査している。衣川の北岸に平泉藤原氏に関連する遺跡が存在することを広範囲の発掘調査によって明らかにできたことは、地域の歴史の解明にとどまらず平泉研究に大きな影響を与えることになろう。調査途中の遺跡もあるが、遺構と遺物の詳細な分析と検討を行い、遺跡の実態を明らかにして考古学的な見地から評価を与えることが今後の課題である。

中世の遺跡としては二戸市（旧淨法寺町）館II遺跡（39）を調査した。全体では10万m²を超す館の北端の一部を調査したにすぎないが、複数の堀で区画され、曲輪には竪穴状遺構や竪穴建物跡・掘立柱建物跡など多くの施設が造られ、重複関係からは数期の変遷があることが見てとれる。16世紀にこの地を支配し、淨法寺城を拠点にした淨法寺氏に関係する館跡であろう。同時期の館跡と推測される二戸市釜沢館跡（1）は確認調査とトレーニングによる堀跡の部分調査をしたにすぎないが、上幅27.5m、深度16.2mの大規模な薬研堀を作った跡であることが確認できた。

（首席文化財専門員兼調査第一課長 三浦謙一）



平成 17 年度調査遺跡位置図

I 発掘調査報告

かまさわだて
(1) 釜沢館跡

所 在 地	二戸市釜沢字寺館地内	遺跡番号・略号	I E 79-1077 K S D-05
委 託 者	二戸地方振興局農政部農村整備室	調査対象面積	1,000 m ²
事 業 名	畑地帯総合整備事業（担い手育成型）	発掘調査面積	1,000 m ²
発掘調査期間	平成 17 年 9 月 1 日～10 月 17 日	調査担当者	横井猛志・西澤正晴

1. 調査に至る経過

釜沢館跡は、畑地帯総合整備事業（担い手育成型）舌崎地区の事業区域内に位置しているため、当該事業の施行にともない発掘調査を実施することとなったものである。

本地区は青森県との県境に位置し、一般河川馬淵川沿いに拓けた、りんご・きゅうり栽培を主体とする畑作地帯である。

地区の現状は、畑地へのかんがい用水施設が未整備であり、農道幅員が狭小なため、生産性・品質・物流に支障をきたしている。そのため、国営事業で水源・幹水路を、本事業で支線用水路、末端かんがい施設、農道等を整備し、計画的・安定的生産や品質の向上及び多目的用水の活用等を図り、併せて生活環境の向上に寄与するものである。

当該事業区域の埋蔵文化財包蔵地に係る試掘調査については、当該事業の施行主体である当室が岩手県教育委員会事務局および二戸市教育委員会に依頼し、平成 14 年度に実施した。

その結果を踏まえ、当室が発掘調査を財團法人岩手県文化振興事業団に委託することとなったものであり、発掘調査は平成 15 年度に続き 2 度目となる。

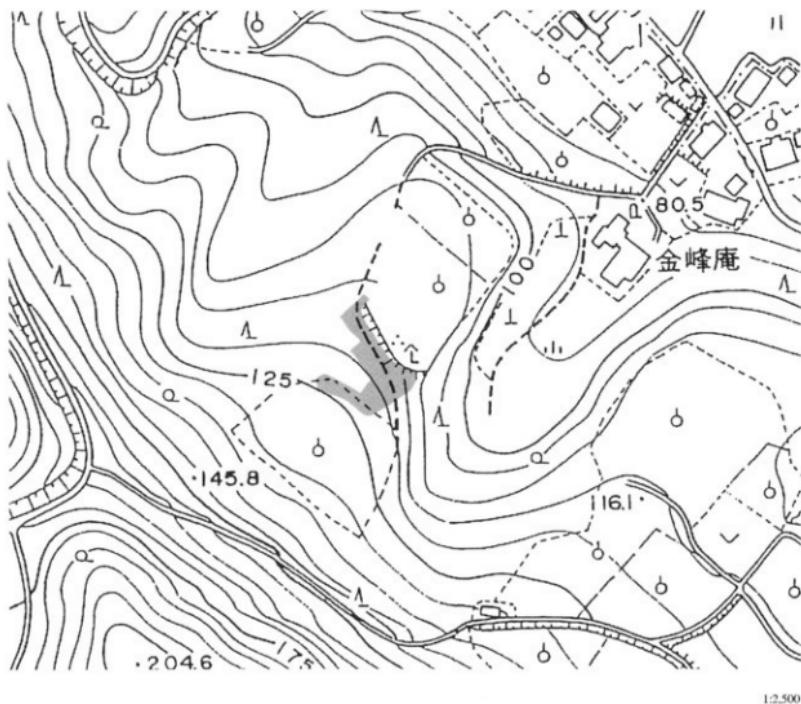
本発掘調査については、岩手県教育委員会から平成 17 年度事業として実施することとして、当室へ通知されたものである。

(二戸地方振興局農政部農村整備室)



第 1 図 遺跡の位置

1:25,000 二戸・陸奥振興



第2図 調査区の位置

2. 遺跡の位置と立地

本遺跡は二戸市の最北端、いわて銀河鉄道金田一温泉駅の西北西約3.9kmに位置し、およそ400m北方には青森県三戸町との県境をのぞんでいる。また、市内の中心を北流し八戸湾にそそぐ馬瀬川が大きく蛇行し、それによって形成された舌状地形の南方、寺館山から東に延びる尾根状の丘陵の突端に立地している。釜沢館跡は本館と古館とに分かれているが、今回の調査範囲は前回の調査範囲（岩文埋 2004：土坑2基検出）から北西約200mの位置にあたり、本館の堀跡を中心として南北の平坦地を含んでいる。標高はおよそ115～124mである。

3. 基本層序

本調査区の基本層序は以下の通りである。なお、土層の観察および柱状図の作成はトレンチ1堀跡の両曲輪斜面において行った。

- I層 10YR6/1 暗灰色粘質土 現表土 (層厚 20～30 cm)
- II a層 10YR5/6 黄褐色土 盛土 1
縹まりやや強、粘性中、十和田八戸テフラ(火碎流)のブロックを多く含む。(層厚 0～32 cm)
- II b層 10YR3/2 暗褐色土 盛土 2
縹まりやや強、粘性中、十和田南部テフラ、同八戸テフラ(火碎流)を多く含む。

(層厚 0 ~ 44 cm)

II c 層 10YR3/1 黒褐色土 盛土 3

縮まり中、粘性中、十和田南部テフラ、同中振
テフラを多く含む。(層厚 0 ~ 32 cm)

II d 層 10YR3/1 黒褐色土と 10YR3/3 暗褐色土の互層

盛土 4 縮まり中、粘性やや弱、十和田南部テ
フラを多く含む。(層厚 0 ~ 80 cm)

III 層 10YR3/1 黒褐色粘質土 (層厚 0 ~ 18 cm)

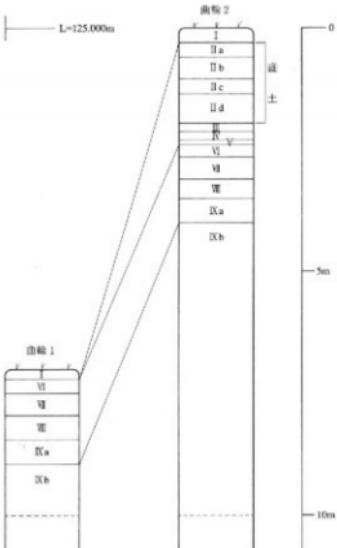
IV 層 10YR3/3 暗褐色粘質土 (層厚 0 ~ 14 cm)

V 層 2.5Y8/8 黄色浮石 十和田中振テフラ層
(層厚 0 ~ 10 cm)

VI 層 7.5YR3/4 暗褐色粘質土 遺構検出面 1

十和田中振テフラ、同南部テフラを含む。
(層厚 0 ~ 60 cm)VII 層 5 YR5/8 明赤褐色浮石 十和田南部テフラ層
遺構検出面 2 (層厚 44 ~ 46 cm)

VIII 層 7.5YR3/4 褐色粘質土 漸移層 (層厚 40 cm)

IX a 層 7.5YR5/6 明褐色火山灰 十和田八戸テフラ・
降下火山灰層 (層厚 50 cm)IX b 層 10YR5/1 灰白色火山灰 十和田八戸テフラ・
火山灰碎流層 (層厚不明)

第3図 基本土層柱状模式図

曲輪 1 では VII 層上面および VIII 層上面までの削平整地がみられ、すべての遺構はこれらの削平面において確認された。また曲輪 2 では 4 層 (II a ~ d 層) にわたって盛土整地 (あるいは土塁か) が確認された。いずれも築城時にともなう普請の痕跡と考えられる。

4. 調査の概要

今回の調査区は本館の堀跡を中心に東西の平坦地に及んでおり、堀跡の北東側を曲輪 1、南西側を曲輪 2 とした。なお本調査は確認調査が主体となっており、遺構の大半は検出作業で調査を終了している。そのため、適宜サブトレンチを設定し、その観察結果から各遺構の性格を判断しているが、実際のものとは異なる可能性がある。唯一堀跡のみ 3 m 幅のトレントによりその規模と堆積土層を確認している (トレント 1)。なお曲輪 1においては平坦部を全面検出したが、曲輪 2においてはまずトレントによる調査を行った (トレント 2 ~ 4)。その結果、範囲内全てが盛土部分であり、かつ盛土上に構築された遺構が確認されなかったためトレント調査のみで終了した。

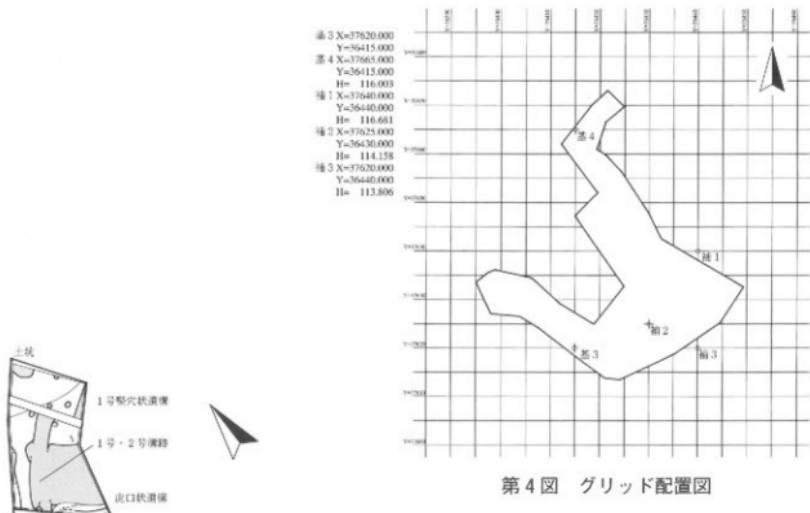
(1) 検出遺構

今回検出された遺構は、曲輪 1において竪穴状遺構 3 基、虎口状遺構 1 箇所、土坑 1 基、溝 2 条、柱穴状土坑 5 基、曲輪 2 において盛土遺構 (整地層) 1 箇所、そして両曲輪間の堀跡 1 条、犬走り状遺構 1 条であった。以下に詳細を列記する。

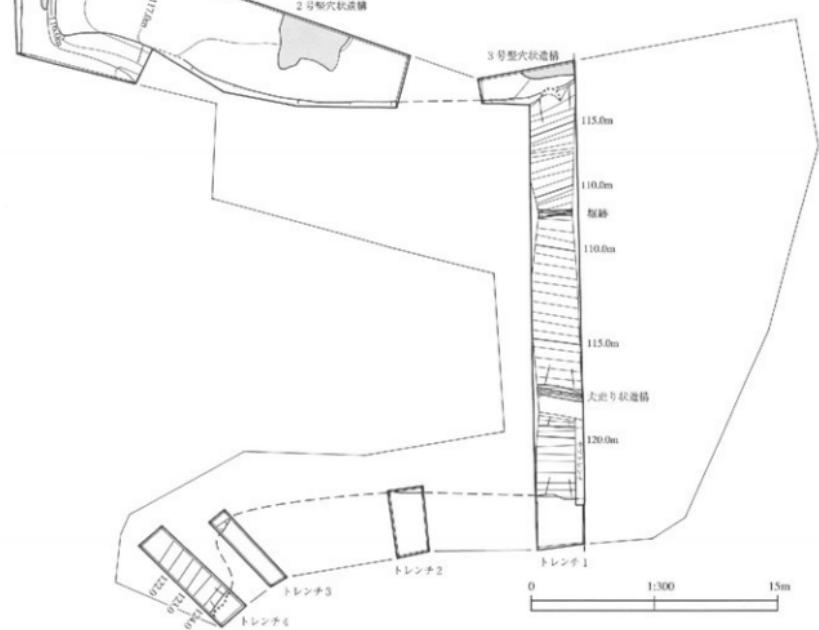
曲輪 1 の遺構

<竪穴状遺構> 調査区の北側、中央、南側で 1 基ずつ検出された。いずれも調査区外にのびており全体形が把握できるものはないが、概ね方形を呈するものと思われる。また 2 号竪穴状遺構において張り出し部を有することが確認された。検出規模は 1 号竪穴状遺構で 2.56×0.40 m、2 号竪穴状遺構

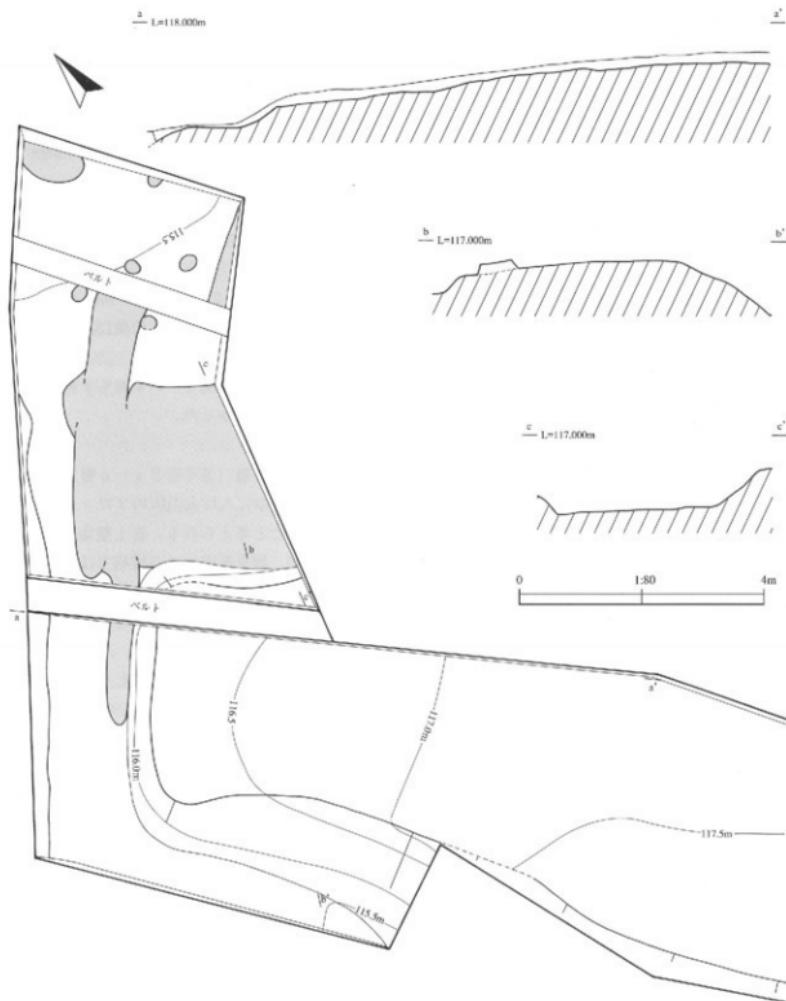
(1) 美沢館跡



第4図 グリッド配置図



第5図 遺構配置図



第6図 虎口状造構エレベーション

(1) 鎌沢跡跡

は主体部 4.24×2.36 m、張り出し部が 1.28×1.04 m、3号竪穴状遺構では 3.22×0.76 m であった。なお、第2号竪穴状遺構においてはサブトレンチより實際に柱穴状のプランが確認されており、竪穴建物跡である可能性が高い。

<虎口状遺構> 調査区北側で検出された。地山の削り出しにより土壘状の高まりが形成されており、その突端に隣接して方形の黒色土プランを確認した。防壁が途切れるとこから入り口に関連する施設と捉え虎口状遺構とした。削り出しの地山は幅 6.05 m、壁高 0.8 mで方形プランは 3.6×3.28 m であった。曲輪内での位置は南西隅、山側に当たり、搦手（裏手）に相当するものと解される。

<土坑> 調査区の北隅において南側半分が検出された。全体形は定かでないが、概ね長楕円形を呈するものと考えられる。開口部の検出幅は 1.4×0.88 m であり、十和田南部テフラ（To-Nb）混じりの黒色土が堆積する。

<溝> 調査区の北側で2条重複して検出された。1号は 5.74×0.92 m、2号は 7.04×0.64 mで、前者が後者を切っている。いずれも十和田南部テフラの混じる黒色土が堆積する。また虎口状遺構とも重複しているが、新旧関係は不明であった。

<柱穴状土坑> 調査区の北東隅に5基まとめて検出された。径 $26 \sim 34$ cmで、いずれも十和田南部テフラ混じりの黒色土が堆積する。柱痕跡、配列の規則性は確認できなかった。

曲輪2の遺構

<盛土遺構>すべてのトレントにおいて確認されており、堆積土は4層（基本層Ⅱa～d層）に大別できる。確認できた範囲では最大で 1.9 mの高さに及び、また土層中に八戸火山灰のブロックが混入していることから、削平整地した際の地山や堀の掘削土を利用したと考えられる。盛土整地にしてはあまりにも大規模であり、土壘と見るのが妥当であると考えるが、調査範囲内での様相では断定できなかった。現況では土壘の痕跡は確認できなかったが、畠地造成の際のものであろうか重機による攪乱がうかがえ、その際に一面平地化したものと考えられる。

その他の遺構

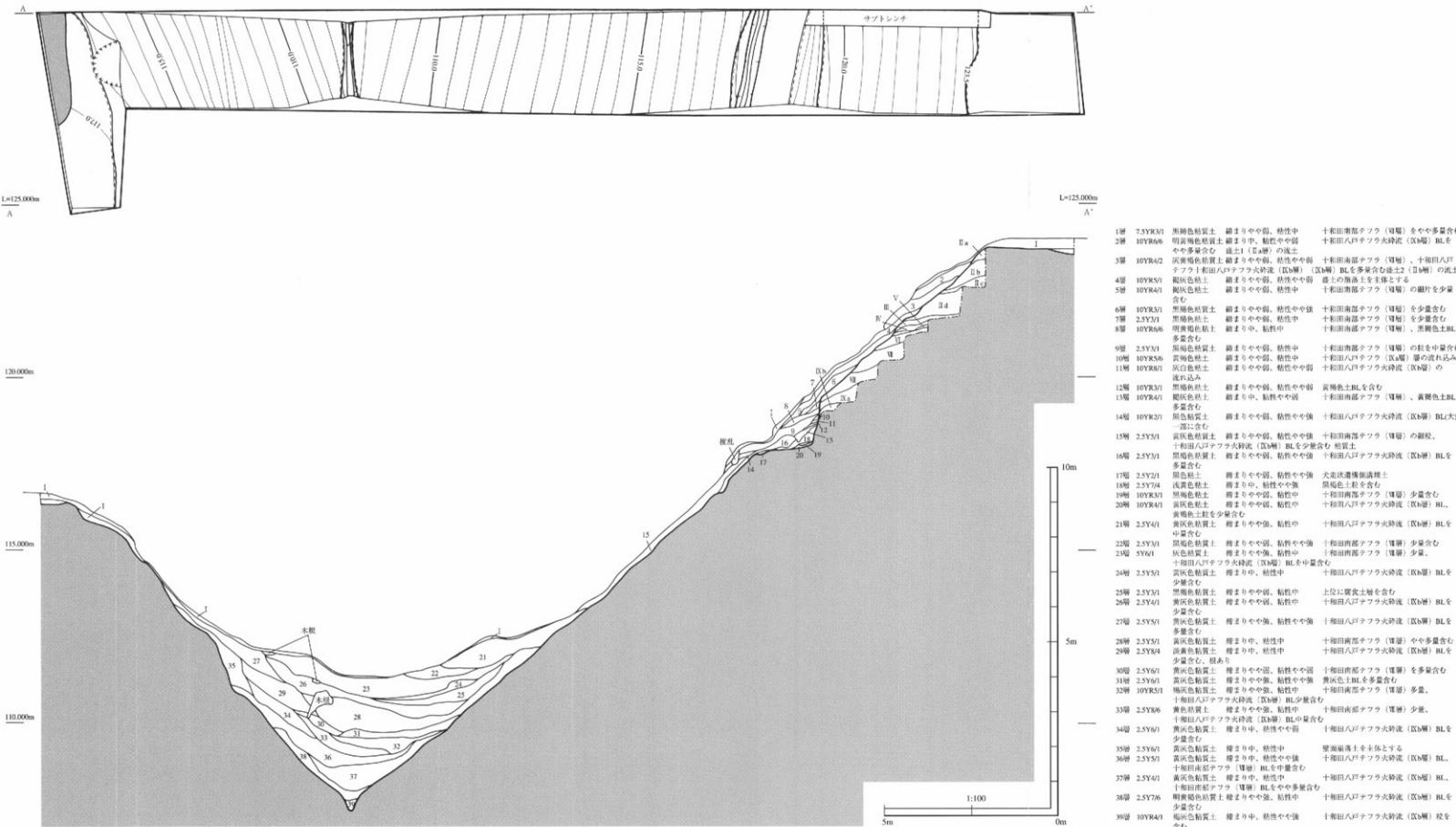
<堀跡>両曲輪をのせた尾根を真横に分断する形で、堀底は曲輪1を巻くように湾曲しながら両脇の腰曲輪へと続いている。規模は実効堀幅 27.55 m、垂直壁壁高 16.23 mと非常に巨大で、現状においても埋没しきらずに残されていた。断面形は薬研状を呈し、曲輪1側に 41° 、曲輪2側に 48° で立ち上がる。堆積土は地山ブロックが主体となっており、壁面の崩落土が大半を占める。曲輪2側の斜面中段付近には犬走り状の遺構が確認された。また普請の際に生じた大量の土は曲輪2の盛土や曲輪1両脇の腰曲輪へ利用されたものと考えられる。遺物は底部埋土中位から下位にかけて寛永錢が3点、下位から凹石、台石が1点ずつ出土している。

<犬走り状遺構> 堀跡の曲輪2側の斜面で確認した。幅は 1.7 mで堀底側に幅 0.32 mの小溝を有している。全体を調査していないので定かでないが、遺構上にそのまま現在の林道が設けられており、当遺構も同様に曲輪2の東側から曲輪1の西側へ、また堀底から曲輪1の両腰曲輪への動線を確保していたものと考えられる。

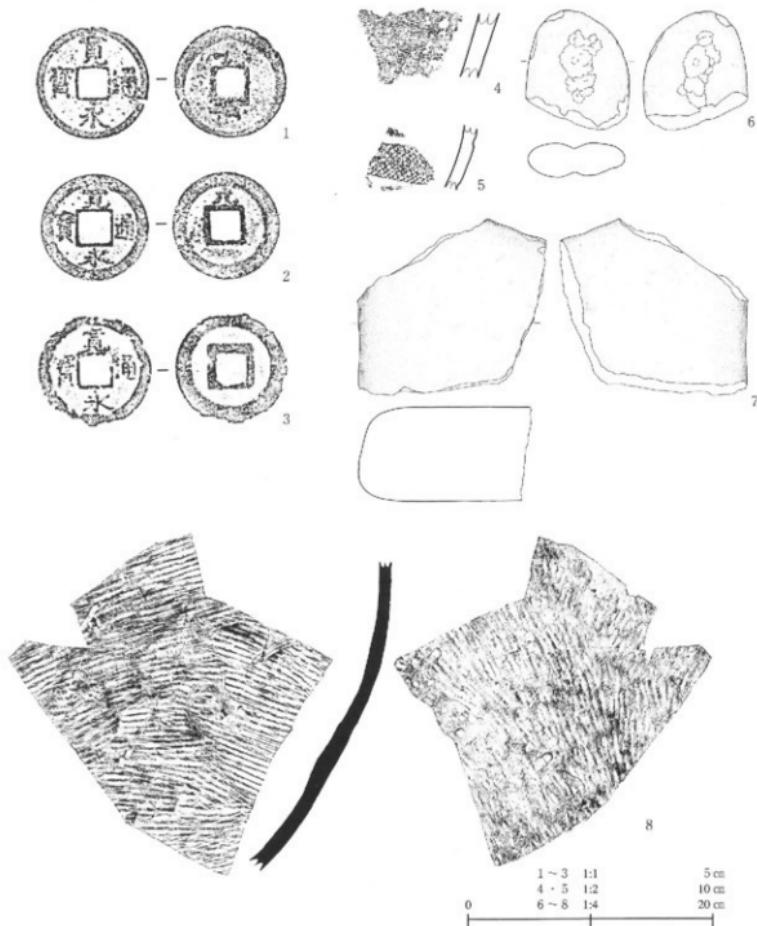
(2) 出土遺物

今回出土した遺物は縄文土器片2点、須恵器片1点、台石1点、凹石1点、寛永通寶3点と非常に少数であり、またいずれも館の存続期に伴うものではなかった。以下に詳細を列記する。

<縄文土器> 2号竪穴状遺構付近において表土中より2点出土した。いずれも小破片で、6は晩期中葉（大洞C:式期）の鉢の体部とみられ磨消縄文が観察される。7は無文鉢の胴部破片であるが時期は不明である。



7 図 据跡平・断面図



第8図 出土遺物

<須恵器> 3号竪穴状遺構付近において表土下より1点出土した。甕の胸部破片で外面に平行叩き具痕、内面には平行當て具痕が見られる。

<凹石>堀跡底部埋土下位より1点出土した。安山岩製で両面に使用痕が観察される。

<台石>堀跡底部埋土下位より1点出土した。花崗閃緑岩製で断面形状は扁平である。明瞭な使用痕は観察されなかった。

<寛永通寶>堀跡埋土中位から下位にかけて3点出土した。いずれもいわゆる新寛永(ハ貝寶)で元禄10(1697)年以降の鋳造とされる。背文は「長」、「元」と無背銭が各1点である。

5. 釜沢（樺沢）館について

＜縄張り＞釜沢（樺沢）館は複郭式の山城であり、西の釜沢館（本館）、東の常楽寺館（古館）からなる。釜沢館（本館）はいわゆる主郭と考えられ、南北160m、東西70mにおよび、東西を自然の沢を利用して画されている。また館跡の東や西側には腰曲輪が存在するが、東側は現在墓地となっており一部地形が改変されている。館跡北側は急な段差となって低地と区画されており、この部分にも何らかの普請の痕跡が予想される。館の南端は明瞭な区画施設が確認されておらず、丘陵へとつづいている。しかし、現在の林道が設置されている付近に、かすかにではあるが溝状に窪んでいる地形がうかがえ、あるいはこれが区画施設かもしれない。

東に隣接する常楽寺館（古館）は、釜沢館（本館）と同等の規模で、本館側に腰曲輪を有するとみられる。古記録や伝承では館主小笠原氏の菩提寺である常楽寺が築かれていたとされる。

＜城主・館の沿革＞次に、館の城主について触れたい。ここでは主に『二戸郡・九戸郡古城館址考』（染部 1971）を参考にした。

初代城主は小笠原伊勢守信淨といい、もとは信濃の深志城城主小笠原信濃守長時の末弟であったとされる。天文14（1548）年、甲斐の武田信玄に攻略された塩尻戦の合戦の末、伊勢守は敗走し、奥州南部にあった小笠原家の領地であった明野（現在の釜沢）に落ち着き、明野与四郎と名乗ることになったという。その後与四郎は明野の地に常楽寺館を築き、一戸城城主、南部大和守宗綱の娘を内室として迎えるなど、周辺地域との関係を強化している。天文22（1553）年、南部大和守が津軽大浦為則に招抱えられた際、与四郎もこれに従った。弘仁2（1556）年には旧姓小笠原に復し、小笠原伊勢守信淨を名乗り家老となつたが、その後詳細は不明であるが3000石を没収され、天正15（1587）年には南部の樺沢（釜沢）に立ち返ったという。天正19（1591）年、いわゆる「九戸の乱」では2代目城主となった小笠原伊勢守重清は九戸政実と親戚関係にあった。九戸城落城後、南部信直によつて600人余の兵をさしむけられ落城し、重清は自決したとされる。

このように、文献記録によると釜沢館は戦国時代末期に存続した館跡であり、いわゆる「九戸の乱」に関係していたことがわかる。城主については、地元では上記とは異なる伝承もありまだ確定されたわけではないが、山來不明の館跡が多いなかにあっては重要な情報であろう。

6.まとめ

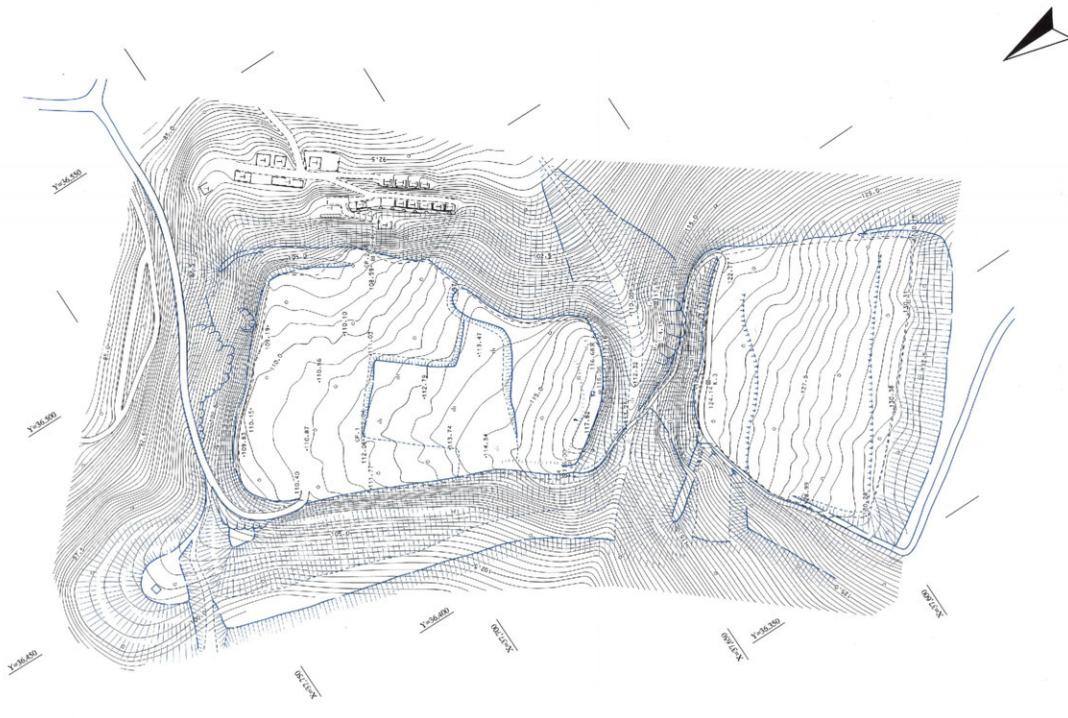
今回の調査成果について、再度触れつつまとめとしたい。

館跡からは地表面の観察どおり、堀をはさんで両側に曲輪が2箇所確認された。北側の曲輪1において前述の通り堅穴状遺構が検出されるなど建物跡が存在することが確認された。また整地の痕跡も明らかになった。しかし、主体と考えられる中央部は調査範囲外であり、曲輪の全体像には迫ることができなかつた。また確認調査であったことも相俟つて当時の遺物と断言できるものは皆無であった。

曲輪1は現在、果樹栽培に利用されているが、その開墾の際に刀剣が出土したといい、未掘範囲には館の存続期の遺物・遺構が埋蔵されているものと想定される。

曲輪2においては大規模な盛土遺構が確認された。最大高が約2mにも及ぶもので、堀の掘削とともに大規模な普請が行われたことがわかる。この盛土は堀の一部でもあり、整地堀でもある。盛土の範囲がどの程度まで及んでいるかは確認できなかつた。なお、曲輪2では調査区が周縁部でもあり、建物跡は確認できない。遺物については館跡にともなうものは出土しなかつた。

今回は部分的な調査であり、かつ確認調査がその主体であったため得られる情報も限られていた。そのなかで特筆すべき成果として堀跡の構造と規模がおよそ判明したことがあげられる。堀跡の上幅が約27m、深さが最大で16mという規模は山城においては県内では類を見ないものである。この



(※地図は笠野秀文氏作製のものを一部改変して転載した)

0 1:1000 50m

第9図 現況地形図および縄張図

ような大規模な堀が普請されていることから、釜沢館跡は周辺地域においては最重要の館であったと思われる。このような規模の必要性を考えると、非常に興味深いものがある。当時の絵図によると館跡の直下には街道が通っている。これは難所である蓑笠町をへて三戸へと通じる主要な交通路であり、この地区は交通の要衝であったと考えられる。また、この地は文献などから三戸南部氏と九戸南部氏の勢力範囲の境界にあたるなど、政治的にも重要な地域であったことが予想される。そのように考えるとこの館跡の巨大な堀の必要性が理解できるかもしれない。堀跡の普請された時期については今回確認できなかったため上記の点は推定の域をでないが、今後の調査には期待がもたれる。

釜沢館と沢をはさんで東側にある古館（常楽寺館）との関係についても調査が及んでいないこともあり情報も少なく不明といわざるをえない。いずれ相互関連的な館であると考えられるため今後合わせて検討していく必要がある。このように釜沢館跡の調査は端緒についたばかりであり、今後の調査や研究に期待することが大きい。

なお、釜沢館跡に関する報告は、これをもって全てとする。

引用・参考文献

- 岩手県教育委員会 1986 『岩手県中世城館跡分布調査報告書』 岩手県文化財調査報告書第 82 収
 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004 『(28) 釜沢館跡』 『岩手県埋蔵文化財発掘調査結果報 (平成 15 年度)』
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第 445 収
 千田 麻博 1993 『城館調査ハンドブック』 新人物往来社
 烏鳥 正雄 1971 『日本城郭辞典』 東京堂出版
 南部町教育委員会 1994 『聖寿寺館跡』 南部町埋蔵文化財調査報告書第 1 収
 永井 久美男 1996 『日本出土銭銘文』 兵庫県銭銘文調査会
 沢鈴 愛三 1978 『南部諸城の研究 (草稿)』 みちのく双書第 33 収 吉森県文化財保護協会
 城岡市教育委員会 1999 『聖寿寺跡—南部重直墓所—発掘調査報告書』
 染部 善次郎 1971 『二戸郡・九戸郡古城館址考』 東北民俗研究会

報告書抄録

ふりがな 書名	へいせいじゅうなねんどはくつちょうさほうこくしょ 平成 17 年度発掘調査報告書	
副書名		
監修		
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書	
シリーズ番号	第 490 収	
著者名	松井 康吉 (編)・西澤 正晴	
調査期間	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	
所在地	〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯田 11 地割 185番地	
発行年月日	2006 年 3 月 27 日 TEL (019) 638-9001	
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	
釜沢館跡	市町村 遺跡番号 北緯 東経 調査期間 調査面積 調査原因	
	三戸市釜沢 釜沢館跡地内	03213 IE79-1107 40 度 141 度 20 分 15 分 44 秒 2005.09.01 ~ 2005.10.17 1,000 m ² 稽古帶合蓋備事業に伴う緊急発掘調査
所取遺跡名	種別 主な時代 主な遺構 主な遺物 特記事項	
釜沢館跡	城館跡 中世 山輪 2、削跡 1 条 大走り状遺構 1 条 堅穴状遺構 3 条 虎口状遺構 1 十字型 1 条、溝 2 条	
要約	釜沢館は戦国期の山城で、東西の 2 郎からなっている。今回の調査は西側の本館 (主郭) 跡において行われ、以上の遺構が検出されている。堀跡は現況においても埋没しきらずに残されており、測量の結果、堀幅約 28m、溝さ約 16m と非常に大きな施設であること、削底へ下る大走りを併設している事がわかった。その他の遺構に関しては確認調査の為、詳しくは知りえなかった。遺物は縄文土器、須恵器、礫石器、貨幣が出土しているが、前の存続期に伴うと考察されるものは出土しなかった。	

北緯度・経度は世界測地系における数値である。

(1) 釜沢館跡



釜沢館跡 航空写真 1



釜沢館跡 航空写真 2

写真図版 1 釜沢館跡 航空写真



堀跡調査前状況 1



堀跡調査前状況 2

(1) 釜沢館跡



犬走り状遺構



堀跡断面

写真図版 3 釜沢館跡 検出遺構 (1)



堀跡（底面付近）



堀跡断面

(1) 釜沢館跡



曲輪1近景（南から）



曲輪1近景（西から）



曲輪1現況



曲輪2現況



堤跡上部



犬走り状遺構



曲輪1及び3号竪穴状遺構



曲輪1



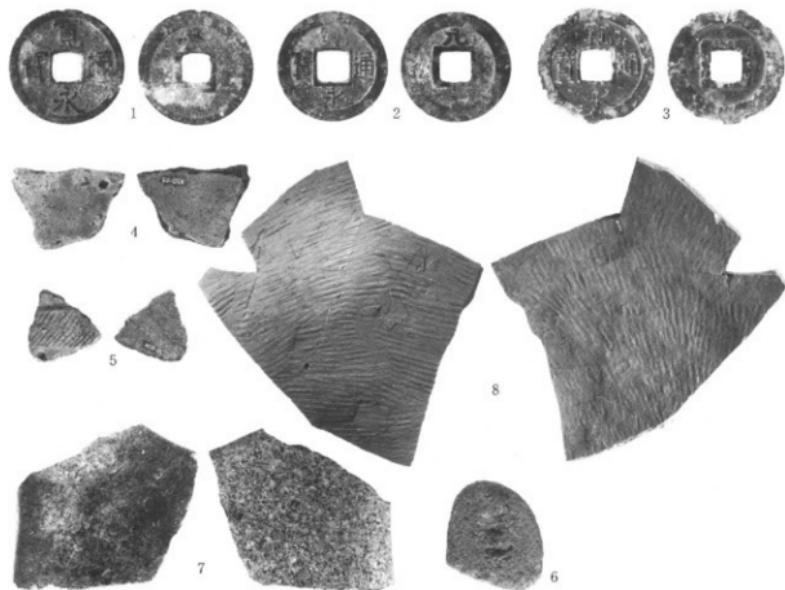
2号竪穴状遺構 検出状況



堀跡作業状況

写真図版 6 金沢館跡 棟出遺構 (4)

(1) 釜沢館跡



写真図版 7 釜沢館跡 出土遺物

銭貨観察表

団版 番号	種別	銭文		出土位置	層位	計測値				鋳造年(西暦)	備考
		面	背			外径(mm)	穿径(mm)	錢厚(mm)	重量(g)		
1	古銭	寛永通寶	「長」	トレンチ1(駆跡)	中～下層	23	6	1	1.89	1697～1747年、 1767～1781年	
2	古銭	寛永通寶	「元」	トレンチ1(駆跡)	中～下層	23	6	1	1.90	1697～1747年、 1767～1781年	
3	古銭	寛永通寶	無背	トレンチ1(駆跡)	中～下層	22	6	1	1.80	1697～1747年、 1767～1781年	

土器観察表

団版 番号	種別	器種	出土位置	層位	特徴			時期	備考
					外径	内径	厚さ		
4	繩文土器	鉢	曲輪1	I				不明	海綿状骨針混入
5	繩文土器	鉢	曲輪1	I	磨消繩文	原体:LR		大正C:式期	海綿状骨針混入
8	須恵器	甕	曲輪1	I	外面:平行タタキ目	内面:平行当て具痕		不明	

石器観察表

団版 番号	種別	器種	出土位置	層位	計測値				石質	備考
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)		
6	礫石器	凹石	トレンチ1(駆跡)	下層	(14.5)	(15.4)	7.2	312.49	安山岩(新生代新第三紀)	
7	礫石器	台石	トレンチ1(駆跡)	下層	(9.8)	8.5	2.9	2942.45	花崗閃綠岩(中生代白堊紀)	

(2) 川口I遺跡 第1次調査

所 在 地 二戸市金田一字川口 20番・21番
委 託 者 二戸地方振興局土木部
事 業 名 一般県道上斗米金田一線豊年橋地区道路整備事業
発掘調査期間 平成 17年 9月 1日～10月 27日

遺跡番号・略号 I E 79-1188・KG I-05
調査対象面積 1,000 m²
発掘調査面積 1,156 m²
調査担当者 千葉正彦・丸山直美

1. 調査に至る経過

川口I遺跡は、「緊急地方道整備事業豊年橋工区」の道路改良工事に伴い、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することとなったものである。

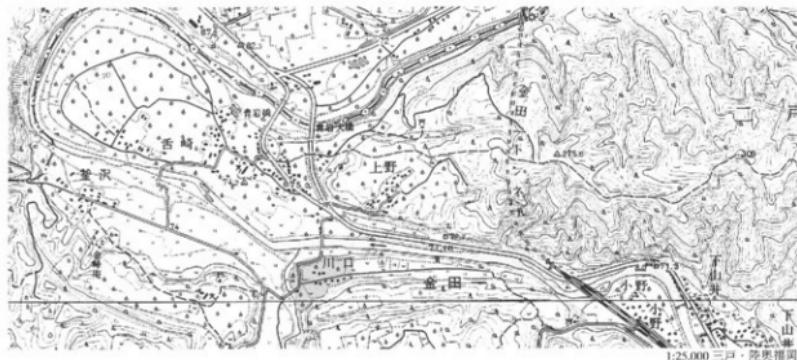
一般県道上斗米金田一線は二戸市北西部に位置し、主要地方道二戸田子線と一般国道4号とを連絡する道路であり、その機能は当該道路沿線の地域交通を広域的幹線道路である一般国道4号へと誘導する補助幹線道路である。事業対象地域である「豊年橋工区」においては、通学路としての指定や道路ネットワーク状況により生活基盤としての性格が強く、年間を通じて走行性や安全性および信頼性の確保のため平成12年度「地方特定道路整備事業」により事業着手したものであるが、平成17年度に新たに「緊急地方道路整備事業」の採択となり早期完成を目指すものである。

当事業の施工にかかる埋蔵文化財の取り扱いについては、二戸地方振興局土木部から平成16年12月1日付二戸土第459号「豊年橋地区道路整備にかかる埋蔵文化財の試掘調査（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

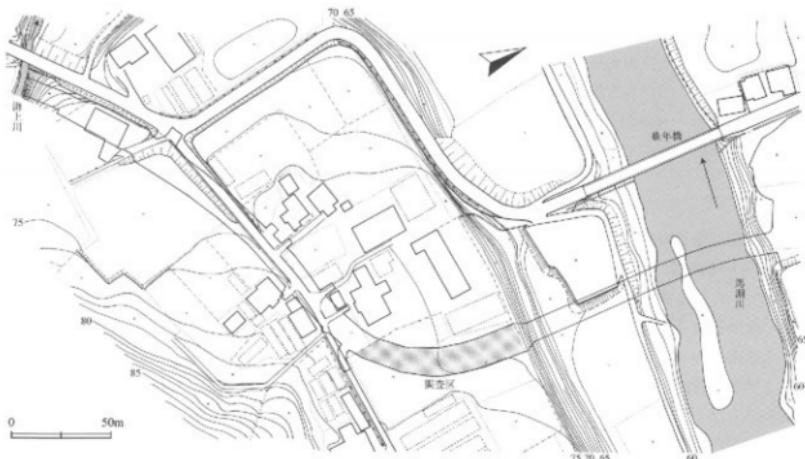
依頼を受けた岩手県教育委員会は平成16年12月2日に試掘調査を実施し、工事に着手するには川口I遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成16年12月3日付教生第1225号「一般県道上斗米金田一線豊年橋地区道路整備予定箇所における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木部は教育委員会と協議し、平成17年度に財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結して発掘調査を実施することとなった。

（二戸地方振興局土木部）



第1図 遺跡の位置



第2図 調査区と周辺の地形

2. 遺跡の位置と立地

川口I遺跡は岩手県北部の二戸市金田一に所在しており、JR東北新幹線二戸駅から北東へ約8.8km、青森県境に近い北緯40度20分16秒、東経141度16分38秒付近に位置している（世界測地系）。遺跡は市域を縱断して北流する馬淵川とその支流・海上川との合流点に近い、馬淵川左岸段丘上に載っている。馬淵川は二戸市付近でその両岸に、明瞭な崖線をもつ狭い段丘面を複数形成している。それらの段丘面は大池昭二氏、中川久夫氏らの研究により、低位から順に仁左平・福岡・米沢・堀野・中曾根の各面に分類されている。さらに、松山力氏の分類によれば米沢段丘はさらに細分され、高位面は中町段丘、低位面は堀野段丘の一部に含められている（岩手県文1983、1990a・bなど）。川口I遺跡の載っている面は標高72～76m、馬淵川との比高16～18mであり、南部浮石以上の十和田系火山灰を載せている。このことから当遺跡の所在する段丘は松山分類の「堀野段丘」（または「中町段丘」）に対比される沖積段丘であると思われる。

今回の調査は遺跡東部にあたり、緩やかに西に屈曲する概ね10m×100mほどの範囲である。調査地の現況は南北2面の畑地であるが、北側の畑地は数年前までは林檎畑だったものを抜根して造り替えたものである。そのため、北半部では抜根によって著しい搅乱を受けており、IV層より上位が搅拌された状態であった。なお、その抜根の際に多量の繩文土器が出土したという。後述のRA01付近のことではないかと推測される。以下、便宜的に北半部の畑地を「北区」、南半部のそれを「南区」と呼称する。

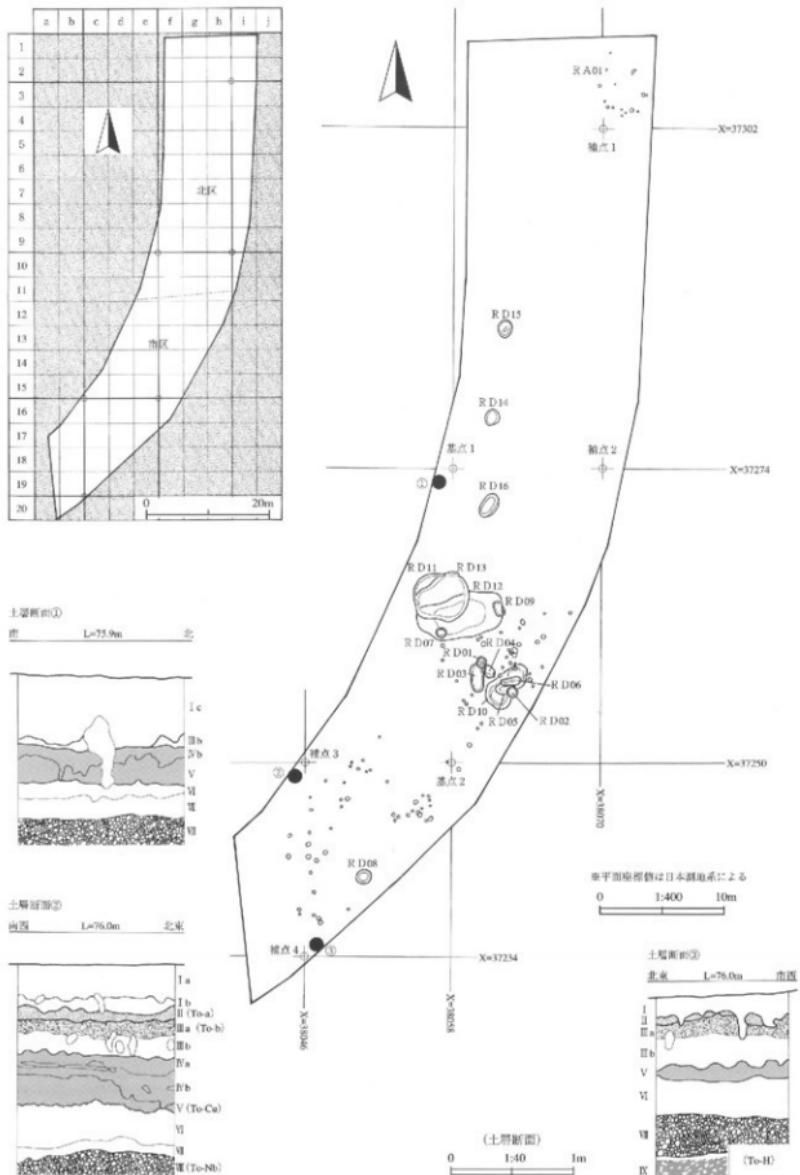
3. 基本層序

調査区の堆積土層は概ね次のとおりである（第2図）。

I層 I a層 10YR 4/2灰黄褐色～7.5YR 3/3暗褐色。シルト。表土、耕作土。

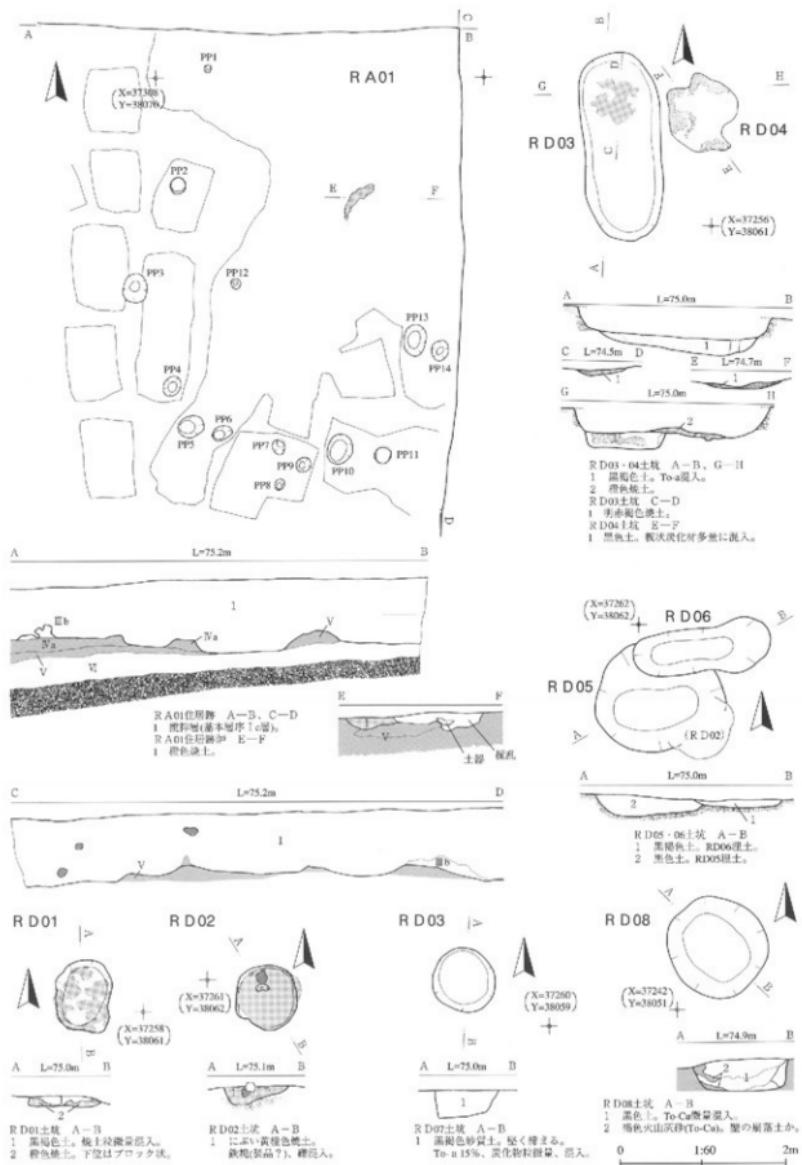
I b層 7.5YR 3/1黒褐色。シルト。遺物を含む。

I c層 人為的な搅拌土。II～IV層が混合。北区のみで見られる。遺物を含む。



第3図 川口Ⅰ遺跡遺構配置図・土層断面図

(2) 川口 I 遺跡



第4図 検出遺構 (1) RA01、RD01～08

- II層 2.5 Y 8/3 淡黄色～8/2 灰白色。十和田a降下火山灰 (To-a)。遺構検出面。
- III層 III a層 十和田b降下火山灰 (To-b)。粒径5～20mmの発泡良いスコリア。
- III b層 10 YR 2/1 黒色～7.5 YR 3/1 黒褐色。クロボク。遺物を含む。
- IV層 IV a層 10 YR 3/3 暗褐色。シルト。土壤化した中揮火山灰。To-Cu 細粒(径1mm程度)5%、同中粒(径5～10mm)1%混入。上位に板状に固結した砂塊を含む。遺構検出面。
- IV b層 10 YR 7/4 にぶい黄褐色。シルト質砂土。To-Cu 粒(径2～3mm)3%混入。
- V層 2.5 Y 8/2 灰白色～8/3 淡黄色。火山灰砂。中揮火山灰 (To-Cu) 純層。粒径3～5mm。調査区西側のVII層以下の落込み部分〔縄文前期以前の河川跡〕に最大50cmと厚く堆積している。
- VI層 VII a層 7.5 YR 2/1 黒色。シルト質粘土。南部浮石粒(径3～10mm)3%混入。遺物を含む。
- VII b層 7.5 YR 2/2 黒褐色。シルト質粘土。南部浮石5%混入。
- VIII層 10 YR 7/8 黄橙色。南部浮石 (To-Nb)。粒径5～50mmほどの発泡良いスコリア。
- IX層 2.5 YR 3/1 暗赤褐色～2.5 Y 3/3 暗オリーブ褐色。粘土。漸移層。
- X層 7.5 YR 5/8 明褐色。シルト質粘土。八戸火山灰 (To-H)。細粒。

4. 調査の概要

(1) 遺構

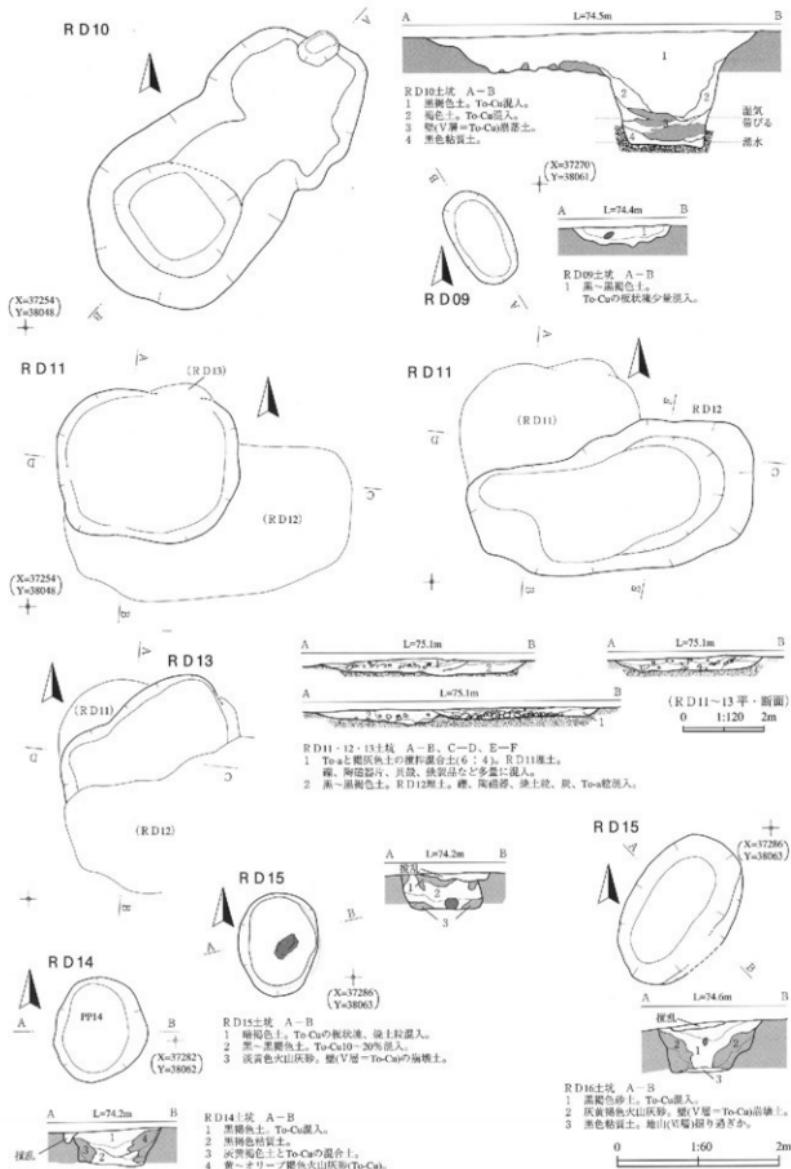
〈堅穴住居跡〉(第3図) 北区の北東隅の1iグリッドにおいて重機でIc層を除去した際、Ic層直下のVa層面で焼土を検出した。次いで、焼土周辺で弧状に配列する柱穴14個を検出した。またこの焼土周辺グリッドは北区の他グリッドに比して、攪乱層からではあるが遺物出土が顕著であった。以上から当該焼土を炉跡と判断し、堅穴住居跡と認定した。当該グリッド付近は果樹の抜根による著しい搅乱を被っており、壁・床面ともに確認できなかった。炉跡と思われる焼土も搅乱を受けており、ごく一部が残存するのみである。

R A 01柱穴 計測表

柱穴	規格	在高	底面	柱穴	規格	在高	底面	科名	面積	周辺	周辺	底面
	(cm)	(cm)			(cm)			セメント	(cm)	セメント	(cm)	セメント
1	9 × 10	27	73.88	6	17 × 24	32	73.77	1.1	20 × 22	43	73.81	
2	18 × 22	14	73.81	7	16 × 23	38	73.77	1.2	13 × 14	13	73.77	
3	28 × 36	85	73.17	8	13 × 15	8	74.17	1.3	27 × 38	18	74.08	
4	20 × 26	28	73.79	9	18 × 20	5	74.25	1.4	17 × 25	4	74.25	
5	27 × 33	46	73.62	1.0	20 × 38	39	73.86					

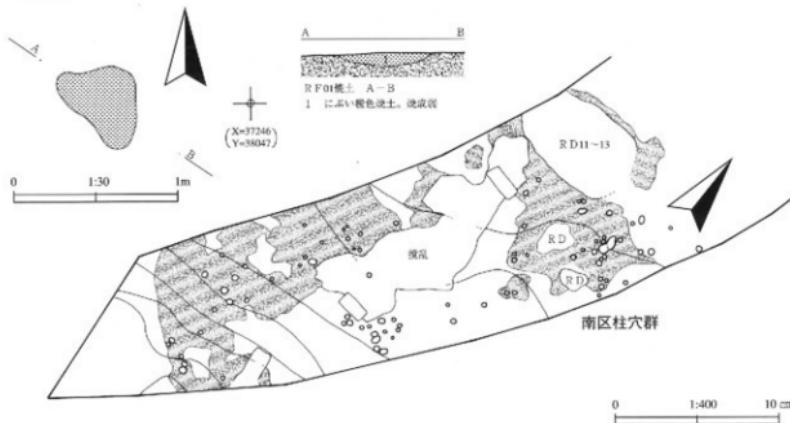
出土しているのみで、本遺構に確実に伴う遺物はほとんど無い等しいが、住居範囲と推測される搅乱部分出土の縄文土器片(5・12・15・21～24・26)は本住居跡に伴っていた可能性が高い。所属時期の詳細は不明であるが、検出面および周辺の出土遺物から判断すると縄文時代後期前業と思われる。

〈土坑〉(第3・4図) 16基検出した(RD 01～16)。II層上面検出: 9基(RD 01～07, RD 10～13)。十和田a火山灰よりも新しく、概ね10世紀前半以降の土坑である。RD 01・03・04はII層面で検出されたが、当初はこれら密集する土坑プランを堅穴住居跡のそれと誤認して精査を行った経緯がある。そのため、RD 03・04については壁の大部分を掘削してしまい、複数の土坑と認識した時点で確認できたのは底面付近のみであった(写真図版1)。RD 01～04は土師器片が出土しており、平安時代に属すると思われる。これら4基の埋土には多量の焼土粒・炭化物が含まれている。RD 11～13は、埋土から肥前IV～V期(1690～1860年代)の陶磁器や寛永通寶の銅一文銭「新寛永」(初鑄1697年)が出土していることから、本土坑の所属時期は18世紀を上限とし、概ね19世紀に属するものと考えられる。RD 05・06は遺物が出土せず、所属時期の詳細は不明確であるが、層位と重複関係(RD 05はRD 02に載られる)から古代の可能性がある。IV a～IV b層面検出: 6基(RD 8～10, 14～16)。RD 10はIV a層面検出ではあるが、本来はより上位層から掘り込まれていた可能性が高い。平面形やや隅丸方形ぎみの土坑で、北側に浅い皿状の窓みが伴う。別遺構の重複の可



第5図 検出構造(2) BD09~16

RF01



第6図 検出遺構（3）RF01、柱穴群

南区II層面柱穴 計測表

柱穴番号	実積 (cm)	開口 (cm)	底面 レベル	出土遺物等	柱穴番号	規模 (m)	深さ (cm)	底面 レベル	出土遺物等	柱穴番号	規模 (cm)	深さ (cm)	底面 レベル	出土遺物等
1	36×28	21	75.338		3 1	35×35	39	74.618		6 1	32×29	32	74.632	
2	32×25	25	75.295		3 2	20×18	23	74.824		6 2	22×22	59	74.548	
3	34×22	43	75.062		3 3	21×20	31	74.672		6 3	24×24	42	74.501	
4	27×21	22	75.233		3 4	30×24	21	74.800		6 4	35×30	54	74.405	
5	36×23	27	75.182		3 5	33×24	29	74.724		6 5	32×27	52	74.432	
6	26×21	52	74.970		3 6	18×17	14	74.923		6 6	20×19	33	74.496	
7	27×23	22	75.144		3 7	29×24	21	74.702		6 7	49×27	45	74.460	
8	28×26	20	75.089		3 8	28×22	21	74.803		6 8	20×19	25	74.590	
9	34×31	23	74.982		3 9	28×23	25	74.766		6 9	36×30	49	74.435	
10	42×33	31	74.856		4 0	25×18	20	74.821		7 0	36×33	54	74.389	縄文土器
11	31×22	25	74.925		4 1	21×19	28	74.734		7 1	32×29	47	74.440	縄文土器
12	25×22	24	74.867		4 2	20×17	32	74.696		7 2	38×23	44	74.515	
13	31×27	24	74.902		4 3	25×24	47	74.564		7 3	30×30	41	74.558	
14	22×21	21	74.884		4 4	31×29	22	74.752		7 4	26×34	49	74.475	
15	33×25	17	75.000		4 5	26×25	40	74.641		7 5	30×25	42	74.556	
16	17×16	27	74.876		4 6	35×29	30	74.776		7 6	32×24	40	74.600	
17	19×17	22	74.889		4 7	26×26	28	74.785		7 7	29×23	57	74.396	
18	46×28	50	74.552		4 8	21×19	16	74.886		7 8	(40)×(27)	52	74.316	
19	26×21	60	74.485		4 9	25×28	34	74.722		7 9	(38)×(26)	61	74.332	
20	22×20	27	74.756		5 0	33×21	47	74.548		8 0	(24)×(18)	56	74.385	重複
21	19×16	20	74.838		5 1	28×23	44	74.550		8 1	(34)×(27)	66	74.277	縄文土器
22	33×29	17	74.872		5 2	22×30	13	74.859		8 2	(35)×(21)	72	74.234	
23	22×22	26	74.798		5 3	25×24	44	74.513		8 3	(31)×(15)	57	74.384	
24	40×34	29	74.778		5 4	33×24	53	74.402						
25	27×23	17	74.914		5 5	27×24	40	74.535						
26	22×18	20	74.878		5 6	27×21	34	74.586						
27	39×29	35	74.736		5 7	23×30	16	74.745						
28	43×36	33	74.745		5 8	53×30	34	74.555	縄文土器					
29	34×24	30	74.782		5 9	28×26	34	74.369						
30	52×38	32	74.748		6 0	28×27	70	74.298						

土坑 計測表

番号	底面	平面形	幅(㎝)	断面形	深さ (㎝)	裏復関係等	出土遺物	備考	時期
R D 01	II層	楕円	77 × 68	方形	14		土師器	覆土に焼土多量混入。	平安
R D 02	II層	楕円	83 × 75	不規	23	R D 05・10を載る	不明鉄製品	覆土に燒土多量混入。	古代?
R D 03	II層	長楕円	235 × 95	楕状?	19		土師器	武道の 部が焼入化。	平安
R D 04	II層	楕円?	95 × 88	楕状?	5	R D 03 を載る	土師器	底面は造り込み。底面に土、敷状 灰化化。	平安
R D 05	II層	楕円	162 × 138	楕状	27	R D 10を載る	縄文土器		古代?
R D 06	II層	楕状?	168 × 84	U字?	9	R D 05・10を載る	なし		古代?
R D 07	II層	円	81 × 76	方形	33	R D 12を載る	なし		近世~?
R D 08	II a層	楕円	117 × 115	適合形	38		なし		平安
R D 09	II a層	長楕円	120 × 68	楕状?	20	R D 11・12の下層	なし		平安
R D 10	II a層	楕円	408 × 225	適合形、直角?	144	R D 02・05・06に載れる?	なし	底面は複数凹凸地。底面より上見から掘り出されていて? 古代~?	古代~?
R D 11	II層	楕円	448 × 362	浅鉢状	22	R D 12・13を載る	縄文土器(肥前、南島、美濃)、磨石、瓦片、貝玉、骨質環、筒錐、刮削器	土師器八方八角形の底なし。	近世
R D 12	II層	長楕円	696 × 370	直角?	36	R D 13を載る	筒錐	土師器八方八角形の底なし。	近世
R D 13	II層	扁丸形	454 × 260	楕状?	26	R D 11の下層	なし	土師器八方八角形の底なし。	近世
R D 14	II a層	楕円	134 × 115	適合形	43		なし	土師器八方八角形の底なし。	平安
R D 15	II a層	楕円	127 × 98	楕状?	45	底面に亀壳織	なし	土師器八方八角形の底なし。	平安
R D 16	II a層	楕円	202 × 120	適合形	57		なし	土師器八方八角形の底なし。	平安

能性もあるが明瞭ではない。底面付近では南部浮石が露出し、湧水する。III層面以上ではプラン確認できなかったものの、形態から井戸状遺構の可能性がある。その他の5基は遺物を作わないが、検出層位から縄文時代に属するものと思われる。

<焼土遺構> (第5図) 16 c グリッドII層面で検出した。焼成弱く、痕跡程度の焼土である。層位から10世紀前半以降のものと思われるが、具体的な時期やその性格については不明である。

<柱穴状小土坑> (第5図) 南区のII層~III a層面において、83個検出した。平面形は円形~楕円形を基調とし、径17~42cm、深さ14~57cmである。埋土はI b層系の黒褐色土で、流れ込みと思われる縄文土器片を僅かに含む。数個が直線的に並び掘立柱建物を構成するように見えるが、建物としての柱配置を把握するに至らなかった。検出層位や埋土の様相から見て中世~近世に属するもので、近世の可能性が高いと思われる。

(2) 遺物

総量大コンテナ4箱分の遺物が出土した。種別は上器(縄文土器・土師器・須恵器)、陶磁器、石器類、土製品、石製品、金銀製品である。土器(2箱弱:14.2kg出土)、特に縄文土器が主体である。なお掲載にあたっては、実測個体(土師器・陶磁器の一部)を除いて、断面図を付加した写真掲載としている。また、写真掲載した資料の多くはベタ置きでの撮影であり、断面図の表現と必ずしも一致していない。

<縄文土器> (第8・9図) 遺構に伴って出土したものは僅かであり、大部分が北区(特にその北半部)のI c層=搅拌埴から出土している。搅拌されたためか、接合状況は悪い。文様や特徴ある破片を中心として29点掲載した。破片資料ばかりで、器形や文様構成が不明なものばかりであり、所属時期の同定は難しいが、主体を占める土器は後期のものと思われる。早期~前期:掲載した3点が出土した(1~3)。1は北区11 eグリッドの試掘においてI c層から出土した尖底土器底部である。早期後葉~末葉にあたる資料と思われるが、撹乱出土であり層位的な裏づけはない。2・3はVI層上位で出土。2はムシリ1式に比定される。3は前期初頭か。中期:4。口縁部に沈線の渦巻文が施されている。中期後半の楕木式か。後期:5~19・21~29。確実ではないが、後期初頭~前葉に属するものが多い。11~15は葦茎式、9・16・21・22・24は十葉内I式。17・27は中葉の十葉内III式。晚期:20。不確実ではあるが、口縁部の様相から晩期と考えた。

<土師器・須恵器> (第9・10図) R D 01・03・04埋土および遺構外から出土している。器種はロクロ使用の土師器壺(30・34・35)および壺(31~33)、須恵器壺(36・37)である。当地方における從来の土師器編年によれば、出土土師器は概ね9世紀後半期に属するものと思われる。

＜陶磁器＞（第10～12図）RD11・12埋土から纏まって出土している。実測可能個体を中心に23点掲載した。陶器（38～43、57～59）と磁器（44～56、60）があり、いずれも肥前産のものが主体である。鉢、浅鉢？、碗、皿、徳利、香炉、紅皿、水滴がある。38は在地窯産陶器であるが、具体的な生産地は不明である。39～41・53～56は肥前産陶器、44～51・60は肥前産磁器、42・43は瀬戸・美濃産陶器、52・57は相馬産磁器である。38～42は遺構内出土の陶器である。38は黄瀬戸の折縁鉢に酷似しているが、胎土の様相が異なっており、黄瀬戸鉢の模倣品である。在地のいずれかの窯産と思われる。41・42は鉄釉の腰錫碗。43～56は遺構内出土磁器。49・50・52の皿は蛇目に釉剥ぎされている。54の青磁香炉は内面無釉であるが、見込みに蛇の目様に白色の釉が掛かる。56は肥前V期の水滴である。57～59は遺構外出土の陶器で、59は刷毛目鉢。60は遺構外出土の磁器で、蛇目釉剥ぎの皿である。これら出土陶磁器の主体をなす肥前産陶磁器については、大橋康二氏の陶磁器編年における「IV期」（1690年代～1780年代）・「V期」（1780年代～1860年代）に該当するものである（九州近世陶磁学会2000）。遺構一括での出土状況から見て、出土陶磁器の所属時期は概ね18～19世紀代であると思われる。

＜石器類＞（第13～15図）13点を掲載した。石匙1点、磨製石斧1点、敲磨器類17点、台石4点、剥片14点、石臼4点が出土した。石臼・台石はRD11・12埋土から一括出土している。石臼は近世、陶磁器との共伴関係から18～19世紀代。台石は時期不明だが、縄文時代の可能性もある。それ以外は縄文時代に属するものである。

＜土製品＞（第15図）縄文時代の円盤状土製品1点（74）。時期の詳細は不明である。

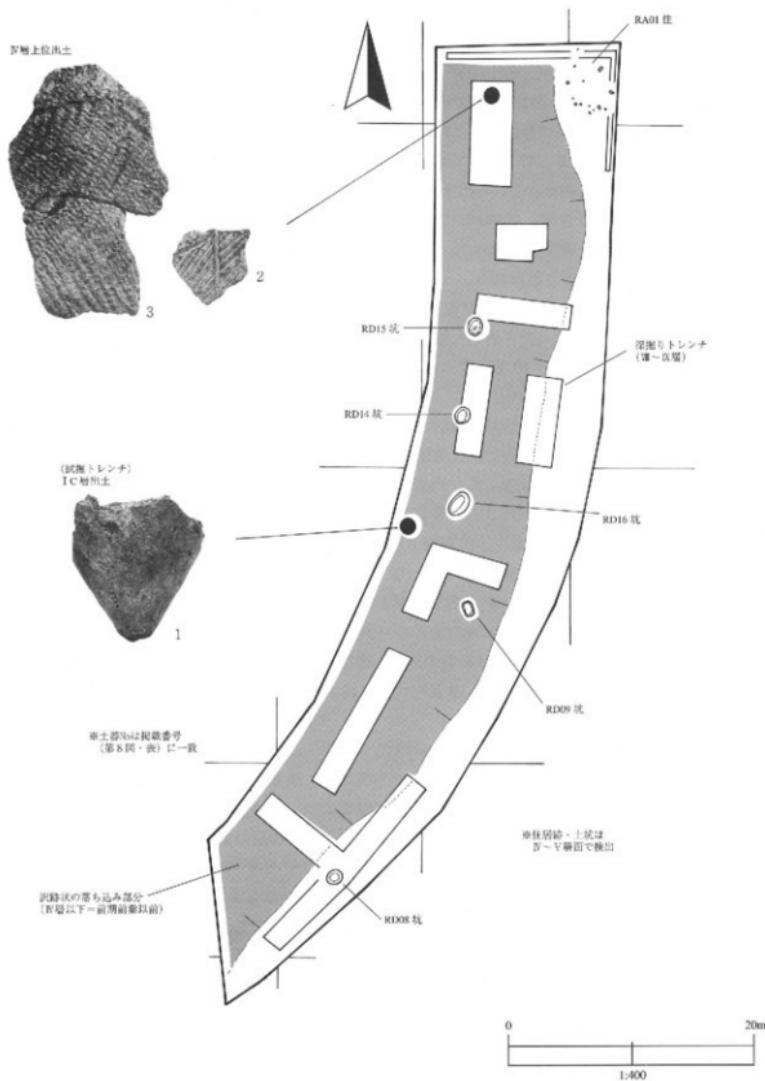
＜石製品＞（第15図）石剣1点（75）。欠損しており詳細は不明である。縄文時代と思われる。

＜金属製品＞（第15図）31点出土した。内訳は、RD02：器種不明1点、RD11：寛永通寶5点・柄鏡1点・釘4点・鎌？1点・鉄滓3点、RD12：寛永通寶4点・煙管1点・釘6点・器種不明2点・鉄滓1点、遺構外：寛永通寶3点・一錢銅貨1点・器種不明1点、である。うち、寛永通寶5点（76～80）、柄鏡（81）を掲載した。76～80は銅一文銭3期、いわゆる「新寛永」（鋳造1697～1781年）に該当する（兵庫埋蔵銭調査会1998）。背面に背文字や記号等がないため、鋳造銭座については不明である。柄鏡はRD12埋土の、礎・陶磁器片の一括廃棄ブロックから出土した。全面に砂粒や炭化財が融着しており、背面の文様装飾は不明である。遺構外出土の一錢銅貨は近代、その他は陶磁器との共伴関係等から類推して近世（18～19世紀代）に属する可能性が高い。

5.まとめ

調査の結果、川口I遺跡が縄文時代・平安時代・近世～近代の複合遺跡であることが判明した。かつて北区から多量の縄文土器が出土したという事実から、調査開始当初は縄文時代の遺構・遺物が纏まって検出されるものと予想された。結果的には該期については住居跡1棟、土坑5基と縄文土器少量が確認できたに過ぎないが、調査地が縄文時代、おそらく後期の集落の一部を占めているだろうことが確認された。また、早期～前期初頭の土器片が出土したことから、調査区の15%程度にIX層（八戸火山灰層）までの深掘りを行ったものの、該期遺構は確認されなかった（第7図）。中揮浮石降下以前には調査地点が塗んだ沢状の地形だったためと思われるが、調査区外に該期の遺構・遺物が存在する可能性はある。一方、平安時代と近世の遺構・遺物が検出されており、調査地点が該期遺跡の一部であることが判明した。とりわけ、RD11・12土坑から18世紀～19世紀代の陶磁器が纏まって出土したことは、調査区周辺に陶磁器を所有する人物の屋敷が存在していたこと、近世のムラの一部を占めていたことを示唆している。

なお、川口I遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。



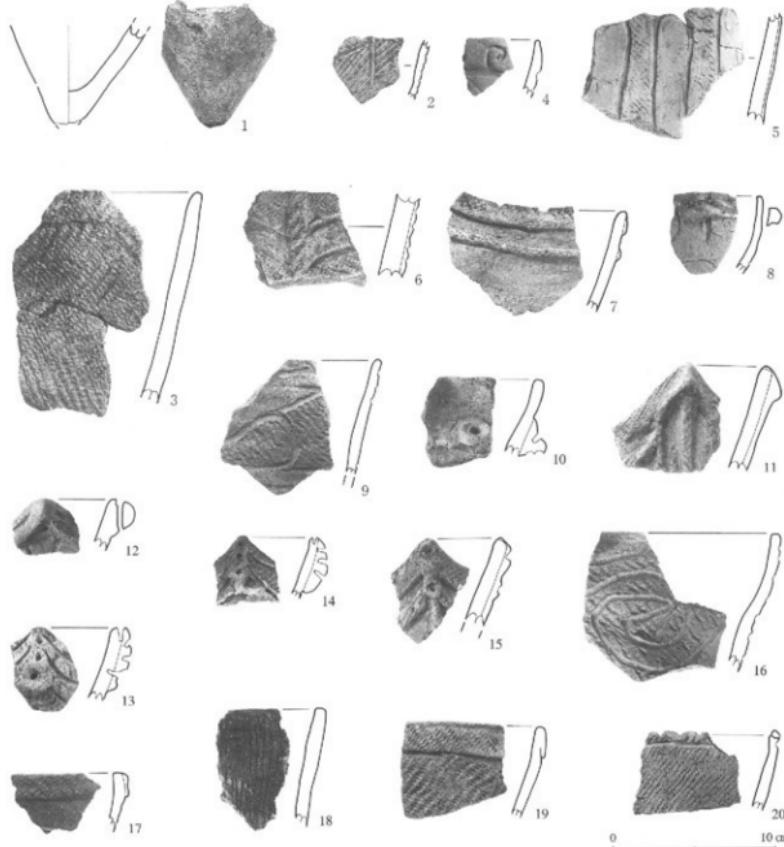
第7図 繩文時代の遺構と深掘トレンチ位置

<参考文献>

- (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター【(財) 岩手県埋蔵文化財センター】
- 1983 「荒谷 A 遺跡発掘調査報告書」岩手県埋文センター埋藏文化財調査報告書第 57 集
 - 1990a 「馬場遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋藏文化財調査報告書第 137 集
 - 1990b 「馬場 II・沖 I 遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋藏文化財調査報告書第 152 集
 - 1992 「八ツ長 II 遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋藏文化財調査報告書第 168 集
 - 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の經年」(佐賀県)
 - 兵庫県鐵調查会 1998 「近世の出土鉄 II 一分類図版篇一」(永井久美男・編)

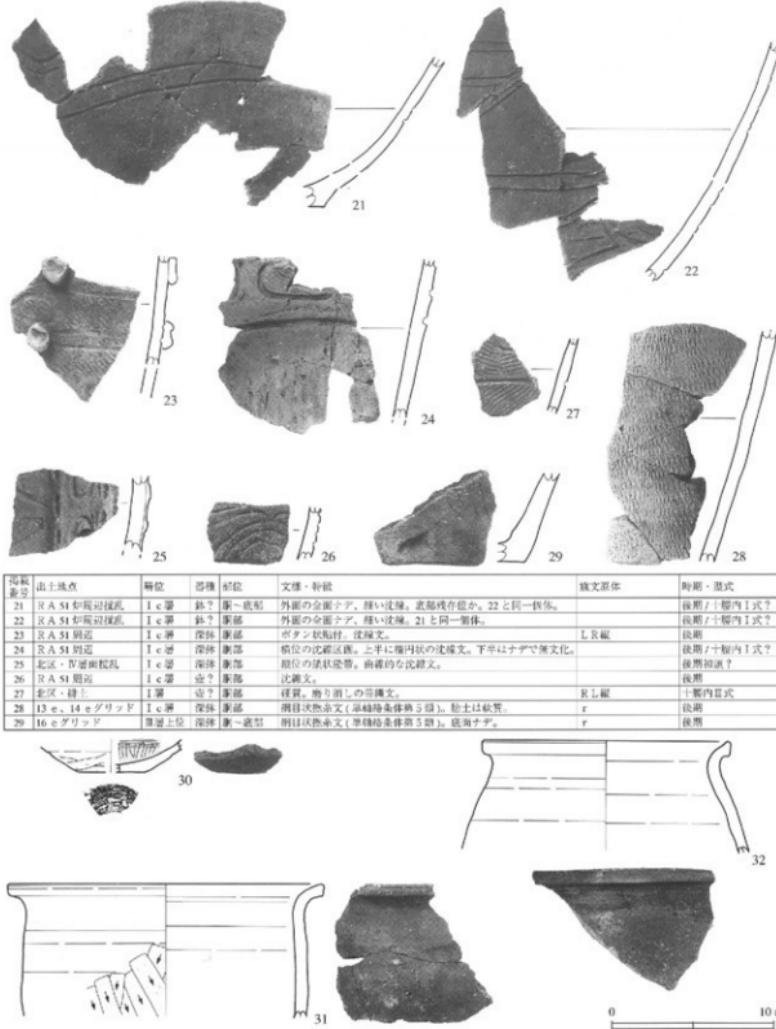
報告書抄録

ふりがな 貴名 別書名	へいせいじゅうななねんどはつくつちょうきほうこくしょ 平成 17 年度発掘調査報告書						
巻次	1						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋藏文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 490 集						
著者名	千葉止彦						
発行機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋藏文化財センター						
所在地	〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯間 11 地割 185 地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	2006 年 3 月 27 日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在施	コード 市町村 道路番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因	
川口 I 遺跡	岩手県・戸市金田一 字川口 20 番・21 番	03213 IE79-1188	40 度 20 分 16 秒	141 度 16 分 38 秒	2005.09.01 ~ 2005.10.27	1,156 m ²	一般県道改 修事業に伴 う緊急発掘 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	土な遺物	特記事項		
川口 I 遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 1 棟 土坑 5 基	縄文土器 大 2 箱 土製円盤 1 点 石器類 27 点 石剣 1 点	縄文土器は早期木 ~ 前期初 △中期後葉○、後期前葉 ○晚期△。殆どが混拌層 出土。		
	散布地	平安時代	土坑 7 基	土師器、須恵器 小 0.5 箱			
要 約	集落?	近世	土坑 4 基 柱穴状土坑 70 基 焼土造構 1 基	陶磁器 25 点 石臼 4 点 古鏡 13 点 釘・鉢等 20 点	土坑から一括廻棄された陶 器器(紀前 IV ~ V 期)が出土。		
	縄文時代の竪穴住居跡・土坑を検出したが、集落の中心は調査範囲外と思われる。平安時代の土坑 4 基が検出され、土師器・須恵器が少量出土した。近世では、罐・陶磁器が集中的に廻棄されていた土坑が検出され、肥料や漬糞・美濃糞の陶磁器が埋まって出土した。18 世紀後半 ~ 19 世紀に属するものと思われる。						



馬軸 號	出土地點	層位	器種	部位	文様・特徴	縄文原体	時期・蓋式
1 11	11号アグリッド	1c層	深鉢	底部	尖底。		早瀬先史
2 1	1号アグリッド	1層	深鉢	底部	舟手で硬質。沈練文。内部丁寧なナサ。船上に砂炒。		早瀬後窓 / ムシリ丁式
3 1	1号アグリッド	1層	深鉢	側面	舟手突起部複数。船手に粗めの継ぎ多量。	LR縦、LR横	前瀬和承
4 11～5	1号アグリッド	1層	深鉢	口縁部	平口縁。波端による波巻文。		中瀬後窓 / 游林式?
5 R.A.51	横窓	1c層	深鉢	側面	沈練区画。廻りによる複数の区画文。	LR縦	後瀬
6	北区・耕土	1層	深鉢	側面	複数縫合。縫合上にも地文。縫合の波纏文。	LR縦、RL横	後瀬
7	試掘T.5	1c層	深鉢	口縁部	波状口縁。口引に弱み2箇所。船上に粗妙。	LR縦、RL横	後瀬
8	北区・P毎海濱	1c層	傳?	口縁部	把手取付部。上から下へ降2段の貫通孔。沈練文。		後瀬
9	北区・耕土	1層	深鉢	口縁部	物り消し織文。		後瀬・十津川1式
10	北区・耕土	1層	深鉢	口縁部	平口縁。ボタン状取付・可突。		後瀬
11	北区・耕土	1層	深鉢	口縁部	山形の波次口縁。		後瀬前窓 / 云宿式
12	R.A.51・舟南側櫛丸	1c層	深鉢	口縁部	山形の波次口縁。		後瀬前窓 / 云宿式
13	北区・耕土	1層	深鉢	口縁部	山形の波次口縁。沈練文。径1mmの刺突。		後瀬前窓 / 亞庭式
14	試掘T.6	1c層	深鉢	口縁部	山形の波次口縁。舟付突起・径2mmの刺突。		後瀬前窓 / 亞庭式
15	R.A.51・舟頭前櫛丸	1c層	深鉢	口縁部	山形の波次口縁。舟付突起・径2mmの刺突。L.R	後瀬前窓 / 亞庭式	後瀬前窓 / 亞庭式
16	播磨4施窓	1c層	傳?	口縁部	山形の波次口縁。沈練文。		後瀬前窓 / 亞庭式
17	試掘T.5	1c層	傳?	口縁部	口縁肥厚。強い文織帶。		十津川1式
18	北区・野地山遺瓦	1c層	深鉢	口縁部	平口縁。強い文織文(半輪接全體1個)。	z	後瀬
19	北区・野地山遺瓦	1c層	深鉢	口縁部	折り返し口縁。舟付突起。	□: R.L横、廻: L横	後瀬
20	8.1～9.1アグリッド	1c層	深鉢	口唇に連続突起(小波状口縁)。口縁邊に構体沈練。	□段多条L	後瀬	

第8図 出土遺物(1) 縄文土器



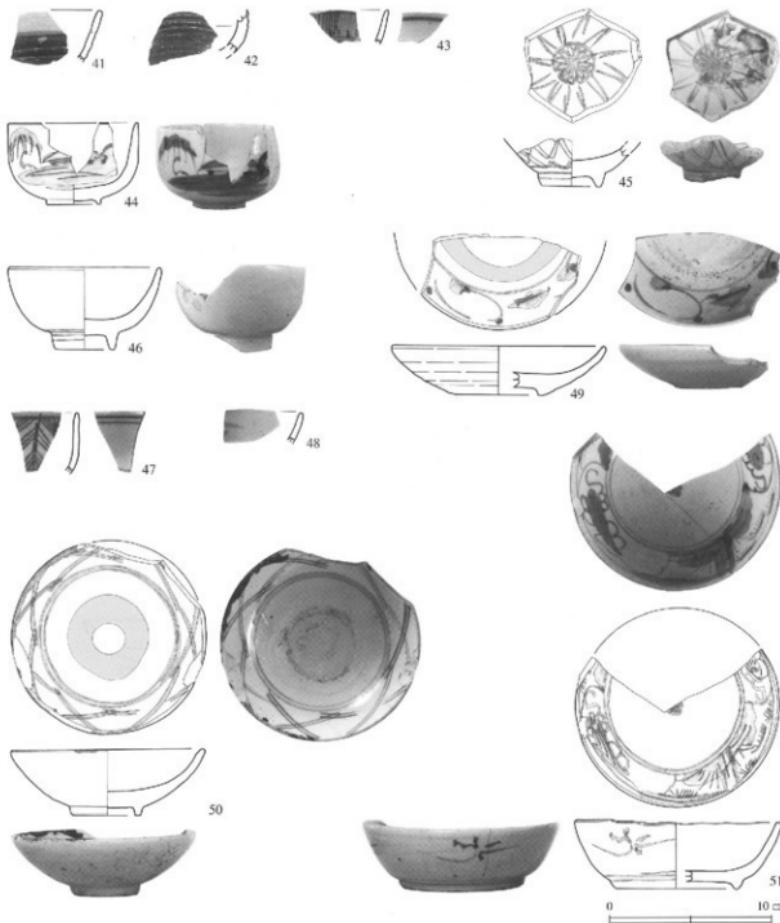
器種 番号	出土地點	層位	種別	器形	外面装飾	内部装飾	法量 (cm)			
							日径	底径	器高	
30	R D 01 (焼土層)	土師器	杯	体: ロクロナナデ+ヘラナデ底: 茶刷毛底: ヘラミガキ	黑色糊面 底: ヘラミガキ	-	(4.2)	< 1.5 > 0.7	密。	
31	R D 03・04	土師器	甕	口: ヨコナナデ 体: ヘラクズリ	ヨコナナデ 体: ヘラクズリ	(19.4)	-	< 8.2 > 0.8	粗。小石・金屬片多。	
32	R D 03・04	土師器	甕	口: ヨコナナデ 体: ロクロナナデ	ロクロナナデ 体: ロクロナナデ	(15.4)	-	< 6.8 > 0.7	密。小石含む。	

第9図 出土遺物(2) 繩文土器・土師器

The figure consists of several groups of artifacts labeled 33 through 40.
 - Group 33: Three fragments of a vessel with horizontal stripes, one fragment with vertical lines, and a small object labeled 33.
 - Group 34: A fragment with horizontal lines and a small object labeled 34.
 - Group 35: Two fragments, one with horizontal lines and a small object labeled 35.
 - Group 36: Two fragments, one with horizontal lines and a small object labeled 36.
 - Group 37: Two fragments, one with horizontal lines and a small object labeled 37.
 - Group 38: A large vessel with a wavy rim and a small object labeled 38.
 - Group 39: A large vessel with a wavy rim and a small object labeled 39.
 - Group 40: Two fragments of a vessel with horizontal lines and a small object labeled 40.

器種 番号	出土地点	層位	形種	表面	外面調査	内面調査	法量 (cm)			地土 (粗密・含有物等)
							口径	底径	器高	
33	R D 03・04	地土	土師器	裏	口・体: ロクロナデ 体: ロクロナデ	口: ロクロナデ 底: ロクロナデ	—	—	—	0.7 密。
34	16 セグリッド	I層	土師器	环	体: ハラミズリ 底: ハラミズリ 表: ハラミガキ 底: ハラミガキ	体: ハラミガキ 底: ハラミガキ 表: ハラミガキ 底: ハラミガキ	—	(5.0)	< 0.8 >	0.7 密。
35	14 イグリッド	I層	土師器	环	体: ハラミズリ 底: ハラミズリ 表: ハラミガキ 底: ハラミガキ	体: ハラミガキ 底: ハラミガキ 表: ハラミガキ 底: ハラミガキ	(5.2)	< 0.7 >	0.75 密。	
36	11 セグリッド	I c層	須恵器	裏	体: タタキメ	体: ハテメ	—	—	—	1.1 10 Y 5/1 頂。粗。小石含む。
37	19 セグリッド	I c層	須恵器	裏	体: タタキメ	体: ハテメ	—	—	—	1.2 10 B 5/1 青灰。粗。小石含む。
※法量の()は推定値、< >は残存値。										
器種 番号	出土地点	層位	形種	表面	外面調査	内面調査	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	地土 (粗密・含有物等)
38	R D 11	地土	陶器鉢	(27.4) (13.4)	8.7	浅黄青(密) 底: 黄(黄)	在地(東北)	18 c 前半以降		分析未定。口唇: 内面に波状文。黄潤(津)の種類品(形状が異なる)。
39	R D 11	地土	陶器鉢	—	—	浅白色(密) 透明釉、塗付	肥尻	初期?		欠刻文。
40	R D 12	地土	陶器鉢	—	—	淡色(密) 灰釉(暗緑), 淡釉	肥尻(津津)	晩期以降		内面に花弁文?

第10図 出土遺物 (3) 土師器・須恵器・陶磁器

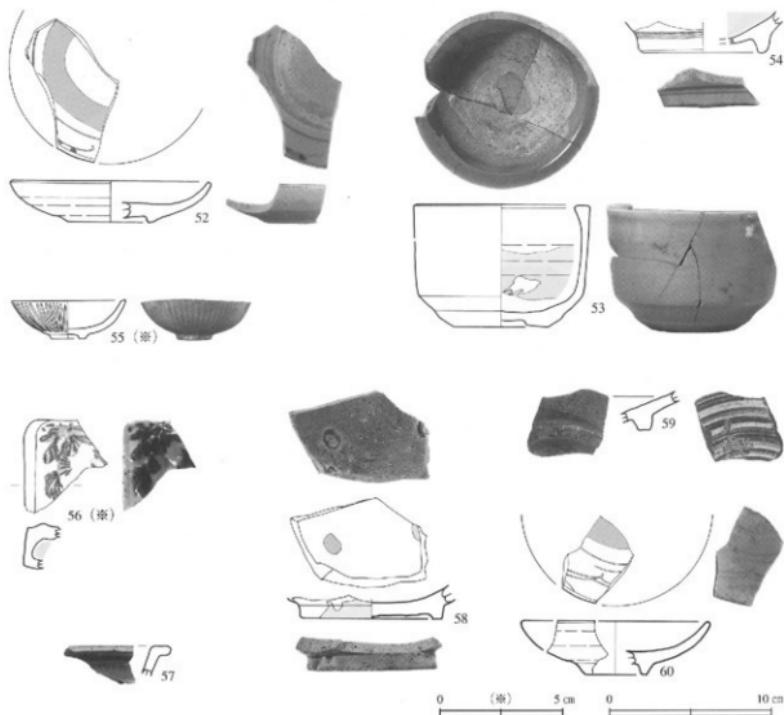


※法量の()は推定値、< >は残存値。

件数 番号	出土地点	部位	器種	法量 (cm)			胎土	釉、繪付	産地	時期	備考
				口径	底径	器高					
41	R D 11	選土	碗唇洗形?	—	—	—	褐色(?)	透明白、白化粧	肥前	吉周?	羽毛文。
42	R D 12	選土	碗唇瓶	—	—	—	灰色(?)	灰釉、鉢輪	鹿児・美濃	吉周	蟹足紋。
43	R D 12	選土	碗唇瓶	—	—	—	灰色(?)	灰釉、鉢輪	鹿児・美濃	吉周	蟹足紋。
44	R D 11	選土	碗唇瓶	7.9	3.3	5.1	灰白色(?)	透明白、染付	肥前	V湖	草花文?
45	R D 11	選土	碗唇瓶	—	3.6	<2.9>	灰白色(?)	透明白、染付	肥前	吉周	二葉刷口文。
46	R D 12	選土	碗唇瓶	(9.3)	(3.7)	5.1	灰色(?)	灰釉	肥前	V周	高台輪に開隙。
47	R D 11	選土	碗唇瓶?	—	—	—	灰白色(?)	透明白	肥前?	V周?	榮町。
48	R D 11	選土	碗唇瓶	—	—	—	灰白色(?)	灰釉、染付	肥前	吉周	矢羽文。
49	R D 11	選土	碗唇瓶	(13.0)	(5.6)	3.1	灰白色(?)	透明白、染付	肥前	吉周	草花文。
50	R D 11	選土	碗唇瓶	11.8	4.2	4.2	灰白色(?)	透明白、染付	肥前	吉~V周	二重燒子文。
51	R D 11	選土	碗唇瓶	12.6	7.5	4.3	灰白色(?)	透明白、染付	肥前	吉周	草花文。

第 11 図 出土遺物 (4) 陶磁器

(2)出ロ I 遺跡



※法線の()は鑑定値、< >は残存値。

器種 番号	出土地点	層位	器種	法量(cm)			數土	種、胎付	產地	時期	備考
				口径	底径	器高					
S2	R D 11	埋土	細部組	(12.1)	(5.2)	2.6	灰色(質)	灰胎	相馬?		
S3	R D 11	埋土 1 層	細部組	10.9	5.7	2.6	灰白色(質)	青組	肥前?	新胡?	曾島燒窯かもしれない。見込みに白色胎。
S4	R D 12	埋土	細部組	—	(7.6)	<2.0>	灰白色(質)	透明胎	肥前	新胡	内面無釉。
S5	R D 12	埋土	細部組	4.6	1.4	1.6	灰白色(質)	透明胎	肥前?	新~V期	
S6	R D 12	埋土	細部水滴	—	—	—	灰白色(質)	透明胎、朱付	肥前	V期	裏面に布目。
S7	1 層	物體	—	—	—	—	灰色(質)	透明胎、白化胎	相馬?	19世紀代	折縫体、唐津窯かもしれない。
S8	南区中央 河原町	埋土	細部組	—	(8.8)	<1.2>	理黃色(質)	灰胎(質)	肥前?		日韓・瀬戸・美濃窯?
S9	市區	正屋?	細部組	—	—	—	灰色(質)	透明胎、白化胎	肥前	新胡以降	刷毛目。
S10	19 d	1 層	細部組	(11.4)	(3.8)	3.4	灰白色(質)	透明胎、朱付	肥前	新胡	蛇目釉前革。

陶磁器 凡例



染付

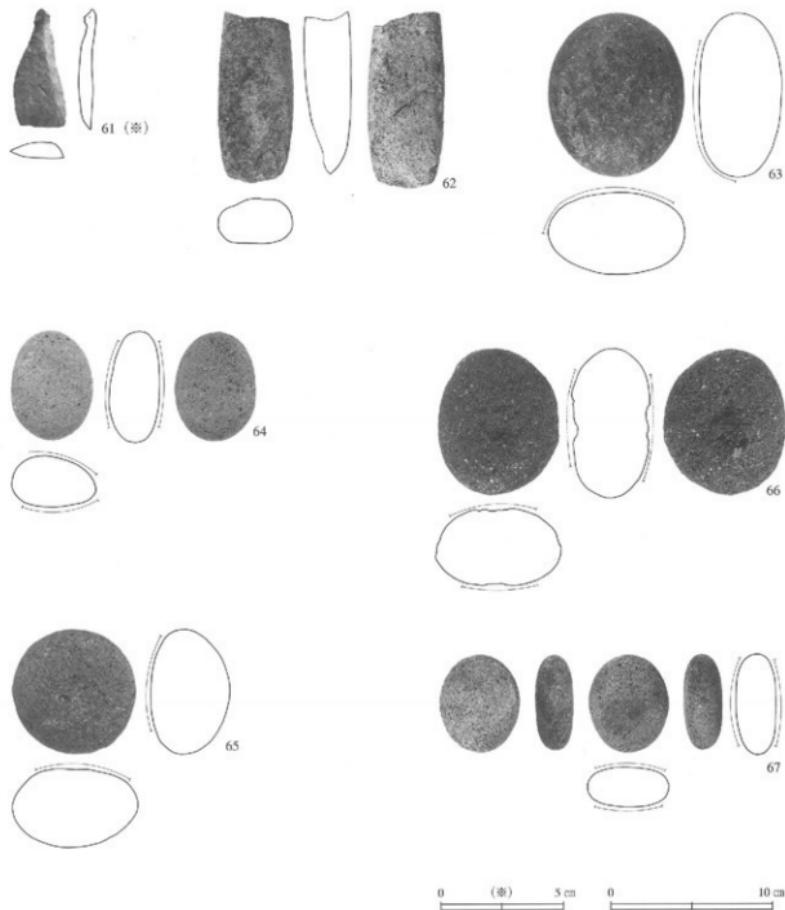


釉剥ぎ、目跡



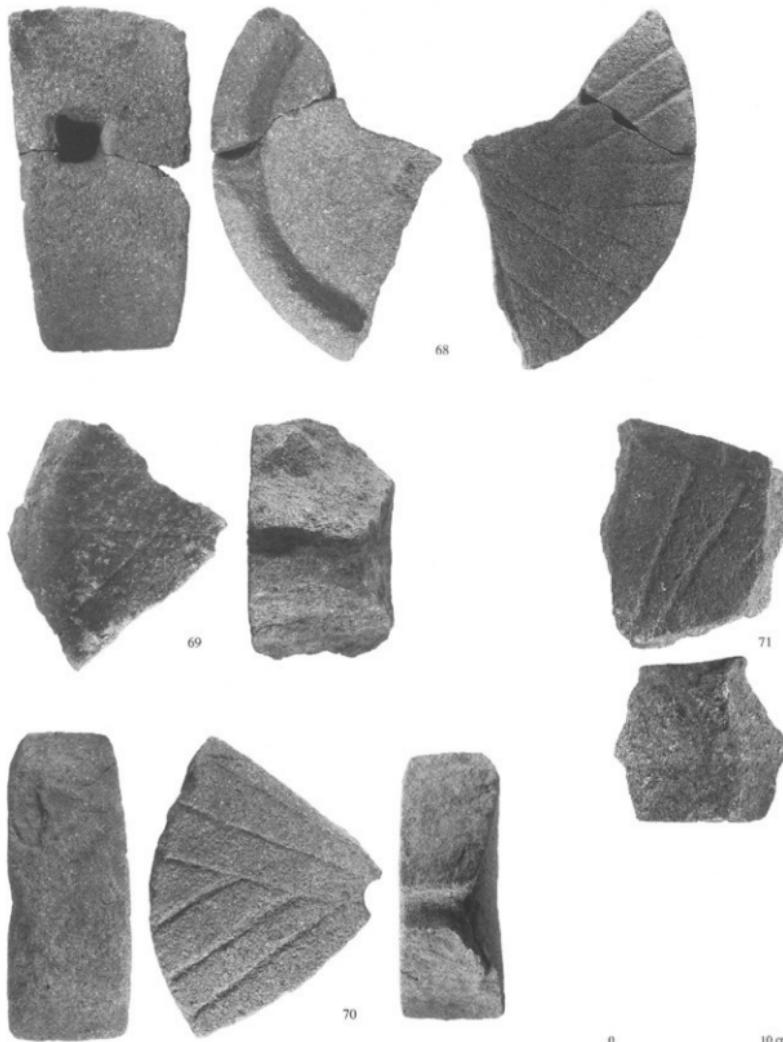
無釉

第12図 出土遺物(5) 陶磁器



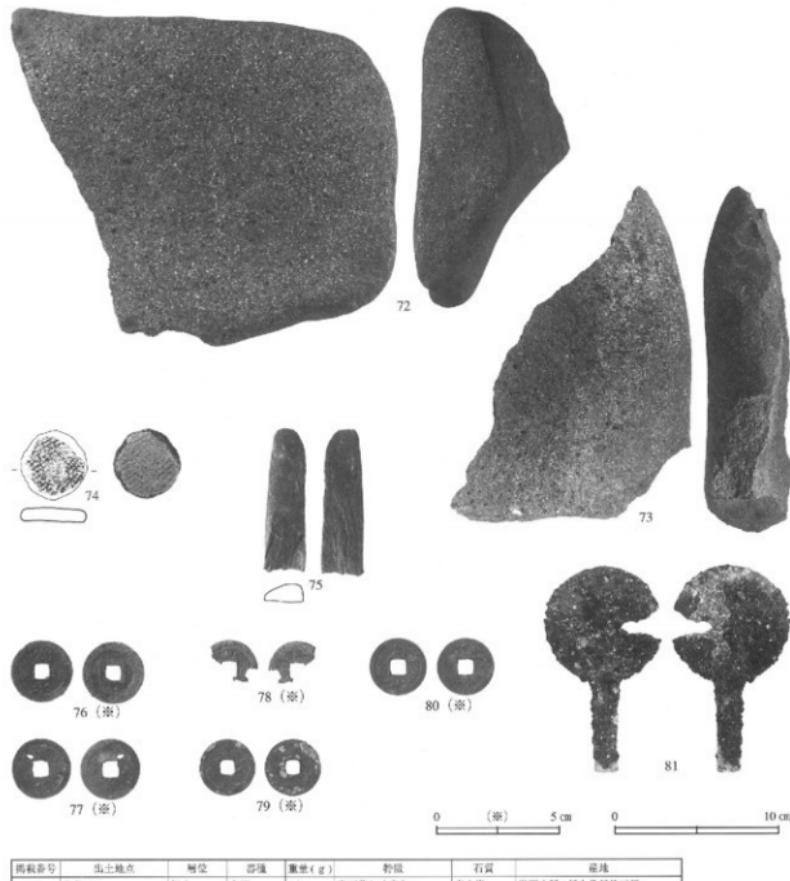
開発番号	出土地点	層位	器種	重量(g)	特徴	石質	産地
61	西区 pp24	地土	石芯	6.0	塊型。	黄泥岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
62	北区西手町	I c 帯	破片石斧	236.8	基部・刃部片面が欠損。	砂岩	北上山脈？ / 新生代新第三紀？
63	R.D.11	地土	破片石斧	641.8	磨石。	砂岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
64	R.A.51 西北面根丸	南風土	破片石斧	171.9	磨石。	ダイサイト	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
65	R.D.11	地土	破片石斧	368.6	磨石。	砂岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
66	13 g グリット	藍土層	破片石斧	452.6	磨石・四石。	安山岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
67	H.e グリット	I c 帯	破片石斧	118.6	磨石。	安山岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀

第13図 出土遺物(6)石器



撲滅番号	出土地点	層位	形態	重量(g)	特徴	石質	産地
68	R D II	堆土	石臼	3.4	上臼。脱水孔。	安山岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
69	R D II	堆土	石臼	2.1	F臼。離受孔。	安山岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
70	R D II	堆土	石臼	2.6	F臼。離受孔。	ダイサイト	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
71	R D II	堆土	石臼	2.4	F臼。	ダイサイト	奥羽山脈 / 新生代新第三紀

第14図 出土遺物(7) 石器



鶴巣番号	出土地点	層位	器種	重量(g)	特徴	石質	産地
72	R D 11	堆土	台石	4.9	表面著しく錆む。	安山岩	奥羽山脈／新生代新第三紀
73	R D 11	堆土	台石	4.6	表面著しく錆む。 被熱？	安山岩	奥羽山脈／新生代新第三紀

鶴巣番号	出土地点	層位	器種	状態	文様・特徴	族文原体	重量(g)
74	14グリッド	I c層	土製円盤	完形	斜行縦文	L R	15.9

鶴巣番号	出土地点	層位	器種	重量(g)	特徴	石質	産地
75	R A 51周辺	I c層	石劍？	29.80	欠損。	経板岩	不明

鶴巣番号	出土地点	層位	器種	状態	特徴	重量(g)
76	R D 11	堆土 1層	寛永通寶	完形	新寛永。	3.4
77	R D 11	堆土 1層	寛永通寶	部分欠損	並み、貫通孔。新寛永。	2.7
78	R D 12	堆土	寛永通寶	欠損 1/2	新寛永。	1.0
79	R D 12	堆土	寛永通寶	完形	新寛永。	2.6
80	18 d グリッド	I 層	寛永通寶	完形	新寛永。	3.0
81	98145.451	98145.451	98145.451	98145.451	98145.451	45.5

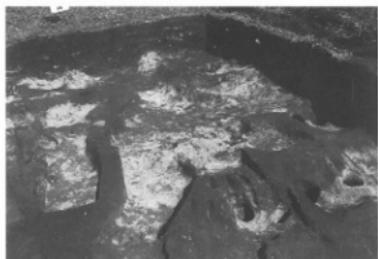
第 15 図 出土遺物 (8) 石器・土製器・石製品・金属製品



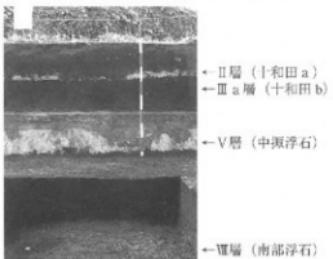
調査前の状況（南から）



調査終了後の状況（南から）



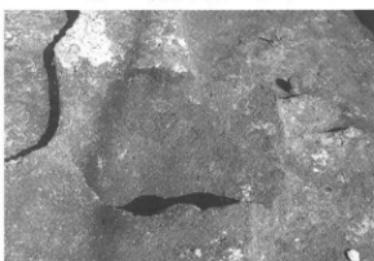
R A 01 (南西から)



南区・土層断面（補点3付近）



R A 01 炉 断面（南から）



R D 01 (西から)



R D 02 (南から)

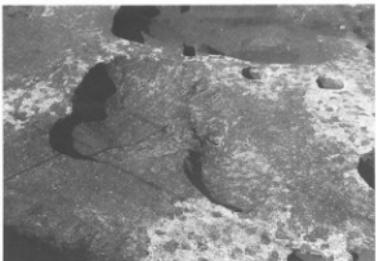


R D 03 (北から)

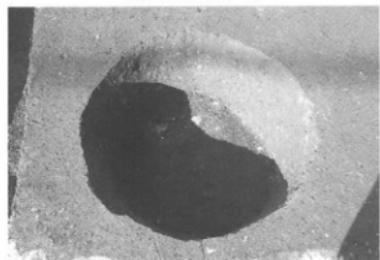
写真図版 1 川口 I 遺跡検出遺構（1）



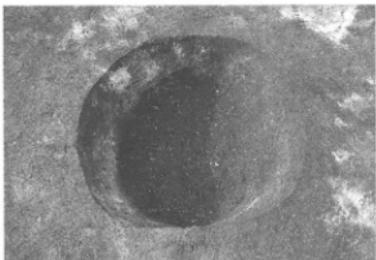
R D 04 (北東から)



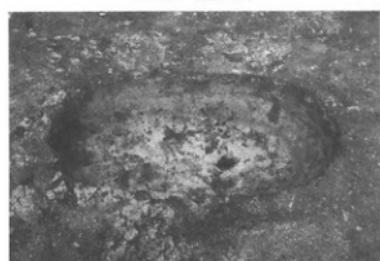
R D 05・06 (東から)



R D 07 (南から)



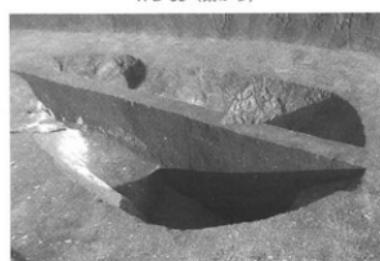
R D 08 (南から)



R D 09 (東から)



R D 10 (北東から)



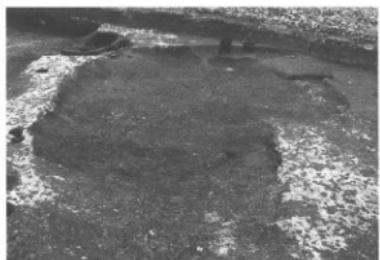
R D 10 埋土上位断面 (南西から)



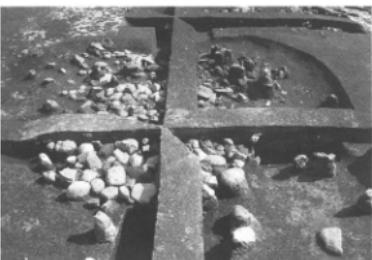
R D 10 埋土下位断面

写真図版2 川口I遺跡検出遺構(2)

(2)川口Ⅰ遺跡



R D 11・12・13 全景（東から）



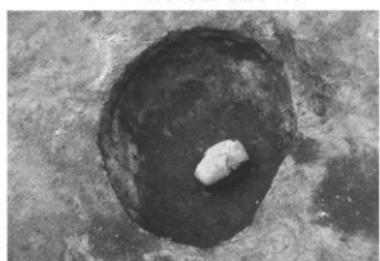
R D 11 埋土断面（西から）



R D 11 碓出土状況（南西から）



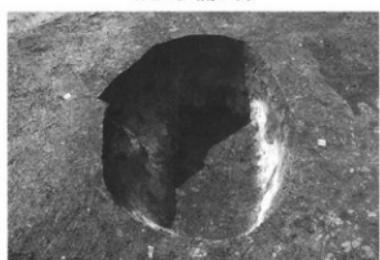
R D 14（南から）



R D 15（南から）



R D 15 埋土断面（南から）



R D 16（北から）



南区Ⅱ層断面柱穴群（南から）

写真図版3 川口Ⅰ遺跡検出遺跡（3）

(3) 宮沢遺跡 第11次調査

所 在 地 盛岡市本宮字宮沢 29 ほか
委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事 業 名 盛岡南新都市土地区画整備事業
発掘調査機関 平成 17 年 7 月 1 日～7 月 22 日

遺跡番号・略号 LE 16-2101・OMZ-05-11
調査対象面積 2,001 m²
発掘調査面積 1,667 m²
調査担当者 濱田 宏・石崎高臣

1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が経済・文化などに対する機能を備えた北東北の拠点都市を目指して、市の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。岩手県・盛岡市・旧都南村の三者は、平成 2 年 9 月に地域振興整備公団（当時・現都市再生機構）に対して事業申請を行い、これを受け公団は実施計画を作成した。平成 3 年 12 月には建設大臣と国土府長官から事業の実施許可がおり、平成 3 年度から平成 17 年度までの 15 年間を事業予定期間とし、対象面積 313ha の土地区画整備事業が実施されることとなった。なお、本事業については、当初計画より数年の期間延長が示されている。

宮沢遺跡第11次調査については、岩手県教育委員会と盛岡市が協議した結果、平成 17 年度の事業として確定し、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

(盛岡市都市整備部盛岡南整備課)

2. 遺跡の位置と立地

遺跡は盛岡市の南西部、JR 東北本線仙北町駅の西約 2.5 km にあり、零石川によって形成された標高 125m 前後の河岸段丘上に立地する。本遺跡の西側には小幡遺跡が隣接し、西方約 1 km には古代城柵志波城がある。調査前の状況は、宅地および畠地であった。



第1図 遺跡の位置

3. 基本土層

全域で以下に示したような土層が観察された。調査区南西側については、地形の凹凸により第Ⅲ層が厚く堆積する箇所がある。

第I層 10YR4/2 にぶい灰褐色 シルト質土

現表土。

第II層 10YR2/1 黒色 シルト質土

畑の耕作土である。

第III層 10YR3/3 暗褐色 シルト質土

古代の遺物を包含する。

第IV層 10YR4/4 褐色 シルト質土

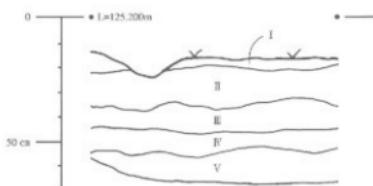
遺構検出面である。

第V層 10YR4/6 褐色 シルト質土

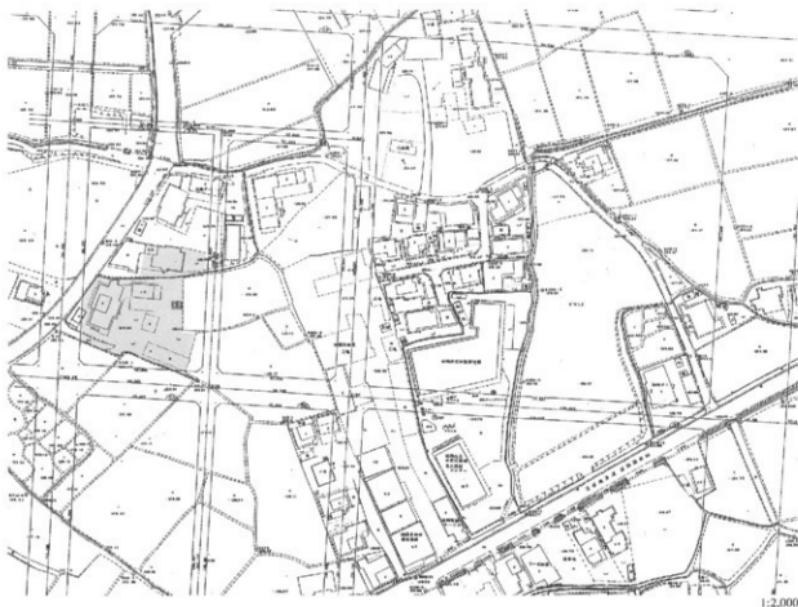
基盤層。

4. 調査の概要

かつて実施されてきた調査区北側・西側の調査では、古代の堅穴住居跡や溝などが確認されているが、今回は掘立柱建物跡1棟の検出にとどまった。遺物も土師器片や銭貨などがわずかに出土したに過ぎない。



第2図 基本層序



第3図 周辺の地形

(1) 遺構

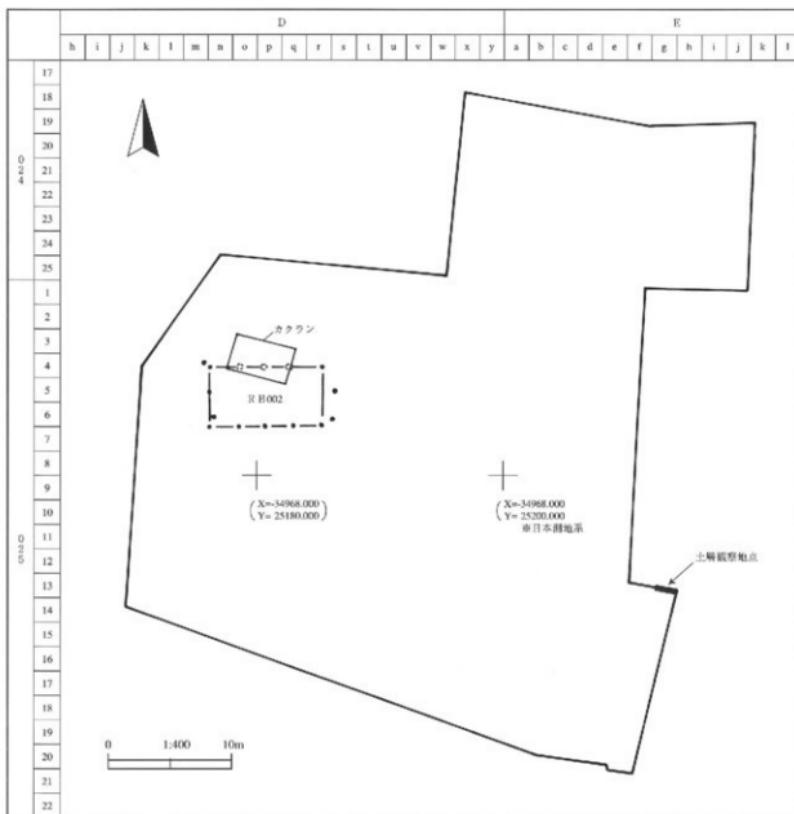
SB002 捩立柱建物跡は、調査区北西寄り、基準点1の北側5m付近に位置する。10個の柱から構成されるが、後世の擾乱により北側の3個を欠く。PP4のみ直径約12cmの柱痕跡を確認している。

全体規模は、桁行4間(8.90m)・梁間1間(4.82m)・面積42.9m²で、ほぼ正方位に沿う東西棟の建物跡である。桁行の柱間は2.15m(7尺)から2.32m(7.6尺)を測り、柱間寸法は2.2m(7.3尺)から2.4m(7.8尺)を基準とするようである。

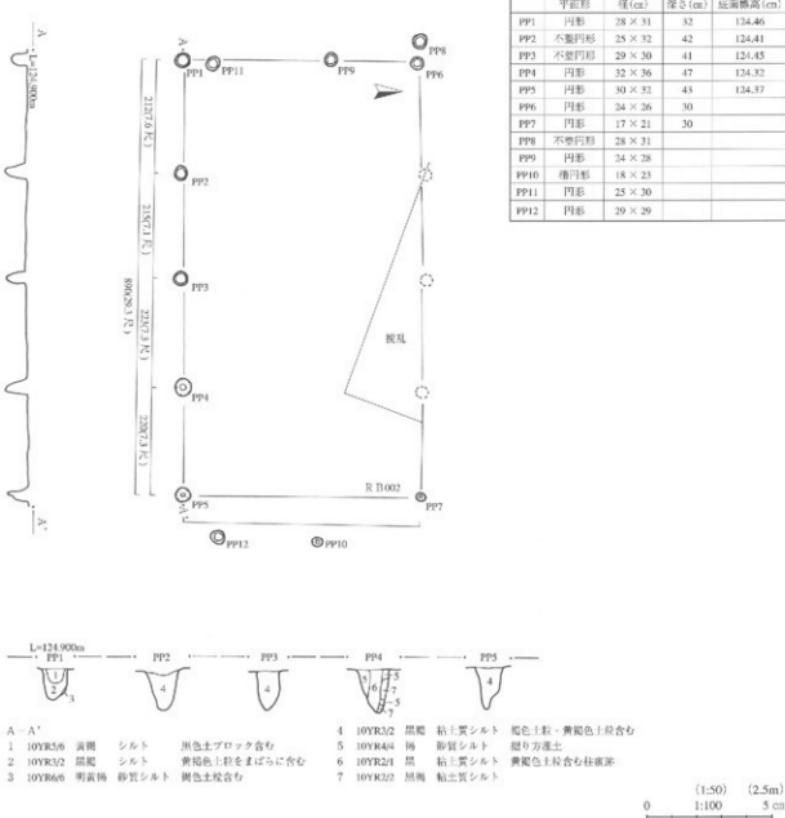
出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、近世に属するものと考えられる。

(2) 遺物

遺物は、表面採集したものと先述した地形の凹部から出土している。内訳は土師器片10点、泥面子あるいは土人形の類5点、ビー玉4個、現代の陶磁器の破片10点あまり、銭貨(寛永通寶)2点である。



第4図 宮沢遺跡第11次調査遺構配置図



第5図 挖立柱建物跡 (RB 002)・柱穴

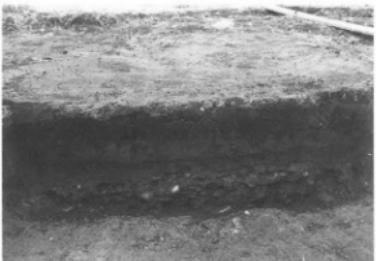
遺物写真の1はロクロ成形の土師器坏の口縁部破片、2は近世・近代の火鉢と思われる素焼きの製品、3は七福神かと思われる泥面子、4・5は寛永通寶である。

遺物観察表

番号	出土地点	層位	器種	部位	特徴(計画値)
1	調査区中央	II層	土師器・坏	口縁部	内外面ロクロ痕、赤焼き
2	基I南側凹部	II層	火鉢	口縁部	内外面ロクロ痕、素焼き、内側に煤付着
3	基I南側凹部	II層	泥面子	頭部	内面に指痕痕多い
4	調査区中央北側	検出面	錢貨		寛永通寶、直徑2.4cm、重さ2.18g
5	調査区中央北側	検出面	錢貨		寛永通寶、欠損あり、重さ0.86g



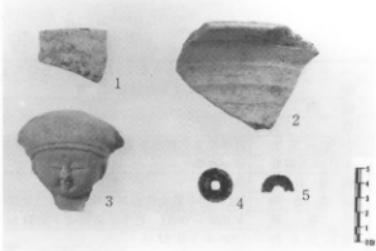
調査前の状況（南から）



基本層序



調査区全景（北から）



出土遺物



掘立柱建物跡（RB 002）

5.まとめ

今回は古代を中心とする遺構の検出、遺物の出土が予想されたが、近世と思われる掘立柱建物跡1棟とわずかな遺物しか確認されず、また調査ではほぼ全域にわたって、比較的浅い所から湧水があることが判明した。のことから、この付近は居住域としては不適な場所であり、人々遺構はあまり存在していなかったものと考えられる。

なお、宮沢遺跡第11次調査に関する報告はこれをもって全てとする。

<引用・参考文献>

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

1998『岩手県埋蔵文化財発掘調査報告』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第266集

報告書抄録

ふりがな 書名	へいせいじゅうななねんどはくつちょうさほうこくしょ 平成17年度発掘調査報告書						
刊 書 名 巻 次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第490集						
編 著 者 名	濱田 宏						
編 集 標 開							
所 在 地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	2006年3月27日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
宮沢遺跡	岩手県盛岡市本宮字宮沢29ほか	03201	LG16-2101	39度41分13秒	141度06分47秒	2005.07.01～2005.07.22	1,667m ² 「盛岡南新都市土地区画整備事業」に伴う緊急発掘調査
第11次調査							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
宮沢遺跡	集落跡	古代	掘立柱建物跡 1棟	土師器・陶磁器 瓦面子ほか			近世と思われる掘立柱建物跡を検出。
要約	かつて実施された本遺跡周辺の調査では、主に平安時代の遺構が確認されたが、今回の調査区では検出されなかった。						

*緯度・経度は世界測地系における数値である。

(4) 本宮熊堂B遺跡 第30次調査

所 在 地 盛岡市本宮字稻荷3-15他 遺跡番号・略号 LE 16-2131・OKO-05-30
委 託 者 独立行政法人都市再生機構 調査対象面積 159 m²
岩手都市開発事務所 発掘調査面積 159 m²
事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業 調査担当者 濱田 宏・石崎高臣
発掘調査期間 平成17年5月2日～5月18日

1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が経済・文化などに対する機能を備えた北東北の拠点都市を目指して、既成市街地の他に南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。この事業は、岩手県・盛岡市・都南村（平成5年に盛岡市と合併）の三者が、地域振興整備公団（現都市再生機構）に対して事業申請を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月には建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可があり、平成3年度から同17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積313haの土地区画整備事業が実施されることとなった。なお、事業期間については、当初計画より数年の延長が示されている。

本宮熊堂B遺跡第30次調査は、岩手県教育委員会と独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所が協議した結果、平成17年度の事業として確定し、財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。
(独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所)

2. 遺跡の立地

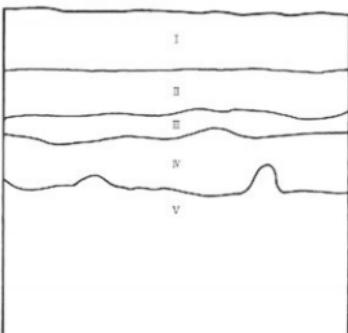
本宮熊堂B遺跡はJR東北本線盛岡駅の南西約2kmに位置し、零石川南側河岸段丘面の微高地上に立地している。標高は124m前後で、おおむね平坦な地形である。本遺跡の北側と南側は段丘面の縁にあたる。1mほど低い北側の段丘面には縄文時代晩期の集落である本宮熊堂A遺跡が立地する。



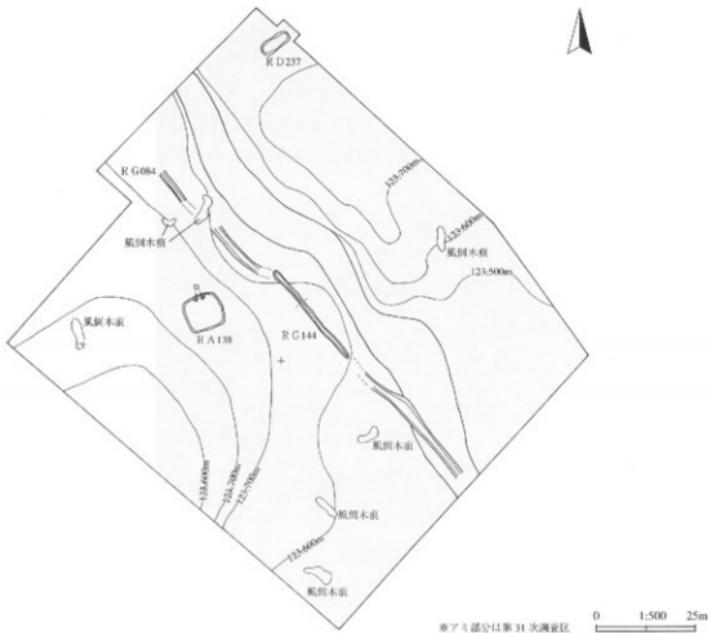
第1図 遺跡の位置

3. 基本層序

層位	色調	粘性	しまり
第I層：10 Y R 6/6 明黄褐色土		やや強	ややあり
10 Y R 8/3 浅黄橙色土	1 %・小礫微量含む		
盛土			
第II層：10 Y R 2/2 黒褐色土		強	あり
水田の床土			
第III層：10 Y R 3/3 暗褐色土		やや強	ややあり
漸移層			
第IV層：10 Y R 4/4 褐色土		やや弱	ややあり
古代の遺構検出面			
第V層：10 Y R 4/4 褐色砂		なし	なし
基盤層			



第2図 基本層序



第3図 遺構配置図

4. 調査の概要

(1) 遺構

< RG 084 溝跡>南側調査区の北西 7 P 15 h グリッド周辺に位置する。第IV層で検出し、重複する遺構はない。北西方向はかつて調査が行われた第10次調査区に、南東方向は並行して調査が行われた第31次調査区に統く。第10次調査では深さが約20~30cmあったが、今次調査では5cmばかりで、削平により底面をわずかに検出したのみと思われる。遺物が出土していないので時期は不明だが、第10次調査では平安時代ないしはそれ以前かとしている。

(2) 遺物

土師器片数点が検出面より出土した。

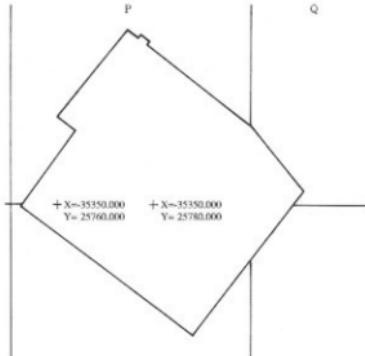
5.まとめ

今次調査区は、奈良時代の堅穴住居が検出された第10次調査区と隣接するが、RG 084 溝跡以外の遺構は検出されなかった。また、並行して調査が行われた31次調査区でも遺構密度は高くない。これまでの調査で確認された奈良・平安時代前期の集落は今次調査区まで広がっていないことが判明した。

なお、本宮熊堂B遺跡第30次調査に関わる報告は、これをもって全てとする。



写真図版1 遺跡全景（南から）



第4図 グリッド図



基本層序



遺構検出状況

写真図版2 基本層序・遺跡検出状況

報告書抄録

ふりがな 書名	へいせいじゅうななんどはつくつちょうさほうこくしょ 平成17年度発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第490集							
編著者名	濱田 宏・石崎高臣							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯田11地割185番地				TEL (019) 638-9001			
発行年月日	2006年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
本宮熊堂B 遺跡第30次 調査	岩手県盛岡 市、本宮字 福荷3-15 ほか	市町村 03201	LE16-2131	39度 21分 40秒	140度 45分 27秒	2005.05.02 ～ 2005.05.18	159 m ²	盛岡南新都市土地 区画整理事業に伴 う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
本宮熊堂 B遺跡	集落	奈良・ 平安時代 前期	なし	土師器片	なし			
要約	北上川の支流である寒石川南側河岸段丘面上に立地する古代の集落遺跡。これまで周辺からは多数の 建物が検出されているが、今回は確認できなかったことから今次調査区は集落の縁辺にあたるものと思われる。 ※経度・緯度は世界測地系における数値である。							

もとみやくまどうびー
(5) 本宮熊堂B遺跡 第31次調査

所 在 地 盛岡市本宮字稻荷3-11他 遺跡番号・略号 LE 16-2131・OKO-05-31
委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課 調査対象面積 2,412 m²
事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業 発掘調査面積 2,412 m²
発掘調査期間 平成17年4月12日～5月31日 調査担当者 濱田 宏・石崎高臣

1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が経済・文化などに対する機能を備えた北東北の拠点都市を目指して、既成市街地の他に南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。この事業は、岩手県・盛岡市・都南村（平成5年に盛岡市と合併）の三者が、地域振興整備公団（現都市再生機構）に対して事業申請を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月には建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可があり、平成3年度から同17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積313haの土地区画整備事業が実施されることとなった。なお、事業期間については、当初計画より数年の延長が示されている。

本宮熊堂B遺跡第31次調査については、岩手県教育委員会と盛岡市が協議した結果、平成17年度の事業として確定し、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

(盛岡市都市整備部盛岡南整備課)

2. 遺跡の立地

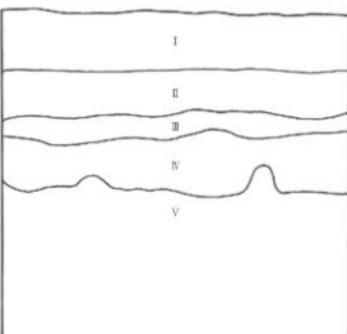
本宮熊堂B遺跡はJR東北本線盛岡駅の南西約2kmに位置し、零石川南側河岸段丘面の微高地上に立地している。標高は124m前後で、おおむね平坦な地形である。本遺跡の北側と南側は段丘面の縁にあたる。1mほど低い北側の段丘面には縄文時代晩期の集落である本宮熊堂A遺跡が立地する。



第1図 遺跡の位置

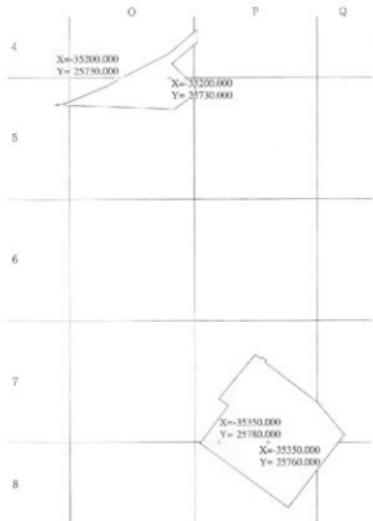
3. 基本層序

層位	色調	粘性	しまり
第I層: 10 YR 6/6 明黄褐色土	やや強	ややあり	
10 YR 8/3 浅黄橙色土 1%・小礫微量含む 盛土			
第II層: 10 YR 2/2 黒褐色土	強	あり	
水田の床土			
第III層: 10 YR 3/3 暗褐色土	やや強	ややあり	
漸移層			
第IV層: 10 YR 4/4 褐色土	やや弱	ややあり	
古代の遺構検出面			
第V層: 10 YR 4/4 褐色砂	なし	なし	
基盤層			



4. 調査の概要

調査区は北側と南側の2つに分かれており、それぞれ北側調査区・南側調査区と称する。北側調査区は14・15・18・25次調査区と接し、また、段丘の縁から一段下がったところには本宮熊堂A遺跡が位置する。南側調査区は1次調査区と北・南側で、並行して調査が行われた30次調査区と西側で接している。さらにその西側は10次調査区となる(第4・5図)。

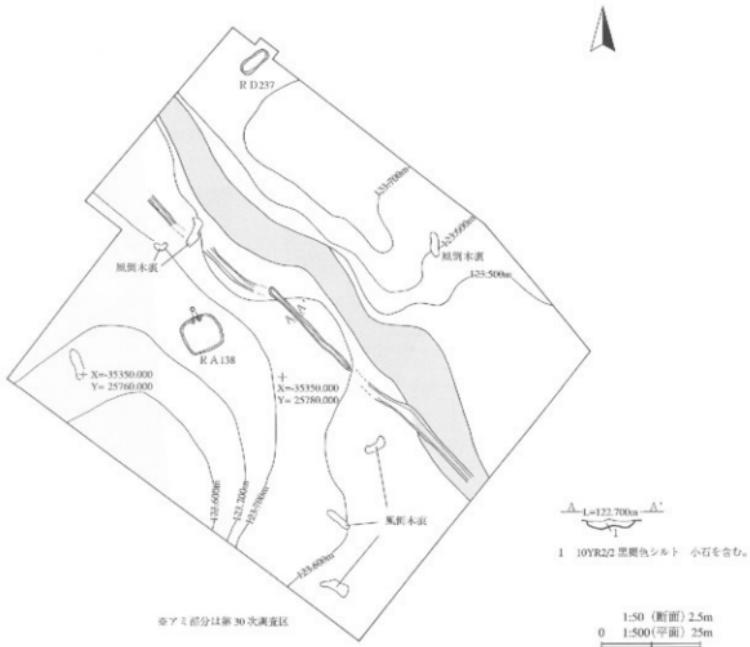


第3図 グリッド図

第4図 南側調査区周辺の状況



第5図 本宮熊堂B遺跡過年度調査地点



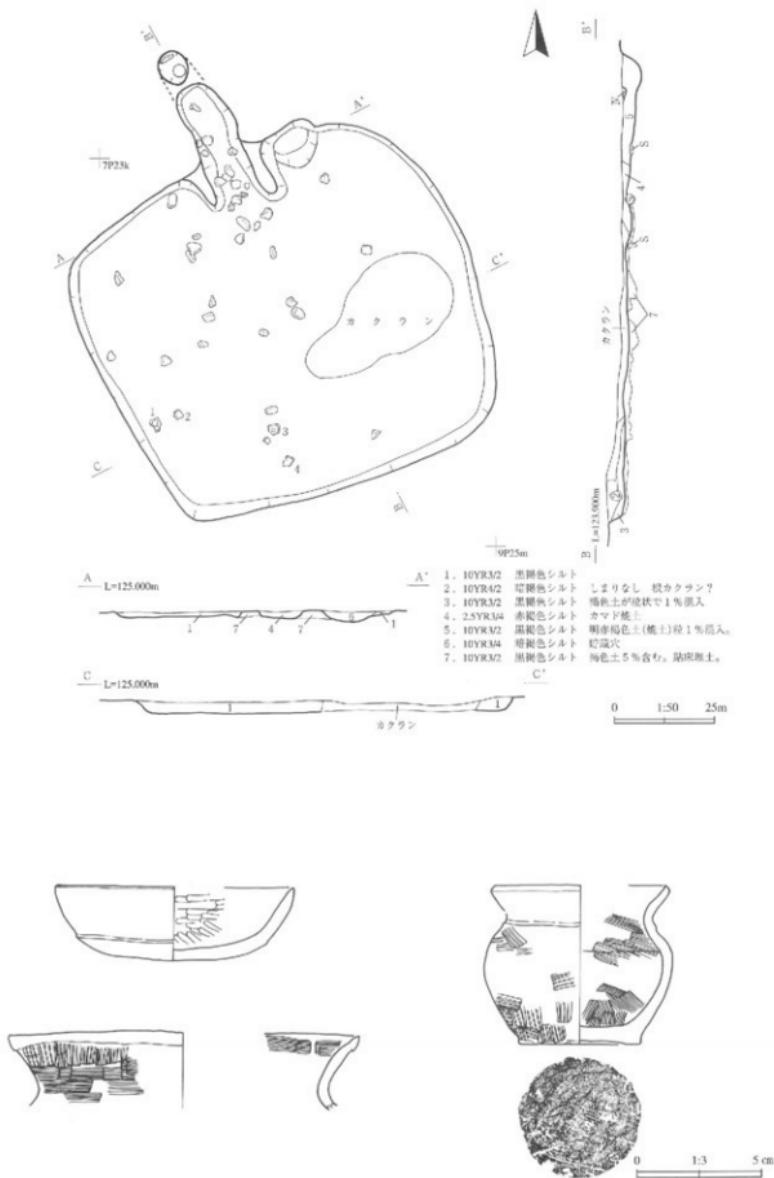
第6図 南側調査区遺跡配置図・地形図

(1) 遺構 (第6~8図、写真図版2・3)

< R A 138 竪穴住居跡 > 南側調査区の中央、7 P 22 k グリッド付近に位置する。第IV層で検出した。重複する遺構はない。平面形は隅丸方形で、東西 3.9 m、南北 3.6 m を測る。軸方向は N - 27° - W である。埋土は、検出時点でカマドの袖が見出されるほどの削平を受けているため、それほど深くなく、下層のみ残存する。住居本体の埋土としては 2 つの層が確認され（1 層と 3 層）、これらは一部レンズ状に堆積していることが観察されるので、自然堆積と考えられる。床面はほぼ平坦で、黒褐色シルトによって貼り床が施されている。また、拳大から 10 cm 前後の礫が散乱していた。壁は外傾しながら立ちあがっているようで、約 15 cm が残存する。壁溝や柱穴は構築されなかったのか、確認できなかった。カマドは北西壁の中央よりやや北寄りに構築されている。袖は地山を削りだして構築されたと考えられるが、前述のようにかなりの削平を受けているため詳しい構築方法は不明である。燃焼部は 0.7 × 0.45 m で、床面より若干掘り込まれている。煙道は切り貫き式で、壁より 1.0 m の所が突出となる。カマドの右に直径 0.5 m、深さ 5 cm ほどのピットがある。位置的に貯蔵穴と見られる。

遺物は、土師器の破片ばかり 1.1 kg が埋土から出土している。これらのうち図化可能な 3 点を掲載した。

時期は、遺物の特徴から 8 世紀後半と考えられる。

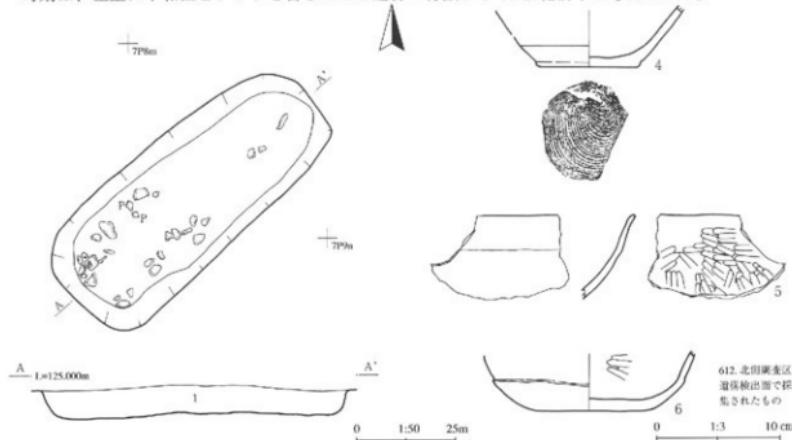


第7図 RA 137 壺穴住居跡・出土遺物

< RD 237 土坑> 南側調査区北隅の7 P 8 m グリッド付近に位置する。一部調査区外に延びていたが、あわせて精査した。第IV層で検出し、重複する遺構はない。平面形は長方形で、主軸はN-52°-Eである。規模は 3.18 × 1.34 m、深さは 30 cm。平らな底面には握り拳大の礫がみられた。これらは底面全面に渡るのではなく、特に南側に集中する。埋土は、暗褐色・褐色シルトを含む黒褐色シルトの単層で、非常によくしまっていた。削平を受けているので確実ではないが、人為的に埋め戻されたと考えられる。のことと、規模・形状から本遺構は墓壙の可能性がある。また、検出面で十和田 a テフラを確認している。

遺物は底面の南側から出土した。すべて土師器の破片で合計 130 g で、このうち 2 点を図化した。

時期は、埋土に十和田 a テフラを含むことと遺物の特徴から 10 世紀前半と考えられる。



第8図 RD 237 土坑・出土遺物

< RG 084 溝跡> 南側調査区の北西 7 P 15 h グリッドから南東 8 P 5 y グリッドにかけて位置する。第IV層で検出し、重複する遺構はない。北西方向は並行して調査が行われた第30次調査区に続く。そのさらに西側の、かつて調査が行われた第10次調査区で検出された RG 084 溝跡と方向が同じであることから、直接は接続しないけれども、本遺構も一連のものと考え、RG 084 溝跡と命名した。第10次調査では深さが約 20 ~ 30 cm あったが、今次調査では 5 cm ばかりで、削平により底面をわずかに検出したのみと思われる。遺物が出土していないので時期は不明だが、第10次調査では平安時代ないしはそれ以前かとしている。

< RG 144 溝跡> 南側調査区の中央 7 P 20 n グリッドから 7 P 25 r グリッドにかけて位置する。第IV層で検出し、重複する遺構はない。規模は、長さが 11.6 m、幅が 0.5 ~ 0.8 m、深さは 8 cm 前後である。位置と方向から RG 084 溝跡と考えられるが、北西端と南東端とが立ちあがっているため別遺構とし、RG 144 溝跡と命名した。遺物の出土はない。

(2) 遺物 (第7・8図、写真図版3)

1 ~ 3 は RA 138 穫穴住居跡から出土したもの。1 は土師器坏で、内面が黒色処理された非ロクロ成形のものである。器壁は厚く、焼成もややあまい。平底に近い丸底で、体部には段が見られ、それより上は内湾しながら立ちあがる。2 は非ロクロ成形の小型甕で、頸部には段がわずかに認められる。

焼成はあまりよくない。これらは1から、8世紀後半でも中ごろに近い時期と考えられる。4・5はR D 237土坑の底面から出土したもので、いずれもロクロ成形の土師器壺である。5には内面に黒色処理が施されて、器壁は薄い。体部は内湾しながら立ちあがり、口縁部にいたってやや外反し、端部に至る。これらの土器は、底径が小さく体部下半に再調整が施されていないことから10世紀前半と考えられる。6は非ロクロ成形の土師器壺である。北側調査区の本宮熊堂A遺跡へと続く段丘の縁の検出面から採取された。底部は平底で、体部にはわずかに段が認められる。褐鉄が付着しており水分の多い環境に埋蔵されていたと推測される。時期は、器形から8世紀後半に位置づけられよう。

5.まとめ

前述のように、今次調査区の周辺は過去に調査が行われており、奈良・平安時代前期の堅穴住居跡があわせて10棟検出されていて、遺構密度は盛南開発関連の遺跡に比べそれほど低くはない（約417m²あたり1棟）。それに比べ、今次調査では調査対象面積2,412m²で検出された堅穴住居跡が1棟のみと、遺構密度は決して高いとはいえない。これは、今次調査区が集落の縁辺にあたっていたためであろう。今次調査区内の地形図を作製すると、南側が低くなっていることが判明する。そして、最も低い部分では基盤層である第V層が細長く露出しており、おそらく沢のような状態になっていたと思われる。これらのことから、今次調査区は居住に適しない場所だったと推測される。遺構密度が低いのはそのためと考えられる。

なお、本宮熊堂B遺跡第31次調査に関する報告は、これをもって全てとする。

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうななねんどはつくつちょうさほうこくしょ					
書名	平成17年度発掘調査報告書					
副書名						
巻次						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第490集					
編著者名	濱田 実・石崎高臣					
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター					
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下郷町11地番185番地					
施行年月日	TEL (019) 638-9001 2006年3月27日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積
本宮熊堂B 遺跡第31次 調査	本宮 字 編 青 44-17 ほか	03201	LE16-2131	39度 21分 40秒	140度 45分 27秒	2,412 m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
本宮熊堂 B遺跡	集落	奈良・ 平安時代 前期	堅穴住居跡 1棟 土坑 1基 溝 2条	土師器	土坑は墓壙の可能性がある。	
要約	北上川の支流である零石川南側河岸段丘面の微高地に立地する古代の集落遺跡。 これまで周辺からは多数の建物が検出されているが、今回は堅穴住居跡1棟だけだった。今回の調査区は集落の縁辺にあたるものと思われる。					

※経度・緯度は世界測地系における数値である。



遺跡遠景（南から）



南側区遺構検出状況（北東から）

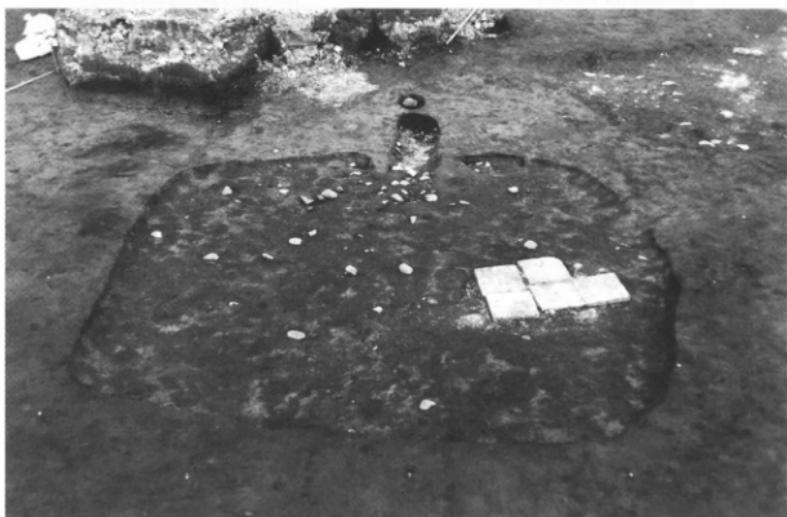
写真図版1 遺跡遠景・遺構検出状況



北側調査区検出状況（東から）



基本層序（南側調査区）



R A 137 壁穴住居完掘状況（東から）



R A 137 壁穴住居跡埋土（東から）



R A 137 壁穴住居跡カマド完掘（ひがしから）

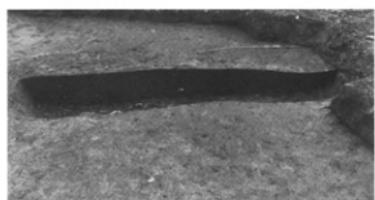
写真図版2 遺構検出状況・検出遺構①



R D 237 土坑完掘状況（南から）



R G 144 溝跡完掘状況（東から）



R D 237 土坑埋土断面（東から）



R G 144 溝跡埋土断面（東から）



1



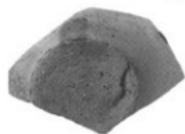
2



3



4



5



6

写真図版3 検出遺構② 出土遺物

(6) 中村遺跡 第1次調査

所在地 花巻市石鳥谷町八重畑 18 地割 22 番地ほか 遺跡番号・略号 ME 06 - 2387・NM-04
委託者 花巻地方振興局農林部農村整備室 調査対象面積 1,425 m²
事業名 経営体育成基盤整備事業八重畑地区 発掘調査面積 1,580 m²
発掘調査期間 平成 17 年 4 月 8 日～5 月 18 日 調査担当者 村上 拓・菅野 梢

1. 調査に至る経過

中村遺跡は、経営体育成基盤整備事業八重畑地区の実施に伴い、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

本事業地は、花巻市に位置し、一級河川北上川の左岸、稗貫川と添市川に囲まれた平坦な地域であるが、地区内水田は 10 a で区画が小さく道路は幅員が狭く土砂道であり、水路は土水路で用排兼用となっているため水利用の合理化が図りにくく、農業機械の大型化、水田の汎用化ができず営農に多大な労力を費やしていた。

このため本事業により、1 ha を標準とする区画の大型化や道路・用排水路の整備を実施し、農地の流動化と担い手農家への集積を進めると共に、農業生産性の向上と農業経営の安定を図るため、平成 9 年度より 371 h a の区画整理を実施している。

当該遺跡については、本事業の施工主体である花巻地方振興局農林部農村整備室からの依頼により岩手県教育委員会が平成 15、16 年度に試掘調査を実施した。その結果を踏まえ岩手県教育委員会と協議し、平成 17 年度に財團法人岩手県文化振興事業団と花巻地方振興局農林部農村整備室との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。
(花巻地方振興局農林部農村整備室)



第1図 中村遺跡 遺跡の位置

2. 遺跡の位置と立地（第1図）

中村遺跡は、花巻空港の東方約1.5kmに位置し、北上川によって形成された自然堤防上の細長い微高地に立地する。調査区は南北2地点に分かれており、北側をA区、南側をB区と仮称した。標高はA区では78.4~79.3m、B区では77.5~78.6mを測る。調査前の現況はA区は畑と水田、B区は南縁部が盛土造成による道路、それより北は水田であった。

3. 基本層序（第2図）

A区はトレンチや風倒木痕の観察などから、I層は褐色のシルト（現耕作土）、IIa層は黄褐色の粘土質シルト（洪水堆積層）、IIb層は暗褐色の粘土質シルト、IIIa層は暗褐色の粘土質シルト、IIIb層は黒褐色の砂質シルト、IV層は黄褐色の砂、V層は暗褐色の砂質シルト、VI層はにぶい黄褐色の砂である。調査区の北側は北東方向に向かってゆるやかに傾斜しながら下っており、II~VI層はこの範囲にのみ残存していた。その他の区域はIV層近くまで削平されており、I層直下がIII~IV層であった。

B区は、I層は褐色の粘土質シルト（現耕作土）、II層は暗褐色の砂質シルト（一部盛土を含む旧表土）、III層は黄褐色の砂質シルト～砂（無遺物層）である。

4. 調査の概要

今回の調査では、A区から土坑6基、柱穴6個、遺物包含層が検出された。B区は表土、盛土中から遺物が散発的に出土したのみで全体量はきわめて少なく、遺構は検出されなかった。

(1) 遺構

A区

<土坑>（表1、第3~5図、写真図版1~3）

いずれも造成による削平を受けてIV層近くまで露出していた区域（南西側）での検出である。

各土坑の開口部の平面形は、SK 02・05・06は円形、SK 04・07は梢円形、SK 03は不整形を呈する。遺構埋土にII層土を含むか（SK 04・07）、含まないか（SK 02・03・05・06）により分けることができるが、いずれも確実に遺構に伴うと判断できる遺物が出土しておらず、土坑の帰属時期は不明である。

また、調査区中央のSK 07は埋土の状況から人為的に埋め戻されたものと判断されることから、埋土から出土した土師器壺底部片（第7図1）もその際に混入したものと考えられる。

表1 A区土坑観察表

遺構名	位置 (グリッド)	開口部径 (長×短: cm)	底面標高 (m)	深さ (cm)	出土遺物 (掲載番号)
SK 02	I A 19 o	112×105	79.182	18.3	—
SK 03	I A 19 n	163×131	78.844	25.2	—
SK 04	I A 18 n~I A 18 o	150×141	78.977	35	—
SK 05	I A 17 m~I A 18 m	118×110	70.986	28.9	—
SK 06	I A 17 m~I A 17 n	122×121	79.063	25.2	—
SK 07	I A 14 j・I A 14 k・I A 15 j	145×102	79.048	32.4	土師器壺底部片（1）

* SK 01は欠番

<柱穴>（表2、第3~5図）

調査区内から6個の柱穴状ピットが検出された。SK 07の周辺にのみ分布している。造成による削平を受けた区域のためか、数が少なく、建物跡を構成する配置を復元するには至らなかった。いず

れも出土遺物を伴っておらず、帰属時期は不明である。

表2 A区柱穴観察表

No.	位置 (グリッド)	開口部径 (長×短; cm)	底面標高 (m)	深さ (cm)	掘り方埋土	柱痕跡
P01	I A15 k	31×30	78.825	42.4	10 Y R 2/3～3/3 砂質シルト	—
P02	I A15 l	34×34	78.914	37.9	10 Y R 2/3～3/3 砂質シルト	10 Y R 3/3 粘土質シルト
P03	I A14 k	45×38	79.006	35.2	10 Y R 2/3～3/3 砂質シルト	—
P04	I A15 k	32×30	79.032	31.3	10 Y R 2/3～3/3 砂質シルト	—
P06	I A15 k	50×46	79.135	17.9	10 Y R 2/3～3/3 砂質シルト	—
P07	I A15 j	32×27	79.25	11.9	10 Y R 2/3～3/3 砂質シルト	—

* P05 は欠番。

<遺物包含層> (第6図、写真図版3)

I A 11 j グリッドから I A 19 p グリッドまでを結んだライン（おおよそ標高 79.3 m の等高線と一致する）より北東部の約 480 m² の範囲で検出した。本調査区が立地している微高地が北東側へ向かってゆるやかに傾斜しながら下っているため、この範囲だけ遺物包含層が造成の際の削平を受けていなかったと考えられる。

精査方法は、人力でスコップとジョレンを用い、小グリッド (4×4 m²) 単位で一層ごとに III a 層上面まで掘り下げていった。一つの層を掘り下げ終わることに、遺構の有無の確認を行った。出土した遺物は全体の出土状況を把握するために、原則としてすぐには取り上げずに残し、遺物の出土状況の記録写真を撮影し、出土地点の平面の記録を行いながら遺物を取り上げていく方針をとった。また、精査中に出土位置から動いてしまったものは、小グリッドごとに「II～III a 層一括」としてまとめて袋に入れた。

II 層は洪水堆積層で、北側の斜面下になるほど厚く残存している。おそらく短期間に数度の堆積があったものと考えられる。調査では遺物の出土層位を「II～III a 層一括」としたが、遺物の分布が面的に広がるのは II b 層上面のみであり、これに一部 II a 層下部のものを含んでいる。II a 層下部の遺物は II b 層上面に分布する遺物が二次的な堆積（再堆積）をしたものと考えられる。II b 層上面の出土状況は低密度ながら面的な広がりをもち、なおかつ復元可能な個体が点在するような様相を呈することから、廃棄時の原位置を保っているものと考えられる。

II b 層以下については北東部全体を III a 層上面まで掘り下げ遺構検出を試みたが、結果的に遺構は検出されなかった。

遺物分布面を覆う洪水堆積層（II a 層）は、風倒木痕の断面観察から本調査区全体に堆積していたことが明らかである。しかし、遺構の分布が想定される微高地頂部（南西部）は、造成により IV 層近くまで削平を受けていた。今回出土した遺物と同時期の遺構はこの造成によって失われた可能性があると考えられる。

B 区 (第6図、写真図版1)

調査ではまず I 層と II 層を重機で除去し、遺構検出面と想定された III 層を露出させた。その結果、本調査区は南側低位面へ落ち込む崖上の縁辺部に位置し、南縁の現道は低位部に盛土を施して構築されたものであり、また現水田範囲は全面削平を受けていることが判明した。

このあと、調査区全域で遺構検出を行ったが、III 層上面において遺構と認定できる痕跡は検出され

なかった。また、本調査区西側南縁および東側中央付近にトレーナーを設定しⅢ層以下の確認を行ったが、埋蔵文化財を包蔵する土層の堆積は認められなかった。

遺物は、表土・盛土中から散発的に出土するのみで全体量はきわめて少なく、出土状況に考古学的な有意性を見出せる個体は認められなかった。

(2) 遺物

出土遺物の総量は大コンテナ ($42 \times 32 \times 30\text{ cm}$) 3箱である。掲載遺物は土器54点（縄文土器53点・土師器1点）、石器7点である。遺構内出土土器は1のみで、SK 07埋土からの出土の土師器壺底部である。2~54は遺構外出土土器であり、54がB区の検出面出土の遺物であるほかはA区北東部の遺物包含層からの出土である。石器はすべて遺構外からの出土である。

＜土師器＞SK 07から1点出土しており、掲載している(1)。壺底部で、底部の切り離しには回転糸切り技法が用いられている。

＜縄文土器＞すべて晩期中葉～末葉の土器であると思われる。完形に近い形で復元できたものも見られたが、ほとんどが破片である。掲載および記述にあたっては、時期を特定できたもの…Ⅰ群、時期を明確にできない土器…Ⅱ群の区分を行った。Ⅰ群の中での小分類は1類、2類…、として記載した。

・Ⅰ群1類…晩期中葉期の土器群で、大洞C2式に比定されるものである(4・13・15・34・37・41・43)。15・34・37・41・43は粗製の深鉢であるが、いずれも僅かながら装飾が加えられている。口縁部は外傾して立ち上がり、数条の平行沈線が巡らされている。口唇部には刻みや押圧が施されている。41は山形突起をもち、口縁部内面に沈線が施されている。4はA突起とB突起をもち(4単位か?)、胴部上半に刺突列、平行沈線、連弧状沈線が施されている鉢である。13は口唇部に刻み、口縁部に沈線が施されている。また、4と13は晩期の中でも1時期新しい大洞A式に分類される可能性がある。

・Ⅰ群2類…晩期後葉期の土器群で、大洞A式に比定されるものである(12・14・29・38・42・44・45・48・52)。12・29・38・52は深鉢であるが、いずれも口唇部は押圧や沈線が施されている。胴部は縄文のみが施されているものが多い。42・44・45は文様の特徴から大洞A式の中でも新しい時期に分類される可能性がある。14は胴部上半に平行沈線と粘土粒が施されていることから、次の大洞A'式に帰属する可能性がある。

・Ⅰ群3類…晩期後葉期の土器群で、大洞A'式に比定されるものである(9・24・36)。いずれも浅鉢で、変形工字文が施されている。

・Ⅱ群…時期を明確にできない土器群である(2・3・5~8・10・11・16~23・25~28・30~33・35・39・40・46・47・49~51・53・54)。深鉢・鉢・台付鉢・壺が見られる。ただし、5の深鉢は晩期後半、7の深鉢と28の浅鉢は晩期後葉～末の時期に分類される可能性がある。

＜石器＞55・56は石鎌でどちらも有茎のものである。57は石匙で両面加工されている。58・61は不定形石器で58は両面に加工が施されている。59・60は打製石斧で、60は一側縁に両面加工が施されている。

5.まとめ

調査成果の概要を以下に列記し、まとめとしたい。

・A区南西部では土坑と柱穴状ピットが検出されたが、遺構の時期を特定する遺物が出土しなかつたため、帰属時期は不明である。

・A区北東部では洪水堆積層に覆われた遺物分布面が検出された。出土した遺物は縄文時代晩期中葉から晩期末葉と考えられる。

- ・A区は南西部が造成によって削平されていたが、北東部で確認された洪水堆積層は調査区全体に堆積していたと判断できる。北東部で出土した遺物と同時期の遺構は削平された南西部に分布していた可能性がある。
- ・B区は南側低位面へ落ち込む崖上の縁辺部に位置し、造成により全面削平を受けており、遺構は検出されなかった。

なお、中村遺跡第1次調査に関する報告は、これをもってすべてとする。

<参考文献>

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

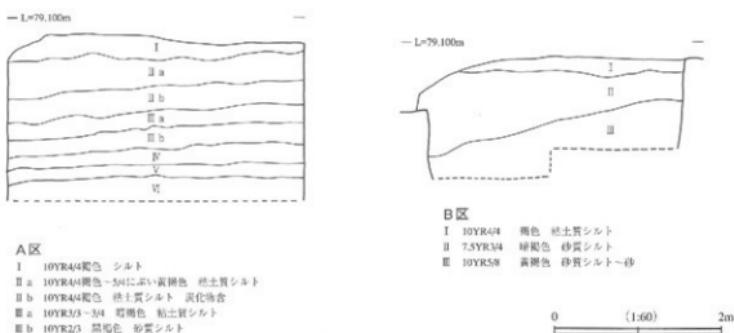
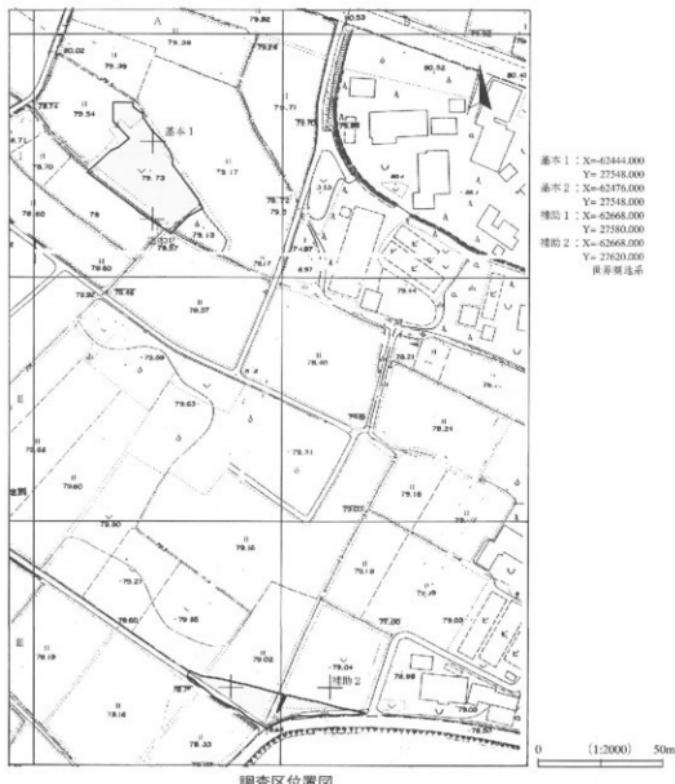
- 1997『上郷生遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第253集（以下第○集と略す）
- 2000『川岸場Ⅱ遺跡発掘調査報告書』第317集
- 2000『峠山牧場Ⅰ遺跡B地区発掘調査報告書』第320集

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうななねんどはくつちょうきほうこくしょ							
書名	平成17年度発掘調査報告書							
圖書名								
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第490集							
編著者名	菅野 桔							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019) 638-9001							
発行年月日	2006年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 度	調査期間	調査面積	調査原因	
中村遺跡 第1次調査	岩手県花巻市石鳥 谷町八重畠18地 割22番地ほか	03205	ME06-2387	39度 25分 45秒	141度 10分 26秒	2005.04.08 ~ 2005.05.18	1,580m ²	経営体育成基盤整備 事業「八重畠地区」 に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
中村遺跡 第1次調査	散布地	縄文時代 時期不明	遺物包含層 土坑6基 柱穴状土坑6個	縄文土器・石器				

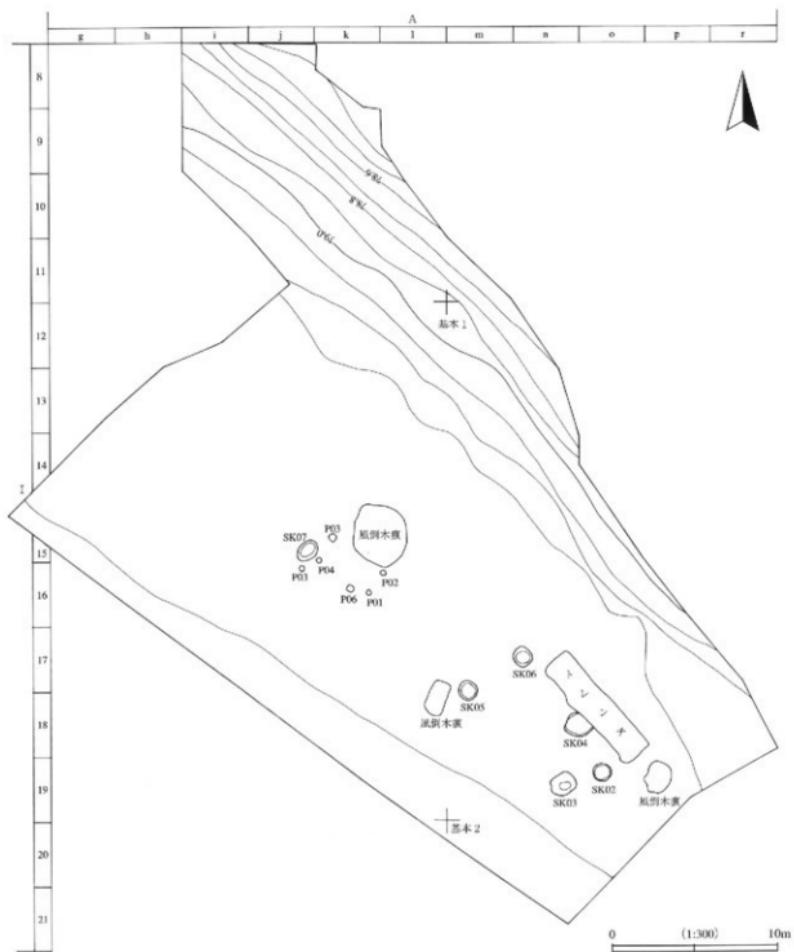
要約 本遺跡は、花巻市石鳥谷町八重畠に所在し、北上川東岸の自然堤防上に立地する。遺跡の南北2地点を調査した結果、北側の調査区で低密度ではあるが縄文時代後期の遺物包含層が検出された。

東経度、緯度は世界測地系における数値である。

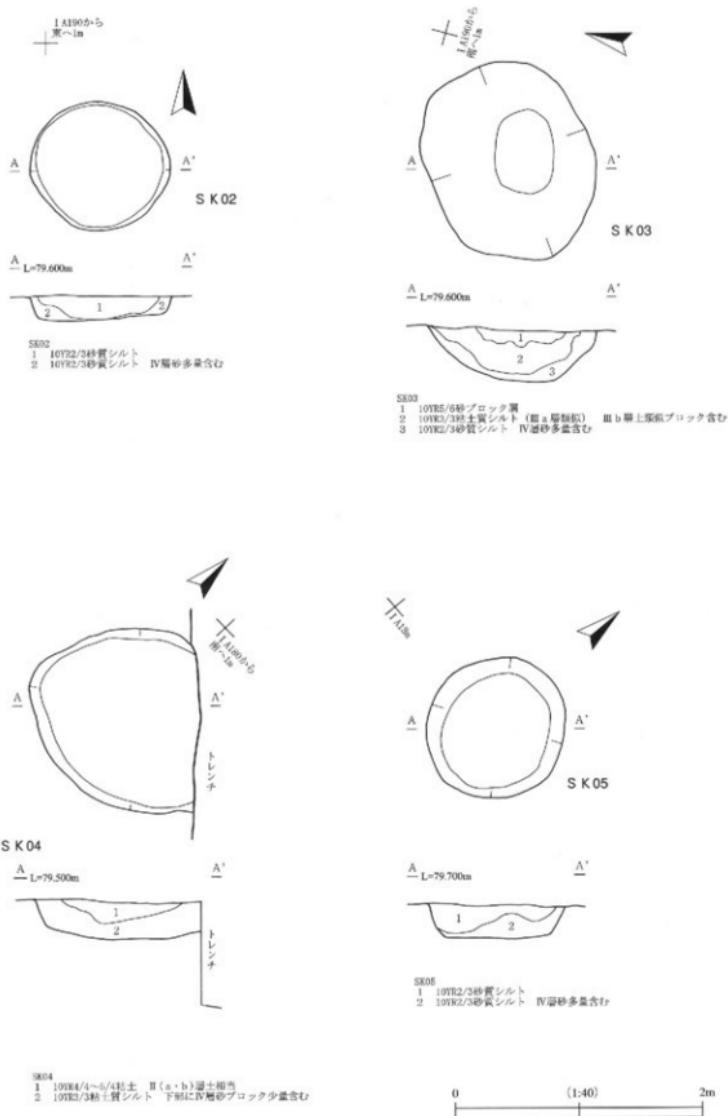


基本層序

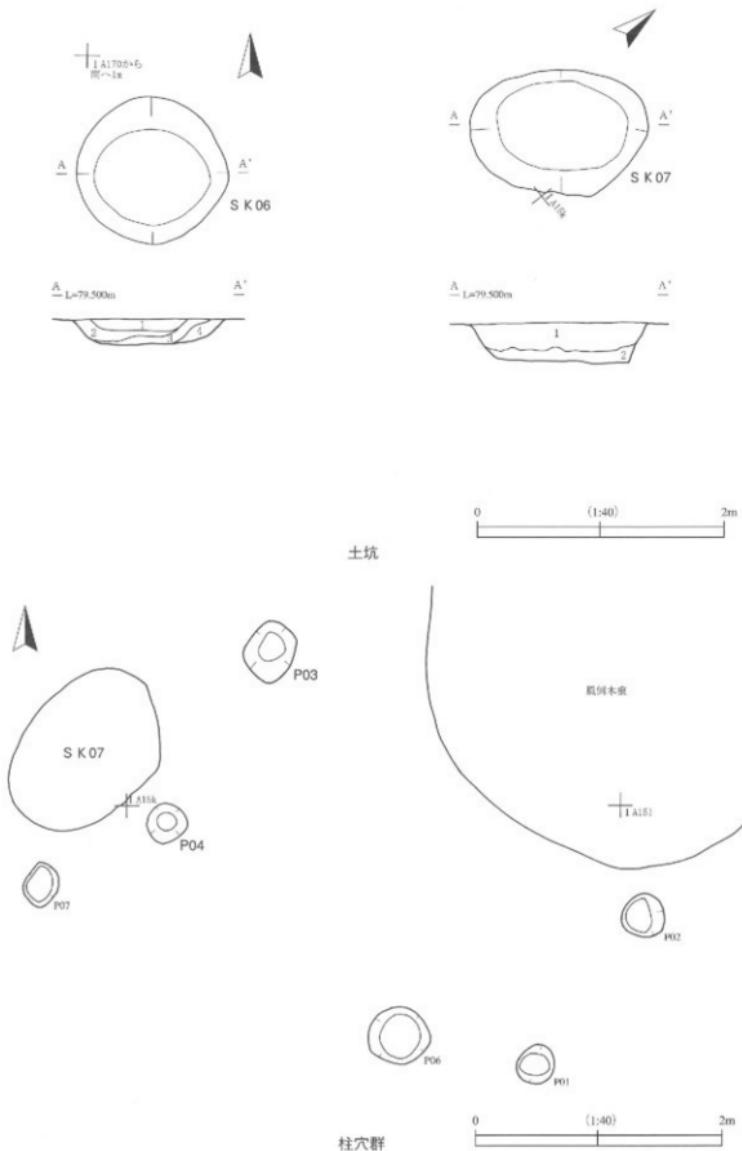
第2図 中村遺跡調査区位置図・基本層序



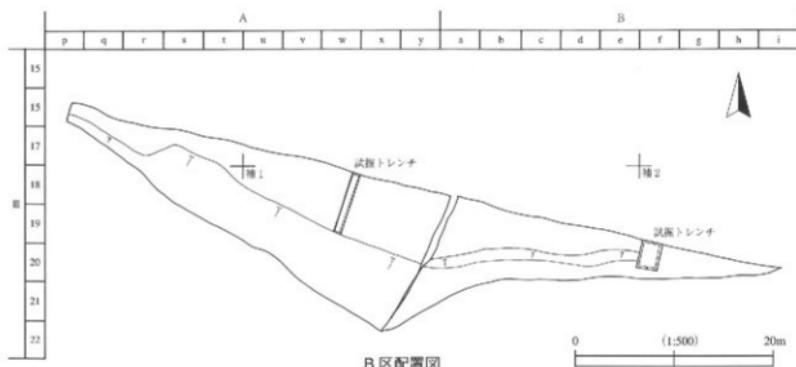
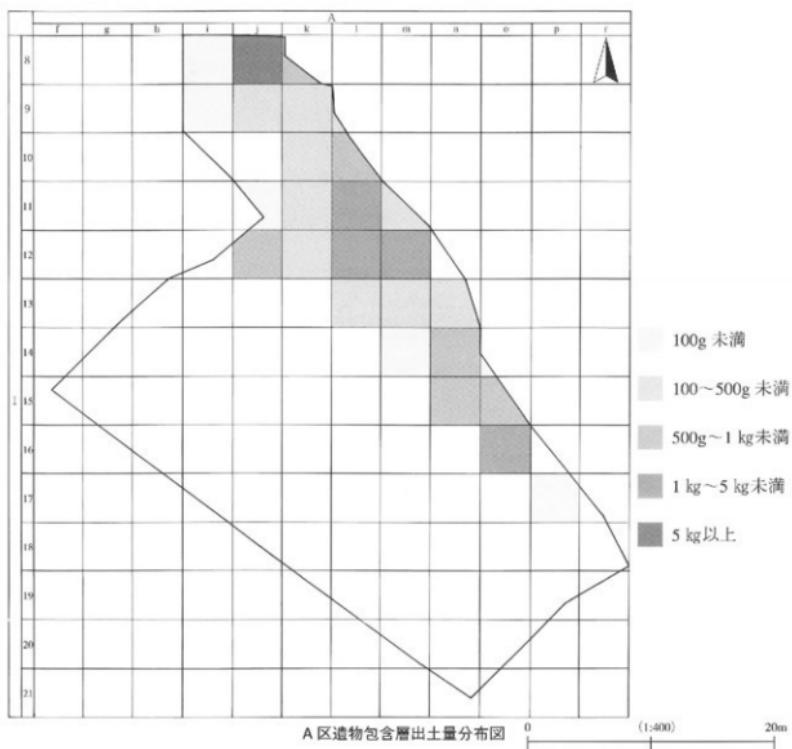
第3図 中村遺跡A区遺構配置図



第4図 中村遺跡土坑SK 02～05



第5図 中村遺跡土坑SK 06・07、柱穴群



第6図 中村遺跡A区遺物包含層出土量分布図、B区配置図



表3 遺物観察表

No.	出土位置(遺構名・グリッド)	その他の箇所のグリッド	器種・部位	特徴	時期
1	A区 SK 07 深土	—	土師器耳・底部	底面: 回転系切り 口唇削み?、口縁無文、横文L R	平安時代
2	I A 8 j	—	深鉢・口一底	口縁無文、横文L R	■
3	I A 8 j	I A 8 k	深鉢・口一肩	口縁無文、横文L R	■
4	I A 8 j	—	鉢・はげ穴形	口唇疣縁、平行疣縁、邊縁底沈縫、横文R L	I・I
5	I A 8 j	I A 8 k・I A 9 k	深鉢・はげ穴形	口縁無文、横文L R	■
6	I A 8 j	—	鉢・はげ穴形	口縁無文、横文L R	■

第7図 中村遺跡出土遺物（1）



表4 遺物観察表

No.	出土位置(遺構名・グリッド)	その他の破片のグリッド	部種・部位	特徴	時期
7	I A 8 j	—	深鉢・削~底	沈筋、底型:新代底、縄文L R	II
8	I A 8 j	—	深鉢・抜け丸形	平行沈筋、縄文L R	II
9	I A 9 k	—	浅鉢?・口微膨	口唇部沈筋、口唇内沈筋、安形工字文	I・II
10	I A 10 l	—	深鉢・口~底	口唇部柱文、網文L R	II

第8図 中村遺跡出土遺物(2)

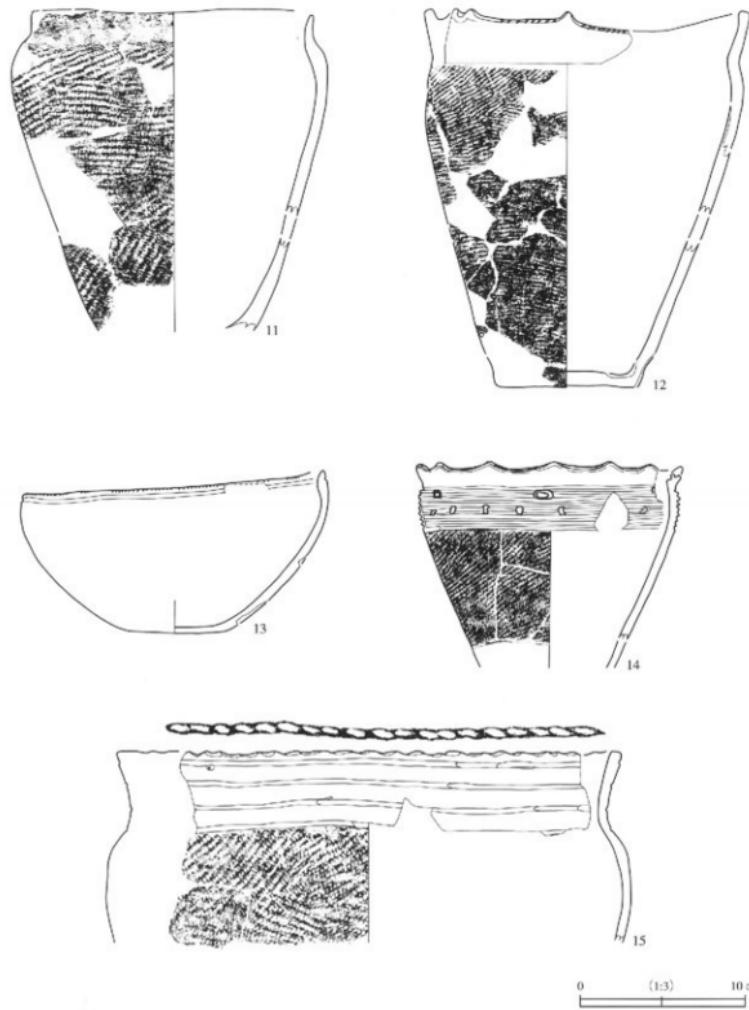


表5 遺物観察表

No.	出土位置 (遺構名・グリッド)	その他の範片のグリッド	断面・部位	特徴	時期
11	IA 11 R	—	縦鉢・口～腹	口沿無文、網文しR	Ⅱ
12	IA 11 I	—	縦鉢・口～底	口唇施紋、波状口縁、網文LR	I・2
13	IA 11 I	—	横鉢・口～底	口唇削み、沈痕、ミガキ？	I・1
14	IA 11 I	IA 12 I・IA 16 o	縦鉢・口～側	口唇沈像、口縁内沈像、波状口縁、平行沈縁、粘土瘤、網文LR	I・2
15	IA 11 I	IA 12 I・IA 12 m	縦鉢・口～側	平行沈縁、口唇落、純文し？	I・1

第9図 中村遺跡出土遺物（3）



表6 遺物観察表

No.	出土位置 (遺産名・グリッド)	その他の観察のグリッド	器種・部位	特徴	時期
16	I A 11.1	—	深鉢・口～底	山形突起、沈継、縄文L.R	II
17	I A 11.m	I A 12.m	深鉢・腹～底	輪帶面、縄文L.R	II
18	I A 12.j	—	深鉢・腹～底	器底削耗、底部：縄代灰	II
19	I A 12.j	—	鉢・口～割	丸ののみ、純文L.R	II
20	I A 12.l	—	浅鉢？・腹～底	沈継	II
21	I A 12.l	—	舟付鉢	舟形：ミガキ？	II
22	I A 12.l	—	深鉢・底鉢片	縄文R.L	II
23	I A 12.l	—	深鉢？・口縁鉢片	波状？、縄文しR	II
24	I A 12.l	—	浅鉢	B突起、口唇沈継、底部T字文	I - 3
25	I A 12.m	—	蓋？		II
26	I A 12.m	I A 9.h	深鉢・腹～底	輪帶面、縄文L.R	II
27	I A 12.m	—	深鉢・腹～底	輪帶面、縄文L.R	II
28	I A 12.m	—	浅鉢・口縁鉢片	口唇、口縁内沈継、縄文しR?	II

第10図 中村遺跡出土遺物(4)

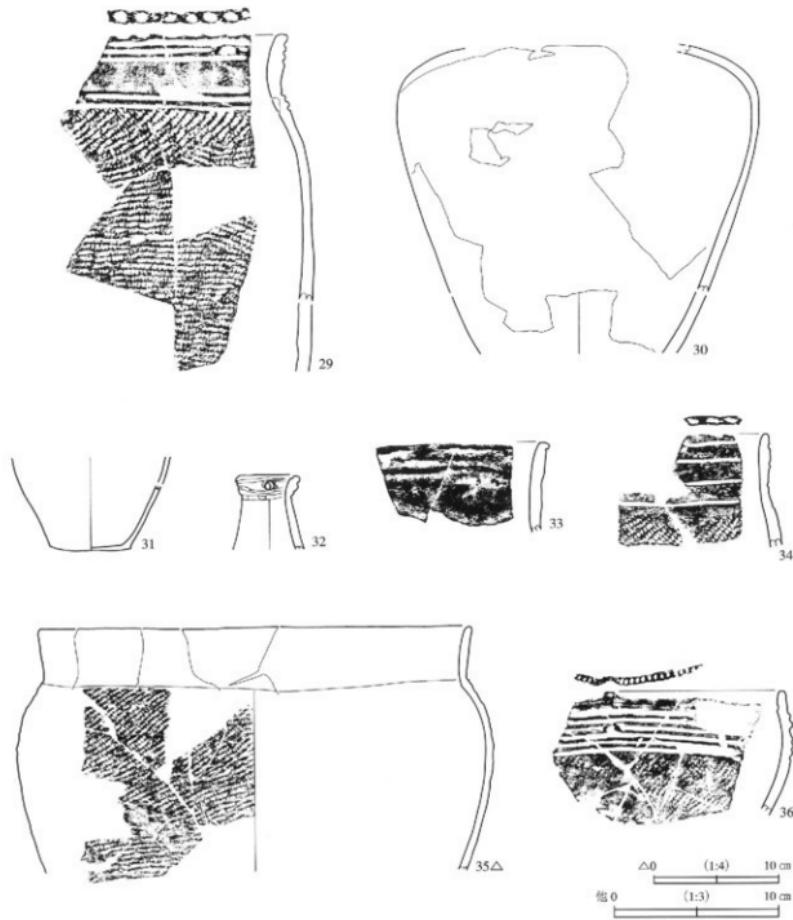


表7 遺物観察表

No.	出土位置(遺構名・グリッド)	その他の断片のグリッド	器種・部位	特徴	時期
29	I A 12 m	—	深鉢・口~肩	小波状凹縁、平行沈線、模文しR	I - 2
30	I A 12 m	I A 10 l	壺・肩	岸感激しい	Ⅲ
31	I A 12 m	—	深鉢・肩~底	ミガキ・ケズリ	Ⅲ
32	I A 12 m	—	壺・口縁部	平行沈線	Ⅲ
33	I A 12 m	I A 12 l	深体?・口縁部分	浅い沈線?	Ⅲ
34	I A 13 l	—	深鉢・口縁部分	(口唇削み・平行沈線、模文しR)	I - 1
35	I A 13 m	I A 12 m	深鉢・口~肩	口縁無文、模文しR	Ⅲ
36	I A 13 m	—	浅鉢・口~肩	口唇削み、平行沈線	I - 3

第11図 中村遺跡出土遺物(5)



表 8 遺物観察表

No.	出土位置 [遺物名・グリッド]	その他の破片のグリッド	器種・部位	特徴	時間
37	I A 13 m	—	漆鉢・口～底	小波状口縁、平行沈線、網文 L R	I - 1
38	I A 14 n	I A 13 n	漆鉢・口～底	小波状口縁、平行沈線、網文 L R	I - 2
39	I A 14 n	I A 15 n	漆鉢・刷～底	地紋のみ、純文 L R	II
40	I A 15 n	—	漆鉢・刷～底	沈線、	II
41	I A 15 n	I A 14 n	漆鉢・口～底	口部刷み、沈線、網文 L R	I - 1
42	I A 15 o	—	漆鉢・口～底	口部刷み、山形突起、平行沈線	I - 2

第 12 図 中村遺跡出土遺物 (6)



表9 遺物観察表

No.	出土位置 (遺物名・グリッド)	その他の裏面のグリッド	器種・部位	特徴	時期
43	I A 16 o	—	浅鉢・口～腹	口沿刷毛、B突起、平行沈線。網文L.R	1-1
44	I A 16 o	—	浅鉢・口～腹	口沿刷毛、沈線、周文L.R	※ No.45と同一器体 1-2
45	I A 16 o	—	鉢・口唇龍鱗片	口沿刷毛、重形L字文?	※ No.44と同一器体 1-2
46	I A 16 o	—	鉢・口～底	壁面擦傷し、ケズリ?、輪帶痕	■
47	I A 16 o	—	浅鉢・第1基	地紋のみ、横文L.R	■
48	I A 16 o	—	台付鉢	沈線、輪帶痕	1-2
49	I A 16 o	—	深鉢?・口唇龍鱗片	口沿無文、横部孔、網文L.R	■
50	I A 16 p	—	浅鉢・口唇龍鱗片	突起、平行沈線、K区間条跡	■
51	I A 16 p	I A 16 o	浅鉢・口～腹	口沿無文	■
52	A区北東部 横出面	I A 8 i	深鉢・口唇龍鱗片	口沿基部正直、平行沈線	1-2
53	A区北東部 横出面	—	浅鉢・第2基	沈線、周文L.R	■
54	II B 19 b 横出面	B区中央 横出面	深鉢・第1基	輪帶痕、地紋のみ、網文R.L	■

第13図 中村遺跡出土遺物 (7)



表 10 遺物観察表

No.	出土位置	部様	計測値 (cm)			重量 (g)	特徴など
			長さ	幅	厚さ		
55	I A 12 m	石核	4.5	2	0.6	4.3	石核；貫器（北上山地・古生代）
56	I A 12 m	石核	4	2.3	0.7	4.58	石核；貫器（北上山地・古生代）
57	I A 9 k	石核	4.65	6.1	1.3	27.5	石核；貫器（北上山地・古生代）
58	A区北東部 植生面	不定形石器	5.8	6.6	1.55	45.5	石核；貫器（北上山地・古生代）
59	A区 表土	打製石斧	9.9	4.85	1.4	72.4	石核；砾状器（北上山地・古生代）
60	A区北東部 植生面	打製石斧	18.7	7.1	3.5	656.4	石核；貫器（北上山地・古生代）
61	A区 表土	不定形石器	3.2	2.3	1.2	6.2	石核；貫器（北上山地・古生代）

第14図 中村遺跡出土遺物 (8)

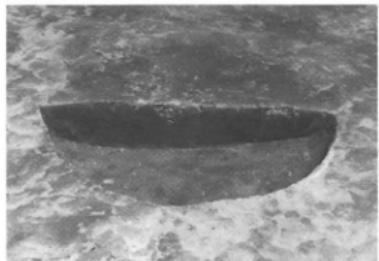


A区 全景（南東から）

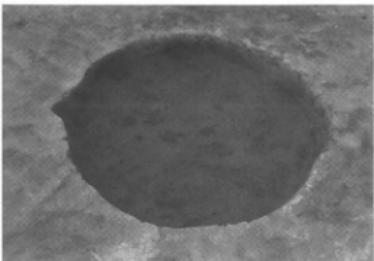


B区 全景（東から）

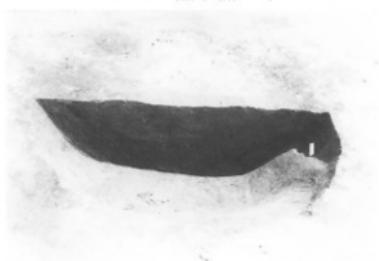
写真図版1 中村遺跡検出遺構（1）



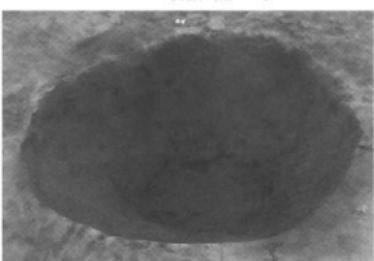
S K 02 断面（南から）



S K 02 完掘（南から）



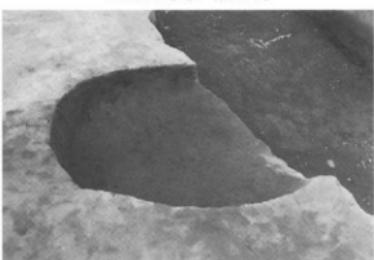
S K 03 断面（西から）



S K 03 完掘（南から）



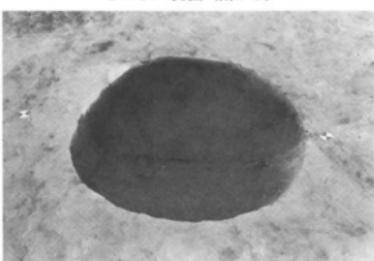
S K 04 断面（南東から）



S K 04 完掘（南から）

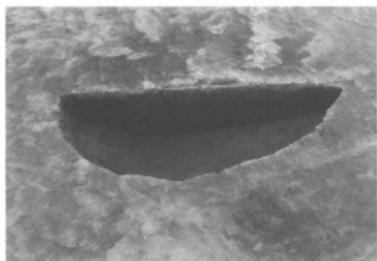


S K 05 断面（南東から）（南東から）

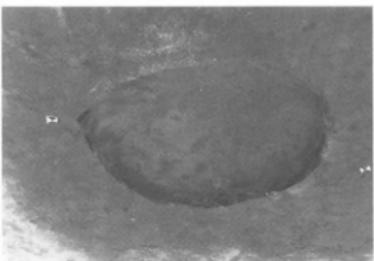


S K 05 完掘（南東から）

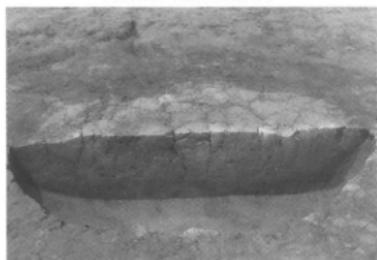
写真図版2 中村遺跡検出遺構（2）



SK 06 剖面（南から）



SK 06 完掘（南から）



SK 07 剖面（南から）



SK 07 完掘（南東から）



IA 8 j 土器出土状況



IA 8 j 土器出土状況近景

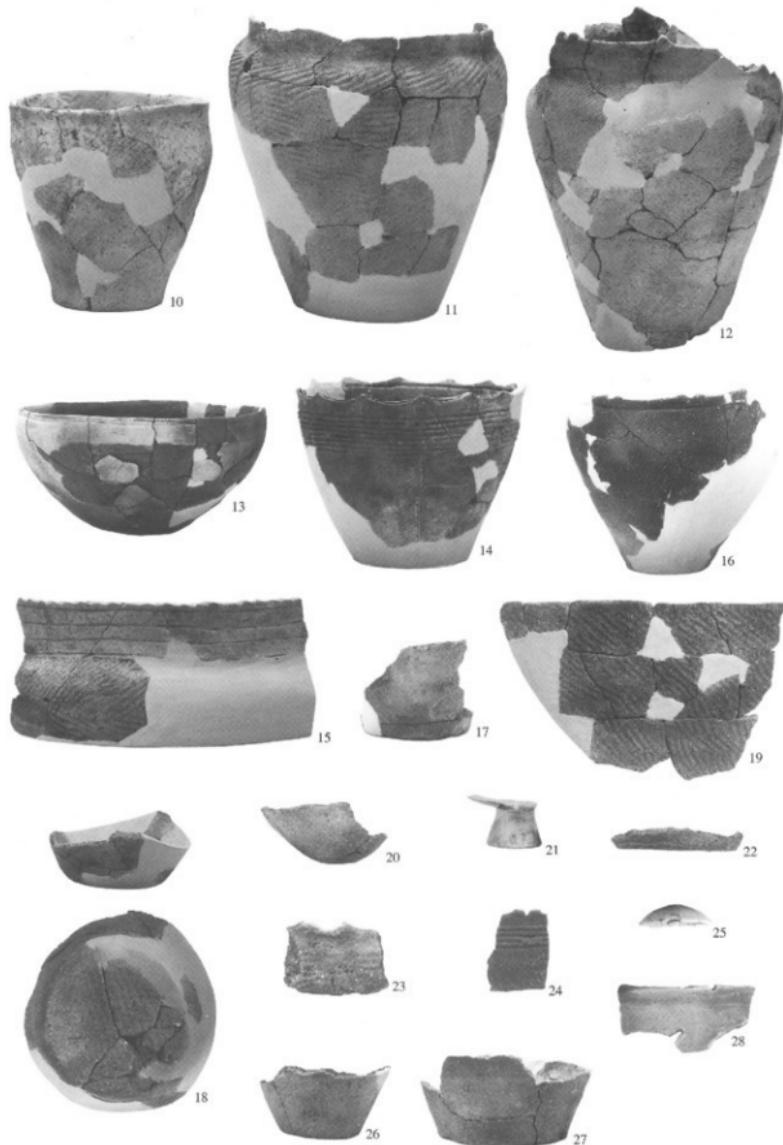


A区北東部 剖面（南西から）

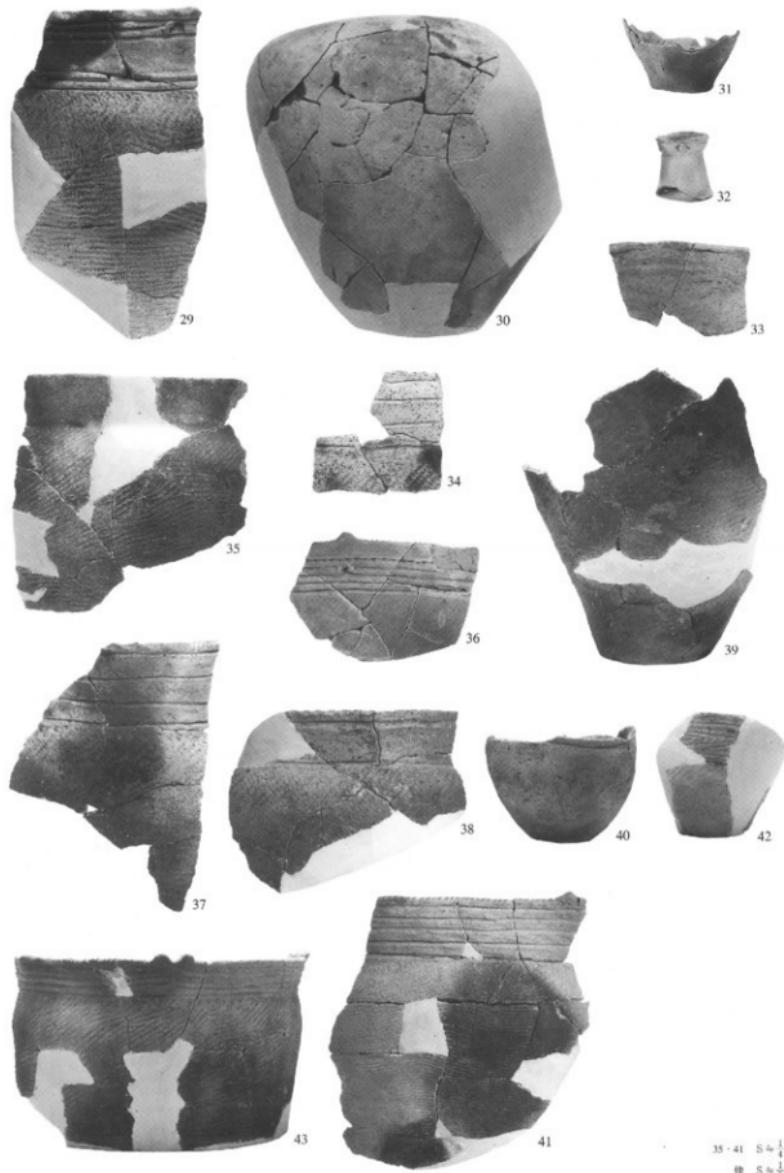


写真図版4 中村遺跡出土遺物（1）

1~3・6・7・9 S= $\frac{1}{3}$
4・5・8 S= $\frac{1}{5}$

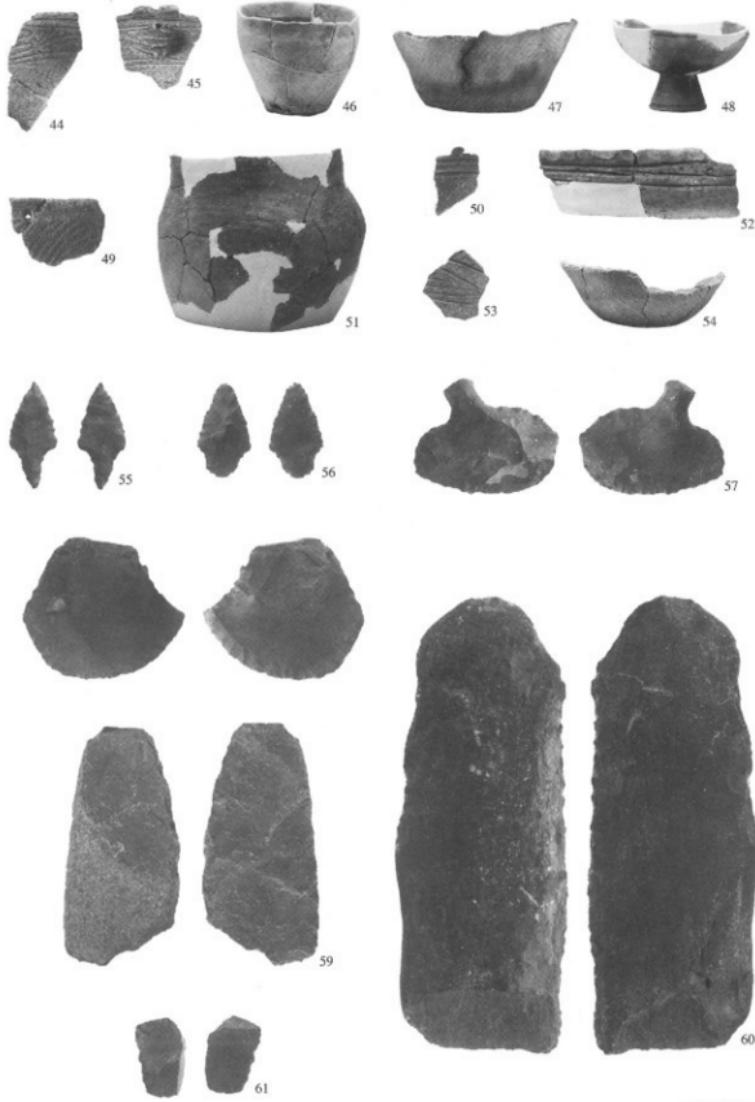


写真図版 5 中村遺跡出土遺物 (2)



写真図版 6 中村遺跡出土遺物 (3)

35・41 S 4 1/4
36 S 4 1/3



44 ~ 54 S $\approx \frac{1}{2}$
55 ~ 61 S $\approx \frac{1}{2}$

写真図版7 中村遺跡出土遺物（4）

(7) 道上遺跡 第1次調査

所 在 地	奥州市前沢区白山字胎内64ほか	遺跡番号・略号	N E 47-0045・D U -05
委 託 者	水沢地方振興局農政部農村整備室	調査対象面積	8,800m ²
事 業 名	経営体育成基盤整備事業白山地区	発掘調査面積	8,269m ²
発掘調査期間	平成17年7月1日～10月24日	調査担当者	川又晋・村上拓・菅野梢

1. 調査にいたる経過

道上遺跡は、経営体育成基盤整備事業白山地区の施行に伴い、事業区域内に位置することから、埋蔵文化財調査を実施することになったものである。

本事業は、奥州市前沢区白山地内の約270haを圃場整備するもので、大部分は昭和29年～31年の非補助土地改良事業により10a区画に整備されているが、農地幅員が2～3mと狭小で農作業の効率が悪く、水路は用耕兼用土水路のため、用水不足や排水不良をきたし、維持管理に多大な労力を投じている現状である。よって本事業により営農規模拡大を目指した大区画圃場とし、作業体系の受委託及び農地の流動化を促進し、経営規模拡大による担い手農家の育成を図ると共に、生産コスト低減のための整備を行い近代農業化による農業経営の安定を期するものである。

本事業の施行に係る埋蔵文化財の取扱いについては、圃場整備事業主体の水沢地方振興局農政部農村整備室が、平成15年12月3日付け水地農整第663-1号で県教育委員会に試掘調査を依頼した。

依頼を受けた県教育委員会は、平成15年12月24日付け教生第1550号で回答を行い、発掘調査が必要となった。これを受け財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに発掘調査を委託することになった。

(水沢地方振興局農政部農村整備室)



第1図 道上遺跡の位置 (1:25000 前沢)

2. 遺跡の位置と立地

道上遺跡は、JR陸中折居駅の南東約2.3kmに位置する。北上川右岸の沖積平野上の微高地に立地し、標高は31m前後である。東約1kmには北上川が南流する。調査区の現況は、水田・畑地であった。水田は、昭和30年代頃の区画整理事業によって、旧地形を削平・盛土して造成されたものである。調査区内には南北に走る旧河道が2本確認されており、遺跡内の地形は旧河道部分とそれに挟まれた微高地部分とに分かれる。近隣の遺跡としては、西に川前遺跡、北東に学堂遺跡、南東に学堂Ⅱ遺跡、南に合野遺跡が確認されている。

3. 基本層序

I層は水田の耕作土層、II層は水田造成時の盛土層で、近現代に形成された層とみられる。III層の黒褐色シルトは旧表土で、遺構埋土はこれを主体とする。IV層は褐色のシルトで、地山である。遺構検出はIV層上面で行った。地点によってはIII層が削平されており、I層直下にIV層が表出する。

I層 水田耕作土層 層厚 20 cm

II層 盛土層 層厚 0 ~ 80 cm

III層 旧表土層 層厚 0 ~ 20 cm 10YR2/2 (黒褐色) シルト 粘性やや有 しまり有

IV層 地山層 層厚不明 10YR4/3 (褐色) シルト 粘性有 しまり強

4. 調査の概要

調査対象となったのは、は場整備事業に伴い道路・水路が建設予定となった範囲で、総面積8,269m²である。このうち、水路建設予定部分の4,970m²は遺構精査までの本調査、道路建設予定部分の3,299m²は遺構検査までの確認調査を行っている。上記のような調査原因に基づくため、調査区は幅2m・4m・7mなどの細長い範囲に限られ、遺跡内を網目状に巡る格好となっている。調査の便宜上、北側の本調査区をA区、南側の本調査区をB区とし、確認調査区はC区とした。A・B・Cの各区は、現水田の区割りである畦畔などを日安にして、A1~A4区、B1~B14区、C1~C19区のように細分した。遺構名は、「A1区S K 01」のように、検出した区ごとに名付けた。グリッドは、国家座標X Y系に合わせて打設した基準杭をもとに、100×100mの大グリッドと、それをさらに細分した4×4mの小グリッドを設定した。各調査区の名称、グリッドの配置等は第2図に示した。なお、調査区が広汎であり、紙数の制限であることから、遺構配置図は遺構の分布する範囲のみに限り、縮尺100分の1(確認調査区は200分の1)で掲載している(第3~7・12図、配置図①~⑩)。

(1) 本調査区の遺構

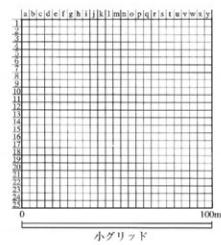
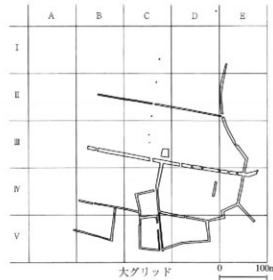
本調査区(A1~A4区、B1~B14区)で検出した遺構は、竪穴住居跡2棟、住居状遺構3棟、土坑15基、溝跡2条、柱穴状小土坑472個を数える。ただし、A2区・B4~7区・B9区では、遺構は確認されず、A2区・B4区・B5区・B7区においては遺物も出土していない。なお、A3区の東辺部分は、現況において用水路のU字溝が敷設されていたが、U字溝を撤去し部分的にトレチを入れたところ、遺構検出面より30~40cm深く削平され、砂利が詰められている状況であった。水路構築時に削平されたものとみられるが、遺構の遺存する可能性は低いとみられたため、部分的なトレチのみで調査を終了している。

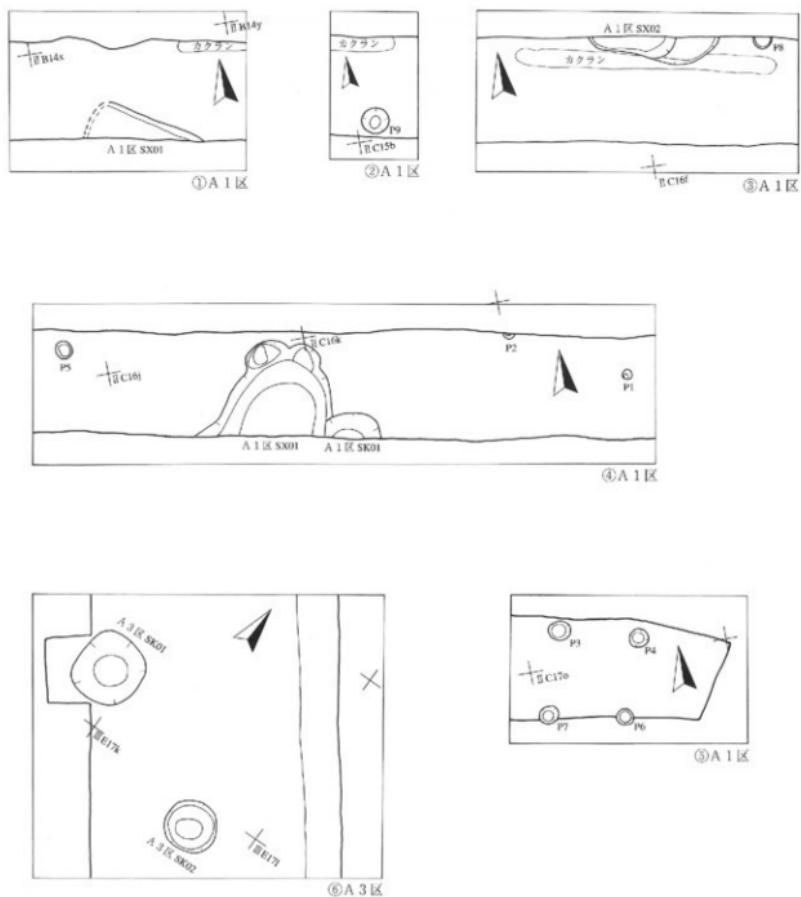
(i) 竪穴住居跡

A4区S K 01 竪穴住居跡(第9図・写真図版1) III C 19 v グリッドに位置する。確認できたの



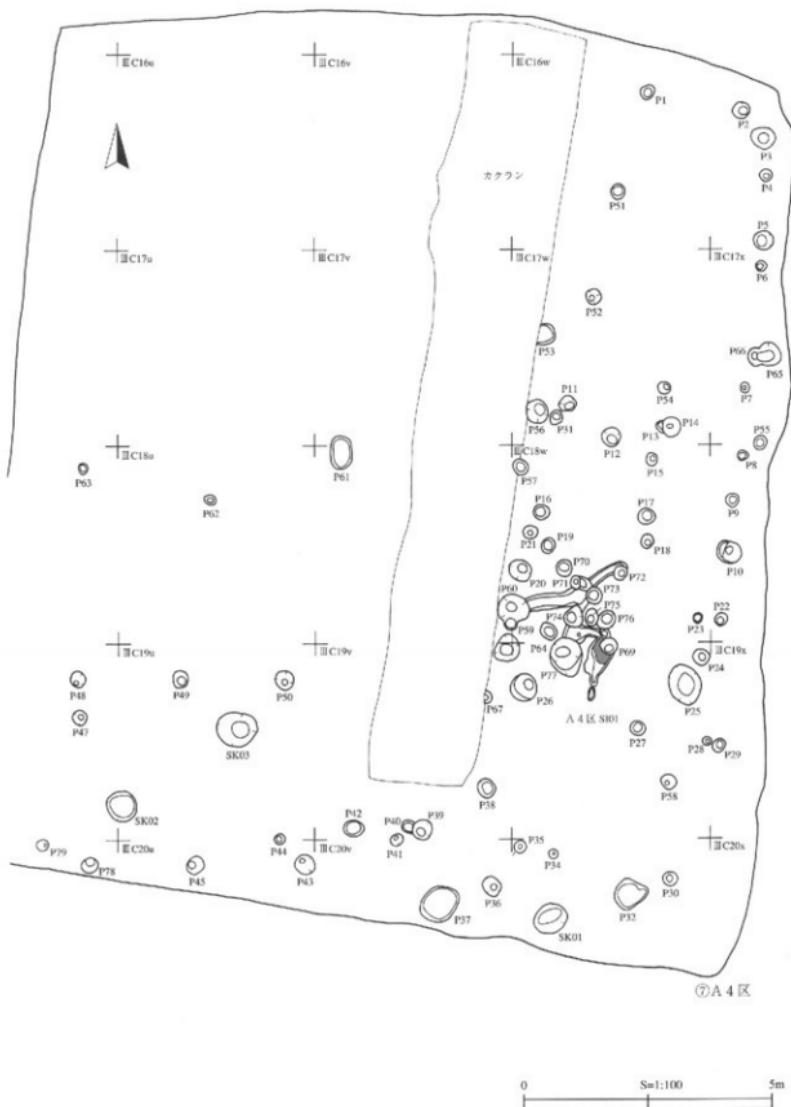
第2図 調査区・グリッド配置図



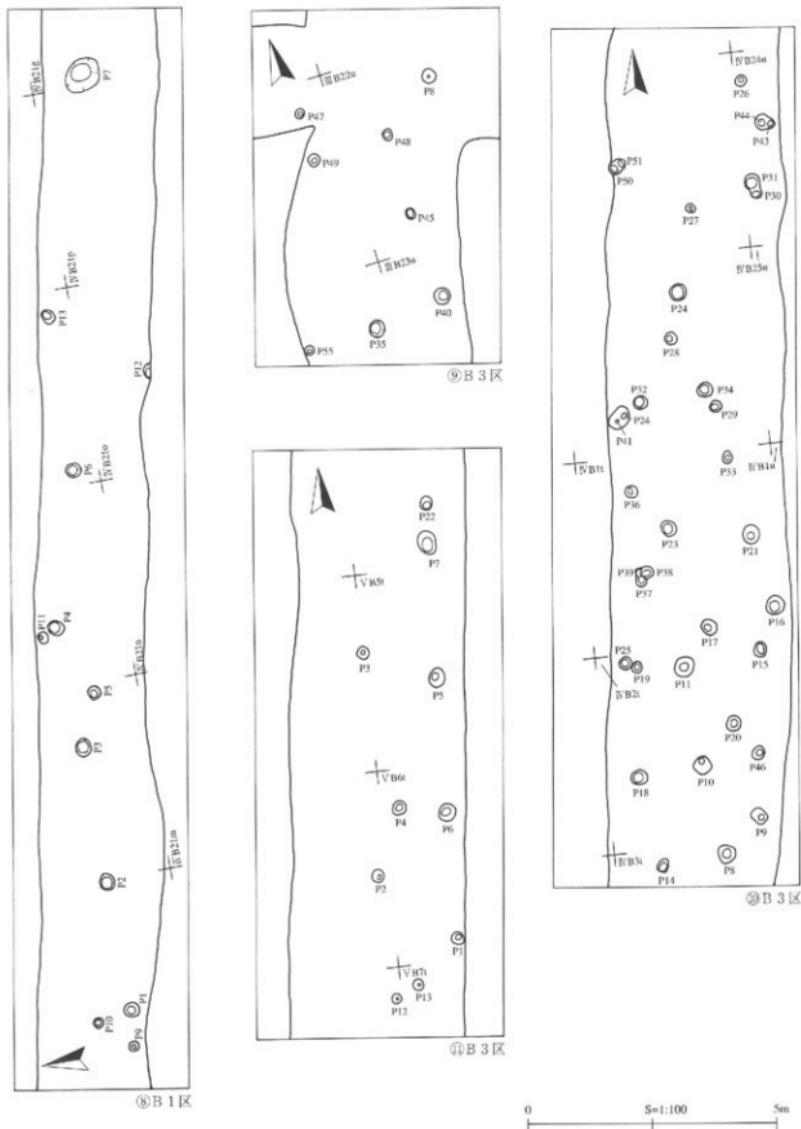


0 S=1:100 5m

第3図 道上遺跡構造配置図 (①~⑥)

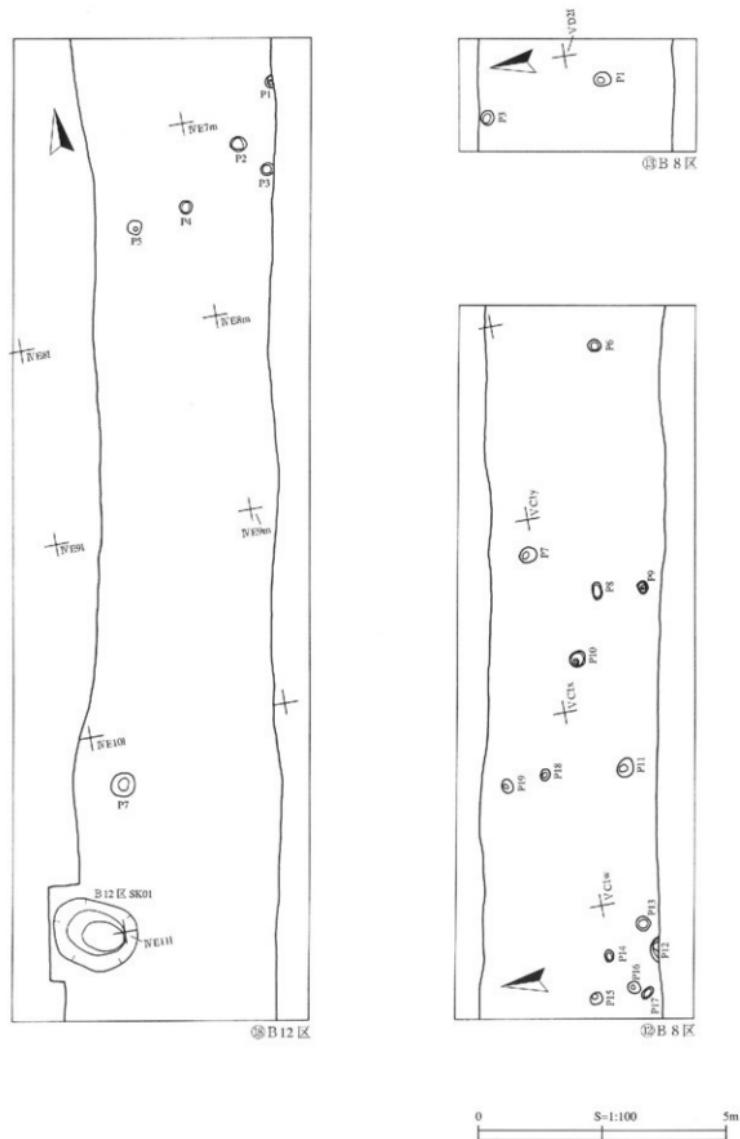


第4図 道上遺跡遺構配置図 (7)

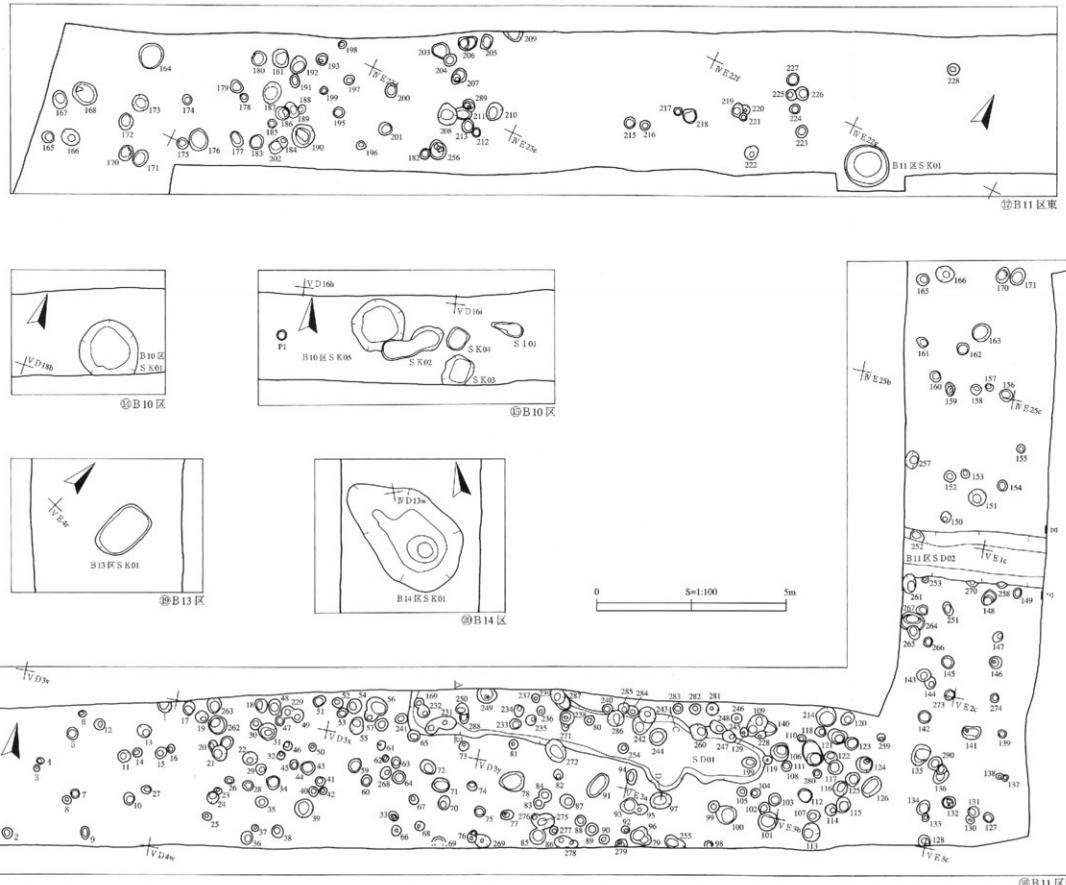


第5図 道上遺跡遺構配置図 (⑧~⑪)

(7) 道上遺跡 第1次調査



第6図 道上遺跡遺構配置図 (12・13・18)



第7図 道上遺跡・遺構配置図 (14)~(17)・(19)・(20)

はカマドの燃焼部とみられる焼土と煙道部のみで、住居本体の壁のプランは検出できなかった。A 4 区周辺は水田造成時に削平を受けた模様で、本遺構も床面まで削平を受けたとみられる。煙道部は長軸方向 S - 20° - W で、深さ 5 cm 程度しか確認できなかった。埋土は炭化物粒・焼土塊・地山塊などを含む暗褐色土で、煙道部天井が崩落したものと考えられる。焼土は煙道部の北側にあり、50 × 40 cm の範囲で強く被熱していた。煙道部と焼土の位置関係から、住居本体は焼土の北側に位置していた可能性が高い。周辺には柱穴状小土坑数個を確認しており、一部はこの住居に伴う柱穴と考えられるが、いずれが該当するかは定かではない（P 69 は焼土を切っているため、住居よりも新期の遺構と考えられる）。遺物は、煙道部の埋土中から土師器壺・壺破片 370g が出土している。このうち、壺（掲載番号 2・3）、甕（4）を図示した。焼土のすぐ北側には、煙道部と直交する方向に溝状の掘り込みがあり、その底面から土師器壺（1）が出土している。この外にも、検出時に付近から土師器壺片 129 g が出土しており、このうち接合した壺（5・6）、台付壺（7）を図示したが、これらも本遺構に伴う可能性が高いと考えられる。出土した土師器は 9 世紀後半～10 世紀代のものと考えられ、住居跡の帰属年代もこれに近い時期と推察される。

B 10 区 S I 01 壁穴住居跡（第 10 図・写真図版 2）V D 16 i グリッドに位置する。検出時に、外周が赤く変色した楕円形のプランを確認した。長軸方向は S - 70° - E である。埋土中には焼土や炭化物の粒が多く含まれていた。開口部径は 86 × 36 cm、確認面から底面までの深さは 16 cm を測る。プランの西側延長線上には、10 × 8 cm の範囲で、僅かではあるが焼けた痕跡が確認された。このことから、検出したプランは住居のカマド煙道部分で、焼土はその燃焼部と判断した。住居本体のプランは一切確認できなかったが、表土直下で燃焼部焼土を確認したことから、本遺構は床面まで削平を受けたと推測される。煙道部の方向と焼土の位置関係から、住居本体は焼土の西側に位置していたと考えられる。煙道部の南西側に隣接する S K 04 は、埋土中に焼土・炭化物を含むことから、本遺構の関連施設の可能性が高い。この他に柱穴・貯蔵穴・周溝などの床面施設は検出できなかったが、S K 02・S K 03 などの隣接遺構により削平された可能性も考えられる。調査範囲が限られていたため、調査区外に本遺構に伴う施設が検出される可能性は十分にある。遺物は、煙道部の底面から上師器甕（12）が出土しており、平安時代の住居跡と考えられる。

（ii）住居状遺構

A 1 区 S X 01 住居状遺構（第 8 図・写真図版 1）II C 16 j グリッドに位置する。調査区境付近に黒褐色土のプランとして確認した。南側は調査区外にあるため、全体の形状・規模は不明である。西側で A 1 区 S K 01 と重複するが、埋土の断面観察から、本遺構が新しいとみられる。埋土は黒褐色土を主体とし、上位には地山ブロック・焼土粒・炭化物粒が多く含まれる。床面は、若干の起伏があるものの概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。柱穴などの床面施設・貼床は確認されなかった。遺物は土師器壺片 53 g・須恵器片 11 g・手づくねかわらけ（16）が出土している。

A 1 区 S X 02 住居状遺構（第 8 図・写真図版 1）II C 15 f グリッドに位置する。調査区境付近に黒褐色土の不整形プランとして確認した。北側は調査区外にあるため、全体の形状・規模は不明である。重複する遺構はない。埋土は黒褐色土主体で、地山ブロックを含む。床面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。柱穴などの床面施設・貼床は確認されなかった。遺物は出土していない。

A 1 区 S X 03 住居状遺構（第 8 図・写真図版 1）II B 14 x グリッドに位置する。調査区境付近に黒褐色土のプランとして確認した。南側は調査区外にあるため、全体の形状・規模は不明である。確認できたのは北壁のみで、西壁は削平されていた。調査区境断面にみられる立ち上がりから西壁の位置を推定すると、北壁と西壁はほぼ直交し、調査区外にあるのは遺構の北西隅付近と推測される。

重複する遺構はない。床面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。床面の一部では黄褐色ブロック混じりの薄い広がりが確認されたが、貼床の可能性がある。柱穴等の床面施設は確認していない。遺物は、埋土中から土師器片 24 g・須恵器片 4 g・手づくねかわらけ(17)が出土している。

(iii) 土坑

本調査区で 15 基確認している。各土坑の位置、形状、規模、出土遺物などは表 1 に示した。B 10 区 S K 05・B 11 区 S K 01・B 14 区 S K 01 は近世の陶磁器などが出土しており、近世以降に帰属すると考えられる。その他に土師器・須恵器などが出土した土坑もあるが、埋土の上位などから少量が出土した程度であり、遺構の構築時期のものであるかは判断を慎重にしたい。A 3 区 S K 01・B 10 区 S K 05・B 11 区 S K 01・B 14 区 S K 01 は底面までの深さが 150 cm 以上もあり、掘削作業中に湧水が湧きわたったことから井戸などの用途が想定されたが、詳細は不明である。

(iv) 溝跡

B 11 区 S D 01 溝跡(第 7・11 図) VD 2 y グリッド付近に位置する。長軸はほぼ東西方向である。遺構の東端は調査区内で確認されているが、西側は調査区外にあり全容は明らかでない。調査区内で確認できた長さは 9.5 m である。南西部分で南壁と西壁が直交しており、東西から南北へ軸方向を変え調査区外へ延びていくことも予想される。断面形は浅い皿状を呈し、壁の立ち上がりは明瞭ではない。底面からは多くの柱穴状小土坑を検出しているが、S D 01 よりも旧期のものとみられ、これらの柱穴状小土坑を切って構築されたと考えられる。遺物は土師器片 7.3 g が出土しているが、流れ込みの可能性が高いとみられる。

B 11 区 S D 02 溝跡(第 7・11 図・写真図版 3) VE 1 c グリッド付近に位置する。長軸方向は N - 85° - E である。東端・西端とも調査区外にあるため全長は不明であるが、調査区内で確認できた長さは 3.75 m である。底面は平坦で、断面形は縦堀状を呈する。遺物は陶磁器(33 ~ 35) が出土しており、近世の遺構と考えられる。

(v) 柱穴状小土坑

本調査区内で計 482 個確認した。区別では、A 1 区で 8 個、A 4 区で 80 個、B 1 区で 51 個、B 3 区で 14 個、B 8 区で 19 個、B 10 区で 1 個、B 11 区で 290 個、B 12 区で 7 個である。A 4 区では土師器片が出土することが多く、隣接する古代の S I 01 住居跡に近い時期のものが多いと考えられる。B 1 区、B 3 区においても、ごく僅かではあるが土師器片が出土している。B 11 区ではかなり密集した状況で確認されている。一部のものには柱材や礎石も残存しており、掘立柱建物跡を構成する柱穴と思われたが、調査範囲が狭いこともあり、配置を見出すことはできなかった。出土遺物は少なく、ごく一部から土師器片、近世陶磁器片が出土したのみだが、大半の小土坑は近世に属するものと考えられる。A 1 区、B 8 区、B 10 区、B 12 区については、遺物は全く出土せず、詳細は不明である。各遺構の規模、出土遺物については、表 2 に示した。

(2) 確認調査区の遺構

遺構配置図中の C 1 ~ C 18 区である。表土除去の後遺構検出を行い、位置の記録を行ったのみで調査を終了している。検出した遺構は、堅穴住居跡 1 棟、住居状遺構 2 棟、焼上遺構 2 基、土坑 12 基、柱穴状小土坑 141 個である。遺構の種別は、検出時の平面形状・規模のみにより区別している。堅穴住居跡としたものは、C 13 区で検出した一辺約 3 m の方形プランである(配置図⑤)。遺構が比較的密集成していたのは、C 2 区、C 6 区である。焼上遺構 2 基は C 2 区で確認した。C 6 区は、隣接する A 4 区で検出した遺構との関連が考えられる。各遺構の構築時期・性格など詳細は不明である。遺物は、

表土除去中に、土師器 320 g、須恵器 216 g、陶磁器 208 gなどを採取している。このうち土師器（13・14）、陶磁器（20～23、28、39、40）、煙管（53）、石器（57・58）を図示した。なお、C 4 区・C 5 区・C 7～11 区・C 14 区・C 16 区・C 17 区では遺構は確認されず、C 3 区・C 11 区・C 12 区・C 14 区・C 16～18 区では遺物は出土していない。C 16～18 区については、現況において用水路の U 字溝が敷設されていたが、U 字溝を撤去し部分的にトレーナーを入れたところ、遺構検出面より 40～50 cm 深く削平され、砂利が詰められている状況であった。水路構築時に削平されたものとみられるが、遺構の遺存する可能性は低いとみられたため、部分的なトレーナーのみで調査を終了している。

（3）出土遺物

59 点を掲載した。（掲載番号 1～59、17 は写真のみ）1～14 は土師器である。1～3・5・6・8 は壺である。いずれもロクロ調整であり、3・6 は底部に回転糸切り痕がみられ、7・9 は高台をもつ。4・10・12～14 は壺である。土師器はいずれも、黒色処理はされていない。1～11 は A 4 区 S I 01 付近からの出土で、9 世紀後半～10 世紀代のものとみられる。15 は須恵器で、長頸壺の底部付近とみられる。不掲載のものも含めると、調査区全体で土師器 1635g・須恵器 585g が出土している。16・17 は手づくねかわらけである。18 は渥美産、19～22 は常滑産の壺の破片である。16～22 は 12 世紀の遺物と考えられる。23～44 は中世～近世の陶磁器類である。23 は古窯戸で、四耳壺または水注の底部付近とみられる。24 は青磁盤の口縁部である。25 は天目茶碗、26～28 は碗、29 は瓶の頸部、30 は徳利の体部片、31～39 は皿、40～44 は擂鉢である。陶磁器類の産地は、中国産、瀬戸・美濃産、肥前産、東北地方産のものがある。45～47 は石製品で、45・47 は石臼、46 は石鉢である。石製品はいずれもディサイト製で、奥羽山脈産の石材を用いている。48～51 は木製品である。48 は長方形の薄い板を円形に湾曲させたもので、曲げ物の側板とみられる。49～51 は円形に加工されており、木製容器の底部とみられる。48 と 49 は同一個体であった可能性が高いが、装着部分などの痕跡は見当たらなかった。木製品は、いずれもスギ材を用いている。52 は永樂通寶である。1408 年初鋤の明錢である。53 は煙管の吸い口で、近世のものである。54～59 は縄文時代の石器で、すべて遺構外の出土である。54・56 は石窓、55 は楔形石器、57 は石鏃である。58 は彼損しているが、石匙とみられる。59 は石鉢である。石器はいずれも頁岩製で、奥羽山脈産の石材を用いている。

5.まとめ

調査区中央部および南端では平安時代の堅穴住居跡、調査区南東部では近世の柱穴群を確認した。調査区内は削平を受けている箇所も多く、遺構の遺存状態は不良であったが、調査範囲は遺跡内のごく一部であり、今回の調査区外に遺構の広がりが存在する可能性は十分に高いといえる。

遺物は、表土中など遺構外のものも含めると、少量ずつではあるが、縄文時代から古代・中世・近世など各時代の遺物を確認している。これらは本米遺構内にあったものが遺構ごと削平され現表土中に混入したものと考えられ、遺跡内および周辺に該期の遺構が分布する可能性を示唆する。特に、県内では出土例が少ない 12 世紀の手づくねかわらけや中世の陶磁器類が出土したことは注目に値する。

なお、道上遺跡第1次調査に係る報告は、これをもって全てとする。

遺構名	グリッド	遺物遺構(※)	平面形 (長軸方向)	断面形 (底面・壁)	埋土	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底部標 高(m)	出土品物	備考
A1区 SK01	II C 16 k	< A1区 SK01	円形?	底面は平出で堅く継まる。 壁は外傾する。	上位はSK01に切られ る。中位は地土・炭化 物質を多量含む。下位 は砂よりの弱い粘土。	(96)	-	91	29.85	上・難燃 63.9g・頸椎器 18.5g・かわらけ 13.7g	北側は調査区外。 底面より湧水。
A3区 SK01	III E 18 j	なし	円形	底面は平出・壁は外傾する。	上位は黒褐色土。下位 はグライ化し縮まりが ない。	106	102	61	30.03	なし	
A3区 SK02	III E 16 j	なし	円形	底面は平出で堅く継まる。 壁は外傾する。	上位は黒褐色土。下位 はグライ化し縮まりが ない。	148	136	190	28.72	土師器 1.6g	底面より湧水。
A4区 SK01	II C 20 w	なし	梢円形 (N-65°-E)	底面は平出・壁は外傾する。	黒褐色土が主体。中位 は地山色土が主体。下位 は外傾する。	68	58	24	30.79	土師器 4.3g	
A4区 SK02	II C 19 u	なし	円形	底面は丸状である。壁は外 傾する。	黒褐色土が主体。下位 は地山色土を少量含む。	63	60	16	30.77	なし	
A4区 SK03	II C 19 u	なし	梢円形 (N-30°-E)	レンズ状、底面と壁との境 界ははっきりしない。	黒褐色土が主体。	85	70	21	30.72	なし	
B10区 SK01	VD 10 b	なし	円形	尖底(V字状)で、底面は 平坦でない。	黒褐色土が主体。 地山色土の多い層と少ない層 がある。	153	(150)	125	29.51	なし	南側は調査区外。 底面より湧水。
B10区 SK02	VD 16 h	> B10区 SK05	不整形 (N-63°-E)	底面は中央と周囲に盛みを もつ。壁は外傾する。	黒褐色土が主体。 地山色土を多く含む。	170	67	67	30.07	土師器 45.5g	堆土中位にビニール 片。
B10区 SK03	VD 16 i	なし	長方形 (N-20°-E)	底面は平出・壁は直立する。 塊を含む。	上位は黒褐色土で地山 色土を含む。下位はグライ 化し縮まりがなさい。	93	78	103	29.68	なし	南側は調査区外。 底面より湧水。
B10区 SK04	VD 16 i	なし	長方形 (N-25°-E)	底面は平出。中央に長い隙 間をもつ。	上位は黒褐色土。下位 はグライ化し縮まりが ない。	58	52	16	30.56	なし	B10区 SK01 間 通 か?
B10区 SK05	VD 16 h	< B10区 SK02	円形	底面は平出で堅く継まる。 壁は外傾する。	上位は黒褐色土。下位 は砂よりの弱い黑色 土。塊を多く含む。	140	138	158	29.17	土師器 9.9g・陶器器 47.44g・石製品 (46)	底面より湧水。
B11区 SK01	VE 22 g	なし	円形	底面は平出で堅く継まる。 壁は直立に近い。	壁を多く含む。 削落のため詳細な記録 なし。	115	110	178	28.79	41製品 (45)・船骨	底面より湧水。
B12区 SK01	VE 11 k	なし	梢円形 (N-65°-W)	底面中央が一段深く盛む。 壁は外傾する。	作業中崩落したため記録 なし。	178	137	113	29.37	土師器 6.8g・頸椎器 110.5g	底面より湧水。
B13区 SK01	VE 3 r	なし	長方形 (N-63°-E)	底面は平出する。	地山色土を含む黒褐色土 で、重頭。	148	95	16	30.41	なし	
B14区 SK01	WD 13 w	なし	梢形 (N-38°-W)	青葉闇がみ深くなる。 底面は平出で堅く継まる。	上位は黒褐色土。下位 は砂よりの弱い粘土質 土。	359	220	188	28.82	陶器 (19)・木製品 (48) 49-50・51	底面より湧水。

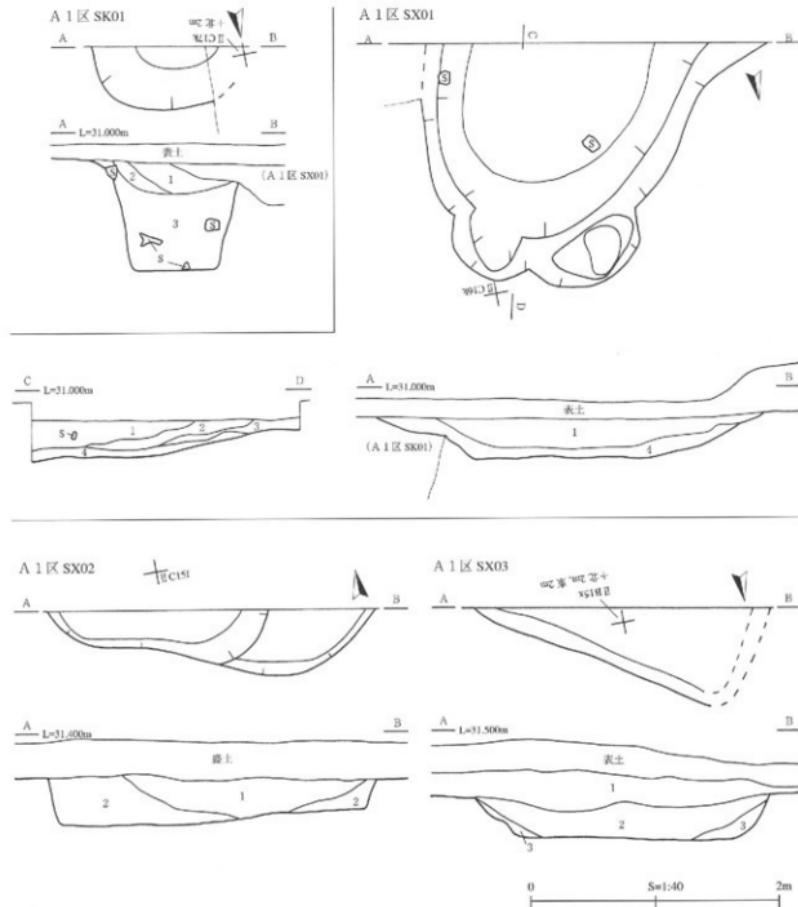
表1 道上遺跡土坑調査表

参考複閑系は(新)>(II)で示している。

表 2 道上地跡柱空翻密表 (1)

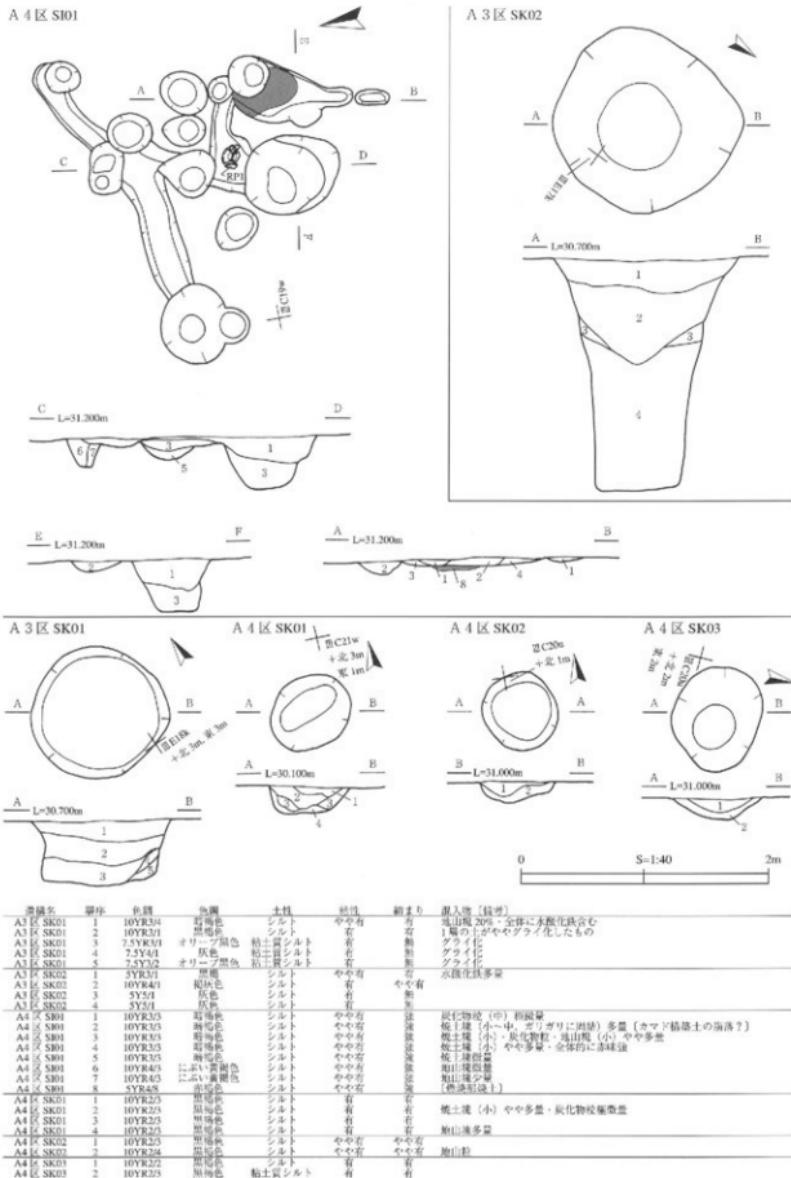
(7) 道上遺跡 第1次調査

柱名	柱式(柱)	高さ(cm)	幅さ(cm)	奥行き(cm)	備考
B11_P01	28	25	66	30.02	
B11_P02	34	24	38	30.27	
B11_P03	27	26	36	30.19	
B11_P04	29	26	31	30.19	
B11_P05	37	31	6	29.72	
B11_P06	47	35	32	30.34	
B11_P07	26	25	32	30.31	
B11_P08	26	22	32	30.64	
B11_P09	28	25	38	30.28	
B11_P10	35	26	38	30.90	TP25B
B11_P11	37	23	30	30.14	
B11_P12	35	26	38	30.19	
B11_P13	29	26	35	30.19	TP26
B11_P14	26	25	38	30.29	ND1
B11_P15	26	25	38	30.45	
B11_P16	26	25	38	30.45	
B11_P17	26	25	38	30.45	
B11_P18	32	24	30	30.29	TP24
B11_P19	35	25	38	30.45	TP25
B11_P20	40	30	38	30.15	TP27
B11_P21	42	37	37	30.19	
B11_P22	36	34	38	30.54	
B11_P23	36	33	38	30.07	
B11_P24	28	23	30	30.47	
B11_P25	42	37	37	30.19	
B11_P26	20	25	38	30.41	
B11_P27	43	38	33	30.34	TP29 距離13
B11_P28	28	25	38	30.34	
B11_P29	32	25	38	30.34	
B11_P30	35	25	38	30.34	
B11_P31	47	40	36	30.31	TP27
B11_P32	36	44	23	30.20	
B11_P33	27	25	38	30.34	
B11_P34	35	38	38	30.34	TP10
B11_P35	30	47	42	30.19	TP29
B11_P36	39	27	30	30.49	TP10
B11_P37	31	30	40	30.24	
B11_P38	28	25	38	30.34	
B11_P39	25	27	30	30.32	
B11_P40	48	48	30	30.05	
B11_P41	32	50	28	30.10	
B11_P42	26	25	38	30.49	
B11_P43	46	38	30	30.20	TP10 距離19
B11_P44	30	30	38	30.20	
B11_P45	35	30	38	30.20	
B11_P46	35	30	38	30.20	
B11_P47	35	30	38	30.20	
B11_P48	35	30	38	30.20	
B11_P49	35	30	38	30.20	
B11_P50	35	30	38	30.20	
B11_P51	35	30	38	30.20	
B11_P52	35	30	38	30.20	
B11_P53	35	30	38	30.20	
B11_P54	35	30	38	30.20	
B11_P55	35	30	38	30.20	
B11_P56	35	30	38	30.20	
B11_P57	35	30	38	30.20	
B11_P58	35	30	38	30.20	
B11_P59	35	30	38	30.20	
B11_P60	35	30	38	30.20	
B11_P61	35	30	38	30.20	
B11_P62	35	30	38	30.20	
B11_P63	35	30	38	30.20	
B11_P64	35	30	38	30.20	
B11_P65	35	30	38	30.20	
B11_P66	35	30	38	30.20	
B11_P67	35	30	38	30.20	
B11_P68	35	30	38	30.20	
B11_P69	35	30	38	30.20	
B11_P70	35	30	38	30.20	
B11_P71	35	30	38	30.20	
B11_P72	35	30	38	30.20	
B11_P73	35	30	38	30.20	
B11_P74	35	30	38	30.20	
B11_P75	35	30	38	30.20	
B11_P76	35	30	38	30.20	
B11_P77	35	30	38	30.20	
B11_P78	35	30	38	30.20	
B11_P79	35	30	38	30.20	
B11_P80	35	30	38	30.20	
B11_P81	35	30	38	30.20	
B11_P82	35	30	38	30.20	
B11_P83	35	30	38	30.20	
B11_P84	35	30	38	30.20	
B11_P85	35	30	38	30.20	
B11_P86	35	30	38	30.20	
B11_P87	35	30	38	30.20	
B11_P88	35	30	38	30.20	
B11_P89	35	30	38	30.20	
B11_P90	35	30	38	30.20	
B11_P91	35	30	38	30.20	
B11_P92	35	30	38	30.20	
B11_P93	35	30	38	30.20	
B11_P94	35	30	38	30.20	
B11_P95	35	30	38	30.20	
B11_P96	35	30	38	30.20	
B11_P97	35	30	38	30.20	
B11_P98	35	30	38	30.20	
B11_P99	35	30	38	30.20	
B11_P100	35	30	38	30.20	
B11_P101	35	30	38	30.20	
B11_P102	35	30	38	30.20	
B11_P103	35	30	38	30.20	
B11_P104	35	30	38	30.20	
B11_P105	35	30	38	30.20	
B11_P106	35	30	38	30.20	
B11_P107	35	30	38	30.20	
B11_P108	35	30	38	30.20	
B11_P109	35	30	38	30.20	
B11_P110	35	30	38	30.20	
B11_P111	35	30	38	30.20	
B11_P112	35	30	38	30.20	
B11_P113	35	30	38	30.20	
B11_P114	35	30	38	30.20	
B11_P115	35	30	38	30.20	
B11_P116	35	30	38	30.20	
B11_P117	35	30	38	30.20	
B11_P118	35	30	38	30.20	
B11_P119	35	30	38	30.20	
B11_P120	35	30	38	30.20	
B11_P121	35	30	38	30.20	
B11_P122	35	30	38	30.20	
B11_P123	35	30	38	30.20	
B11_P124	35	30	38	30.20	
B11_P125	35	30	38	30.20	
B11_P126	35	30	38	30.20	
B11_P127	35	30	38	30.20	
B11_P128	35	30	38	30.20	
B11_P129	35	30	38	30.20	
B11_P130	35	30	38	30.20	
B11_P131	35	30	38	30.20	
B11_P132	35	30	38	30.20	
B11_P133	35	30	38	30.20	
B11_P134	35	30	38	30.20	
B11_P135	35	30	38	30.20	
B11_P136	35	30	38	30.20	
B11_P137	35	30	38	30.20	
B11_P138	35	30	38	30.20	
B11_P139	35	30	38	30.20	
B11_P140	35	30	38	30.20	
B11_P141	35	30	38	30.20	
B11_P142	35	30	38	30.20	
B11_P143	35	30	38	30.20	
B11_P144	35	30	38	30.20	
B11_P145	35	30	38	30.20	
B11_P146	35	30	38	30.20	
B11_P147	35	30	38	30.20	
B11_P148	35	30	38	30.20	
B11_P149	35	30	38	30.20	
B11_P150	35	30	38	30.20	
B11_P151	35	30	38	30.20	
B11_P152	35	30	38	30.20	
B11_P153	35	30	38	30.20	
B11_P154	35	30	38	30.20	
B11_P155	35	30	38	30.20	
B11_P156	35	30	38	30.20	
B11_P157	35	30	38	30.20	
B11_P158	35	30	38	30.20	
B11_P159	35	30	38	30.20	
B11_P160	35	30	38	30.20	
B11_P161	35	30	38	30.20	
B11_P162	35	30	38	30.20	
B11_P163	35	30	38	30.20	
B11_P164	35	30	38	30.20	
B11_P165	35	30	38	30.20	
B11_P166	35	30	38	30.20	
B11_P167	35	30	38	30.20	
B11_P168	35	30	38	30.20	
B11_P169	35	30	38	30.20	
B11_P170	35	30	38	30.20	
B11_P171	35	30	38	30.20	
B11_P172	35	30	38	30.20	
B11_P173	35	30	38	30.20	
B11_P174	35	30	38	30.20	
B11_P175	35	30	38	30.20	
B11_P176	35	30	38	30.20	
B11_P177	35	30	38	30.20	
B11_P178	35	30	38	30.20	
B11_P179	35	30	38	30.20	
B11_P180	35	30	38	30.20	
B11_P181	35	30	38	30.20	
B11_P182	35	30	38	30.20	
B11_P183	35	30	38	30.20	
B11_P184	35	30	38	30.20	
B11_P185	35	30	38	30.20	
B11_P186	35	30	38	30.20	
B11_P187	35	30	38	30.20	
B11_P188	35	30	38	30.20	
B11_P189	35	30	38	30.20	
B11_P190	35	30	38	30.20	
B11_P191	35	30	38	30.20	
B11_P192	35	30	38	30.20	
B11_P193	35	30	38	30.20	
B11_P194	35	30	38	30.20	
B11_P195	35	30	38	30.20	
B11_P196	35	30	38	30.20	
B11_P197	35	30	38	30.20	
B11_P198	35	30	38	30.20	
B11_P199	35	30	38	30.20	
B11_P200	35	30	38	30.20	
B11_P201	35	30	38	30.20	
B11_P202	35	30	38	30.20	
B11_P203	35	30	38	30.20	
B11_P204	35	30	38	30.20	
B11_P205	35	30	38	30.20	
B11_P206	35	30	38	30.20	
B11_P207	35	30	38	30.20	
B11_P208	35	30	38	30.20	
B11_P209	35	30	38	30.20	
B11_P210	35	30	38	30.20	
B11_P211	35	30	38	30.20	
B11_P212	35	30	38	30.20	
B11_P213	35	30	38	30.20	
B11_P214	35	30	38	30.20	
B11_P215	35	30	38	30.20	
B11_P216	35	30	38	30.20	
B11_P217	35	30	38	30.20	
B11_P218	35	30	38	30.20	
B11_P219	35	30	38	30.20	
B11_P220	35	30	38	30.20	
B11_P221	35	30	38	30.20	
B11_P222	35	30	38	30.20	
B11_P223	35	30	38	30.20	
B11_P224	35	30	38	30.20	
B11_P225	35	30	38	30.20	
B11_P226	35	30	38	30.20	
B11_P227	35	30	38	30.20	
B11_P228	35	30	38	30.20	
B11_P229	35	30	38	30.20	
B11_P230	35	30	38	30.20	
B11_P231	35	30	38	30.20	
B11_P232	35	30	38	30.20	
B11_P233	35	30	38	30.20	
B11_P234	35	30	38	30.20	
B11_P235	35	30	38	30.20	
B11_P236	35	30	38	30.20	
B11_P237	35	30	38	30.20	
B11_P238	35	30	38	30.20	
B11_P239	35	30	38	30.20	
B11_P240	35	30	38	30.20	
B11_P241	35	30	38	30.20	
B1					



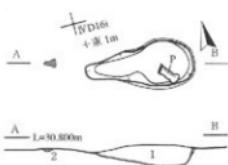
第8図 道上遺跡検出構造（1）

(7) 道上遺跡 第1次調査

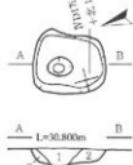


第9図 道上遺跡検出構造 (2)

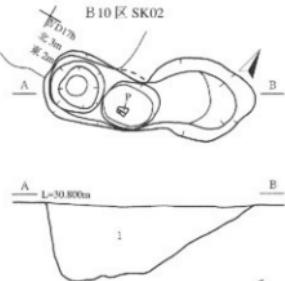
B10区 SK01



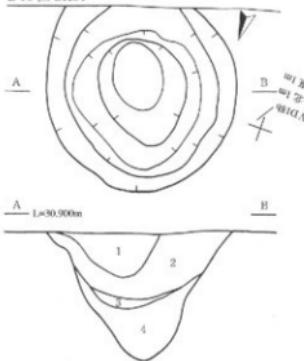
B10区 SK04



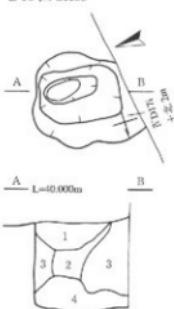
B10区 SK02



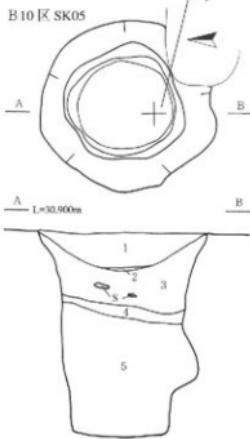
B10区 SK01



B10区 SK03



B10区 SK05

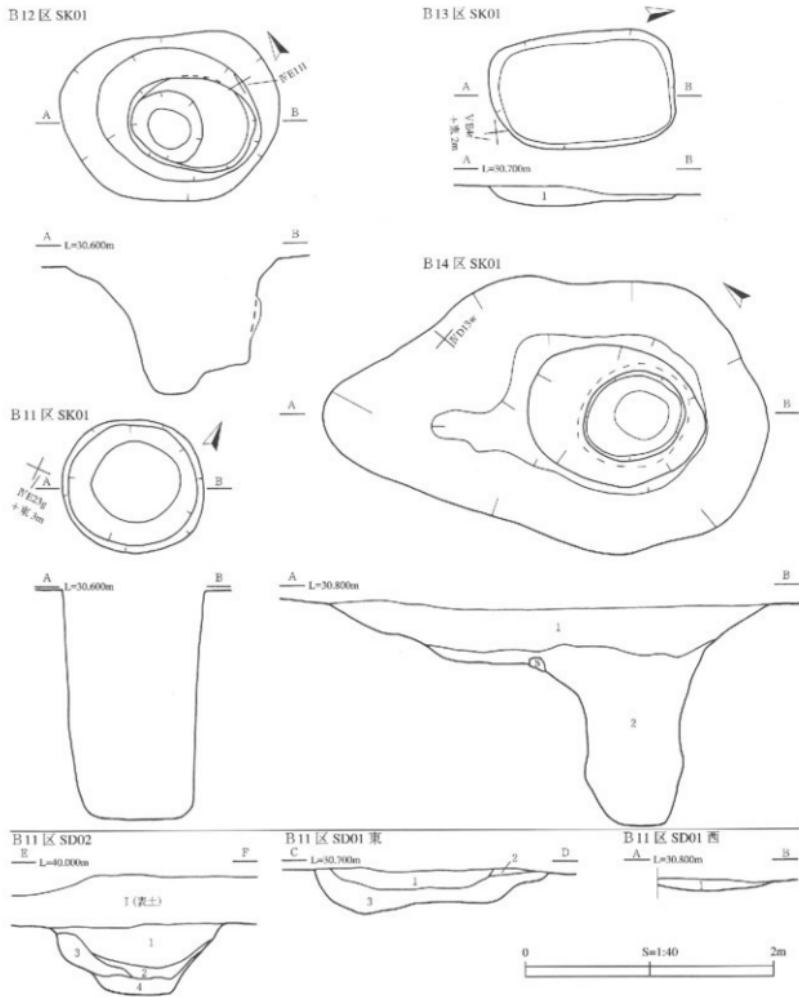


0 S=1:40 2m

遺跡名	場序	色調	色調	土性	粘性	揮きり	混入物 (備考)
B10区 SK01	1	7.SYR2/5	黒褐色	シルト	やや有	有	淡土粒多量・炭化物絶多量・埴生粒剥離状に少量
B10区 SK01	2	5YR4/6	赤褐色	シルト	やや有	有	淡土
B10区 SK01	1	10YR2/5	黒褐色	シルト	有	有	地山塊多量
B10区 SK01	2	10YR2/5	黒褐色	シルト	有	有	地山塊少量
B10区 SK01	3	10YR2/5	黒褐色	シルト	有	有	地山塊多量
B10区 SK01	4	10YR2/5	黒褐色	シルト	強	有	地山塊少量
B10区 SK02	1	10YR2/2	黒褐色	シルト	やや有	有	地山塊多量
B10区 SK03	1	10YK5/5	暗褐色	シルト	やや有	有	地山塊多量
B10区 SK03	2	10YK3/4	暗褐色	シルト	有	強	強
B10区 SK03	3	10YR2/5	黒褐色	シルト	強	強	地山塊(大) 多量
B10区 SK03	4	2.5Y4/1	黄灰赤	シルト	強	弱	
B10区 SK04	1	10YR3/5	暗褐色	シルト	やや有	有	桃土粒・炭化物粒・地山塊多量
B10区 SK04	2	10YR2/5	黒褐色	シルト	やや有	有	桃土粒・炭化物粒・地山塊少量
B10区 SK05	1	10YK2/5	暗褐色	シルト	やや有	有	繊維少量
B10区 SK05	2	10YR1.3/3	黒色	シルト	やや有	有	炭化物少量
B10区 SK05	3	10YR2/5	黒褐色	シルト	やや有	有	地山塊少量・泥多量
B10区 SK05	4	2.5Y2/1	黑色	粘土質シルト	強	弱	繊維多量
B10区 SK05	5	2.5Y2/1	黑色	粘土質シルト	無	弱	

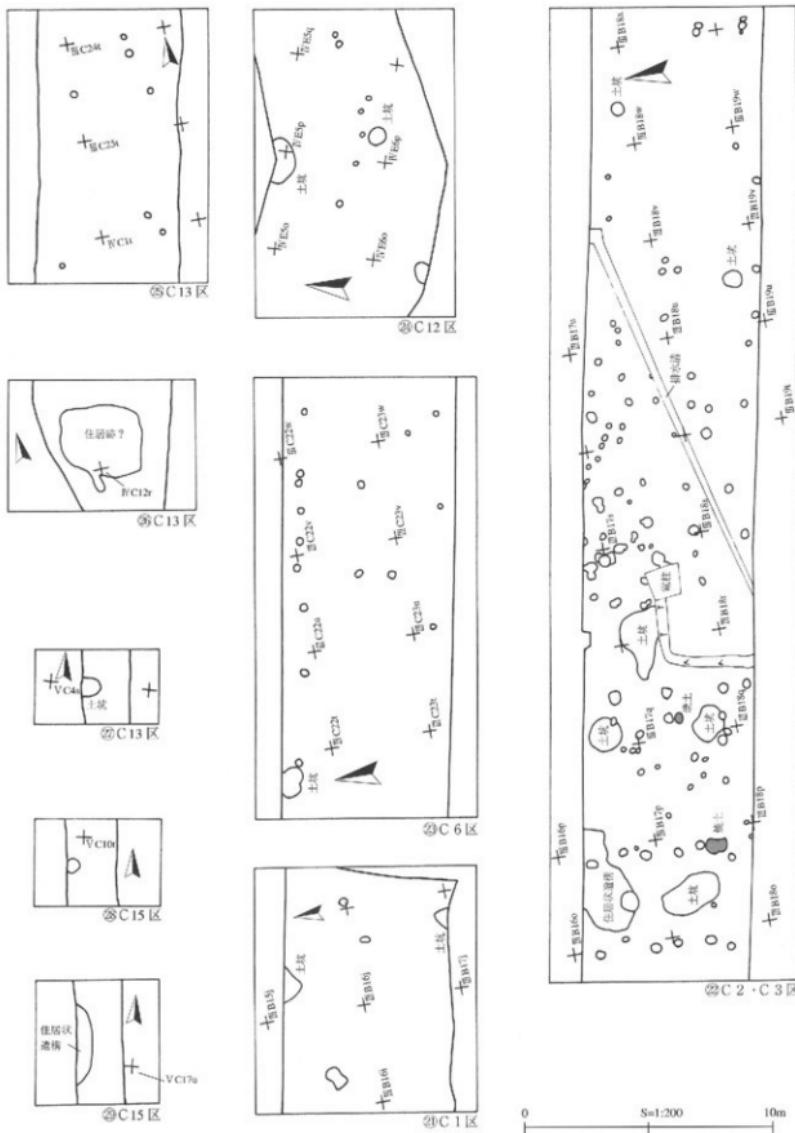
第10図 道上遺跡検出構造 (3)

(7) 道上遺跡 第1次調査



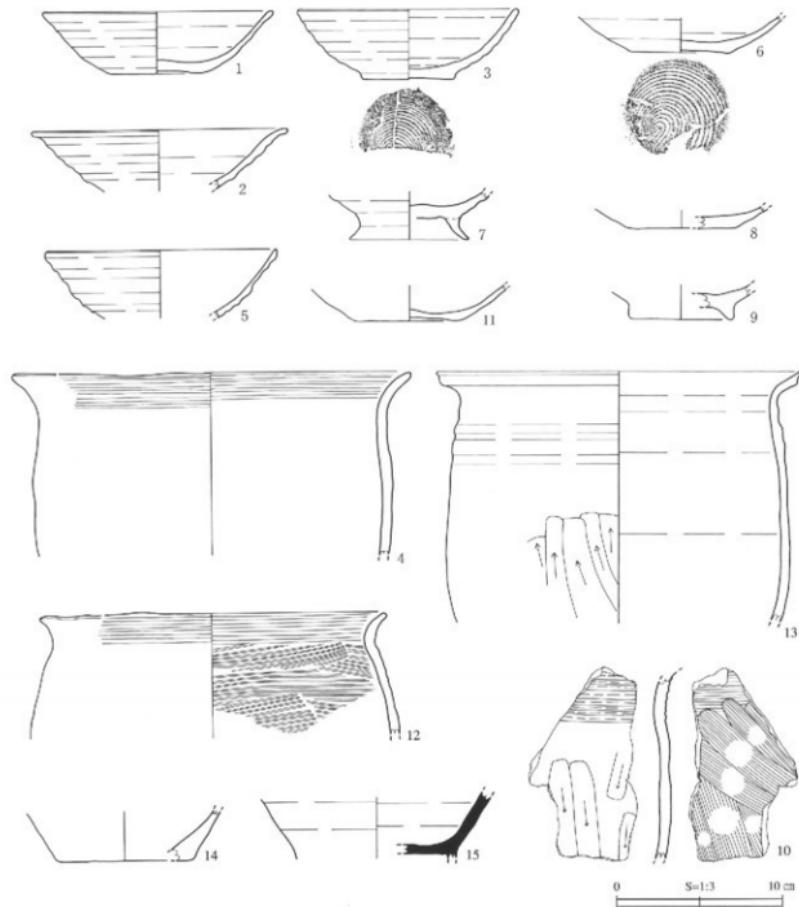
遺構名	順序	色調	色調	土性	透性	礫量	埋立物(後考)
B11 区 SD01	1	10YR2/3	黒褐色	シルト	やや有	有	灰化物粒多量
B11 区 SD01	2	10YR2/3	黒褐色	シルト	やや有	有	灰化物粒少量
B11 区 SD02	1	10YR2/3	黒褐色	シルト	やや有	有	黄褐色砂礫状に少量
B11 区 SD02	2	10YR2/3	黒褐色	シルト	透	やや弱	細山砂多量・灰化物粒少量
B11 区 SD02	3	10YR4/4	褐色	砂	無	有	黒褐色土層状に少量
B11 区 SD02	4	2.5Y4/1	黃灰色	粘土	透	弱	赤色粘土層状に少量
B11 区 SK01	1	10YR2/3	黒褐色	シルト	やや有	やや右	地山塊全体的に少量
B11 区 SK01	1	10YR2/3	黒褐色	シルト	やや有	左	地山塊部分的に少量
B11 区 SK01	2	10YR2/1	黒色	粘土質シルト	強	弱	
B12 区 SK01	注記なし						
B12 区 SK01	注記なし						

第11図 道上遺跡検出遺構(4)



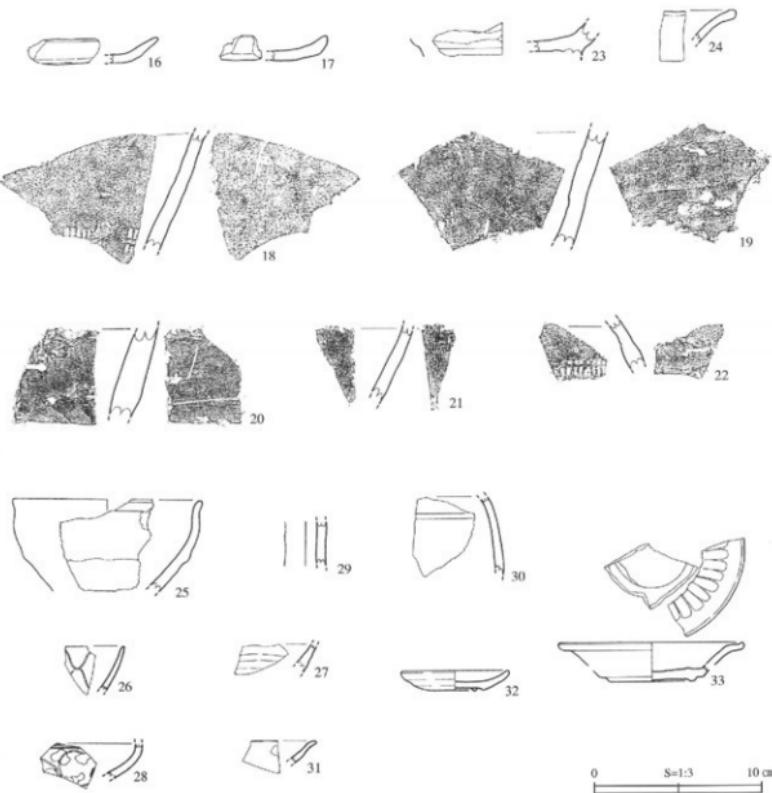
第12図 道上遺跡構造配置図 (21)~(29)

(7) 道上遺跡 第1次調査



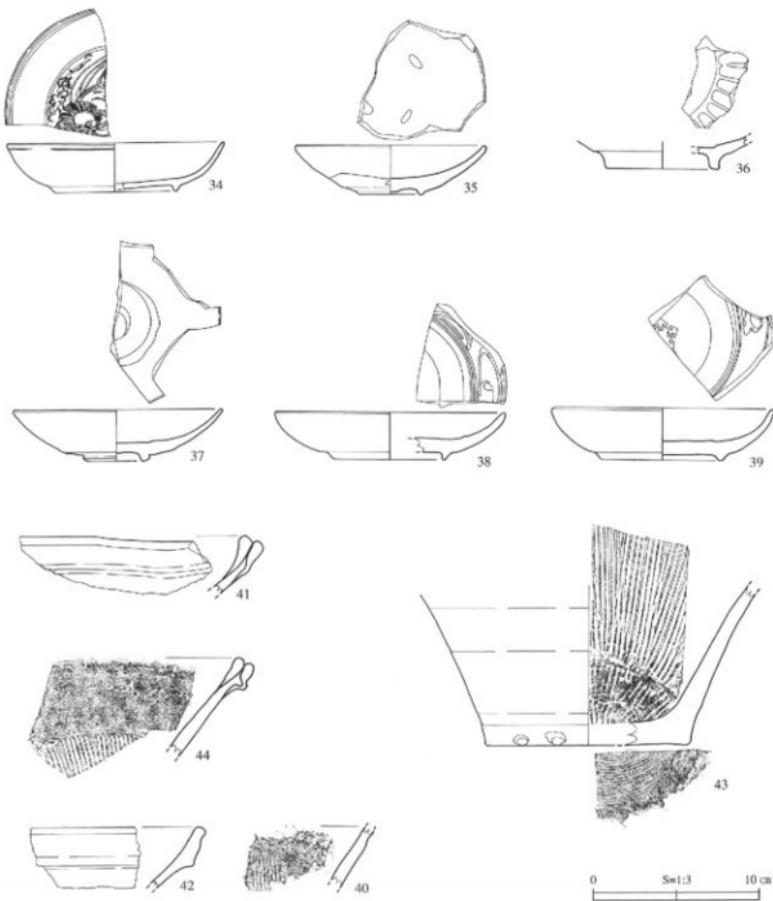
地番 No.	出土位置	種類	器種	形状	口径 (cm)	外径 (cm)	内面裏表	外面裏表	色調	その他の
1	A4 区 SH01 壁部	土師器	罐	口縁-直筒	3.8	13.8	マツツ	ロタロナデ	褐色	
2	A4 区 SH01 カマド内	土師器	罐	口縁-上屈	19.2	-	ロタロナデ	ロタロナデ	褐色	
3	A4 区 SH01 カマド内	土師器	罐	口縁-底屈	4.3	13.2	5.4	ロタロナデ	褐色	底部凹凸有り
4	A4 区 SH01 ロマド裏落し内	土師器	瓶	口縁-上口	24.0	-	口:ロコナデ/底:マツツ	ロコナデ/底:マツツ	褐色	瓶上に砂埃多く含む
5	A4 区 E19w	土師器	罐	口縁-上口	-	13.8	-	ロタロナデ	褐色	
6	A4 区 E19w	土師器	罐	下口-底屈	-	6.0	ロタロナデ	ロタロナデ	褐色	
7	A4 区 E19w	土師器	罐	口縁-底屈	-	7.2	ロタロナデ	ロタロナデ	褐色	
8	A4 区 E19w	土師器	罐	口縁-底屈	-	7.2	ロタロナデ	ロタロナデ	褐色	明るい褐色
9	A4 区 PT04	土師器	罐	口縁-底屈	-	6.0	マツツ	マツツ	褐色	
10	A4 区 PT04	土師器	罐	口縁-上口	-	6.0	マツツ	マツツ	褐色	瓶上に砂埃多く含む
11	A4 区 PT7	土師器	罐	下口-底屈	-	6.4	マツツ	ロコナデ	褐色	
12	SH01 壁部	土師器	瓶	口縁-上口	21.2	-	ロコナデ/底:マツツ	ロコナデ/底:マツツ	褐色	外側にスカリ有り、内部多
13	C2 収納小箱	土師器	瓶	口縁-中口	26.2	-	ロタロナデ	ロコナデ/口:ロタロナデ/底:ハラカズミ	褐色	
14	C3 収納小箱	土師器	瓶	下口-底屈	-	8.2	マツツ	マツツ	褐色	瓶上に砂埃多く含む
15	BH10 壁部	土師器	罐	口縁-上口	3.3	-	ロタロナデ	ロタロナデ	褐色	
16	A1 区 SH01	土器片	罐	口縁-上口	1.5	-	4.0	不規則	褐色	
17	A1 区 SH01	土器片	罐	口縁-上口	1.5	-	4.0	不規則	褐色	に高い青緑色

第13図 道上遺跡出土遺物（1）



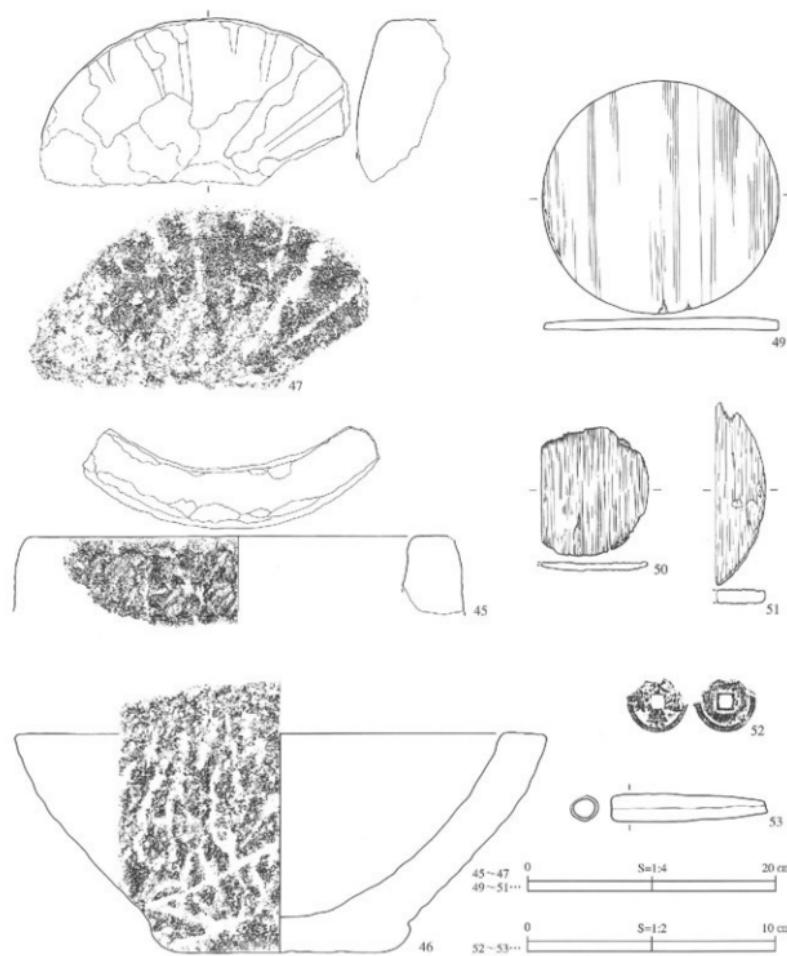
標號 No.	出土位置 Locality	種類 Type	器種 Vessel	残存部位 Remaining part	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	文様 Pattern	釉面 Glaze	胎土・色調 Clay soil・Color	產地 Origin	年代 Period	備考 Remarks
18	A4区貴塗	陶器	寬	体部片	-	-	-	-	-	灰色	越美		
19	B14区SK01	陶器	寬	体部片	-	-	-	-	-	灰色	常滑		
20	C区西側板出面	陶器	寬	体部片	-	-	-	-	-	灰白色	常滑		
21	C区西側板出面	四器	甕	体部片	-	-	-	-	-	灰黄色	常滑		
22	C7区模出面	陶器	寬	体部片	-	-	-	-	-	灰黄色	常滑		
23	C1区模出面	陶器	四耳壺?	体部	-	-	-	-	-	灰白色	吉浦	13c?	水注?
24	B8区深盆	青釉	盤	口縁部	-	-	-	-	-	灰白色	中国	15c?	帶底座?
25	B9区深盆	陶器	天目茶碗	口縁~下笠	-	-	-	-	-	灰白	美濃?		
26	B10区深盆	陶器	碗	口縁部	-	-	-	模印文	透明釉	灰白色	琵琶	18c	大和朝~V期
27	B10区SK05	陶器	腰鑊碗	体部片	-	-	-	模印	灰白	大和朝	19c		
28	C5区壁出面	陶器	碗	底盤付近	-	-	-	草花文	透明釉	灰白色	關戸	19c	
29	B8区深盆	陶器	甕?	口縁?	-	-	-	-	-	灰色	不明	近世?	
30	B11区P225	陶器	他物	体部片	-	-	-	樂符	透明	灰白色	肥前	18c	
31	B8区深盆	陶器	青文瓦	口縁部	-	-	-	透明	灰白色	肥前	18c		
32	B11区P093	陶器	九里	口縁~底部	6.4	3.4	1.2	-	-	灰白	美濃?	16c?	
33	B11区SD02	陶器	彷彿罐	口縁~底部	11.5	5.0	-	-	-	灰白	關戸・美濃	16末~17初	大和4期

第14図 道上遺跡出土遺物（2）



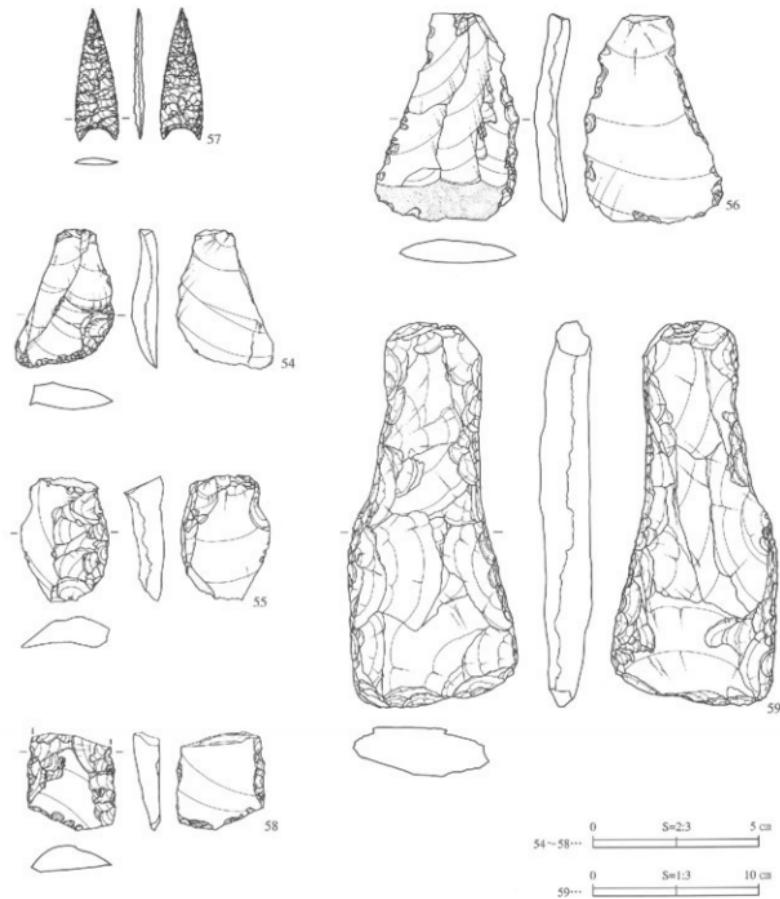
番号	出土位置	種別	形様	残存部位	口径 (cm)	底径 (cm)	深高 (cm)	文様	種類	騎士・色調	產地	年代	参考
34	B11区 SD02	磁器	直	口縁~底部	13.0	7.4	3.8	麻神?	透明釉	灰白色	中國	16c?	明治台
35	B11区 SD02	陶器	直	口縁~底部	11.3	3.8	3.0	-	透明釉	灰白色	在地	19c	
36	B11区 SK05	陶器	梅花直	口縁・底部	-	7.0	-	-	灰釉	灰白色	龜戸・美濃	17c	
37	B10区 SK05	陶器	直	口縁~底部	12.6	3.4	3.2	なし	透明釉	灰白色	肥前	18 ~ 19c	大鏡IV ~ V期
38	B11区西側突出面	磁器	直	口縁~底部	13.8	6.7	3.9	草花文	透明釉	灰白色	肥前	18c	
39	C1区側面裏	磁器	直	口縁~底部	13.4	7.4	3.2	草花文	透明釉	灰白色	肥前	18c	
40	C区西側後面向	陶器	堆溝	口縁付近	-	-	-	-	鉄釉	に赤い黄褐色	鹿児	17c 後 ~ 18c	
41	B8区段乱	陶器	堆溝	口縁部	-	-	-	-	鉄釉	灰褐色	東北地方	19c	
42	B9区側面裏	陶器	堆溝	口縁部	-	-	-	-	鉄釉	灰褐色	東北地方	19c	
43	B10区 SK05	陶器	捺沫	下部~底部	-	12.2	-	-	鉄釉	灰褐色	東北地方	19c	雄琴引痕
44	B10区 SK05	陶器	捺沫	口縁部	-	-	-	-	鉄釉	灰褐色	東北地方	19c	

第15図 道上遺跡出土遺物（3）



馬番號	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
45	B11区 SK01	石臼?	(23.70)	(8.50)	高さ (6.2)	950.0	デイサイト製・黒羽山駁歯(新生代新第三期)
46	B10区 SK05	石鉢?	口径 43.0	底径 21.0	深さ 18.0	7400.0	デイサイト製・黒羽山駁歯(新生代新第三期)
47	B10区 SK05	石臼	(24.70)	(13.50)	(5.50)	2600.0	デイサイト製・黒羽山駁歯(新生代新第三期)
48	B14区 SK01	動物骨板	58.00	10.00	0.10	150.0	スギ製
49	B14区 SK01	動物骨板	19.35	19.00	1.10	185.0	スギ製
50	B14区 SK01	板状?	10.70	(8.60)	0.75	45.0	スギ製
51	B14区 SK01	板状?	(15.20)	(4.10)	1.20	50.0	スギ製
52	B11区邊縁外	水堀造貝	2.48	(2.15)	0.13	1.1	
53	C5区側出部	細管破口	6.40	1.20	1.10	12.4	

第16図 道上遺跡出土遺物 (4)



揭露No	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	参考
54	B8 区 SD01 掘起。	石鋸	4.35	2.95	0.80	8.0	頁岩質・奥羽山脈産(新生代更新三期)
55	B9 区 岩山面	側面石鋸	4.30	2.20	1.20	22.4	頁岩質・奥羽山脈産(新生代更新三期)
56	B9 区 岩山面	石鋸	6.45	4.28	1.10	22.4	頁岩質・奥羽山脈産(新生代更新三期)
57	C1 区 岩山面	石鋸	4.05	1.30	0.70	1.1	頁岩質・奥羽山脈産(新生代更新三期)
58	C 区 西側検索面	石鋸?	(3.05)	2.70	0.80	6.5	頁岩質・奥羽山脈産(新生代更新三期)
59	B11 区 SD02	石鋸	23.60	10.20	3.50	886.4	頁岩質・奥羽山脈産(新生代更新三期)

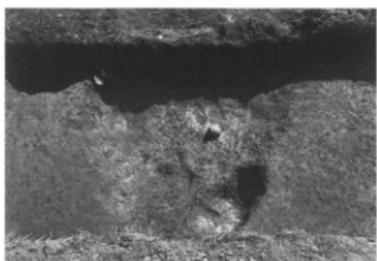
第17図 道上遺跡出土遺物（5）



調査区全景



基本層序



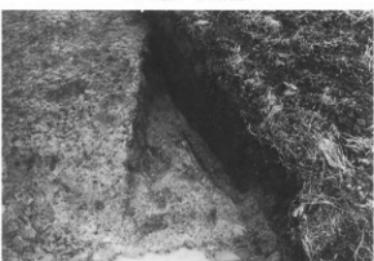
A 1 区 SX 01



A 1 区 SX 02



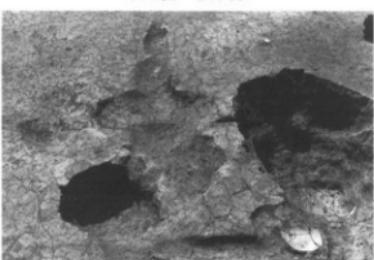
A 1 区 SX 01



A 1 区 SX 03



A 4 区 全景



A 4 区 SI 01

写真図版1 道上遺跡検出遺構（1）



A 3区 SK 01



A 3区 SK 02



B 1区 全景



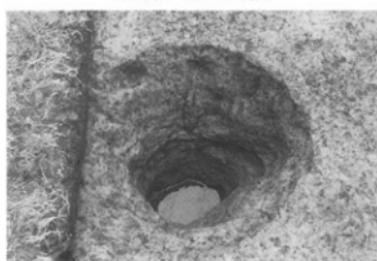
B 3区 全景



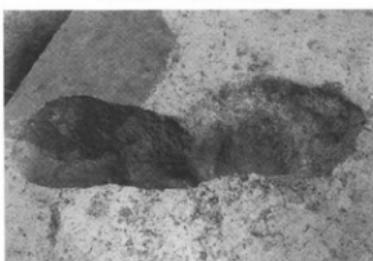
B 10区 SI 01周辺



B 10区 SI 01(煙道)



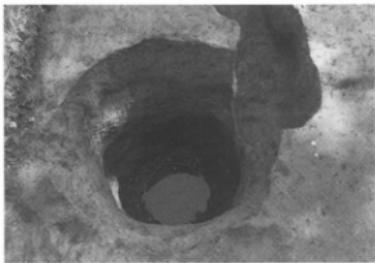
B 10区 SK 01



B 10区 SK 02



B 10 区 SK 03



B 10 区 SK 05



B 11 区 東部全景



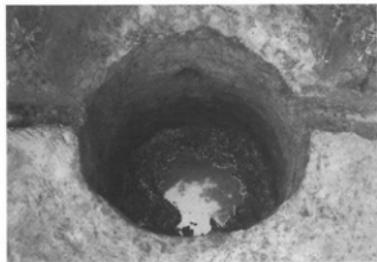
B 11 区 中央部全景



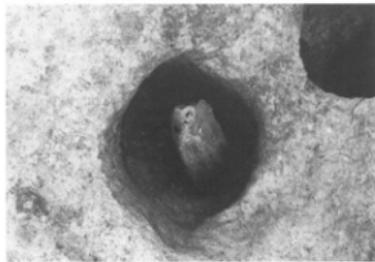
B 11 区 西部全景



B 11 区 SD 02



B 11 区 SK 01

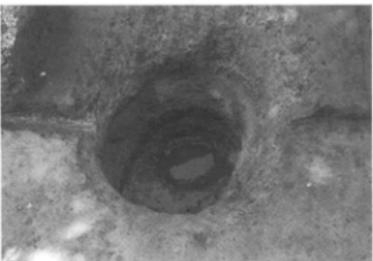


B 11 区 P 33'

写真図版 3 道上遺跡検出遺構 (3)



B 12 区 全景



B 12 区 SK 01



B 13 区 SK 01



B 14 区 SK 01



C 2 区 検出状況



C 6 区 検出状況



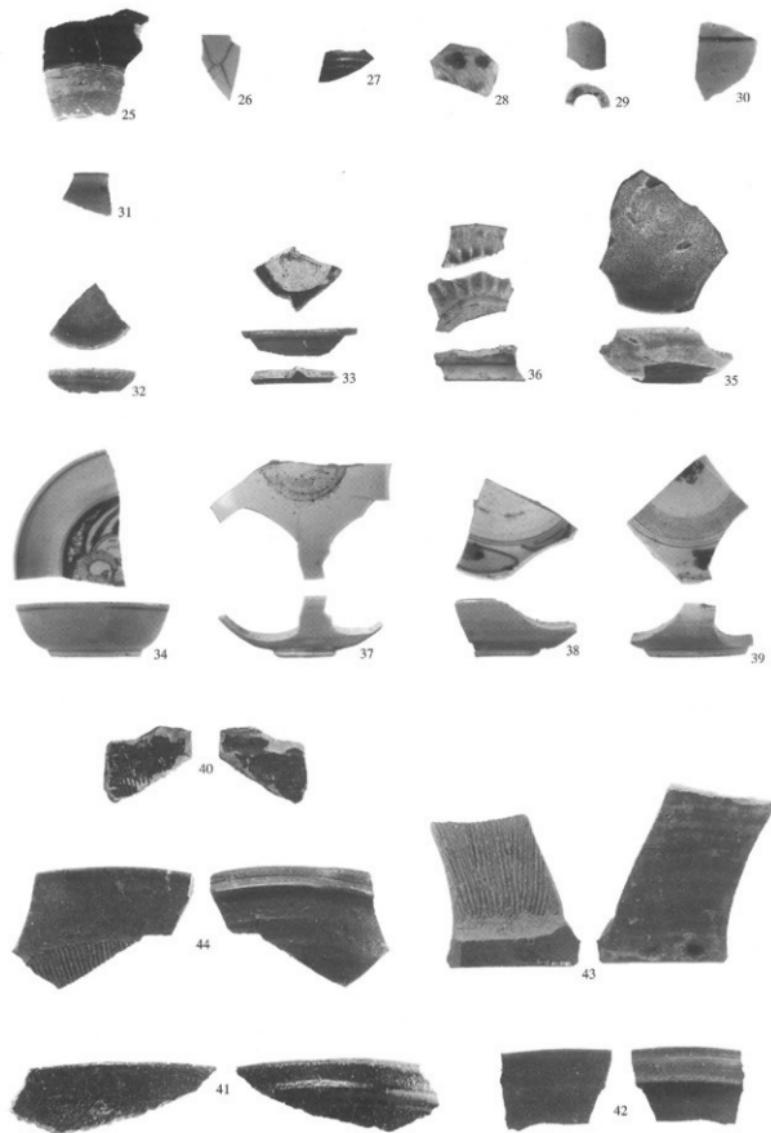
C 12 区 検出状況



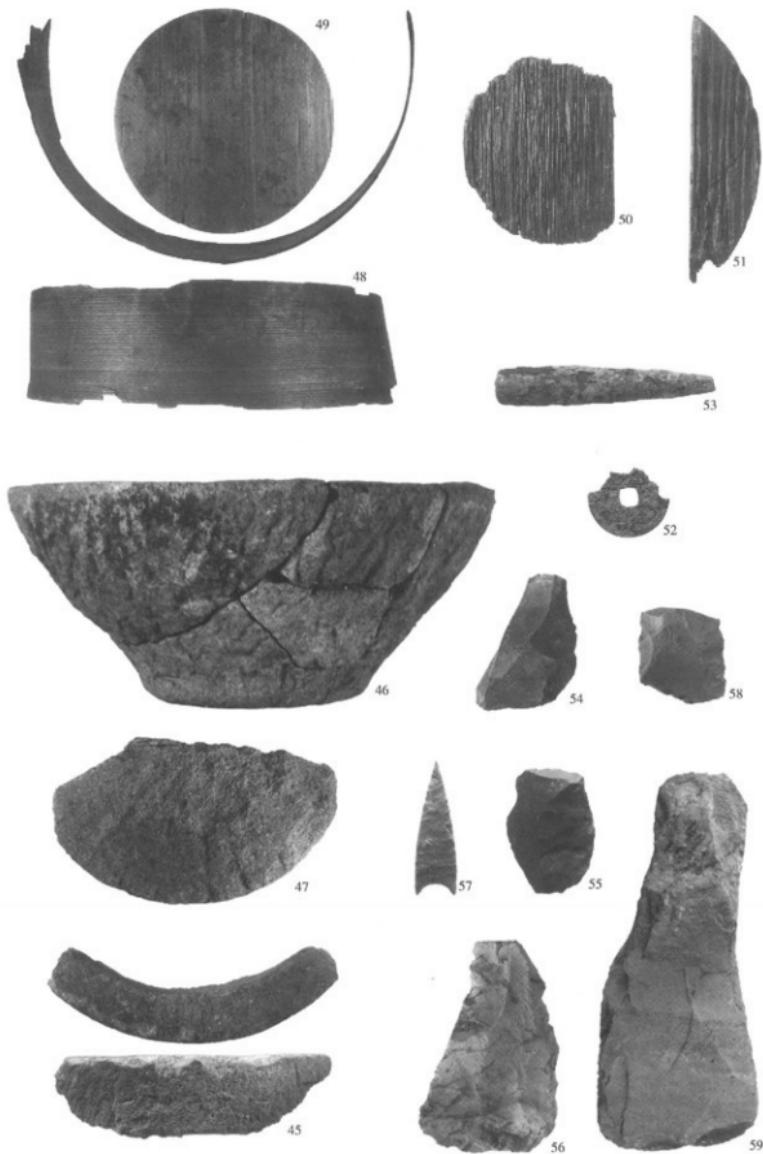
C 13 区 検出状況



写真図版 5 道上遺跡出土遺物 (1)



写真図版 6 道上遺跡出土遺物 (2)



写真図版 7 道上遺跡出土遺物（3）

報告書抄録

ふりがな	どうのうえいせきはくつちょうさほうこくしょ						
書名	道上遺跡発掘調査報告書						
調書名	経営体育成長整備事業白山地区開発遺跡発掘調査						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第490集						
編著者名	川又吉・村上拓・菅野梢						
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638 - 9001						
発行年月日	2006年3月27日						
ふりがな所収遺跡名	ふりがな所在地 コード 北緯 東経 調査期間 調査面積 調査原因						
道上遺跡 第1次調査	岩手県奥州市 前沢区 白山字駒内64ほか	市町村 03382 NE47-0045	39度 04分 42秒	141度 09分 31秒	2005.07.01 ~ 2005.10.24	8,199 m ² (本調査 4,970 m ² 確認調査 3,299 m ²)	経営体育成長整備 事業白山地区に伴う 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別 主な時代 主な遺構 主な遺物 特記事項						
道上遺跡 第1次調査	集落跡 故市地 繩文 平安 整穴住居跡 2種 土器群 幾土造構 2基 頸椎群 中・近世 住居状造構 時期不明 30基 手づくねかわらけ 柱跡 2条 陶磁器 柱穴状小土坑 62個 石製品 木製品						

要約

道上遺跡は奥州市前沢区白山に所在し、北上川西岸の沖積平野上の微高地に立地する。遺跡範囲は昭和期の十進整備事業により削平を受けて遺構の遺存状態は不良であったが、整穴住居跡2種、住居状造構5種、焼土造構2基、土坑30基、溝跡2条、柱穴状小土坑62個を検出している。整穴住居跡は2種ともカマド周辺のみの遺存であったが、平安時代の遺構である。柱穴群は調査区南東部でかなりの高密度で確認され、主に近世に属するものと考えられる。遺構の分布する旧河床沿いの微高地は調査区外にも連続するため、調査区外に遺構の広がりが確認される可能性は高い。遺物は、繩文時代の石器、平安時代の土器群・須恵器、12世紀のてづくねかわらけ・常滑・瀬美窯陶器、中世・近世の陶磁器、石製品・木製品・金属製品が出土しており、遺跡内もしくは周辺部に、繩文時代から近世・現代に至るまで連続的に人々の生活の場が存在したものとみられる。

北緯度・東経度は世界測地系における数値である。

(8) 十文字遺跡

所 在 地	東磐井郡藤沢町西口字十文字 119 番地 2 ほか	遺跡番号・略号	O F 10 - 2292 · J M J - 05
委 託 者	千厩地方振興局農林部農村整備室	調査対象面積	131 m ²
事 業 名	畑地帯総合整備事業	発掘調査面積	131 m ²
発掘調査期間	平成 17 年 4 月 8 日～4 月 21 日	調査担当者	千葉正彦・丸山直美

1. 調査に至る経過

十文字遺跡は、畑地帯総合整備事業藤崎地区の施工区域内に位置することから、発掘調査を実施することとなったものである。

本事業は、一関市川崎町および東磐井郡藤沢町の農村地帯 346.7ha を受益としている。本受益地内は、しばしば水不足に悩まされ水田や畑地経営に支障を來たしていたことから、恒久的な水源施設の設置を望む声が出ていた。このような状況から、水源施設として北上川に揚水機、黄海川上流に金越沢ダムを設け、安定した農業用水の供給を図るとともに、営農にかかる労働力節減を図る目的で平成 4 年度に着工し現在に至っている。

本事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、千厩地方振興局農林部農村整備室が平成 17 年 2 月 3 日付け千地農整第 696 号で県教育委員会に試掘調査を依頼した。県教育委員会では試掘調査を実施し、その結果を受けて平成 17 年 3 月 22 日付け教生第 1816 号で調査が必要である旨、千厩地方振興局に回答した。これを受けて、千厩地方振興局と財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約が結ばれ、発掘調査は岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施することとなった。

(千厩地方振興局農林部農村整備室)



第 1 図 遺跡の位置



十文字遺跡 周辺の地形



第2図 十文字遺跡調査区・基本層序

2. 遺跡の立地

十文字遺跡は岩手県東南部の東磐井郡藤沢町に所在し、藤沢町役場から北西へ約3.3km、高鳥兎山の南東麓に張り出する馬背状の丘陵上に載っており、北緯38度51分59秒、東経141度18分48秒付近(世界測地系)に位置する。遺跡は西口コミュニティセンターおよび同地区体育館周辺の丘陵頂部平坦面(標高153~155m)および緩斜面部(同135m~)に広がる。遺跡の現況は体育館敷地・宅地・道路・畠地である。

本遺跡は古くから周知されており、平成4年、西口地区体育館建設の際に町教育委員会により発掘調査が行われた(第1図)。堅穴住居跡4棟、土坑13基、掘立柱建物跡、炉跡、集石、遺物包含層が検出され、本遺跡が縄文時代中期の集落跡であることが判明している。遺物包含層からは大木8b式を主体に大木8a~10式の土器が出土し、出土総量はコンテナ200箱を越えた(藤沢町教委1997)。

今回の調査はパイプライン敷設に伴うものであり、現道部分(標高138~152m)に幅1.2~1.4m、延長約100mの細長いトレンチを入れた形である。

3. 基本層序

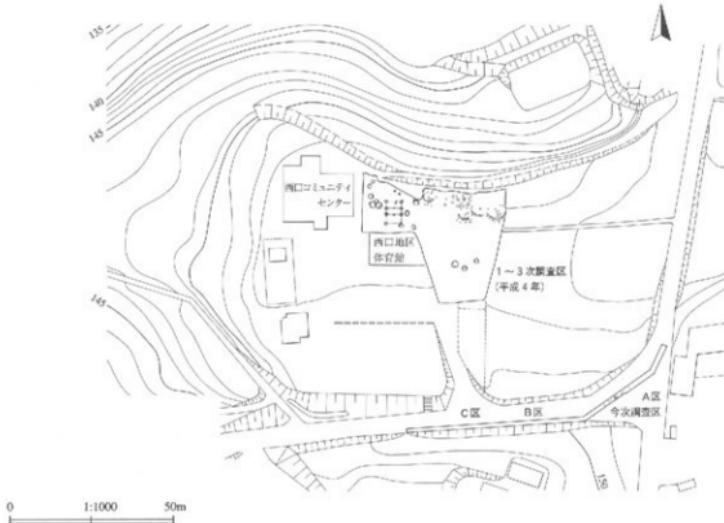
調査区の土層は次のとおりである(第2図)。

I層 アスファルト・碎石(Ia層)および盛り土(Ib・Ic層)。層厚80~150cm。現道の造成に伴う人為堆積層。盛り土層には縄文土器の小破片や少量の陶磁器片などが含まれており、本来あったII層およびII層より上位の堆積土層が擾乱されたものと思われる。

II層 10YR4/1褐灰色。粘質シルト。層厚0~20cm。縄文時代の遺物包含層。しまりあり。傾斜上方のA区北端・D区北端部では存在しない。現道造成の際に削剥されたと推測される。

III層 10YR3/2黒褐色。粘質シルト。層厚0~70cm以上。縄文時代の遺物包含層。II層と同じく削剥によりA区北端・D区北端部では失われている。

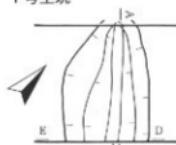
IV層 10YR3/4暗褐色。層厚不明。粘土質土。堅く締まる。地山。



第3図 十文字遺跡調査区位置(A~C区)

(8) 十文字遺跡

1号土坑



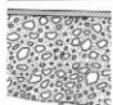
A L=151.600m B A L=151.600m C



X=126.005.0548
Y=094.120724-A
S151.120724-A

0 1:40 1m

D L=152.300m E



1号土坑 深土剖面A-B、D-E

1層	灰黄褐色土	上位には少い黄褐色。堅くしまる。上部細片・炭化物1%含む。
2層	黄褐色土	粘性あり、しまる。炭化物1%含む。N層起源の「地山」崩れ土と思われる。
3層	黒褐色土	粘性あり、堅くしまる。Ⅲ層起源。



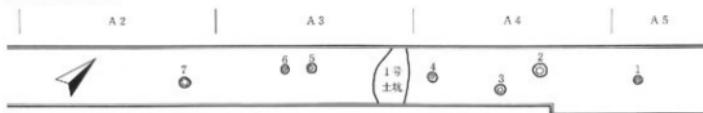
A区柱穴 計測表

	pp1	pp2	pp3	pp4	pp5	pp6	pp7
平面形	円形	円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形
長径×短径 (cm)	14	23	20	19×15	17×16	14×13	17
深さ (cm)	5	21	7	7	10	14	10

A区 (本調査分)
遺構配置図

0 1:200 5m

A区柱穴状土坑



0 1:100 5m

第4図 検出遺構

4. 調査の概要と検出遺構

今回の調査は、本調査部分 33 m²、遺構確認調査部分 98 m²、総面積 131 m²について行った。調査区は狭小なうえに、幅が狭く細長い形状である。調査の便宜上、北東側の本調査部分を A 区、確認調査部分を東から B～D 区と呼称することとした（第 1・2 図）。調査区の形状は平面座標系に沿った通常のグリッド設定が難しい状態であったため、工事軸線に沿った 4 m の区割りを設定し、南側から「A 1、A 2、A 3…」という区名を付して、精査・遺物取り上げを行うこととした（なお、B～D 区については盛り土からの出土遺物のみということから、掲載にあたっては具体的な区名を示さず一括で扱った）。

調査区開始当初、遺物包含層（II・III 層）の広がりを確認するため、重機により I 層を除去した。その結果、調査区の全面に遺物包含層が広がっていることを確認した。その後、A 区については、段階的に IV 層上面まで人力で掘り下げた。B～D 区では、C 区の中央付近に 1 箇所、層厚確認のための深掘りを行ったが、その他の部分については II 層以下の精査を行っていない。調査の結果、土坑 1 基、柱穴状小土坑 7 個、遺物包含層が検出された。

＜土坑＞（第 3 図） A 3 区と A 4 区の境界付近の IV 層面で検出した。西側末端部および東側が調査区外に延びている。検出部分で見ると、平面形は長さ 1.0 m 以上・幅 70 cm の溝状を呈し、深さは 75 cm を測る。埋土断面で見ると、本来の構築面は III 層だったと考えられる。底面は幅狭くほぼ平坦で、壁は外反ぎみに立ち上がるが、やや張り出した長輪末端部では内彎している。埋土は底面付近に III 層起源の黒褐色土、上～中位に II 層系の灰褐色～明黄褐色土が堆積しており、自然堆積の様相を示している。形状から判断すると陥し穴状遺構と思われる。土坑埋土からの出土遺物はないが、形状や埋土の様相から縄文時代中期中葉に属すると推測される。

＜柱穴状小土坑＞（第 3 図） A 2 区～A 5 区において検出された。当該区の IV 層面で、疎らに分布する黒褐色土の円形プラン 10 数個を検出し、精査の結果、7 個を柱穴として認定した。平面形は円形または梢円形を呈しており、径 13～23 cm、深さ 5～21 cm である。埋土は III 层起源と思われる黒褐色土である。竪穴住居跡の柱穴の可能性もあるが、当該区の包含層中および IV 層面では床面は確認できず、調査範囲が狭いため配置に規則性は見出せなかった。pp 2・3・5 から縄文土器の小破片が出土している。出土遺物および埋土の様相から縄文時代中期に属するものと推測される。

＜遺物包含層＞ 基本層序 II 層および III 層に相当し、調査区ほぼ全面に広がっている。I 層直下で検出され、現道から包含層上面までの深さは 0.8～1.6 m である。基本層序で述べたとおり、上位の褐灰色シルト層（II 層）と下位の黒褐色シルト層（III 層）で構成されている。両層ともに粘性があり締まっている。層厚は A 区では最大 45 cm、B～D 区では精査していないため詳細不明であるが、C 区の深掘り部分を参照すると 2 層あわせて厚さ 130 cm を測る。中期中葉～後期前葉の縄文土器片、石器類、炭化物粒・焼上粒を含んでいる。特定地点に遺物集中する訳ではなく、全体に散在する出土状況であった。II 層上位では碎かれたように粒状になっている土器片も見られる。また A 区では斜面上方にあたる北側で層厚は薄くなり、A 5 グリッド以北では II 層が確認できなくなることから、現道造成時に擾乱を受けているものと思われる。

5. 出土遺物

主として遺物包含層から、総量コンテナ 6 箱弱（総重量約 75.5 kg）の遺物が出土している。種別は縄文土器、土製品、石器であるが、縄文土器が主体を占めており、他はごく少量である。

A 区出土土器重量	64083.8
B 区出土土器重量	5518.2
C 区出土土器重量	3561.1
D 区出土土器重量	0.0
その他	975.8
土器重量	74033.0
石器石製品重量	1502.1
出土遺物総計	75535.1

表 1 遺物出土重量 (g)

<縄文土器> (第6～9図) 遺物包含層であるⅡ・Ⅲ層、および盛土Ⅰ層から約74.0 kg分が出土した。接合できたものは少なく、実測できる立体資料は僅か17点に止まった。破片資料が多く明確に時期同定しにくいものが多いが、文様に特徴あるものを中心に、推定される時期ごとに分類した73点を掲載した。

中期：1～30。中葉～末葉のものを見られる。1～7は大木8a式、8～17は大木8b式。8は8b-2式、16・17は8b-3式か。18～28は大木9式、29・30は大木10式。後期：31～51。初頭～中葉と思われるものである。31～35は門前式か。31・32は波状口縁の波頂部の円孔、斜位の帶状沈線文などの特徴から、門前Ⅱ～Ⅲ式の可能性がある。³⁶

~51は加曾利B2～3式(新山権現社2～3式、宮戸Ⅱ式)平行である。36～49は加曾利B2式(新山権現社2式)、51は加曾利B3式(新山権現社3式)に平行する。52～73は中～後期に属すると思われるが、詳細不明のものである。52～61は半精製ないしは粗製土器の口縁部破片、62～73は底部破片。62～64は縄文、65～68は縄代痕、69～72は木葉痕が底面に見られる。73は浅鉢の底部である。

本調査を行ったのはA区のみであるが、当該区からの出土重量は約64.1 kgである。第2図に示すとおり、A区は現道の建設に伴い少なからず削剥を被っており、特に北側・斜面上方のA5グリッド以北ではⅡ・Ⅲ層を欠くため、出土量が極端に落ち込む。比較的残存状況の良い斜面下方のA1・2グリッドからは、Ⅱ層を主体に約41.6 kg分が出土しており、本来は全面が密な包含層だったものと思われる。なお、地点による(斜面の上下)による時期的な差異は明確には捉えられなかった。

<土製品> (第9図) 円盤状土製品16点、土偶の脚部破片1点が出土した。

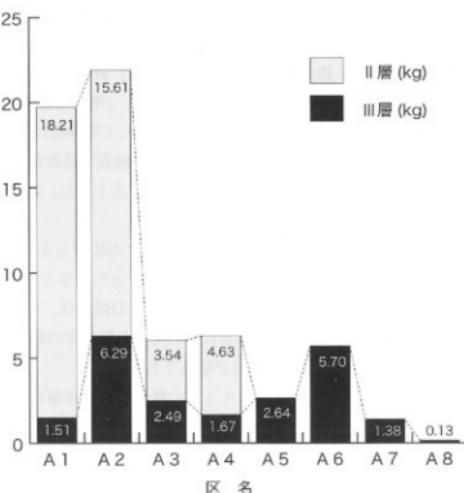
<石器類> (第10・11図) 石鏃5点、削搔器15点、敲磨器4点、剥片・碎片が出土した。黒曜石を母材とした石器や碎片が顕著である。

<陶磁器> 図示していないが、染付が施された肥前窯の磁器碗(古伊万里)の小破片がA・C区の擾乱層から各1点出土している。

6.まとめ

調査の結果、縄文時代の陥入穴状造構・柱穴と縄文時代中期中葉を主体とする遺物包含層が検出された。調査区が細長く、かつ本調査部分が狭小であるため明確ではないが、次の点を指摘しておく。

遺物包含層は、土層や出土遺物の様相から、前回調査で確認された包含層と同一のものと考えられ、集落の「捨て場」範囲が今回の調査区および調査区外にまで延びていることが確認された。なお、前回調査での包含層出土遺物は中期中葉を主体としていたのに対して、今回はやや新しい後期初頭～中



第5図 A区グリッド別出土土器重量

葉期の上器出土が目立っており、地点により包含層の時期が推移している可能性がある。すなわち、明瞭には把握できなかったものの、斜面下方側がより新しい様相を示していると考えられる。

また、遺物包含層の範囲内で土坑が検出された。当該土坑はⅢ層面で構築されていた可能性が高く、かつ、形態から見て陥り穴状遺構と考えられることから、包含層の形成途上に「捨て場」の一部がある時期には狩場として使用されていたのかもしれない。

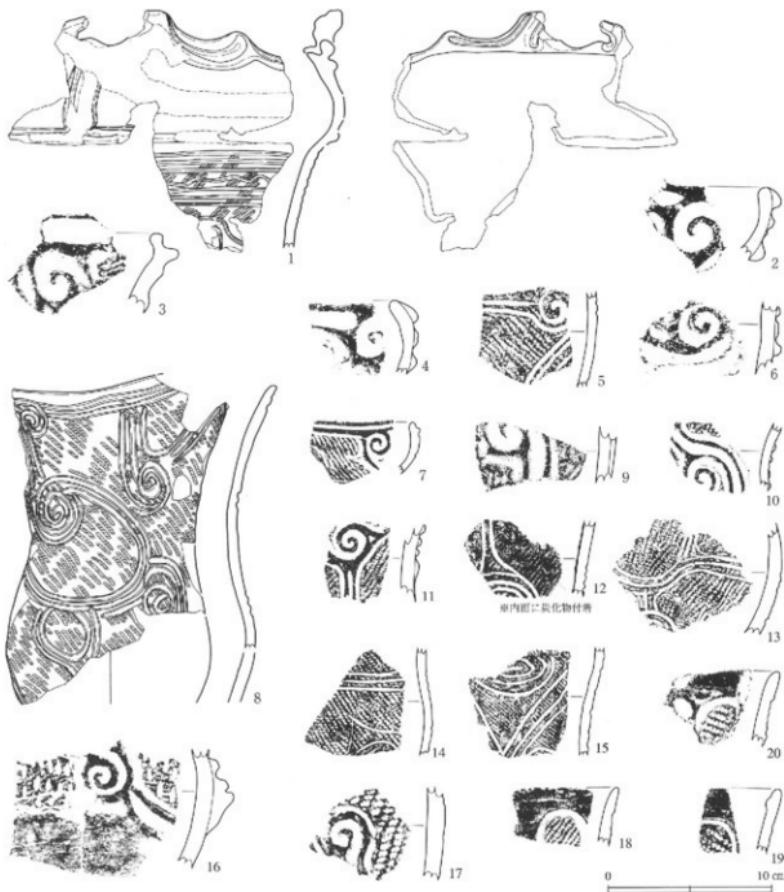
なお、十文字遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

<参考文献>

藤沢町教育委員会 1997 「十文字遺跡発掘調査報告書」 藤沢町文化財調査報告第14集

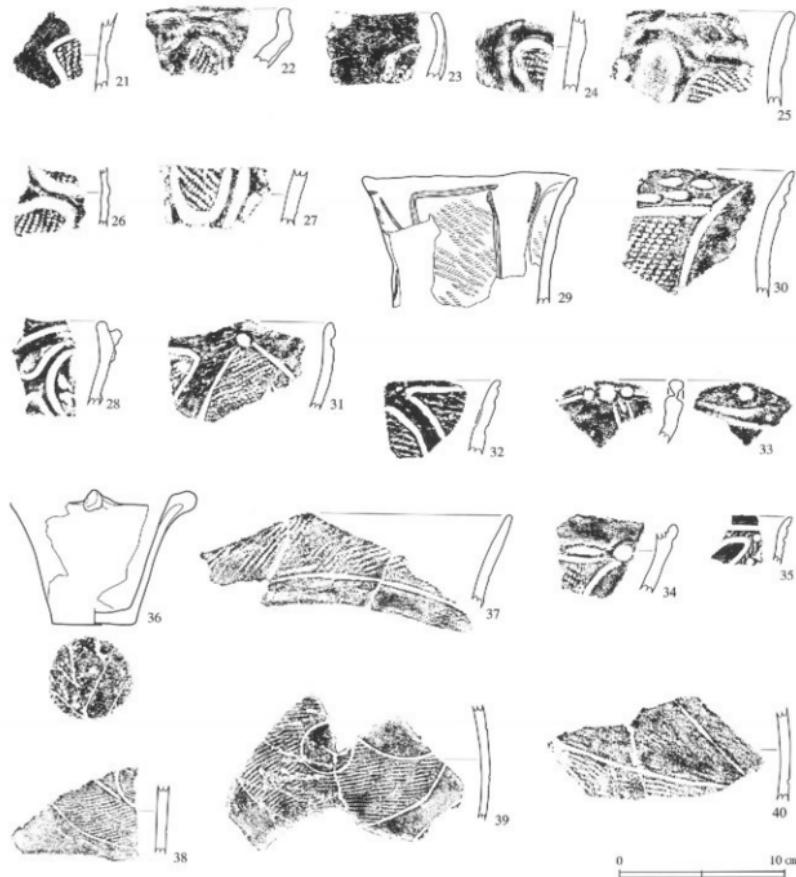
報告書抄録

ふりがな	へいせい 17ねん どはくつちょううきはうこくしょ						
書名	平成17年度発掘調査報告書						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第490集						
編著者名	千葉正彦						
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11連荘185番地 TEL(019) 638-9001						
発行年月日	2006年3月27日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
十文字遺跡	岩手県東磐井郡 沢町西口字十文 字119番地2ほか	市町村 遺跡番号	38度 51分 59秒	141度 18分 48秒	2005.04.08 ～ 2005.04.21	131m ² 33m ² 98m ²	畑地総合整備事業に 伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
十文字遺跡	集落跡	縄文時代	土坑 柱穴状土坑 遺物包含層	1基 7個 1箇所	繩文土器 土製品 石器	大5箱 17点 24点	中期中葉～後期中葉にかけての 遺物包含層を検出した。
要約	十文字遺跡は、以前の調査で縄文時代中～後期の集落跡であることが判明している。調査の結果、縄文時代中期中葉～後期中葉にかけての遺物包含層を検出した。出土上器は大木8a～10式、門前式、加賀利B2～3式、と時間幅がある。今回の調査区については、概ね中期後葉～後期前葉の土器が主体である。						※緯度・緯度は世界地図における数値である。



番号	出土遺物	層位	形態	部位	文様・特徴	施文様	時期・型式
1	A 6 区	直縫	溝縫	口縫内壁	直絶状の斜材による斜切縫。底部に複数条の横材沈痕。	Rし縫	中期・大木 b-a 式
2	A 4 区	直縫	溝縫	浮き割り状の斜材による渦巻文。	R縫	中期・大木 b-a 式	
3	A 1 区	直縫下伏	溝縫	浮き割り状の斜材による渦巻文。	R縫	中期・大木 b-a 式	
4	A 2 区	直縫	溝縫	浮き割り状の斜材による渦巻文。	R縫	中期・大木 b-a 式	
5	A 2 区	直縫中伏	溝縫	浮き割り状の斜材による渦巻文。	R縫	中期・大木 b-a 式	
6	A 2 区	直縫	溝縫?	浮き割り状の斜材による渦巻文。	R縫	中期・大木 b-a 式	
7	C区	直縫	溝縫	浮き割り状の斜材による渦巻文。	R縫	中期・大木 b-a 式	
8	A 4 区	直縫一長縫	溝縫	口縫内側に開く。例は沈絶による腰に連結された渦巻文。	Rし縫	中期・大木 b-a 2 式?	
9	A 1 区	直縫下伏	溝縫	沈絶による腰位の渦巻文(渦縫?)。	R縫	中期・大木 b-b 式	
10	A 1 区	直縫	溝縫	沈絶による腰位の渦巻文(渦縫?)。	R縫	中期・大木 b-b 式	
11	B 3 区	直縫	溝縫	沈絶による腰位に連結された渦巻文。	Rし縫	中期・大木 b-b 式	
12	A 6 区	直縫	溝縫	沈絶による腰位に連結された渦巻文。	Rし縫	中期・大木 b-b 式	
13	C区	直縫	溝縫	沈絶による腰位に連結された渦巻文。	Rし縫	中期・大木 b-b 式	
14	A 2 区	直縫上伏	溝縫	沈絶による腰位に連結された渦巻文。	Rし縫	中期・大木 b-b 式	
15	A 2 区	直縫丸形	溝縫	沈絶による腰位に開拓する渦巻文。	Rし縫	中期・大木 b-b 式	
16	A 4 区	直縫	口縫	沈絶による腰位、下子に斜切。	R縫	中期・大木 b-b 3 式?	
17	A 4 区	直縫	溝縫	沈絶による腰位、斜切。	R縫	中期・大木 b-b 3 式?	
18	C区	直縫	溝縫	周縁内側の横筋構造。	Rし縫	中期・大木 9 式	
19	A 1 区	直縫下伏	溝縫	周縁内側の横筋構造。	Rし縫?	中期・大木 9 式	
20	A 5 区	直縫	溝縫	周縁内側の横筋構造。	Rし縫	中期・大木 9 式	

第6図 出土遺物（1）縄文土器



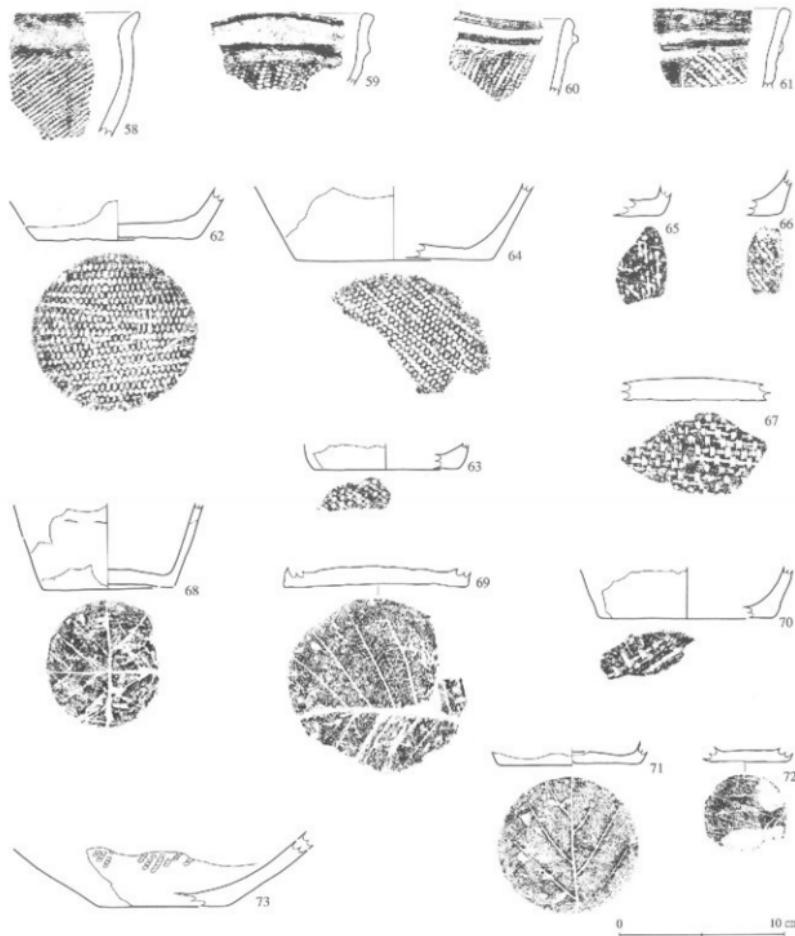
番号	出土施設	断片	基盤	部位	文様・特徴	施工作業体	時期・型式
21	A 6 区	直縁	済体	茎	楕円形又は圓の波折繩文。	R.上縁	中期・大木ノ式
22	C 16	直縁	済体	口縁	楕円形又は圓の波折繩文。	L.上縁	中期・大木ノ式
23	C 16	直縁	済体	口縁	楕円形又は圓の波折繩文。	L.上縁	中期・大木ノ式
24	A 3 区	直縁	済体	口縁?	楕円形又は圓の波折繩文。	L.上縁	中期・大木ノ式
25	A 6 区	直縁	済体	口縁?	垂葉丸印による舟形凹向裏、歩道繩文、細い波繩文。	L.上縁	中期・大木ノ式
26	A 2 区	口縁上位	済体	茎	鶴円形又は圓の波折繩文。	L.下縫	中期・大木ノ式
27	不明	不明	済体	茎	鶴円形又は圓の波折繩文。	L.下縫	中期・大木ノ式
28	A 6 区	直縁	済体	口縁	方孔区段の舟形凹向裏。	L.上縁	中期・大木ノ式(?)
29	A 2 区	直縁	済体	口縁	方孔区段の舟形凹向裏。	R.上・R.縫	中期・大木ノ式(?)
30	A 2 区	直縁	済体	口縁	方孔区段の舟形凹向裏。	R.縫	中期・門前式?
31	A 1 区	2 基所下位	済体	口縁	斜状口縁の類似し円孔軸孔の孔。斜位の波折繩文、溝り消し。	L.縫	後期・門前式?
32	A 1 区	2 基	済体	口縁	口縁から斜位に開削する波折区段、溝り消し。	L.縫	後期・門前式?
33	A 2 区	2 基	済体	口縁	斜状口縁の波折文・表裏同様から円孔軸孔。斜位の波折文。	R.上縫	後期・門前式?
34	B 3 区	1 基	済体	口縁?	円孔軸孔。斜位の波折文。	R.上縫	後期・門前式?
35	B 3 区	1 基	済体	口縁	縫取の斜位。斜位の波折文。	R.縫	中期・門前式?
36	2 種施設底部	済外	口縁一端	大木ノ口縁	底面に木乗柵。	後期・加賀井田 2 次?	
37	A 1 区	2 基	済外	口縁	底面に木乗柵。	後期・加賀井田 2 次?	
38	A 1 区	2 基	済外	口縁?	波折の舟形凹向裏。	L.上縫	後期・加賀井田 2 次?
39	A 1 区	2 基	済外	口縁?	波折の舟形凹向裏。(尖角)	R.上縫	後期・加賀井田 2 次?
40	A 1 区	2 基	済外	口縁	溝り消し繩文。(歩道)	L.上縫	後期・加賀井田 2 次?

第7図 出土遺物（2）縄文土器



番号	出土場所	層位	器種	形態	文様・特徴	施文部位	時期・型式
41	A-1区	有茎燒瓦器	深鉢	口縁	断びの縦り消し彫文。	0段多面L	後期・加賀利B 2次
42	B-3区	上部	深鉢	口縁	平行の縦り消し彫文。	R.L.縫	後期・加賀利B 2次
43	B-1区	上部	深鉢	口縁	平行の縦り消し彫文。	S.R.縫	後期・加賀利B 2次
44	B-2区	有茎燒瓦器	深鉢	口縁	波状火綱。波状溝は所引込まれて突起状。	S.R.縫	後期・加賀利B 2次
45	A-2区	有茎焼瓦器	深鉢	口縁	波状火綱。波状溝は波状して突起状。	S.R.縫	後期・加賀利B 2次
46	A-1区	有茎燒瓦器	深鉢	口縁	波状火綱。波状溝は波状して突起状。	S.R.縫	後期
47	A-1区	有茎燒瓦器	深鉢	口縁	口縁に捺られた大振りの火綱。口縁部に複数条の横筋沈線。	L.R.?	後期・加賀利B 2次
48	B-3区	上部	深鉢	口縁	火綱と捺縫。	R.L.縫	後期・加賀利B 2次
49	A-2区	有茎燒瓦器	深鉢	口縁	火綱と捺縫。	R.L.縫?	後期
50	A-1区	有茎燒瓦器	浅鉢	口縁	火綱と捺縫。	S.R.?	後期・加賀利B 3次
51	A-2区	有茎燒瓦器上位	浅鉢	口縁	火綱と捺縫。	0段多面L	後期・加賀利B 3次
52	B-3区	上部	深鉢	口縁	口縁溝部に沿って火綱1条。	R.R.縫	中～後期
53	A-1区	有茎下化	深鉢	口縁	口縁溝部に沿って細い火綱2条。	R.R.縫	中～後期
54	B-3区	上部	深鉢	口縁	斜行火綱。	R.L.縫	中～後期
55	A-3区	有茎下化	深鉢	口縁	斜行火綱。	R.L.縫	中～後期
56	B-2区	上部	深鉢	口縁	口縁部に無文街。	火縫?	中～後期
57	C区	無	深鉢	口縁	口縁部に無文街。	火縫	中～後期

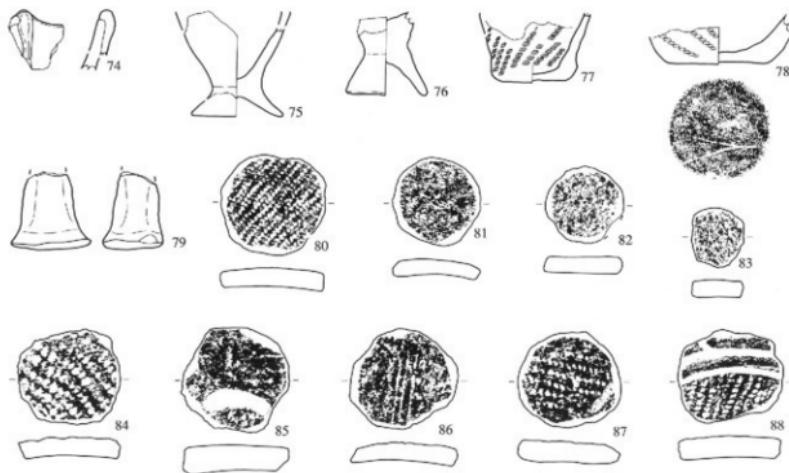
第8図 出土遺物（3）縄文土器



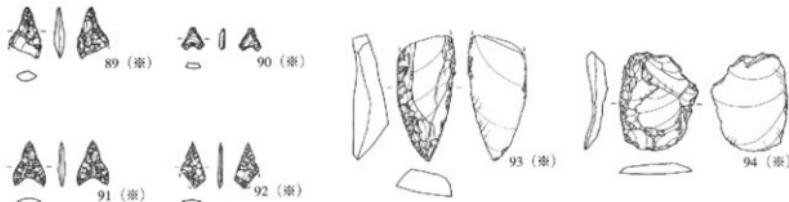
番号	出土地点	断面	裂隙	部位	文様・剖面	施文部	輪郭・底式
58	B 3区	縦	直縫	口縁	口縁部は横文帯。	L.R底	中-後期
59	A 6区	直縫	直縫	口縁	口縁は斜済区段の横文帯。	又L底	中-後期
60	C区	直縫	直縫	口縁	口縁にV字形横文帯をもつ通り窓文。	单側筋条体L	中-後期
61	A 1区	直縫下位	直縫	口縁	口縁にV字形横文帯をもつ。	L.直縫	中-後期
62	B 3区	横	直縫	底	底面に横文帯（1本逆り、1本直り、1本横）、1本横（？）。	又L底	中-後期
63	A 1区	横	直縫	底	底面に横文帯（1本逆り、1本直り、2本横（？））。	又L底	中-後期
64	A 1区	2号窓孔部	直縫	底	底面に窓孔部（1本逆り、1本直り、1本横（？））。	又L底	中-後期
65	A 1区	2号窓孔部	直縫	底	底面に窓孔部（1本直り）。	又L底	中-後期
66	A 1区	2号窓孔部	直縫	底	底面に窓孔部（4本横）。	又L底	中-後期
67	A 1区	直縫下位	直縫	底	底面に横文帯（1本逆り、2本直り、1本横）。	又L底	中-後期
68	A 2区	直縫	直縫	底	底面に木立山（複数窓孔）。	又L底	中-後期
69	A 2区	直縫	直縫	底	底面に木立山。	又L底	中-後期
70	B 3区	直縫	直縫	底	底面に木立山（複数窓孔）。	又L底	中-後期
71	A 1区	直縫下位	直縫	底	底面に木立山。	又L底	中-後期
72	A 2区	直縫	直縫	底	底面に木立山。	又L底	中-後期
73	A 1区	直縫下位	？	底	斜行窓文。	又L底	中-後期

第9図 出土遺物(4) 繩文土器

(8) 十字形遺跡

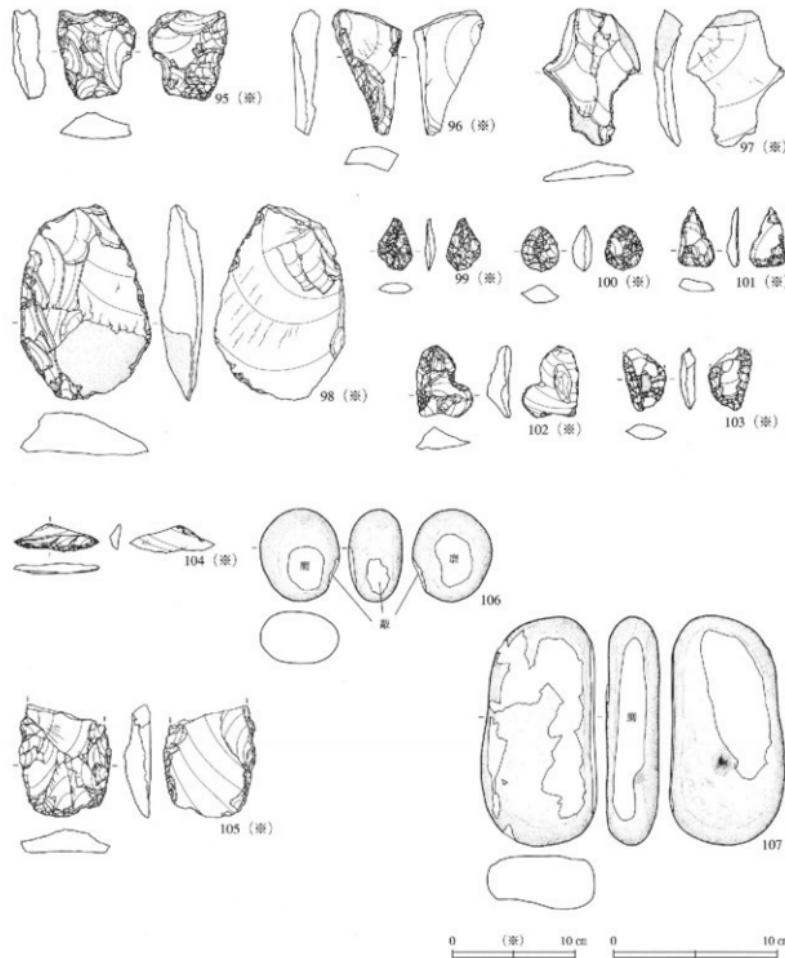


番号	出土地点	層位	器種	状態	文様・特徴	陶文部体	重量(g)	時期
74	A 1 区	貝塚下位	骨片	環状、尖端に棘状突起			2.5	後期
75	A 1 区	貝塚下位	骨片	上端尖、直角口。			26.4	中間
76	A 1 区	貝塚下位	骨片	直角口。			19.2	中間
77	A 1 区	貝塚	骨片	環状、直角口。	R L R ?	L R	21.8	中間?
78	A 1 区	貝塚下位	骨片	斜行軸文。			42.0	中間?
79	A 2 区	貝塚下位	土器	輪型破片 手捻り型。			17.6	後期?
80	A 1 区	貝塚下位	土器円盤	尖形	斜行軸文。	L R	16.8	中～後期
81	A 1 区	貝塚推定部	土器円盤	尖形	表無地。		9.2	中～後期
82	A 1 区	貝塚	土器円盤	尖形	表無地。	R L ?	8.4	中～後期
83	A 1 区	貝塚	土器円盤	尖形	表無地。		2.1	中～後期
84	A 2 区	貝塚下位	土器円盤	尖形	斜行軸文。	L R	17.0	中～後期
85	A 4 区	貝塚推定部	土器円盤	尖形	張子の大きい虎足(四脚)。		22.0	中～後期
86	A 2 区	貝塚	土器円盤	尖形	3本セットの無い虎足。		16.1	中～後期
87	A 1 区	貝塚	土器円盤	尖形	斜行軸文。	R L	15.2	中～後期
88	A 1 区	貝塚	土器円盤	尖形	縦・平行する溝。	R L	18.9	中～後期



番号	出土地点	層位	器種	重量(g)	特徴	石質	産地
89	A 1 区	貝塚下位	石器	0.61	欠端。石錐か。	碧璽石	不明
90	A 2 区	貝塚下位	石器	0.1	細やかな形。	墨灰岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
91	A 3 区	貝塚上位	石器	0.31	棘玉頭。基部抉入。	碧海石	不明
92	A 2 区	貝塚	石器	0.20	欠端。石錐か。	碧璽石	不明
93	A 3 区	貝塚	石器	13.51	高麗火舟。	青石	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
94	A 4 区	貝塚推定部	削拔器	7.45	削端。片歯のみ鋸歯。	良玉	奥羽山脈 / 新生代新第三紀

第10図 出土遺物(5) 土製品・石器

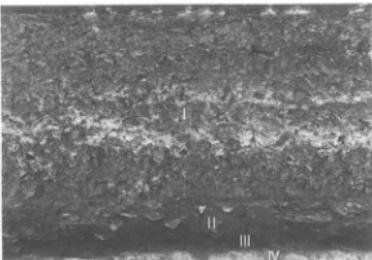


番号	出土地点	種類	特徴	石器	産地
95	A 1 区	貝殻工具	13.85 壳器。片側のみ刃部。	貝殻	奥羽山脈 / 新代新第一紀
96	A 2 区	貝殻	11.08 貝殻。片側のみ刃部。	貝殻	奥羽山脈 / 新代新第一紀
97	A 2 区	貝殻上位	14.30 貝殻。刃部は削痕・切入し、裏面は研磨。	貝殻	奥羽山脈 / 新代新第一紀
98	A 2 区	貝殻	68.10 扇形。刃部は一次削離の自然面を利用。	貝殻	奥羽山脈 / 新代新第一紀
99	A 3 区	貝殻上位	0.77 扇形。石器少。	黑曜石	不明
100	貝殻	貝殻	1.80 扇形。小柱で円形。縁辺全体に刃部調整。	貝殻	奥羽山脈 / 新代新第二紀
101	貝殻中央トレンド	貝殻	1.46 扇形。刃部調整。右側か。	黒色貝殻	北上川流域 / 新代新第一紀
102	A 2 区	貝殻	4.66 扇形。	貝殻	奥羽山脈 / 新代新第一紀
103	A 2 区	貝殻	2.30 扇形。欠損。	貝殻	奥羽山脈 / 新代新第一紀
104	A 2 区	貝殻微孔形	1.00 扇形。小柱で刃部形。	貝殻	奥羽山脈 / 新代新第一紀
105	A 2 区	貝殻	18.75 欠損。法叠加。	黒曜石	不明
106	A 1 区	貝殻微孔形	122.50 扇形(?)。破損(?)。	黒灰質砂岩	奥羽山脈 / 新代新第一紀
107	A 2 区	貝殻	364.50 但書(?)前面。特殊磨石状。	貝殻	奥羽山脈 / 新代新第一紀

第 11 図 出土遺物 (6) 石器



A区完屈（南西から）



A区堆積土層断面



1号土坑完屈（東から）



1号土坑埋土断面（南から）



B区II層検出（東から）



C区II層検出（西から）

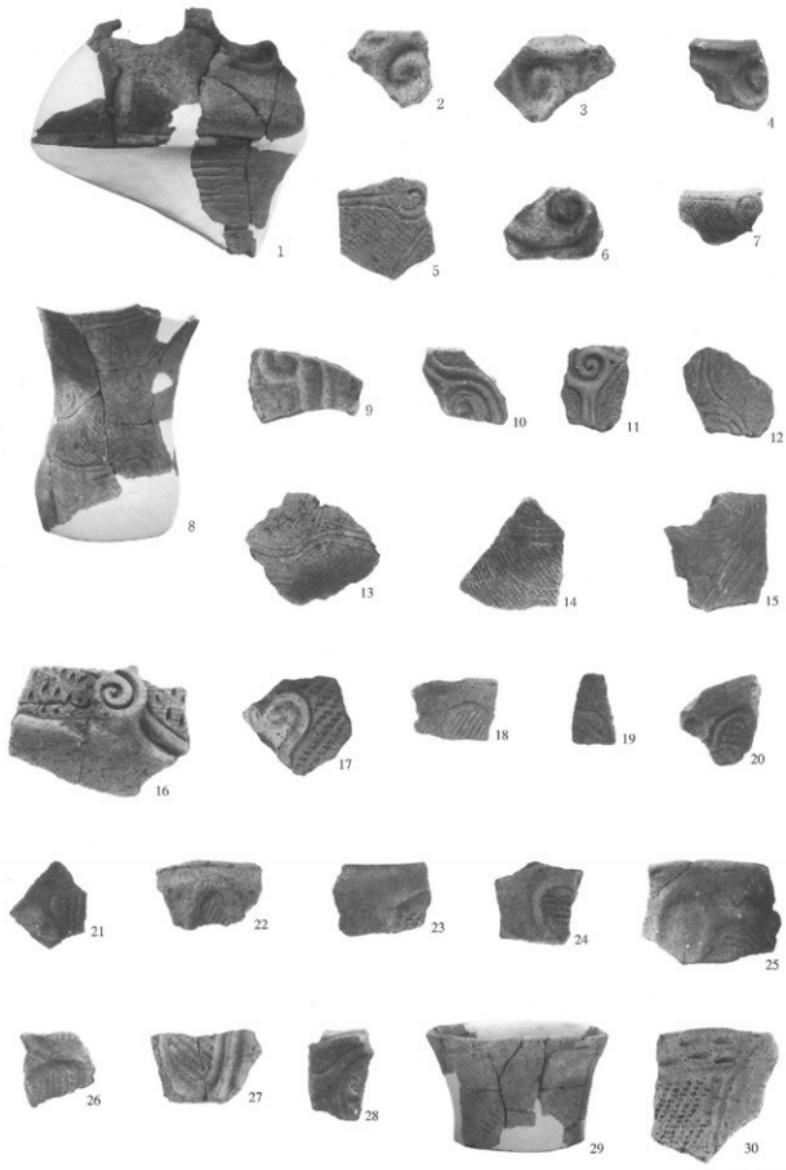


D区III層検出（南から）

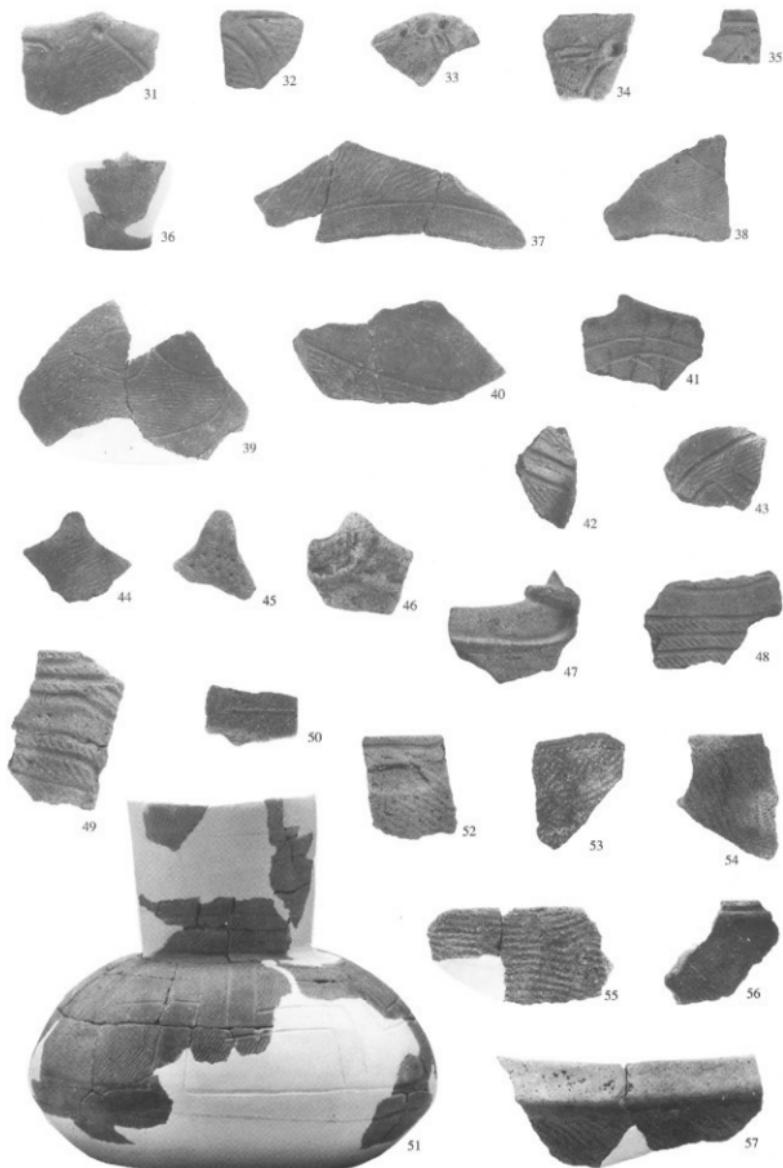


A区精査状況（南西から）

写真図版1 検出遺構

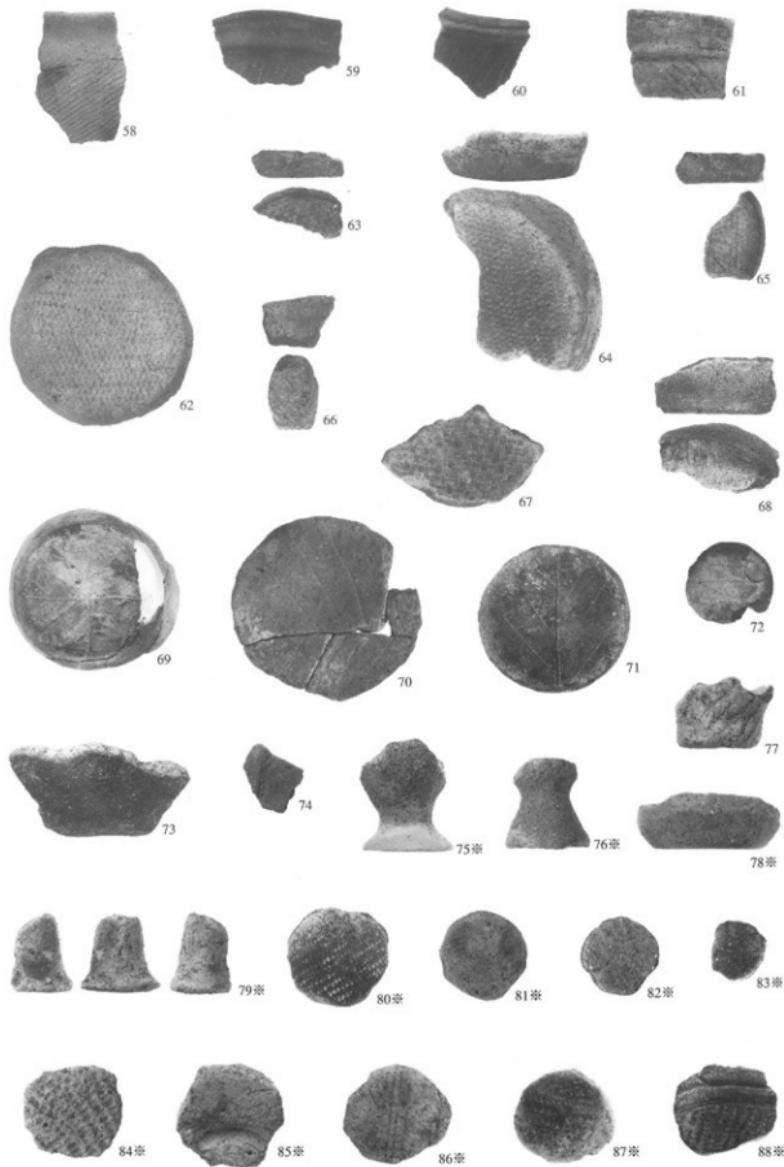


写真図版 2 出土遺物 (1)



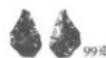
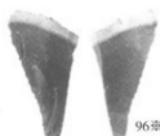
写真図版 3 出土遺物 (2)

縮尺 約 1 / 3



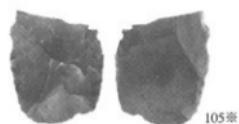
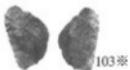
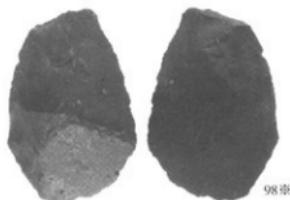
写真図版4 出土遺物（3）

縮尺 約1/3、※1/2



100

101



縮尺 約1/3、※1/2

写真図版5 出土遺物(4)

II 試掘・確認調査報告

(9~19) 八木沢Ⅱ遺跡ほか10遺跡

所 在 地	宮古市大字「八木沢」・「金浜」地内	調査対象面積	89,430 m ²
委 託 者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	試掘・確認調査面積	5,046 m ²
事 業 名	三陸縦貫道路宮古道路建設事業	調査 担当者	林 熊・米田 寛・水上明博 西澤正晴・千葉正彦・川又 晋 横井猛志・荒谷伸郎
調査期間	平成17年7月15日~11月29日		

調査に至る経過

八木沢Ⅱほか10遺跡は、一般国道45号宮古道路事業の事業区域内に位置しているため、当該事業の施行に伴い、試掘・確認調査を実施することとなったものである。

宮古道路事業は、宮古市内の国道45号の線形不良及び隘路箇所を解消し、増大する交通需要に対応するとともに、三陸沿岸地域への高速交通サービスの充実を図り、地域経済の発展、連携・交流の促進のために、平成15年度から事業化している。

これに係わる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、平成16年1月26日付け国東整陸調第78号により、国土交通省三陸国道事務所長から、岩手県教育委員会に、埋蔵文化財包蔵地の確認依頼を行い、平成16年1月26日~1月28日、2月24日~2月25日にわたり分布調査を実施した。

その結果、平成16年3月4日付け「教生第1879号」により、八木沢Ⅱほか10遺跡の試掘・確認調査が必要となったことから、岩手県教育委員会と三陸国道事務所が協議を行い、調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに委託することとなったものである。

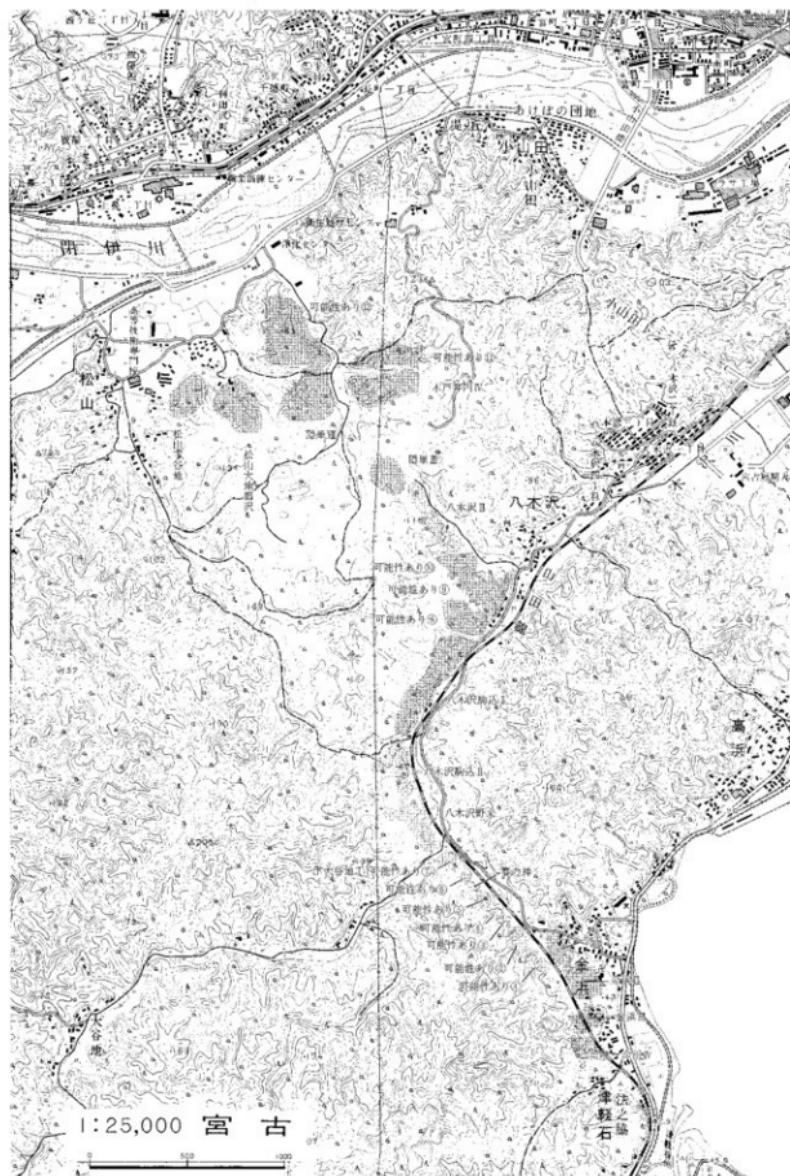
(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



写真図版1 八木沢Ⅲ野来遺跡出土縄文土器



写真図版2 可能性あり②出土鉄滓



第1図 宮古道路関連遺跡位置図

(9) 可能性あり①

所 在 地 宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上
遺 跡 番 号 L G 43 - 2353

調査対象面積 6,760 m²
試掘調査面積 530 m²

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯駅の南約4.5kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地している。現況は畑地、山林である。今回の試掘調査範囲は、西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部・谷間で構成される。

2. 基本層序

I 层 黑褐色～暗褐色土（表土）	層厚 20 ~ 40 cm
II 層 黒色土（遺物包含層） 谷部で厚く堆積	層厚 0 ~ 150 cm
III 層 暗褐色土	層厚 0 ~ 60 cm
IV 層 褐色～黄褐色土（マサ上）最終遺構検出面	層厚 層厚不明

3. 調査概要

試掘は全て人力掘削で行った。調査範囲内に38カ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV層での検出作業を最終とした。

(1) 検出遺構 烧土遺構1基、竪穴状遺構1基、炭窯2基、古代廃溝場1カ所、縄文遺物包含層1カ所を検出した。谷部には縄文遺物包含層が50~80cm、古代以降の廃溝場が70~100cmの層厚で堆積している。地形的には「可能性あり②」の廃溝場と類似する。尾根部ではIV層で検出し、竪穴状遺構、焼土遺構、炭窯を確認した。焼土遺構周辺は硬質面が円形に広がることから、竪穴住居跡の可能性が高い。また、斜面部では炭窯1基を確認した。

(2) 出土遺物 縄文土器（中期～後期）小コンテナ1箱、陶磁器（近世以降）・鉄滓各9号袋1袋。

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうななねんどはくつちょうさはうこくしょ							
書名	平成17年度宮古調査報告書							
開書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第490集							
著者名	井上 雄・木田 寛							
編集機関	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下郷原第11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2006年3月27日							
ふりがな								
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
可能性あり①	岩手県宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上	03202 LG43-2353	39度36分06秒	141度56分04秒	2005.07.15 ~ 2005.11.29	530 m ²	道路整備事業	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
可能性あり①	集落跡 生産遺跡	縄文時代 古代 近世	竪穴状遺構 焼土遺構 廃溝場・遺物包含層	1基 1基 2基	縄文土器 鉄滓 近世陶磁器			
要約	宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地し、現況は畑地、山林である。西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部・谷間で構成される。既往品から人洋芋を「豊」できる立地条件にあり、集落の形成、中世山城に付属する見張り台程度の施設の存在も考慮する必要がある。試掘の結果、尾根部を中心とした縄文集落と古代以降の製鉄関連施設の検出が見込まれる。							

北緯度・東経度は世界測地系における数値である。

(10) 可能性あり②

所 在 地 宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上
遺跡番号 LG 43-2341

調査対象面積 4,780 m²
試掘調査面積 473 m²

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR 山田線磯鶴駅の南約 4.5 km に位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地している。現況は畑地、山林である。今回の試掘調査範囲は、西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部・谷部で構成される。

2. 基本層序

I 层	黒褐色～暗褐色土（表土）	層厚 20 ~ 40 cm
II 層	黑色土（遺物包含層）	層厚 0 ~ 150 cm
III 層	暗褐色土	層厚 0 ~ 60 cm
IV 層	褐色～黄褐色土（マサト）最終遺構検出面	層厚不明

3. 調査概要

試掘は全て人力掘削で行った。調査範囲内に 50 カ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV 層での検出作業を最終とした。

(1) 検出遺構 堪穴状遺構 1 基、製鉄炉 3 基、炭窯 2 基、古代廃滓場 2 カ所、縄文遺物包含層 2 カ所を検出した。谷部は縄文遺物包含層が 50 ~ 80 cm、その上部には古代以降の廃滓場が 80 ~ 100 cm の層厚で堆積している。北側の谷部のトレンチでは製鉄炉 3 基を確認し、鉄滓、羽口、縄文土器・石器、陶磁器が出土している。尾根・斜面部では堪穴状遺構 1 基、炭窯 2 基を確認している。また、沢を挟んで南側の谷部でも縄文土器（前期以降）・石器や大量の鉄滓が出土し、北側と同様に縄文遺物包含層と廃滓場が形成されている。

(2) 出土遺物 縄文土器（小コンテナ 1 箱）、縄文石器（9 号袋 2 袋）、陶磁器（9 号袋 1 袋）、鉄滓（大コンテナ 2 箱）、羽口（9 号袋 1 袋）。

報告書抄録

ふりがな 書名	平成 17 年度発掘調査報告書					
副書名						
巻次						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第 490 編					
編著者	林 駿・米田 寛					
施設・機関	（財）岩手県文化振興事業団蔵文化財センター					
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第 11 地割 185 番地 Tel. (019) 638-9001					
発行年月日	2009 年 3 月 27 日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積
可能性あり②	岩手県宮古市大字 金浜第3地割字妻ノ上	03202	LG43-2341	39 度 36 分 02 秒	141 度 56 分 08 秒	2005.07.15 ~ 2005.11.29
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
可能性あり②	集落跡 生産遺跡	縄文時代 古代 近世	堅穴状遺構 製鉄炉 炭窯	1 基 縄文土器・石器 3 基 羽口 2 基 鉄滓 廃滓場・遺物包含層		
要約	宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地し、現況は畑地、山林である。西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部・谷部で構成される。谷部には縄文時代遺物包含層と古代以降の廃滓場が 2 カ所形成されている。尾根部・斜面部では堅穴状遺構・炭窯を確認した。縄文集落の存在と、古代以降の製鉄関連施設の候虫が見込まれる。					

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

(11) 可能性あり③

所 在 地 宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上
遺跡番号 LG 43 - 2331

調査対象面積 3,050 m²
試掘調査面積 358 m²

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯駒駅の南約4.3kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地している。現況は山林である。今回の試掘調査範囲は、西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部で構成される。

2. 基本層序

I層 黒褐色～暗褐色土（表土）	層厚 20～40 cm
II層 黒色土	層厚 0～80 cm
III層 暗褐色土	層厚 0～40 cm
IV層 褐色～黄褐色土（マサ土）最終遺構検出面	層厚不明

3. 調査概要

試掘は全て人力掘削で行った。調査範囲内に29ヶ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV層での検出作業を最終とした。

(1) 検出遺構 今回の調査区では遺構を確認できなかった。

(2) 出土遺物 繩文土器2点が尾根部で出土した。いずれもIII層で出土したが、器面の摩滅が著しい。

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうななねんどはくくつちょうきほうこくしょ						
書名	平成17年度発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第490集						
編著者名	林 熊・米田 寛						
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	2006年3月27日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
可能性あり③	岩手県宮古市大字 金浜第3地割字妻ノ上	03202	LG43-2331	39度 36分 04秒	141度 56分 02秒	2005.07.15 ～ 2005.11.29	358 m ² 道路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
可能性あり③	散布地	縄文時代		縄文土器			
要約	宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地し、現況は山林である。西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部で構成される。遺構は確認されず、縄文土器2点のみ出土した。散布地と考えられる。						

北緯度・東経度は世界測地系における値である。

可能性あり①

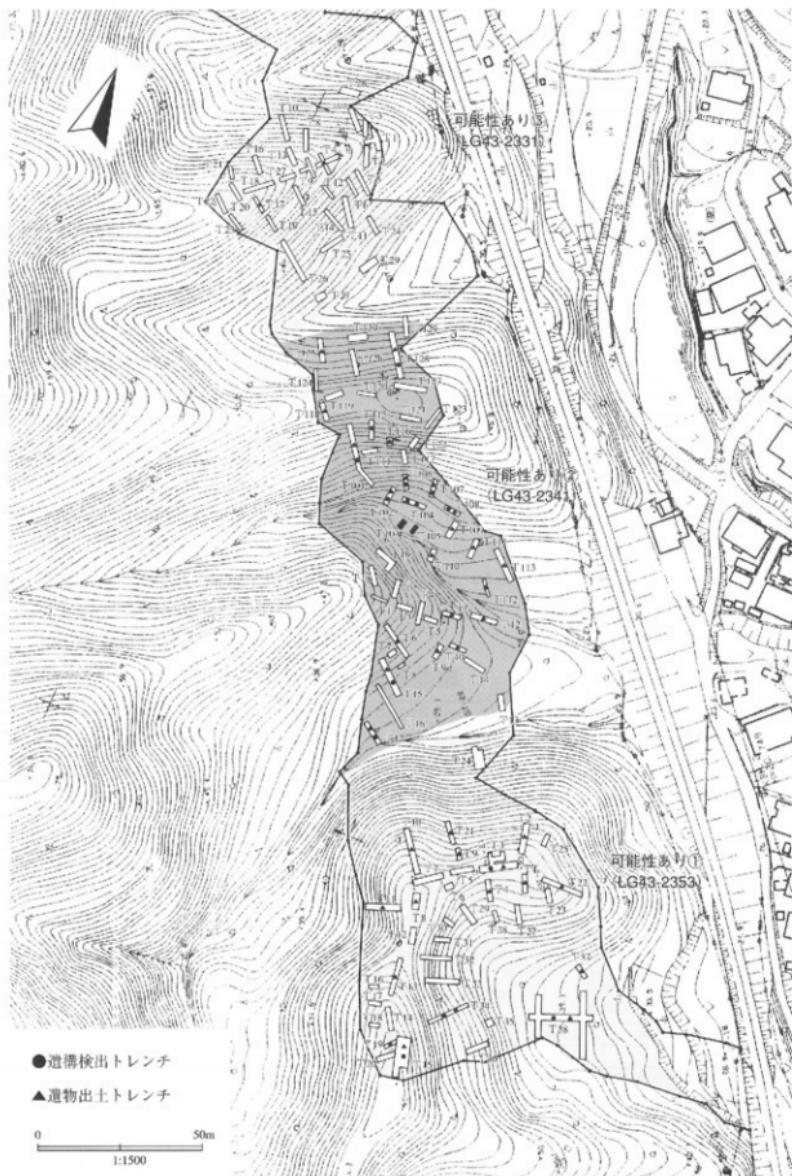
トレンチ	遺構	遺物
T 1		縄文土器
T 2		縄文土器
T 3	焼土遺構（住居の炉跡か？）1基、炭窯1基	縄文土器（後期）
T 4		縄文土器（後期）
T 8		縄文土器（後期？）
T 9		縄文土器
T 10		縄文土器
T 11		鉄滓
T 13		縄文土器
T 15	竪穴状遺構1基	縄文土器
T 19		縄文土器
T 21		縄文土器
T 22		縄文土器
T 34	炭窯1基	焼土
T 37		鉄製ナイフ（現代）
T 38	廐津場1基・遺物包含層1カ所	貝殻、近世陶磁器、鉄滓、縄文土器

可能性あり②

トレンチ	遺構	遺物
T 6		鉄滓
T 9		縄文土器（前期）、磨石、石核
T 10		縄文土器（前期）
T 11		現代磁器、貝殻
T 12		縄文土器（前期）、石器、濁片
T 15	縄文包含層	縄文土器（羽状縄文）、鉄滓
T 17	廐津場範囲	鉄滓、近世陶器
T 101	廐津場・縄文包含層	縄文土器（中～後期）、陶器
T 102	廐津場・縄文包含層	特殊磨石、鉄滓、縄文土器、木炭、現代磁器
T 103	廐津場・縄文包含層	鉄滓、縄文土器
T 104	製鉄炉3基	鉄滓、羽口多量、木炭、縄文土器、磨石
T 105	廐津場・縄文包含層	鉄滓、羽口多量、土師器、木炭、縄文土器
T 106	焼土	鉄滓多量
T 107	廐津場・縄文包含層	鉄滓、近世陶器
T 108	廐津場・縄文包含層	鉄滓（流出滓）
T 109		木炭、鉄滓、縄文土器、近世陶器
T 110		鉄滓、縄文土器、羽口、木炭
T 111		鉄滓、縄文土器
T 112		羽口、陶器、縄文土器
T 113		縄文土器、羽口、貝殻、鉄滓、近世陶器（18世紀）
T 115	竪穴状遺構1基	
T 116		鉄滓（複形鉄滓）
T 118		磨石、縄文土器
T 125		近世磁器
T 128	炭窯（方形プラン）1基	縄文土器

可能性あり③

トレンチ	遺構	遺物
T 4		縄文土器（後期以降）
T 17		縄文土器（後期以降）



第2図 可能性あり①~③トレンチ配置図

(12) 可能性あり④

所在地 宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上
遺跡番号 LG 43-2320

調査対象面積 2,140 m²
試掘調査面積 215 m²

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯鶴駅の南約4.3kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地している。現況は山林である。今回の試掘調査範囲は、西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部で構成される。

2. 基本層序

I層 黒褐色～暗褐色土（表土）	層厚 20～40 cm
II層 黒色土	層厚 0～80 cm
III層 暗褐色土	層厚 0～40 cm
IV層 褐色～黄褐色土（マサ土）最終遺構検出面	層厚不明

3. 調査概要

試掘は全て人力掘削で行った。調査範囲内に27ヵ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV層での検出作業を最終とした。

(1) 検出遺構 周溝1基。尾根から緩やかに続く斜面上に、張り出るような平場があり、約4×10mの広さであった。T7を設定し、IV層上面で周溝を確認した。トレンチの範囲内では弧状のプランを確認したが、円形になる可能性もある。溝幅は約80cmで、深さ30～80cmと一定でない。

(2) 出土遺物 なし

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうななねんどはつくちょうさはうこくしょ						
書名	平成17年度発掘調査報告書						
原書名							
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第490集						
編著者名	林 熊・米田 寛						
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-1083 岩手県盛岡市下飯田第11地割185番地 Tel.(019) 638-9001						
発行年月日	2006年3月27日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
可能性あり④	岩手県宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上	03202	LG43-2320	39度36分06秒	141度56分00秒	2005.07.15～2005.11.29	215 m ² 道路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
可能性あり④	周溝		1基		墓域か？		
要約	宮古に向かって北流する八木沢川東岸に立地し、現況は山林である。西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部で構成される。周溝1基のみ確認され、遺物は出土しなかった。西領の調査区外に集落形成に適した平場がある。遺跡周辺では宮古市長坂1遺跡、山田町房の沢IV遺跡で円形切溝によって区画された古墳が確認されており、検出した周溝が古墳の構成施設であれば本調査区は墓域の可能性がある。						

*緯度、経度は世界測地系における数値である。

(13) 可能性あり⑤

所在地 宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上
遺跡番号 L G 43 - 2310

調査対象面積 3,220 m²
試掘調査面積 310 m²

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯薙駅の南約4.2kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地している。現況は山林である。今回の試掘調査範囲は、西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部で構成される。

2. 基本層序

I層 黒褐色～暗褐色土（表土）	層厚 20～40 cm
II層 黒色土	層厚 0～80 cm
III層 暗褐色土	層厚 0～40 cm
IV層 褐色～黄褐色土（マサ土）最終遺構検出面	層厚不明

3. 調査概要

試掘は全て人力掘削で行った。調査範囲内に24ヵ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV層での検出作業を最終とした。集落の痕跡を示す遺構は確認できなかつた。

(1) 検出遺構 土坑1基、炭窯1基。いずれもIV層で検出した。炭窯（時期不明）は長方形プランで黒色土を埋土とする。

(2) 出土遺物 繩文土器（中期）4点、土師器1点、近世陶器1点。

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうななねんどはくつちょうさほこうくしょ						
書名	平成17年度発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第490集						
編著者名	林 熊・末田 寛						
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下條町第11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	2006年3月27日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	測定期間	測定面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
可能性あり⑤	岩手県宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上	03202	LG43-2310	39度36分08秒	141度55分58秒	2005.07.15～2005.11.29	310 m ² 道路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
可能性あり⑤	生糞遺跡	縄文時代	炭窯	1基	縄文土器		
可能性あり⑤	散布地	古代以降	土坑	1基	土師器		
要約	宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地し、現況は山林である。西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部、谷間に構成される。試掘の結果、縄文土器・土師器が尾根から出土しているが、集落の痕跡を示す遺構は確認できなかつた。測査区西側の事業用地外に比較的広い平場がある。居住活動の主体は今回の調査範囲よりも西側の平場にある可能性が高い。						

*緯度・経度は世界測地系における数値である。

(14) 賽の神遺跡

所在地 宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上
遺跡番号 LG 43-2209

調査対象面積 2,080 m²
確認調査面積 214 m²

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯鶴駅の南約4kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地している。現況は山林・畠地である。今回の確認調査範囲は、谷部と西部の山地から続く尾根部で構成される。

2. 基本層序

I層 黒褐色～暗褐色土（表土）	層厚 20～40 cm
II層 黒色土	層厚 0～120 cm
III層 暗褐色土	層厚 0～60 cm
IV層 褐色～黄褐色土（マサ土）最終遺構検出面	層厚不明

3. 調査概要

確認は全て人力掘削で行った。調査範囲内に20ヶ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV層での検出作業を最終とした。

II層から瀬戸・美濃産近世磁器（18世紀）が出土している。鉄滓の所属時期はこれまでの宮古市内発掘調査例を見る限り、地形的には古代の可能性が高い。尾根部は木材切り出し道路により削平された箇所があり、削平された土砂は尾根部先端にマウンド状に残されている（T14付近）。尾根部から南側斜面部にかけてマサ土の二次堆積層が2m近くあるが、尾根部全体の崩落によるか、人工的な平場造成の痕跡なのか判別できない。

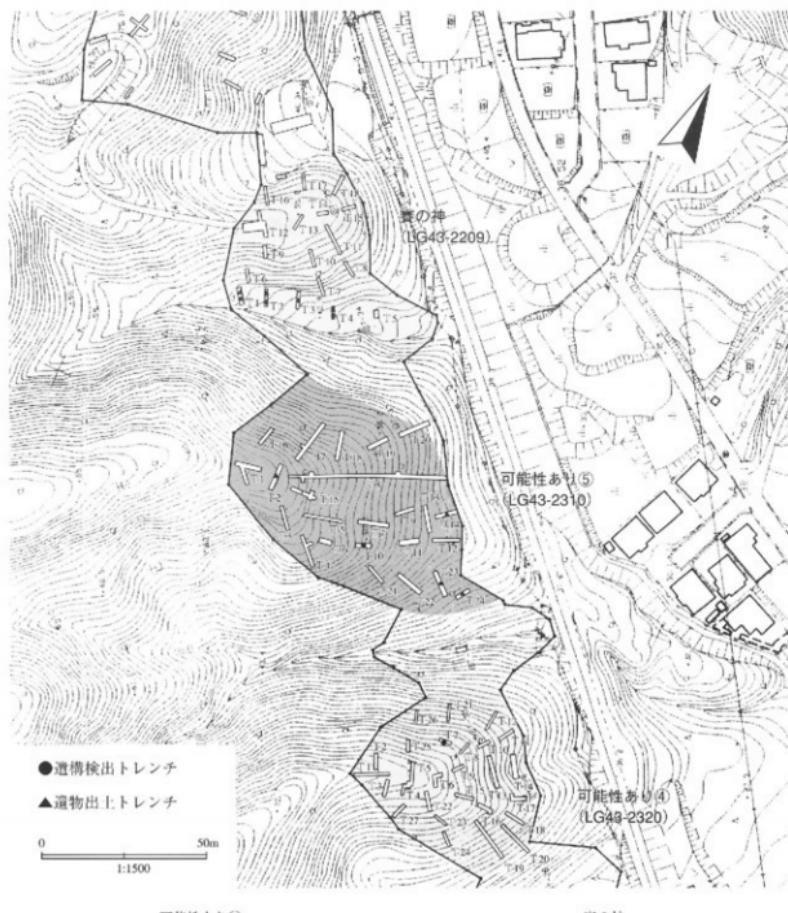
（1）検出遺構 遺物包含層1カ所。谷部はII・III層が厚く堆積し、II層上面で鉄滓、II層下部で縄文土器が出土した。谷部のII層は80～120cm堆積している。遺物包含層と認識できる。

（2）出土遺物 縄文土器3点、鉄滓1点、鉄釘1点、磁器1点。

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうななねんどはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成17年度発掘調査報告書							
図書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第490集							
編著者名	林 駿・米田 寛							
編集機関	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL(019) 638-9001							
発行年月日	2006年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
賽の神遺跡	岩手県宮古市大字 金浜第3地割字妻ノ上	03202	LG43-2209	39度 36分 10秒	141度 55分 55秒	2005.07.15 ～ 2005.11.29	214 m ²	道路整備事業
所取遺物名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
賽の神遺跡	集落跡？	縄文時代 古代以降 近世	遺物包含層	1カ所	縄文土器 鉄滓 近世磁器			
要約	宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地し、現況は灌地、山林である。西側の山地から続く尾根部と隣接する斜面部・谷部で構成される。谷部には縄文時代遺物包含層と古代以降の施設場所が2カ所形成されている。縄文集落の存在と、古代以降の製鉄関連施設の検出が見込まれる。							

※緯度・経度は世界測地系における数値である。



可能性あり④

トレンチ	遺構	遺物
T 7	掘溝（円形か？）	

可能性あり⑤

トレンチ	遺構	遺物
T 2	縄文土器	
T 10	上坑1基	
T 14	土師器	
T 15	灰窯1基（長方形）	
T 23	縄文土器（中期）	
T 24		近世陶器（18世紀）

トレンチ	遺構	遺物
T 1	遺物包含層範囲	縄文土器、鉄錠
T 2	遺物包含層範囲	縄文土器、鉄錠
T 3	遺物包含層範囲	
T 4	遺物包含層範囲	近世磁器（18世紀）

第3図 可能性あり④・⑤、賽の神遺跡トレンチ配置図

(15) 可能性あり⑥

所在地 宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上
遺跡番号 LG 43-2229

調査対象面積 4,890 m²
試掘調査面積 146 m²

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯鶴駅の南約4kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地している。現況は畠地、山林である。今回の試掘調査範囲は、東側を低地面（現況畠地）、西側を南部の山地から続く尾根部（現況山林）で構成される。

2. 基本層序

I 层 黑褐色～暗褐色土（表土）	層厚 20～40 cm
II 層 黒色土	層厚 0～20 cm
III 層 暗褐色土	層厚 0～20 cm
IV 層 褐色～黄褐色土（マサ土）最終遺構検出面	層厚不明

3. 調査概要

試掘は全て人力掘削で行った。調査範囲内に21ヵ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV層での検出作業を最終とした。

尾根部の一部分は木材切り出し道路によって地形改変をうけていることが判明した。南側の低地面は立ち木がなく、畠地として利用されており、T17・18・20・21を設定した。T20・T21から近代以降の丸釘、ガラス片が出土したが、それ以前の遺構・遺物は確認できなかった。

(1) 検出遺構 なし

(2) 出土遺物 なし

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうななねんどはくつちょうさはうこくしょ							
書名	平成17年度先挖掘在報告書							
著者名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第490集							
編著者名	林 熊・米田 寛							
編集機関	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 Tel.(019) 638-9001							
発行年月日	2006年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
可能性あり⑥	岩手県宮古市大字 金浜第3地割字妻ノ上	03202	LG43-2229	39度 36分 12秒	141度 55分 53秒	2005.07.15 ～ 2005.11.29	146 m ²	道路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
可能性あり⑥								
要約	宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地し、現況は山林である。西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部、谷間で構成される。試掘の結果、遺構・遺物は確認できなかった。							

*緯度・経度は世界測地系における数値である。

(16) 下大谷地 I 遺跡

所在 地 宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上
遺跡番号 L G 43 - 2208

調査対象面積 5,320 m²
試掘調査面積 156 m²

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯萬駅の南約4kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地している。現況は畑地、山林である。今回の確認調査範囲は、東側を低地面、西側を南部の山地から続く尾根部で構成される。旧登録名は可能性あり⑦である。

2. 基本層序

I層 黒褐色～暗褐色土（表土）	層厚 20 ~ 40 cm
II層 黒色土	層厚 0 ~ 20 cm
III層 暗褐色土	層厚 0 ~ 20 cm
IV層 褐色～黄褐色土（マサ土）最終遺構検出面	層厚不明

3. 調査概要

試掘は全て人力掘削で行った。調査範囲内に25ヵ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV層での検出作業を最終とした。

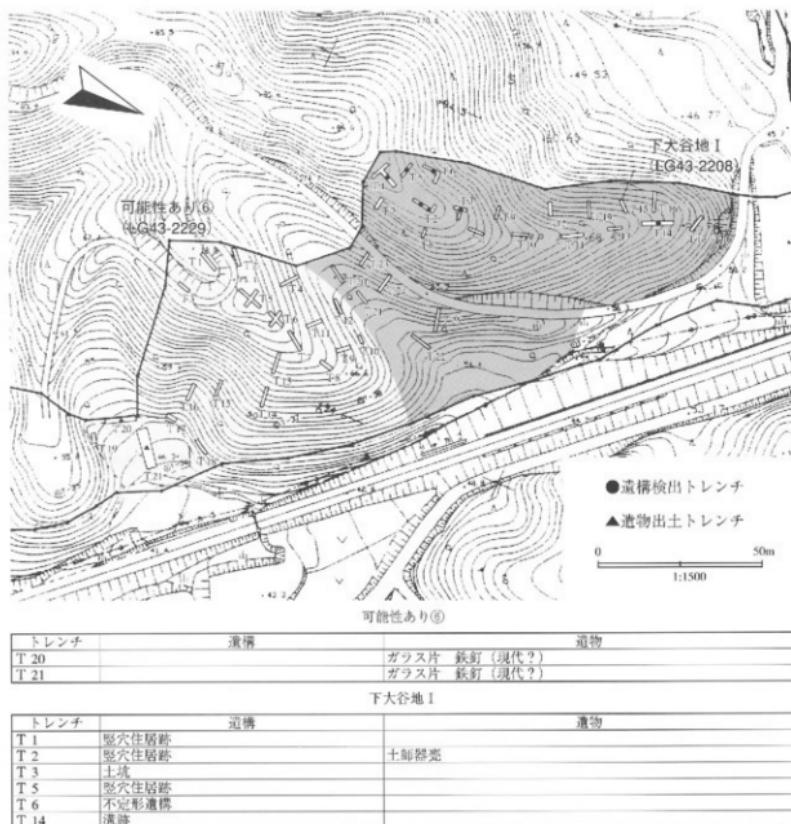
(1) 検出遺構 壁穴住居跡3棟、溝跡1条、土坑1基、不定形遺構1基。尾根部・斜面部で壁穴住居跡を確認した。T2ではカマド煙道部が確認でき、土師器が1点出土している。トレンチ幅の制約から全体形状を知ることはできないが、壁穴住居跡は一辺3~4mの正方形ないしは長方形プランと思われる。他に土坑、溝跡、不定形遺構をIV層で検出した。東側斜面については、尾根部すでに遺構が検出されたことから、尾根部に接する斜面上部についてはトレンチを設定していない。斜面下部と低地面にはT20~T25を設定したが、遺構・遺物を確認できなかった。

(2) 出土遺物 土師器1点が出土した。

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうななねんどはくつちょうさはうこくしょ				
書名	平成17年度発掘調査報告書				
題名					
著者					
シリーズ名	岩手県文化振興事業団堆蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第490集				
収集者名	林 熊・米田 審				
収集機関	(財)岩手県文化振興事業団堆蔵文化財センター				
所在地	〒020-0853 宮城県仙台市青葉区第11地割南185番地 Tel (019) 638-9001				
発行年月日	2006年3月27日				
ふりがな	ふりがな				
所収遺跡名	所在地				
下大谷地 I 遺跡	岩手県宮古市大字 金浜第3地割字妻ノ上				
遺跡番号	03202 LG43-2208				
種別	古代				
主な時代					
所取遺跡名	種別	主な時代	土な遺構	主な遺物	特記事項
下大谷地 I 遺跡	集落跡	古代	壁穴住居跡 溝跡 土坑	3棟 土師器 1条 1基	
要約	宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地し、現況は畑地、山林である。試掘調査範囲は、東側を低地面、西側を南部の山地から続く尾根部で構成される。斜面下部と下部は林道（木材切り出し道路）によって分かれられる。林道向は斜面が激しく、一部IV層が露出している。今回の試掘調査では、尾根部と斜面上部を中心で遺構・遺物が確認された。古代の集落跡である。				

※緯度・経度は世界測地系における数値である。



第4図 可能性あり⑥・下大谷地I遺跡トレンチ配置図



写真図版3 下大谷地I : T 2 検出竪穴住居跡



写真図版4 下大谷地I : T 14 検出溝跡

やぎさわ のらい
(17) 八木沢Ⅲ野来遺跡

所 在 地 宮古市人字八木沢第8地割字駒込
 遺跡番号 LG 43 - 1257

調査対象面積 12,220 m²
 確認調査面積 908 m²

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯鳴駅の南約3.5kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸に立地している。現況は水田、畑地、山林である。本遺跡は南部を低地面（現況水田・畑地）、北部を西部の山地から続く尾根部とその谷間（現況山林）で構成される。

2. 基本層序

I層 黒褐色～暗褐色土（表土）	層厚 20 ~ 40 cm
II層 黒色土	層厚 0 ~ 120 cm
III層 暗褐色土	層厚 0 ~ 20 cm
IV層 褐色～黄褐色土（マサ土）最終遺構検出面	層厚不明

3. 調査概要

確認は全て人力掘削で行った。調査範囲内に67カ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV層での検出作業を最終とした。

南部は低地部である。T1～T3で遺物が出土したため、調査範囲を南側に拡大したが、八木沢川による削平と再堆積を繰り返していた。ここで出土した遺物は磨耗が著しく、流れ込んだ可能性が高い。また、遺構は確認できなかった。

一方、北部では尾根部・斜面部・谷間でそれぞれ遺構を検出した。尾根部ではI層の下がIV層となる場合があるが、遺構・遺物は浅いところで地表から5~10cm下げた面で確認できた。堅穴状遺構、工房跡、土坑、溝跡、炭窯、遺物包含層を検出している。遺物包含層は範囲内の試掘トレンチT55～61から縄文前期（大木2式期）土器・石器が多量に出土している。また、T56・58からは円盤形土製品が出土した。

北部の尾根は緩やかな傾斜で谷部へと続き、尾根から谷間での最大比高差は10m未満である。集落の形成には最適な環境で、谷部の遺物包含層形成には、尾根部の堅穴状遺構との関連性が想定される。また、遺物包含層上部からは鉄滓が数点出土している。尾根部に位置するT45の工房跡から鉄滓が出土しており、立地的には谷間に廃滓場が形成されている可能性が高い。遺物包含層出土遺物は、捨て場でみられる一般的現象の「磨耗」や「土器片の小片化」が、沢に近い斜面部の遺物に多く観察されるものの、平坦な谷面出土遺物にはほとんど見られない。したがって、包含層内に堅穴住居跡を検出できる可能性もある。

(1) 検出遺構 堅穴状遺構9基、工房跡1カ所、溝跡2条、土坑3基、炭窯1基、縄文時代遺物包含層1カ所。

(2) 出土遺物 縄文土器（前期）大コンテナ1箱、陶磁器3点、縄文石器（前期）小コンテナ1箱、鉄滓11点、鉄釘1点、鉄片1点。

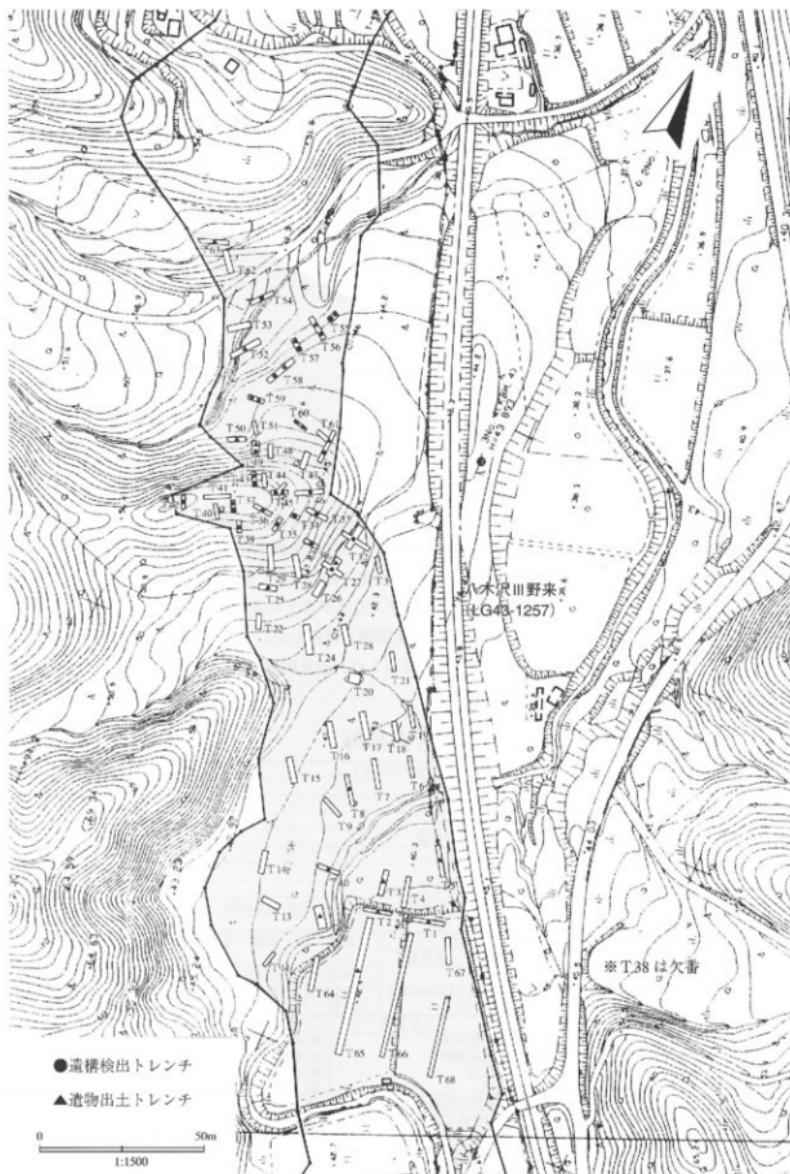
八木沢Ⅲ野来

トレンチ	遺構	遺物
T 1		縄文土器（大羽 A'）、陶器（18世紀肥前產）、鉄刃
T 2		縄文土器
T 3		縄文土器
T 5		縄文土器、鉄刃
T 8		鉄刃、鉄片（羅？）
T 10		縄文土器（十腰内 1）
T 12		鉄彈、鉄刃
T 25		縄文土器（大木 2）
T 27	溝跡	縄文土器（大木 2）
T 30	土坑	
T 32	炭窯	
T 33	土坑	
T 34	豎穴状遺構・土坑	
T 35	豎穴状遺構 2基	
T 36		縄文土器
T 37	豎穴状遺構	縄文土器
T 39	豎穴状遺構	
T 42	溝跡	
T 43	豎穴状遺構	縄文土器
T 45	工房跡	縄文土器（前期）、磨石、鉄片 12点
T 46	豎穴状遺構	
T 49	豎穴状遺構	縄文土器（前期）、鉄滓
T 50		縄文土器（前期）、鉄滓
T 52		縄文土器（前期）、剥片
T 54	豎穴状遺構	
T 55	包含層	縄文土器（大木 2）、剥片、鉄滓
T 56	包含層	縄文土器（大木 2）、円盤形土製品、石錐、石皿、石製品、鉄滓
T 57	包含層	縄文土器（大木 2）、尖頭器、剥片、鉄滓
T 58	包含層	縄文土器（大木 2）、石錐、石皿、陶器（18世紀瀬戸・美濃）、鉄滓
T 59	包含層	縄文土器（大木 2）
T 60	包含層	縄文土器（大木 2）
T 61	包含層	縄文土器（大木 2）、磨製石斧、磨石、剥片
T 63		縄文土器
T 65		縄文土器（前期）

報告書抄録

ふりがな	ひいせいじゅうなねんどはつくちょうきはうこくしょ							
書名	平成 17 年度発掘調査報告書							
調査名								
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 490 号							
著者名	林 勉・米田 章							
発行機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒 020-0853 岩手県盛岡市下熊町第 11 地割 185番地 電 (019) 638-9001							
発行年月日	2000 年 3 月 27 日							
ふりがな	ふりがな							
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
八木沢Ⅲ	岩手県宮古市大学	03202	LG43-1257	39 度 36 分 22 秒	141 度 55 分 43 秒	2005.07.15 2005.11.29	908 m ²	道路整備事業
野来遺跡	八木沢第 8 地削字込							
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
八木沢Ⅲ	縄文	縄文	豎穴状遺構	9 基	縄文土器（前期）			
野来遺跡	古代	古代	工房跡	1 棟	縄文石器			
	近世	近世	土坑	3 基	鉄滓			
			遺物包含層	1 カ所	陶磁器			
要約	宮古に向かって北流する八木沢川西岸に立地している。南部を低地帯（現況水田・畑地）、北部を西船の山地から続く尾根部とその谷間（現況山林）で構成される。南部の低地は八木沢川によって形成された河成段丘面で、地盤の削平と再堆積を繰り返している。北部は豎穴状遺構、工房跡が確認された縄文～古代の集落および製鉄関連遺跡である。							

※緯度・経度は世界測地系における数値である。



第5図 八木沢Ⅲ野来遺跡トレンチ配置図

や さ わ こ ま ご
(18) 八木沢駒込Ⅱ遺跡

所在 地 宮古市大字八木沢第8地割字駒込
 遺跡番号 L.G.43-1244

調査対象面積 14,370 m²
 確認調査面積 648 m²

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯崎駅の南約3.5kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸に立地している。現況は水田、畑地、山林である。本遺跡は西部の山地から連なる尾根部と八木沢川支流によって形成された低地面で構成される。

2. 基本層序

I層 黒褐色～暗褐色土（表土）	層厚 20 ~ 40 cm
II層 黒色土	層厚 0 ~ 80 cm
III層 暗褐色土	層厚 0 ~ 20 cm
IV層 褐色～黄褐色土（マサ土）最終遺構検出面	層厚不明

3. 調査概要

確認は全て人力掘削で行った。調査範囲内に87ヶ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV層での検出作業を最終とした。

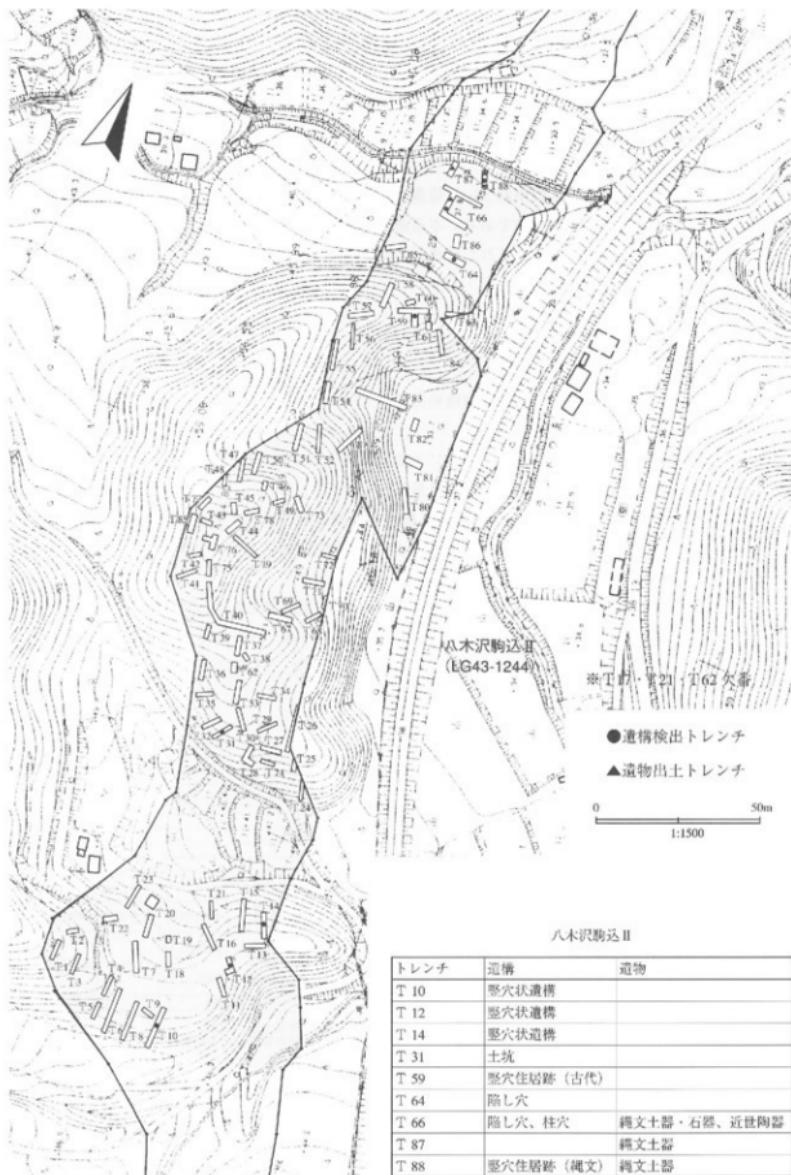
(1) 検出遺構 壁穴住居跡2棟（縄文1棟・古代1棟）、壁穴状遺構3基、土坑1基、陥し穴状遺構2基、柱穴3個。南側の尾根部で壁穴状遺構を確認し、中央の尾根部では土坑を確認した。焼土粒を伴う。北側の尾根部ではカマドを伴う古代の壁穴住居跡1棟をIII層で検出した。低地面では縄文時代と近世の遺構・遺物を確認した。埋土に十和田中源火山灰が含まれる楕円形の陥し穴状遺構のほか、溝状の陥し穴状遺構、柱穴、縄文時代前期の壁穴住居跡を確認した。

(2) 出土遺物 縄文土器（前期）9号袋1袋、敲石1点、近世陶器1点。

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうななねんどはつくつちょうさはうこくしょ
青名	平成17年度発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第490集
編著者名	林 熊・米田 寛
発行機関	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯田第11地割185番地 TEL (019) 638-9001
発行年月日	2006年3月27日
ふりがな	ふりがな
所収遺跡名	所在地
八木沢駒込Ⅱ遺跡	市町村 遺跡番号
八木沢駒込Ⅱ遺跡	03202 LG43-1244
八木沢第8地割字駒込	北緯 東経
	39度 141度
	36分 55分
	30秒 40秒
	2005.07.15 ~ 2005.11.29
所収遺跡名	調査期間
種別	調査面積
八木沢駒込Ⅱ遺跡	648 m ²
集落跡	調査原因
縄文	道路整備事業
古代	
近世	
要約	宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸に立地している。現況は水田、畑地、山林である。本遺跡は西側の山地から連なる尾根部と八木沢川支流によって形成された低地面で構成される。尾根部では壁穴住居跡や壁穴状遺構、低地で陥し穴が確認された。北側の低地面にはTo-euブロックが確認されている。縄文～古代の集落跡と考えられる。

幸緯度・経度は世界測地系における数値である。



第6図 八木沢駒込II遺跡トレンチ配置図

(19) 八木沢Ⅱ遺跡

所在地 宮古市大字八木沢第3地割字中村
遺跡番号 LG 43 - 0205

調査対象面積 30,600 m²
確認調査面積 1,088 m²

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線穂麿駅の南約3kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸に立地している。現況は水田、畑地、山林である。本遺跡は南部の山地から達なる尾根部・斜面部（現況山林）と八木沢川の支流によって形成された低地面（現況水田）からなる。

2. 基本層序

I層 黒褐色～暗褐色土（表土）	層厚 20 ~ 40 cm
II層 黒色土	層厚 0 ~ 100 cm
III層 暗褐色土	層厚 0 ~ 40 cm
IV層 褐色～黄褐色土（マサ土）最終遺構検出面	層厚不明

3. 調査概要

確認は全て人力掘削で行った。調査範囲内に165ヶ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV層での検出作業を最終とした。

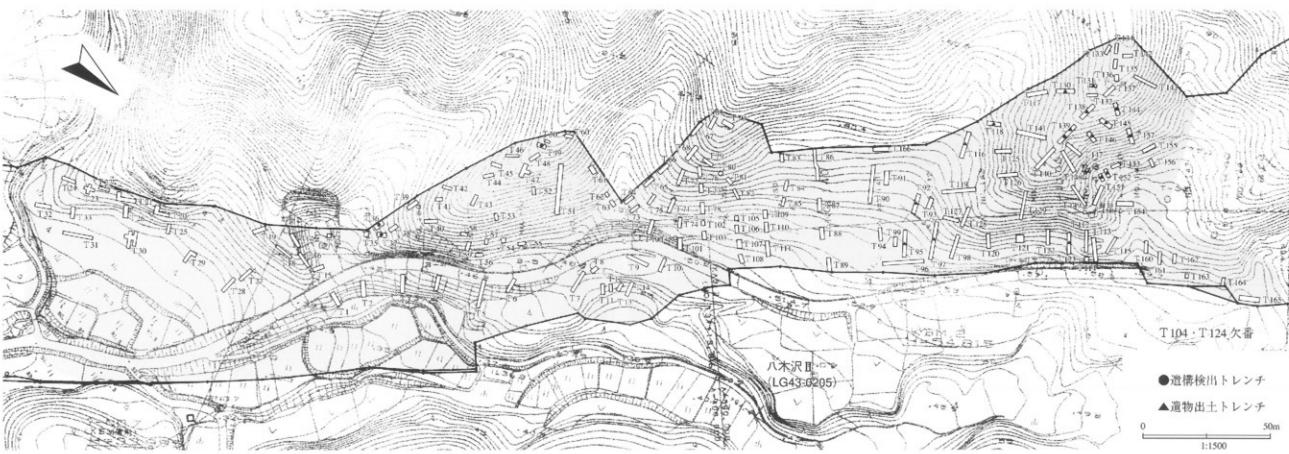
(1) 検出遺構 壑穴住居跡（縄文後期）2棟、竪穴状遺構4基、炭窯1基を検出した。T36で炭窯、T37で竪穴状遺構、T49で竪穴状遺構、T139で縄文時代壙穴住居跡、T144で竪穴状遺構、T157で竪穴状遺構を確認している。いずれもIV層検出。

(2) 出土遺物 縄文土器（9号袋2袋）、磨石1点、敲石1点、須恵器壺1点、近世陶器3点、鉄滓1点。T139では縄文土器・石器が多く出土している。T92・116・118・130・131・138・139・145・146・151・152から縄文土器・石器、T95から須恵器壺、T97から獸骨、T123から鉄滓が出土している。

報告書抄録

あたりがな	へいせいじゅうななねんどはつくつちょうさはうこくしょ							
登録名	平成17年度発掘調査報告書							
圖書名								
著者名								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第490集							
編著者名	林 翠・米田 實							
監修機関	（財）岩手県文化振興事業団蔵文化財センター							
所在地	〒020-0852 岩手県盛岡市下飯町第11地割185番地 Tel.(019) 638-9001							
査定年月日	2006年3月27日							
あたりがな								
所取遺跡名	所在施設	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
八木沢Ⅱ遺跡	岩手県宮古市大字八木沢第3地割字中村	03202	LG43-0205	39度36分43秒	141度55分49秒	2005.07.15 ~ 2005.11.29	1,088 m ²	道路整備事業
八木沢Ⅱ遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	記記事項			
	集落跡	縄文	壙穴住居跡	2棟	縄文土器・石器、			
		古代	竪穴状遺構	4基	須恵器壺、近世陶器、			
		近世	炭窯	1基	鉄滓			
要約	宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸に立地している。現況は水田、畑地、山林である。本遺跡は西部の山地から達なる尾根部と八木沢川支流によって形成された低地面で構成される。尾根部・斜面部を中心に濃霧、遺物が確認されており、縄文時代と古代以降の複合遺跡である。今朝の調査地南側の事業用地外に1万m以上との平塗が存在し、集落の形成に最適な環境である。縄文～古代の居住活動の痕跡は事業用地外へと広がるものと想定される。							

緯度・経度は世界測地系における数値である。



第7図 八木沢II遺跡トレンチ配置図



写真5 八木沢II:T139 棲出堅穴住居跡



写真6 八木沢II:T157 棲出堅穴状遺構



写真7 八木沢II:T36・37 棲出遺構



写真8 八木沢II:T95 出土須惠器碎片

八木沢II	
トレンチ	遺構
T 36	炭窯
T 37	堅穴状遺構
T 49	堅穴状遺構
T 92	縄文土器
T 95	須恵器部
T 97	破骨
T 116	縄文土器
T 118	縄文土器
T 123	鉄滓
T 130	縄文土器
T 131	縄文土器
T 138	縄文土器、剥片
T 139	堅穴住居跡 2 様 縄文土器（中期～後期）、敲石、磨石、炭化物
T 144	堅穴状遺構
T 145	縄文土器
T 146	縄文土器
T 151	縄文土器
T 152	縄文土器
T 157	堅穴状遺構

(20 ~ 23) 山の神遺跡ほか 3 遺跡

委託者	農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所	調査対象面積	107,380 m ²
事業名	国営いさわ南部農地整備事業	確認調査面積	10,992 m ²
発掘調査期間	平成 17 年 10 月 3 日～11 月 8 日	調査担当者	水上明博・丸山浩治・荒谷伸郎 菅野 梢



18 宮沢原下遺跡 19 山の神遺跡 20 岩洞堤遺跡 21 北丑軒遺跡 1:25,000 供養塚

遺跡の位置

山の神遺跡ほか3遺跡の確認調査に至る経過

国営いさわ南部農地整備事業実施地区は、岩手県の西南部に位置し、胆沢川から北上川にかけての扇状地の右辺部にあり、標高 110 ~ 210 m の段丘地形を呈している。この地形のなかに位置する「山の神遺跡」ほか3遺跡は、「国営いさわ南部農地整備事業」の施行に伴って、その事業地区に存することから分布調査を実施し、その結果、縄文時代の土器等が出土したことから確認調査を実施することとなったものである。

この地区的農業は、水田を主体とした経営により発展してきたものの、所有耕地が分散し区画形状は未整備もしくは昭和30年代に整備された10ha区画がほとんどで、かんがい用水不足に加え用排水路も未整備なことから農業の近代化が困難なまま生産性の低い農業経営を余儀なくされている。

このため、農用地の効率的利用と労働生産性の高い農業経営の展開が可能な生産基盤を形成するため、国営かんがい排水事業により基幹的な用排水施設を整備し、本事業では既耕地を再編整備する区画整理1,089haと地目変換による農地造成11haの地域を一括して施工し、併せて担い手への農地利用集積による経営規模の拡大と経営の合理化を図るとともに、土地利用の整序化を通じ農業の振興を基幹として本地域の活性化に資することを目的に、事業を進めてきた。

この地区的埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が平成8年度に分布調査を実施し、「上中沢I遺跡」ほか29遺跡と平成15年度に分布調査を実施し、新たに「山の神遺跡」ほか2遺跡が確認された。

その結果に基づいて岩手県教育委員会は東北農政局いさわ南部農地整備事業所に対し事業について照会した。回答を受けた岩手県教育委員会は東北農政局いさわ南部農地整備事業所と協議を行い、確認調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、岩手県教育委員会は平成17年度事業について平成17年1月14日付け教生第1447号により財団法人岩手県文化振興事業団へ通知した。

これを受けて財団法人岩手県文化振興事業団は、「山の神遺跡」ほか3遺跡について東北農政局いさわ南部農地整備事業所と委託契約を締結のうえ確認調査を実施することとなったものである。

(農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所)

みやざわはらした
(20) 宮沢原下遺跡

所 在 地	奥州市胆沢区若柳字宮沢原	遺跡番号・略号	N E 23 - 2347 M H S - 05
委 託 者	農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所	調査対象面積	27,200 m ²
事 業 名	国営いさわ南部農地整備事業	確認調査面積	3,667 m ²
発掘調査期間	平成 17 年 10 月 3 日 ~ 11 月 8 日	調査 担当者	水上明博・丸山浩治・荒谷伸郎

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR 東北本線陸中折居駅の西方約 10 km に位置し、胆沢扇状地の中央付近に東西に広がる畠段丘上に立地している。現況は水田、畑地、牧草地である。

2. 基本土層

I 层	10YR4/2 ~ 10YR3/2	黒褐~灰黄褐色土	
		層厚 15 ~ 20 cm	耕作土
II 层	Ⅲ層~VI層の混土	層厚 0 ~ 50 cm	盛土
Ⅲ層	10YR1.85/I ~ 10YR2.5/I	黒~黑褐色土	
		層厚 0 ~ 25 cm	遺構検出面
IV 层	10YR7/6	明黄褐色テフラ	
		層厚 0 ~ 5 cm	南部のⅢ層下位に堆積
V 层	10YR4/2	灰黄褐色土	
		層厚 0 ~ 10 cm	VI層の漸移層 遺構検出面
VI 层	10YR5/6	褐色土 層厚 15 cm 以上	地山層 遺構検出面



第1図基本土層柱状図

(S=1/100)

3. 調査の概要

今年度本調査（宮沢原下遺跡第1次調査）を実施した箇所の東側、周知の遺跡範囲と東側隣接地にあたる範囲に幅約 2.3 m、長さ 4 ~ 66 m のトレンチを 45 箇所設定し、遺構・遺物の有無を確認した。地形は北から南に下がっており、これに耕地造成時の地形変更が加わり段状（3段）を呈する。すなわち、T 1 ~ 11・33 ~ 45 が上段、T 12 ~ 21 が中段、T 22 ~ 32 が下段である。各トレンチとも南側ほど残存状態がよい。

（1）遺構

検出された遺構は、陥し穴状遺構 6 基、土坑 4 基である。陥し穴状遺構の形態には楕円形（4 基）と構形（2 基）があり、前者のうち 3 基の埋土で IV 層テフラの堆積を確認している（第1表参照）。

（2）遺物

T 31 の V 層中から旧石器の可能性がある頁岩製搔器（彫搔器？）1点（1）と赤色頁岩製剥片 1 点（2）が出土した。その他、I・II 層中から剥片 1 点、須恵器片 1 点、寛永通寶 1 枚（3）が出土している。

4. まとめ

遺構の大半は上段部分から検出された。同部分は今年度の本調査区と一連の地形上にあたり、検出遺構も同種であることから一連の遺構群と推定される。いっぽう、遺物（石器 2 点）は下段部分から出土したが、同付近には北東～南西方向の浅い沢状微地形が存在し、遺物はその北端落ち際付近に位置していた。よってそれより北側の高位部分に遺物集中の存在する可能性が残される。



第2図 トレンチ配置図

第1表 宮沢原下遺跡検出遺構規模表

トレンチ名	遺構種別	規模（長軸×短軸）cm	トレンチ名	遺構種別	規模（長軸×短軸）cm
T1	陥し穴状遺構	220×130	T8	陥し穴状遺構	190×100
T3	土坑	140×不明	T9	陥し穴状遺構	210以上×150
T4	陥し穴状遺構	195×45	T10	土坑	100以上×90以上
T5	土坑	165×不明	T18	土坑	180以上×不明
T7	陥し穴状遺構	200×130		陥し穴状遺構	325×45



T 1 全景（南から）



T 1 陥し穴状遺構（東から）



T 3 陥し穴状遺構（南から）



T 6 陥し穴状遺構（西から）



T 7 陥し穴状遺構（西から）

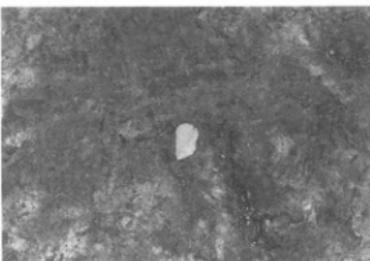


T 8 陥し穴状遺構（東から）

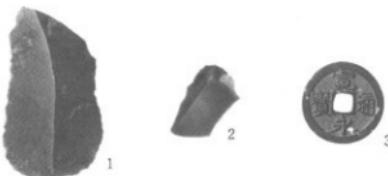
写真図版 1 検出遺構



T 18 質し穴状遺構



T 30 遺物出土状況



(遺物 N=27)

写真図版2 検出遺構、出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうななねんどはくつちょうさはうこくしょ						
書名	平成17年度発掘調査報告書						
調査名							
卷次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第490集						
編著者名	水上明博						
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地				TEL (019) 638-9001		
発行年月日	2006年3月27日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
みやびけいなし いさわ 宮沢原下遺跡	奥州市胆沢 区着佛字宮 沢原	03215	NE23-2347	39度 06分 55秒	141度 00分 49秒 2005.10.03 ~ 2005.11.08	3.667 m ²	国営いさわ南部農 地整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
宮沢原下遺跡	狩猟場 散布地	旧石器時代 縄文時代 平安時代	陥し穴状遺構6基 土坑4基	搔器1点、剥片2点 須恵器片1点 寛永通寶1枚			
要約	国営いさわ南部農地整備事業に係る確認調査である。						

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

(21) 山の神遺跡

所 在 地	奥州市胆沢区若柳字山の神	遺跡番号・路号	N E 24 - 2137 Y K - 05
委 託 者	農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所	調査対象面積	44,900 m ²
事 業 名	国営いさわ南部農地整備事業	確認調査面積	4,724 m ²
発掘調査期間	平成 17 年 10 月 3 日 ~ 11 月 8 日	調査担当者	丸山浩治・荒谷伸郎

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR 東北本線陸中折居駅の西方約 8 km に位置し、胆沢扇状地の中央付近に東西に広がる堀切段丘上に立地している。現況は水田、畑地、牧草地、山林である。

2. 基本土層

I 层	10YR4/2 ~ 10YR3/2 黑褐~灰黄褐色土	
	層厚 15 ~ 20 cm	耕作土
II 層	III 层 ~ VI 层の混土	層厚 0 ~ 50 cm 盛土
III 层	10YR1.7/1 ~ 10YR2/1 黒色土	
	層厚 0 ~ 40 cm	
IV 层	10YR7/6 明黄褐色テフラ	
	層厚 0 ~ 5 cm	一部地点の III 层下位に堆積
V 层	10YR4/2 灰黄褐色土	
	層厚 0 ~ 10 cm	VI 层の漸移層 遺構検出面
VI 层	10YR5/6 褐色土 層厚 15 cm 以上	地山層 遺構検出面



第1図 基本土層柱状図
(S-1/30)

3. 調査の概要

事業区域内に含まれる周知の遺跡範囲内に幅約 2.3 m、長さ 7 ~ 82 m のトレーナーを 59 箇所設定し、遺構・遺物の有無を確認した。地形は北東方向に下がっており、調査区南部には東西方向に小規模な段丘崖が走る。その北側には用水路が存在するが、これに沿うように旧沢跡が確認された。さらに、調査区外北側には大規模な段丘崖が存在する。

(1) 遺構

検出された遺構は、陥し穴状遺構 7 基、土坑 2 基である。前者の形態はすべて溝形で、埋土中に IV 层テフラの堆積は確認されなかった（第 1 表参照）。

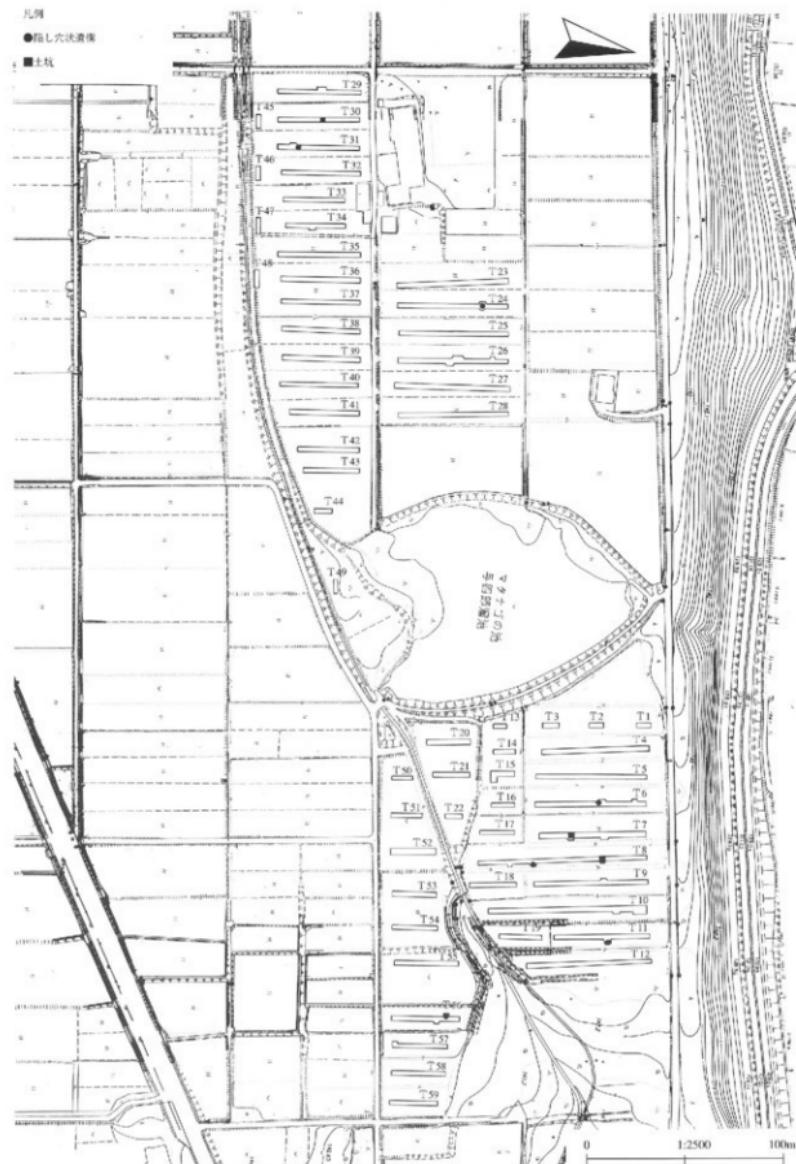
(2) 遺物

出土していない。

(4) まとめ

遺構検出地点にまとまりは見られず、散在する状態が看取された。すなわち、旧沢跡と小規模な段丘崖を挟んだ高位面（南側）、低位面（北側）の両面に陥し穴状遺構が点々と存在するようである。

本遺跡においても明黄褐色テフラの堆積が確認されたが、これは旧沢跡内堆積土等に見られるのみで、遺構埋土中には確認されていない。



第2図 トレンチ配置図

第1表 山の神遺跡検出遺構規模表

トレンチ名	遺構種別	規模（長軸×短軸）cm	トレンチ名	遺構種別	規模（長軸×短軸）cm
T6	陥し穴状遺構	220×95	T24	陥し穴状遺構	300×135
T7	土坑	120×65	T30	陥し穴状遺構	265×75
T8	陥し穴状遺構	220以上×45	T31	陥し穴状遺構	260×70
	土坑	150×80	T56	陥し穴状遺構	230以上×45
T11	陥し穴状遺構	255×110			



T 6 陥し穴状遺構（東から）



T 8 陥し穴状遺構（西から）



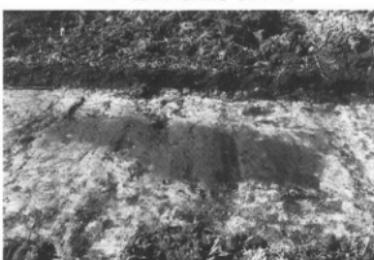
T 8 土坑（西から）



T 11 陥し穴状遺構（南から）

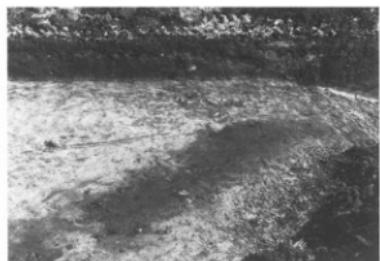


T 24 陥し穴状遺構（東から）

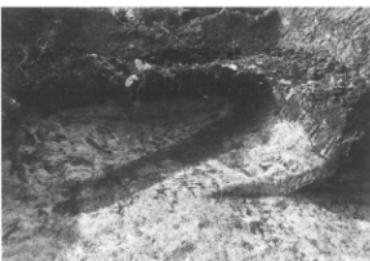


T 30 陥し穴状遺構（東から）

写真図版1 検出遺構（1）



T 31 陥し穴状遺構（西から）



T 56 陥し穴状遺構（東から）

写真図版 2 検出遺構

報 告 書 抄 錄

ふりがな	へいせいじゅうななねんどはくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成 17 年度発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 490 集						
編著者名	水上明博						
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒 020 - 0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 菅地				TEL (019) 638 - 9001		
発行年月日	2006 年 3 月 27 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号	***	***		
山の神遺跡	美神市祖沢区若槻字山の神	03215	NE24 - 2137	39 度 06 分 58 秒	141 度 02 分 04 秒	2005.10.03 ~ 2005.11.08	4,724 m ² 国営いざわ南部農地整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
山の神遺跡	散布地 狩猟場	縄文時代 平安時代	陥し穴状遺構 7 基 土坑 2 基				
要約	国営いざわ南部農地整備事業に係る確認調査である。						

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

がんどうづみ
(22) 岩洞堤 遺跡

所 在 地	奥州市胆沢区小山字岩洞沢	遺跡番号・略号	N E 34 - 1263 G D Z - 05
委 託 者	農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所	調査対象面積	15,300 m ²
事 業 名	国営いさわ南部農地整備事業	確認調査面積	1,155 m ²
発掘調査期間	平成 17 年 10 月 3 日 ~ 11 月 8 日	調査 担当者	丸山浩治・荒谷伸郎

1 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR 東北本線陸中折居駅の西方約 7.5 km に位置し、胆沢扇状地の北西~南東方向に広がる横道丘上に立地している。現況は水田、畑地、牧草地、山林である。

2 基本土層

I 層 10YR3/2 ~ 10YR4/2 黒褐色~灰黃褐色土

層厚 15 ~ 25 cm 耕作土

II 層 III 層 ~ VI 層の混土 層厚 0 ~ 80 cm 盛土

III 層 10YR3/1 黒褐色土

層厚 0 ~ 20 cm

IV 層 10YR4/2 灰黃褐色土

層厚 0 ~ 10 cm V 層の漸移層 遺構検出面

V 層 10YR5/6 褐色土 層厚 15 cm 以上 地山層 遺構検出面

VI 層 10YR5/6 褐色土 層厚不明 軽石混入

なお、本遺跡では明黄褐色テフラの堆積は確認されていない。

3 調査の概要

事業区域内に含まれる周知の遺跡範囲内に幅約 2.3 m、長さ 5 ~ 42 m のトレンチを 23 箇所設定し、遺構・遺物の有無を確認した。地形は南西から北東に下がっており、調査区北部には大規模な段丘崖が存在する。山林以外は耕作造成時の地形変更によって段状を呈しており、各トレンチとも南側ほど残存状態が良い。とくに T 18・19 は、北側の段丘崖を埋め立てて平坦化するために南半が大規模に削平されている。

(1) 遺構

検出された遺構は、陥し穴状遺構 4 基、土坑 1 基である。前者の形態はすべて溝形で、埋土中に明黄褐色テフラの堆積は確認されなかった(第 1 表参照)。

(2) 遺物

T 8・9 の II 層最下位で旧石器の可能性がある石刃状剥片 1 点(1)、T 22 の IV 層中で縄文土器 1 片(4)と剥片 2 点(2, 3)、T 23 の I 層中で縄文土器 10 片程度(5, 6)が出土した。

4 まとめ

遺構は、高位部分となる調査範囲南西部で検出された。同付近は段丘北縁にあたり、以南はしばらくの間平坦面が続く。よって、この段丘縁に沿った東西のラインおよびこれ以南にはさらなる遺構・遺物の埋蔵が想定される。



第 1 図 基本土層柱状図

(S-1/30)



第2図 トレンチ配置図

第1表 岩洞堤遺跡検出遺構規模表

トレンチ名	遺構種別	規模（長軸×短軸）cm	トレンチ名	遺構種別	規模（長軸×短軸）cm
T 3	陥し穴状遺構	150以上×85	T 8・9	陥し穴状遺構	270×50
T 6	陥し穴状遺構 土坑	170以上×65 110以上×不明	T 13	陥し穴状遺構	315×105



T 1 東端北壁断面（南から）



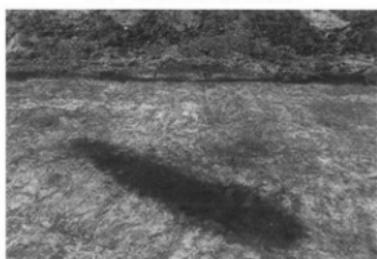
T 4 東端北壁断面（南から）



T 3 陥し穴状遺構（南から）



T 6 陥し穴状遺構（左）土坑（右）（南から）

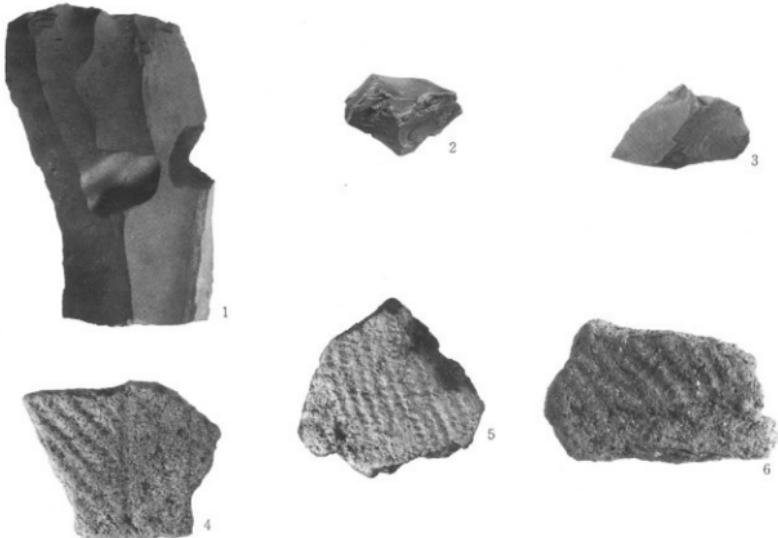


T 8・9 陥し穴状遺構（南から）



T 13 陥し穴状遺構（南から）

写真図版 1 検出遺構



(S=20)

写真図版2 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうななねんどはくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成17年度発掘調査報告書							
調査名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第490集							
編著者名	水上明博							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2006年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	。	。	。	。	
岩洞堤遺跡	岩手県胆沢 区小山字岩 洞堤	03215	NE34-1263	39度 05分 43秒	141度 02分 24秒	2005.10.03 ~ 2005.11.08	1,155m ²	国営いさわ南部農地整備事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	主な遺物	特記事項			
岩洞堤遺跡	狩猟場 散布地	旧石器時代 縄文時代	陥穴状遺構4基 土坑1基	石刃状剥片 剥片 縄文土器約	1点 2点 10点			
要約	国営いさわ南部農地整備事業に係る確認調査である。							

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

きたうしころばし
(23) 北丑転遺跡

所 在 地	奥州市胆沢区若柳字北丑転	遺跡番号・略号	N E 24 - 2089 K U K - 05
委 託 者	農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所	調査対象面積	19,980 m ²
事 業 名	国営いさわ南部農地整備事業	確認調査面積	1,446 m ²
発掘調査期間	平成 17 年 10 月 3 日 ~ 11 月 8 日	調査担当者	水上明博・菅野 桃

1 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR 東北本線陸中折居駅の西方約 10 km に位置し、胆沢扇状地の北西～南東方向に広がる堀切段丘上に立地している。現況は水田、畑地、牧草地、山林である。

2 基本土層

I 層	10YR3/2 ~ 10YR4/2	黒褐色～灰黄褐色土	
		層厚 25 cm	耕作土
II 層	III 層～VI 層の混土	層厚 0 ~ 80 cm	盛土
III 層	10YR3/1	黒褐色土	
		層厚 0 ~ 25 cm	
IV 層	10YR4/2	灰黄褐色土	
		層厚 0 ~ 10 cm	V 層の漸移層 遺構検出面
V 层	10YR5/6	褐色土 層厚 15 cm 以上	地山層 遺構検出面
VI 层	10YR5/6	褐色土 層厚不明	軽石混入

なお、本遺跡では明黄褐色テフラの堆積は確認されていない。

3 調査の概要

事業区域内に含まれる周知の遺跡範囲内に幅約 2.3 m、長さ 5 ~ 56 m のトレーナーを 37 箇所設定し、遺構・遺物の有無を確認した。地形は北東に向かって下がっており、T 12 ~ 14 の中央付近以北に小規模な段丘崖が存在する。これに耕地造成時の地形改変が加わり、上（南）・下（北）段丘面とも南北側の削平度合いが大きく、残存状態が悪い。このほか、調査区南側（T 1 ~ 15 の南端）では東西南向の浅い沢状微地形の一部が確認されており、IV ~ V 層が停滞性の水成堆積の様相を呈する。

(1) 遺構

いずれのトレーナーからも遺構は検出されなかった。

(2) 遺物

いずれのトレーナーからも遺物は検出されなかった。

4 まとめ

今回の調査範囲内では、設定したいずれのトレーナーからも遺構・遺物とも検出されなかった。ただし、地形から推定される、遺構が構築される可能性の高い地点は地形改変によってすでに消失していると考えられ、元々存在しなかったとの断定はできない。とくに、調査範囲外南北に関しては遺構・遺物ともに埋蔵されていても何ら不思議ではない。

なお、北丑転遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。



第1図 基本土層柱状図

(S=1/20)



第2図 トレンチ配置図

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうななねんどはくつちょうさほうこくしょ						
書名	平成17年度発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第490集						
編著者名	水上明博						
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地				TEL (019) 638-9001		
発行年月日	2006年3月27日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所在地	市町村	道路番号					
北 丘 転 道 駅	奥州市胆沢 区若柳字北 丘転	03215	NE24-2089	39度 06分 48秒	141度 01分 39秒 2005.10.03 ~ 2005.11.08	1,446 m ²	国営いさわ南部 農地整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
北丘転道跡	散布地				今回の調査範囲からは、遺構、遺物とも確認されなかった。		
要約	国営いさわ南部農地整備事業に係る確認調査である。						

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

III 発掘調査概報

1 国関係

のなか
(24) 野中遺跡

所 在 地	二戸郡一戸町小鳥谷字野中 117-3 ほか	遺跡番号・略号	J F 30 - 1033 · N N - 05
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	1,685 m ²
事 業 名	国道4号小鳥谷バイパス建設事業	発掘調査面積	1,685 m ²
発掘調査期間	平成17年9月1日～9月29日	調査 担当者	荒谷伸郎・丸山浩治

遺跡の立地

遺跡はいわて銀河鉄道小鳥谷駅の北北西約800mに所在する。東側を北流する馬渕川ならびに平穂川により形成された南北方向に延びる自然堤防上に位置し、これより西側は後背湿地となる。標高は174m前後で、現況は水田、宅地等である。

調査の概要

検出された遺構は、竪穴状遺構1基、土坑38基、柱穴状土坑242個である。宅地造成等により削平が進み、調査区西側の一部を除く大半が表土直下において最終検出面が露出する状態であった。よって検出面からの遺構構築年代推定は不可能で、遺物出土もほとんどないため帰属時期の不明な遺構が多い。土坑の一部には寛永通宝の出土したものがあり、近世の構築と考えられる。

出土遺物は、縄文土器（前期初頭・晚期）、石核、剥片、土師器、古銭で、総量は大コンテナ1箱分である。



航空写真（下が東）

(25) 野里上遺跡

所 在 地	二戸郡一戸町小鳥谷字穴久保 90-2 ほか	遺跡番号・略号	J F 30 - 1081・N Z K - 05
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	10,000 m ²
事 業 名	国道4号小鳥谷バイパス建設事業	発掘調査面積	12,230 m ²
発掘調査期間	平成17年4月14日～8月31日	調査担当者	丸山浩治・荒谷伸郎・村木 敬 藤原大輔

遺跡の立地

遺跡はいわて銀河鉄道小鳥谷駅の北西約500mに所在し、西側から延びる丘陵裾部の東向き緩斜面上に立地する。東側には平穂川が北流する。標高は177～185mで、現況は水田・宅地等である。

調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡2棟、土坑9基、焼土遺構・炭化物集中16基、溝跡16条、畠状遺構6区画、柱穴状土坑28個、近世墓1基で、このほか植物遺体残存層が約3,000m²確認された。遺構構築時期の推定にあたっては、遺構内出土遺物から検討が可能であった竪穴住居跡および一部土坑を除き、極めて遺物量が少ないとから検出層位および介在する十和田aテフラ層から判断している。時期は縄文時代から近世までと幅広い。

竪穴住居跡は、奈良時代のものと推定される。1棟は1辺8m超の大形住居で、埋土内に同テフラが成層堆積していた。床面からは間仕切り溝が検出されている。

掘立柱建物跡は古代およびそれ以降の構築で、1棟は同テフラ層を掘り込む。このうちの柱穴1基から柱材が検出され、現在放射性炭素年代測定中である。

焼土遺構・炭化物集中、畠状遺構、柱穴状土坑はすべて同テフラ層上位で検出したもので、この降灰以後の構築である。とくに焼土遺構・炭化物集中の構築は同テフラ降下直後と推定され、後者からは獸骨片が多量に出土した。

土坑、溝跡は同テフラ層の上下で検出されている。土坑は検出層位が多様で、1基は出土遺物からも縄文時代の構築と推定される。溝跡は同テフラ直下層で1条検出されており、ほかはすべてテフラを掘り込む。

出土遺物は、縄文土器（前～晚期）、石器、土師器、鉄製品（刀子など）、木製品（柱材など）、墓副葬品の漆塗り椀、曲げ物、櫛、古錢などで、総量は大コンテナ約7箱分に相当する。



竪穴住居跡



畠状遺構

の ざとかみ
(26) 野里上Ⅱ遺跡

所 在 地	二戸郡一戸町小鳥谷字野里上 63 ほか	遺跡番号・略号	J F 30 - 2021・N Z K II - 05
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	6,365 m ²
事 業 名	国道4号小鳥谷バイパス建設事業	発掘調査面積	6,365 m ²
発掘調査期間	平成17年4月14日～7月14日	調査 担 当 者	村木 敏・藤原大輔 木戸口俊子

遺跡の立地

遺跡は、いわて銀河鉄道小鳥谷駅より南西約1kmに位置し、北流する平棟川によって形成された標高180～200mの河岸段丘上に立地する。中屋敷上遺跡は120m南側にある。現況は畠地である。

調査の概要

調査区は、南側と北側に大きく分かれており、南側は丘陵部の緩斜面、北側は南側より一段低い河岸段丘上の平坦部にある。

検出された遺構は竪穴住居跡4棟、竪穴建物跡2棟、埋設土器1基、焼土遺構3基、土坑20基、柱穴28個、包含層1箇所である。遺物は縄文土器と石器が大コンテナ8箱分出土した。

竪穴住居跡はすべて縄文時代に属している。調査区南側では中期末から後期初頭のものが2棟、調査区北側では晩期のものが2棟確認されており、時期によって標高の異なる段丘を選択し集落を形成していたことが窺えた。竪穴建物跡は出土遺物が認められなかったものの、周辺の遺跡の成果から中世に属するものと思われる。



航空写真（直上）

なかやしきうえ
(27) 中屋敷上遺跡

所 在 地	二戸郡一戸町小鳥谷字中屋敷上 24-2 ほか	遺跡番号・略号	J F 30-2040・N Y U-05
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	360 m ²
事 業 名	国道4号小鳥谷バイパス建設事業	発掘調査面積	360 m ²
発掘調査期間	平成17年7月15日～7月28日	調査担当者	村木 敬・藤原大輔

遺跡の立地

遺跡は、いわて銀河鉄道小鳥谷駅より南西0.7kmに位置し、北流する平鍊川によって形成された標高210mの河岸段丘、東向きの緩斜面上に立地する。野里上II遺跡の120m北側にある。現況は荒蕪地である。

調査の概要

今回の調査では遺構は検出されなかった。調査区南西から北東方向に旧河道1条が延びており、その河道の両脇に風倒木が複数基確認された。

遺物はII層中から土器が中コンテナ1箱出土している。遺物の所属時期は縄文時代晚期のものである。



航空写真（直上）

(28) 飯岡才川遺跡 第7次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田2地割字才川46-1ほか 遺跡番号・略号 LE 16-2291・ISW-05-07
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所 調査対象面積 6,550 m²
 事 業 名 一般国道46号盛岡西バイパス建設事業 発掘調査面積 6,550 m²
 発掘調査期間 平成17年8月19日～10月31日 調査担当者 村田 淳・戸根貴之・村木 敬
 藤原大輔

遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅の南方約2kmに位置する。半石川右岸の河岸段丘上に立地する遺跡であり、既往の調査で縄文時代の陥し穴状遺構、奈良・平安時代の堅穴住居跡・掘立柱建物跡などが検出されている。今次調査区の検出面標高は123m前後で、調査前の現況は宅地及び畠地であった。

調査の概要

今次調査区は、遺跡範囲のほぼ中央部に位置する。地形変が著しくほぼ全域で表土直下が地山検出面となっていたが、遺構の遺存状況は比較的良好で、堅穴住居跡7棟、古墳・円形周溝8基、土坑14基、陥し穴状遺構2基、溝跡11条、ピット65個、井戸跡1基、性格不明遺構1基を検出した。なお、調査区の中央には東西に走る旧河道が1条検出されており、遺構の大半は旧河道より北側で検出されている。全体的な傾向として、円形周溝は等間隔に配置されており、その隙間を埋めるように堅穴住居跡が密集して検出されている。堅穴住居跡は遺存状態が良好で、土師器を中心に平安時代の遺物が出土している。一方、古墳・円形周溝は出土遺物から奈良～平安時代初めの遺構と考えられるが、削平が著しく墳丘及び埋葬施設が残るものは皆無であった。この他に検出された遺構については時期不明なものが多いが、出土遺物からピットの一端と井戸跡は近世に属する遺構と考えられる。この他にも平面形が長方形で、墓と考えられる土坑や焼土や土器を捨てた廐棄土坑などを検出している。

遺物は土師器・須恵器が大コンテナ約4箱のほか、鉄製品（刀子・鉄鎌など）、石製品（砥石・石帯）、剥片、近世陶磁器、錢貨、木製梳が出土している。ほとんどが遺構内から出土しており、遺跡・遺構の形成時期を推定するうえで良好な資料である。なかでも腰帶具と考えられる石帯は、岩手県内では10遺跡ほどしか出土しておらず、とくに鉈尾と呼ばれる部位で、かつ瑪瑙製の石帯は、東北地方において極めて出土例の少ない遺物として注目される。



円形周溝



石帯出土状況

(29) 宮沢原下遺跡 第1次調査
みやざわはらした

所 在 地 奥州市胆沢区若柳字宮沢原地内
 委 託 者 農林水産省東北農政局
 いさわ南部農地整備事業所
 事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業
 発掘調査期間 平成 17 年 4 月 13 日～8 月 31 日

遺跡番号・略号 N E 23 - 2347 · M H S - 05
 調査対象面積 24,000 m²
 発掘調査面積 58,700 m²
 調査担当者 戸根貴之・村田 淳・林 烈
 米田 寛・千葉正彦・丸山直美
 村上 拓・菅野 梢

遺跡の立地

本遺跡は奥州市の西部、JR 東北本線水沢駅の西南西約 15 km に位置し、胆沢扇状地に形成された堀切段丘の縁辺部に立地する。標高は約 183 m 前後を測り、調査前の現況は水田及び畑地である。

調査の概要

今回の調査では陥し穴状遺構 208 基、焼土集中区 1 ヶ所、性格不明遺構 2 基を確認した。陥し穴状遺構は、平面形態が楕円形のもの、溝状のもの、円形のものという 3 種類に大別できる。

楕円形の陥し穴状遺構では、埋土中に灰白色火山灰を含むことが多い。岩手県内における過去の調査では、埋土の中～上位で灰白色火山灰を確認することが多かったが、今回、底面付近でも灰白色火山灰の存在を確認した。分析の結果、西暦 915 年前後に降下したとみられる十和田 a 火山灰由来のものであることが判明した。灰白色火山灰層よりも下位の埋土中で確認された炭化物の放射性炭素年代測定の結果とも整合することから、縄文時代晚期から平安時代までの間と考えられてきた楕円形の陥し穴状遺構の年代について、平安時代には開口していたものが存在することが明らかになった。

溝状の陥し穴状遺構は調査区西側で比較的まとまって見つかっているが、中央部から東側でも散発的だが見つかっている。所属時期については、今までの研究成果等から、縄文時代中期頃と考えられる。

円形の陥し穴状遺構には、底面中央付近に杭状の穴のあるものとないものがあり、杭状の穴のあるものが比較的多い。杭状の穴のないものについては他の用途の可能性はあるものの、遺構の配置等から、陥し穴として使用した可能性が高い。所属時期については、今までの研究成果から縄文時代前期頃と考えられる。

広大な面積の調査であったにも関わらず、陥し穴状遺構を中心とするという遺跡の性格上、遺物は、縄文土器（前・後・晚期）や土師器の細片、石窓、石礎等の石器が僅かに出土したのみである。



調査区全景（東から）



陥し穴状遺構底面火山灰検出状況（南から）

(30) 六日市場遺跡
むいかいちば

所 在 地 奥州市衣川区大字下衣川字六日市場 遺跡番号・略号 N E 65 - 2346・MK I - 05
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所 調査対象面積 5,500 m²
 事 業 名 一関遊水地事業衣川左岸築堤工事 発掘調査面積 5,500 m²
 発掘調査期間 平成 17 年 4 月 11 日 ~ 9 月 29 日 調査担当者 川又 晋・水上明博・木戸口俊子

遺跡の立地

本遺跡は奥州市衣川区の南東部に所在し、旧衣川村役場から南東約 5 km に位置する。立地は衣川北岸の河岸段丘であり、標高は約 24.0 m である。調査区は概ね平坦で、調査区東側と衣川に接する南端は段丘崖になっている。

調査の概要

今回の調査では掘立柱建物跡 3 棟、柱穴 154 個、溝跡 4 条、土坑 4 基、波板状遺構 2 基が検出された。SD 1 (西側)、SD 2 (東側) は調査区を南北に横切る大規模な溝である。どちらも上幅約 2 m、深さ約 1.3 m で、出土遺物から 12 世紀の溝跡と判断できる。SD 1 と SD 2 の間の空間には遺構がなく、SD 2 より東側にも遺構は全く無い。一方、西側の SD 2 よりも西側には掘立柱建物や土坑が存在し、それらの遺構が切れ目なく西隣の細田遺跡に連続して展開していく。この遺構配置から、SD 1、SD 2 は衣川北岸に広がる 12 世紀の遺跡群の東端を区画する遺構と推測できる。最も東側に位置する掘立柱建物跡 SB 1 は正方形の平面形で、特異な形状を呈している。12 世紀に属する遺物はかわらけ、国産陶器、中国産白磁、短刀、はさみがある。

12 世紀以外の遺物では弥生土器、土師器が出土している。また、明確な所属時期は不明であるが黒曜石製のラウンドスクレーバーが 3 点出土している。



航空写真（右・六日市場、左・細田遺跡）

ほそた
(31) 細田遺跡

所在地 奥州市衣川区大字下衣川字六日市場
委託者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事業名 一関遊水地事業衣川左岸築堤工事
発掘調査期間 平成 17 年 4 月 11 日～9 月 29 日

遺跡番号・略号 N E 65 - 2334 · H T - 05
調査対象面積 5,400 m²
発掘調査面積 5,840 m²
調査担当者 島原弘征・羽柴直人

遺跡の立地

本遺跡は奥州市衣川区の南東部に所在し、旧衣川村役場から南東約 5 km に位置する。立地は衣川北岸の河岸段丘であり、標高は約 24.5 m である。概ね平坦な地形で、南端は衣川に向かって急激に標高を減ずる。

調査の概要

今回の調査では掘立柱建物跡 41 棟、柱穴状小土坑 900 個、溝跡 8 条、土坑 29 基、波板状遺構 2 基が検出された。出土遺物は大別すると 12 世紀と近世の遺物があり、両時代の複合遺跡と考えられる。

掘立柱建物跡の多くは所属時期が不明であるが、四面庇建物のように、確実に 12 世紀に属する建物も存在しており、他にも 12 世紀に属する建物の存在を予測させる。また出土遺物から 12 世紀に属すると判断される土坑、溝跡が複数以上検出され、今回の調査区域が 12 世紀に使用された空間であることは確実である。12 世紀の出土遺物はかわらけ、国産陶器、中国産青磁がある。

また、近世の遺構、遺物は「六日市場屋敷」と呼ばれる近世屋敷に伴うものである。出土遺物と寛文年間の検地帳から 17 世紀中葉に成立した屋敷と推測される。なお、東隣の六日市場遺跡、西隣の接待館遺跡とは遺構が切れ目無く連続しており、一連の遺跡として把握・検討する必要がある。



衣川遺跡群全景

(32) 接待館遺跡

所 在 地	奥州市衣川区大字下衣川字七日市場	遺跡番号・略号	N E 65 - 2343・S T K - 05
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	10,600 m ²
事 業 名	一関遊水地事業衣川左岸築堤工事	発掘調査面積	10,600 m ²
発掘調査期間	平成 17 年 6 月 1 日～ 11 月 16 日	調査 担当者	羽柴直人・島原弘征・川又 普 横井猛志・水上明博

遺跡の立地

本遺跡は奥州市衣川区の南東部に所在し、旧衣川村役場から南東約 5 km に位置する。立地は衣川北岸の河岸段丘であり、標高は約 24.5 m である。調査区は概ね平坦で、衣川と接する南端は河川の浸食により急崖になっている。

調査の概要

今回の調査では掘立柱建物跡 42 棟、柱穴状小土坑 1131 個、溝跡 8 条、堀跡 3 条、土坑 22 基、竪穴住居 5 棟、焼土 7 基が検出された。遺構検出は調査区の全面について終了しているが、精査を終了していない遺構が多々ある。堀 SD 1 は幅 7 m、深さ 2 m の規模で、調査区域の東側と西側（その間約 120 m）で検出されている。これは SD 1 が調査区外の北側を巡って、東側と西側がつながっている状況と考えられ、SD 1 が遺跡を開んでいると推測できる。さらに、堀 SD 1 で開まれた範囲のはば中央部には幅 3 m、深さ 1.3 m の堀（SD 3）で開まれた東西約 40 m の内部区画が存在し、接待館遺跡は外部区画と内部区画を持った居館と解釈できる。SD 3 からは多量の 12 世紀後半のかわらけが出土し、堀の内部でかわらけを使った儀式・儀礼が盛んにおこなわれたことを示している。

また調査区内からは、少量ではあるが 15 ~ 16 世紀の陶磁器も出土しており、掘立柱建物の中には中世に属する建物もあると推測される。



航空写真（直上）

(33) 衣の関道遺跡

所 在 地	奥州市衣川区大字下衣川字閑谷起地内	遺跡番号・略号	N E 65 - 2351 · K S M - 05
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	14,800 m ²
事 業 名	一関遊水地事業衣川左岸築堤工事	発掘調査面積	14,800 m ²
発掘調査期間	平成 17 年 4 月 11 日～11 月 14 日	調査担当者	福島正和・須原 拓

遺跡の立地

奥州市の南端、衣川によって形成された低位段丘上に位置し、南側直近を衣川が流れる。今回の調査区は衣川の曲線に沿う東西に長い形状で、調査前は水田であった。調査区の標高は 23 m 前後である。調査の概要

今回の調査では掘立柱建物跡 30 棟、土坑 87 基、溝跡 16 条、池状遺構 1 基、テラス状遺構 1ヶ所、中～近世墓 5 基、カマド状遺構 15 基を検出した。掘立柱建物は 12 世紀から近世までのものがあると考えられる。また、池状遺構は西半において石を用いた州浜と考えられる岸を検出し、テラス状遺構は斜面地上部を人工的に削り出した平坦面を検出した。平坦面は帯状を呈し、南北方向に延びる。いずれの遺構も出土遺物から 12 世紀代の遺構と考えられる。今回の調査区は、層位および出土した遺物から、平安時代から近世にかけての集落跡および中世から近世にかけての墓域の一部であると考えられる。

遺物は大コンテナで約 5 箱出土した。12 世紀代の遺物は、かわらけ 3 箱、渥美・常滑などの国産陶器片 1 箱、中国産磁器 15 片である。その他の時代では中～近世陶磁器類、土師器、須恵器、灰釉陶器 2 片、縄文土器などが出土した。土器・陶磁器以外には砥石、碁石、硯などの石製品、土錘、瓦片、火打金、鉄釘などが挙げられる。



航空写真（直上）

2 独立行政法人関係

せんそくみなみ
(34) 千足 南 遺跡

所 在 地	下閉伊郡田野畠村字千足 59-16	遺跡番号・略号	K G 11 - 1013 · S Z M - 05
委 託 者	独立行政法人緑資源機構	調査対象面積	2,297 m ²
事 業 名	東北北海道整備局下閉伊北建設事業所	発掘調査面積	2,297 m ²
発掘調査期間	平成 17 年 6 月 1 日～7 月 25 日	調査担当者	米田 寛・林 熟

遺跡の立地

本遺跡は田野畠村役場から約 7 km 北西の山間部に位置する。標高 320 ~ 330 m で、遺跡西側には千足沢が普代川方向へと南流する。おおむね緩斜面地形であるが、その中でも堅穴住居跡は比較的平坦な場所に構築されている。周辺には沼袋遺跡（縄文後期前葉）、坂下遺跡（縄文後期後葉）、子木地の台遺跡（平安時代）など、普代川流域を中心に遺跡が点在する。

調査の概要

今回の調査では堅穴住居跡 3 株、土坑 4 基、焼上遺構 3 基を検出した。出土した遺物から縄文時代早期末～前期初頭のキャンプ跡、奈良～平安時代の集落跡と考えられる。

遺物は、縄文時代については纖維混入土器（早期末～前期初頭）がまとまって出土した。また、早期中葉の沈線文土器 2 点、尖底土器 2 点や石鏸、尖頭器、石匙、剥片、碎片などが出土している。奈良～平安時代については、土師器壺、骨片、水晶製剥片が堅穴住居跡から出土している。また、調査区西側の 2 号堅穴住居跡の埋土からは、十和田 a 火山灰と思われる灰白色火山灰を検出した。



千足南遺跡全景

(35) 飯岡才川遺跡 第8次調査

所 在 地	盛岡市飯岡新田2-46-3ほか	遺跡番号・略号	L E 16-2291・I SW-05-08
委 託 者	独立行政法人都市再生機構	調査対象面積	1,135 m ²
	岩手都市開発事務所	発掘調査面積	839 m ²
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整理事業	調査担当者	濱田宏・石崎高臣
発掘調査期間	平成17年9月1日～9月29日		

遺跡の立地

遺跡はJR東北本線盛岡駅の南西約2kmに位置し、零石川右岸の河岸段丘面の微高地上に立地する。標高は123～124m前後である。南側には旧河道を挟んで古代の集落遺跡である細谷地遺跡が、西側には主に縄文時代の狩り場だった矢盛遺跡が立地する。

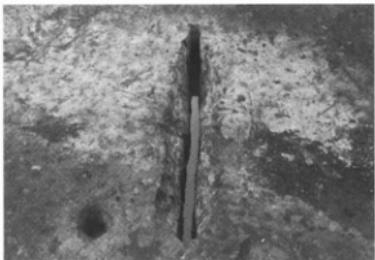
調査の概要

竪穴住居跡4棟、住居状遺構2棟、陥し穴状遺構2基、柱穴状土坑約35個を検出した。竪穴住居跡は、9世紀後半～10世紀前半の平安時代前期のものであろう。カマドが確認されなかつたものを住居状遺構とした。竪穴住居跡を切っているが、おおむね古代に属すると考えられる。陥し穴状遺構は、縄文時代のものと考えられる。調査区のはば全域から柱穴状土坑が検出されているが、掘立柱建物を構成するようなものはない。

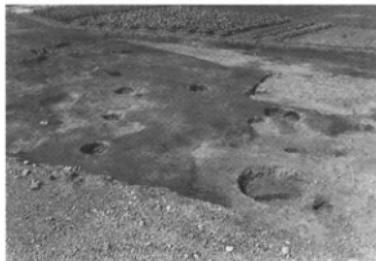
遺物は、土師器や陶磁器などが小コンテナで1箱ほど出土している。土師器の大部分は9世紀後半～10世紀前半に位置づけられるものである。



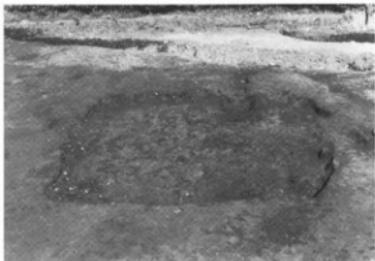
溝跡（手前は7次調査区）



おとし穴



掘立柱建物跡（古代）



竪穴住居跡（古代）

ほそやち
(36) 細谷地遺跡 第9次調査

所 在 地	盛岡市向中野字野原1-6	遺跡番号・略号	L E 26 - 0214 · O H Y - 05 - 09
委 託 者	独立行政法人都市再生機構	調査対象面積	1,835 m ²
	岩手都市開発事務所	発掘調査面積	1,835 m ²
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整理事業	調査担当者	金子佐知子
発掘調査期間	平成17年4月12日～11月18日		

遺跡の立地

細谷地遺跡は、盛岡市の南西、JR 東北本線仙北町駅から南西に約 1.3 km に位置する。遺跡は零石川によって形成された沖積段丘上にある。標高は 122 m 前後である。

調査の概要

今回の調査では、堅穴住居跡 11 棟、溝跡 2 条、土坑 12 基、焼土遺構 2 基、畝間状遺構 1 カ所、墓壙 1 基などを検出した。ほとんどが、奈良、平安時代の遺構である。なお、今次調査区の北側と南側を 10 次調査として同時に調査しており、同様に奈良、平安時代の集落跡を検出している。

過去 8 回にわたる遺跡西側の調査では平安時代の集落が検出されていたが、遺跡東側にあたる今回 の調査では、奈良時代の集落も存在することがわかった。奈良時代の堅穴住居跡は、調査区を南北に伸びる沢状の地形に沿って分布し、平安時代の堅穴住居跡は西側を除き、調査区全体に分布している。

今次調査区では堅穴住居跡は奈良時代が 1 棟、平安時代が 10 棟検出された。平安時代の堅穴住居跡 1 棟から床面に焼土跡や鉄床と見られる礫が検出されており、鍛冶を行った可能性がある。また、小型の住居跡 1 棟から、壁外柱穴が検出されている。

溝跡はいずれも出土遺物や検出層位、墓壙、土坑との重複関係から古代と考えられる。

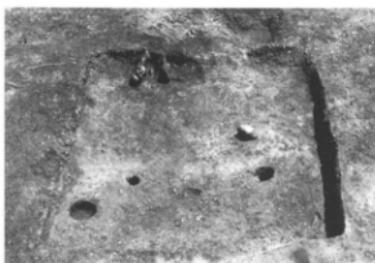
土坑には埋土に炭や焼土を含み、掘り方をもつものが 6 基ある。これらのうち、2 基から焼成時の欠損品とみられる剝片状の平安時代の土器器臺破片が多数出土した。

墓壙は火葬骨を埋葬しており、永楽通宝が出土している。

出土遺物は、大コンテナで 6 箱の土器、中コンテナで 2 箱の石器が出土した。圧倒的に平安時代の土器が多く、奈良時代の土器は小コンテナ 1 箱、縄文土器、弥生土器はそれぞれ小 1 袋程度である。平安時代の堅穴住居跡の 1 棟からは、樹木状の植物が線刻された内外面黒色の土器小破片が出土している。



奈良時代の堅穴住居跡



平安時代の堅穴住居跡

むかいなかのだて
(37) 向中野館遺跡 第7次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田2地割124-1ほか 遺跡番号・略号 LE 26-0205・OMN-05-07
 委 託 者 独立行政法人都市再生機構 調査対象面積 795 m²
 岩手都市開発事務所 発掘調査面積 795 m²
 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業 調査担当者 八木勝枝・水上明博・藤原大輔
 発掘調査期間 平成17年7月15日～11月15日

遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約1.3kmに位置し、平石川によって形成された沖積段丘上とその周辺の旧河道（湿地）に立地する。

調査の概要

第8次調査と合わせ、縄文時代のフ拉斯コ状土坑1基、平安時代の堅穴住居跡3棟、土坑2基、柱穴状土坑（堅穴住居跡の残骸らしい）5個、中世の曲輪跡1箇所、堀跡4条、柱穴状土坑100個以上、古代以降時期が特定できない柱穴状土坑100個以上、土師器・須恵器大コンテナ約1箱、古代の鉄器（刀子など）3点、砥石類（自然砾をそのまま利用）約50点、中世の銭貨（永楽通宝。柱穴から出土）6枚、鉢状の木製品1点（堀底から出土）が発見された。

これまでの調査の続きで、調査区は三箇所に分かれ、北と中央の調査区は、7次の周りに8次の調査区が存在するため、遺構は両方の調査区にまたがるものが多い。南側の調査区は、8次のみである。

今回の最大の成果は、遺跡の北西端を調査したことで、遺跡全体の様子と地形が推測できた点である。周辺の地形は東西方向に広がり、北から南に向かって、湿地、自然堤防状の細長い段丘、湿地、広い沖積段丘と続く。遺跡は、これらの地形を南北に継続するように立地する。

広い沖積段丘上は細谷地遺跡という古代の集落跡が広がるので、向中野館遺跡は、これと一部重複していることになる。これは、向中野館遺跡が本来中世の館跡で、北館と南館の二つからなり、その南館が、広い沖積段丘上の北西端にある可能性が高いためである。

向中野館遺跡の北西端に見つかった曲輪跡は、東西方向は堀で区画し、南北方向は湿地という自然地形に区画され、防御性の高いものであるが、規模は7×7mほどの非常に狭いもので、ここから発見された柱穴は、数が少ない上に規則的に並ばず、建物を推定復元することはできなかった。北館の主郭は、今回の調査区の東側に存在する可能性が高い。



曲輪と堀跡（南から）



曲輪上に広がる柱穴状土坑

3 岩手県・市関係

いたこやしき
(38) 板子屋敷 3 遺跡

所 在 地	軽米町大字上館 22 地割 25 - 13 ほか	遺跡番号・略号	I F 74 - 0096・I K Y 3 - 05
委 託 者	二戸地方振興局農政部農村整備室	調査対象面積	5,100 m ²
事 業 名	広域農道整備事業軽米九戸第2期地区	発掘調査面積	4,800 m ²
発掘調査期間	平成 17 年 6 月 1 日～11 月 11 日	調査 担当 者	中村繪美・木戸口俊子・北田歎

遺跡の立地

遺跡は、軽米町の北部、町役場の北東約 4 km に位置する。遺跡の南側を流れる雪谷川の支流である坊里沢川によって開析された右岸に延びる丘陵縁辺部に立地し、埋没谷を挟んで西側は東斜面、東側は南斜面となっている。今年度は東側を調査対象としており、当調査区の標高は 315 ～ 281 m である。

調査の概要

今年度の調査区では、遺跡の大半を急な斜面が占める中、わずかな緩斜面である尾根頂部および南斜面から、竪穴住居跡 8 棟、土坑 35 基、土器埋設遺構 7 基、焼土遺構 2 基が検出された。竪穴住居跡と土坑は重複しているものが多く、また土坑は形態の違いから、時期や用途の違いがありそうである。

遺物は、土器が大コンテナで 9 箱、石器が中コンテナで 1 箱が遺構内外から出土している。土器は縄文時代後期を中心に、早期、晚期、弥生時代後期のものも若干含んでいる。早期の土器は、南斜面のごく限られた範囲の低位面からのみ出土しており、次年度以降調査する予定である。



航空写真（直上）

(39) 館 II 遺跡

所 在 地	二戸市浄法寺町御山館地内	遺跡番号・略号	J E 37 - 0075・TT II - 05
委 託 者	二戸地方振興局土木部	調査対象面積	3,720 m ²
事 業 名	緊急地方道路整備事業浄法寺工区	発掘調査面積	4,730 m ²
発掘調査期間	平成 17 年 5 月 19 日～9 月 9 日	調査 担当 者	丸山直美・千葉正彦

遺跡の立地

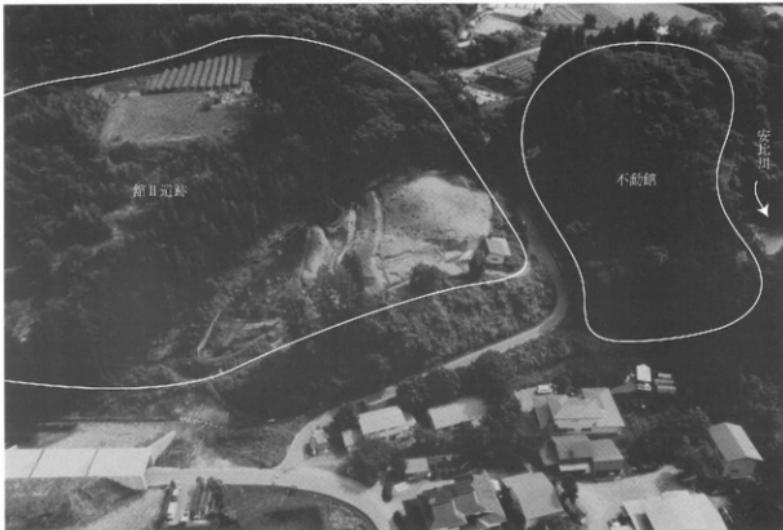
遺跡は、東北自動車道浄法寺 IC から南西約 1.2 km の地点に位置し、東西を沢に挟まれ北側に張り出す丘陵の縁辺部に立地する。北側 0.3 km を蛇行しながら東流する安比川との比高は 32～39m を測る。道を挟んで西側には同じく中世城館「不動館」が隣接する。西側約 1.2 km には、当地を所領した浄法寺氏の居館として知られ、市の教育委員会によって継続調査が行われている浄法寺城跡がある。

調査の概要

土坑 14 基、円筒形陥し穴状遺構 28 基、溝状陥し穴状遺構 23 基、炉跡 1 基（以上、縄文時代）、竪穴住居跡 3 棟、焼上跡 1 基（以上、古代）、曲輪 5 箇所、帯曲輪 1 箇所、堀跡 3 条、大溝 2 条、土塁 1 箇所、切岸状遺構 2 箇所、竪穴建物跡 9 棟、竪穴状遺構 7 棟、掘立柱建物跡 1 棟（以上、中世）、柱穴群 548 個、墓塚 1 基（以上、時期不明）が検出された。

遺跡の主体である館跡は、東西両側の谷地形を利用し、南端は尾根を横断する堀で区画防御する構えとなっており、全体の規模は東西約 250m、南北約 300m の範囲に及ぶ。遺跡の縄張りは、前方（北方）に曲輪群を配置する東西 2 つの郭で構成され、今回の調査区はこのうち西側の郭にあたる。

遺物は縄文土器が少量出土しているほか、中世陶磁器片、刀子、古銭、茶臼など、主に館跡に関わる遺物が大コンテナで 2 箱分出土しており、中世後期に営まれた山城であることが判明した。



航空写真（北から）

いいおかさいかわ

(40) 飯岡才川遺跡 第9次調査

所 在 地	盛岡市飯岡新田 2-46-3 ほか	遺跡番号・略号	L E 16 - 2291 · I S W - 05 - 08
委 託 者	盛岡市都市整備部盛岡南整備課	調査対象面積	2,337 m ²
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整理事業	発掘調査面積	6,107 m ²
発掘調査期間	平成 17 年 7 月 25 日～ 11 月 10 日	調査担当者	濱田 宏・村木 敬・石崎高臣

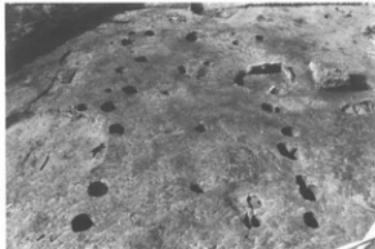
遺跡の立地

遺跡は JR 東北本線盛岡駅の南西約 2 km に位置し、零石川右岸の河岸段丘面の微高地上に立地する。標高は 123 ~ 124m 前後である。南側には旧河道を挟んで古代の集落遺跡である細谷地遺跡が、西側には主に縄文時代の狩り場だった矢盛遺跡が、北側には旧河道を挟んで古代の集落・墓域だった飯岡沢田遺跡が立地する。

調査の概要

堅穴住居跡 17 棟、住居状遺構 7 棟、掘立柱建物跡 5 棟、土坑 21 基、溝跡 12 条、陥し穴状遺構 20 基、円形周溝 16 基、墓壙 2 基、柱穴状土坑多数を検出した。この中には調査未了のものも含まれ、特に円形周溝は 15 基を次年度調査に持ち越している。堅穴住居跡は 9 世紀後半～ 10 世紀前半の平安時代前期のものが中心だが、これまで当遺跡での調査で未確認だった 8 世紀代のものが 2 棟検出されている。カマドが確認されなかったものを住居状遺構としたが、おおむね古代に属すると考えている。掘立柱建物は遺物の出土がなく詳細な時期は不明だが、柱穴の掘方の規模や柱間距離などから、おおむね古代（2 棟）と近世（3 棟）に分けられる。土坑の所属時期も不明だが、大部分は古代のものであろう。溝跡は、埋土に十和田 a テフラを含むものが 2 条あり、うち 1 条は一部未検出部分があるけれども方形に巡るようである。円形周溝は 1 基のみ精査した。年代などの詳細は次年度の課題である。陥し穴状遺構は、縄文時代のものと考えられる。調査区のほぼ全域から柱穴状土坑が検出されているが、掘立柱建物を構成するようなものはない。

遺物は、土師器・須恵器・陶磁器・鉄製品などが大コンテナで 3 箱ほど出土している。大部分は 9 世紀後半～ 10 世紀前半のもので、一部 8 世紀代および 9 世紀前半のものも含まれる。



掘立柱建物跡（近世）



円形周溝

はそやち
(41) 細谷地遺跡 第10次調査

所 在 地	盛岡市向中野字野原1-17ほか	遺跡番号・略号	L E 26-0214・O H Y-05-10
委 託 者	盛岡市都市整備部盛岡南整備課	調査対象面積	6,678 m ²
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整備事業	発掘調査面積	10,545 m ²
発掘調査期間	平成17年4月12日～11月18日	調査担当者	金子佐知子・北村忠昭 木戸口俊子・八木勝枝 金子昭彦

遺跡の立地

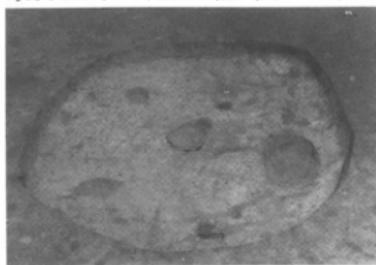
本遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南に約1.3kmに位置し、零石川によって形成された自然堤防上に立地する。調査区の標高は約122mである。

調査の概要

今回の調査では縄文時代の竪穴住居跡1棟、フ拉斯コ状土坑3基、弥生時代の焼土遺構1基、奈良時代の竪穴住居跡10棟、土坑1基、溝跡1条、平安時代の掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡35棟、墓壙1基、土坑28基、焼土遺構1基、溝跡5条、古代の土坑16基、溝跡7条、近世の掘立柱建物跡1棟、墓壙1基、土坑10基、溝跡4条、不明遺構2基、時期不明の土坑1基、焼土遺構3基、溝跡2条が検出された。

縄文時代の竪穴住居跡は出土遺物から晩期前葉のもので、県内でも確認例の少ないものである。古代の遺構は過年度の調査と同様、平安時代の竪穴住居跡が中心であるが、これまで細谷地遺跡では確認されていなかった奈良時代の竪穴住居跡が10棟検出され、遺跡の東側に集落が営まれていることが確認された。当該期の竪穴住居跡は北西向きのカマドを持つ特徴を持っている。平安時代の竪穴住居跡は一辺が5m以上の大形のものが1棟、2~5mの中形のものが32棟、2m未満のものが2棟で、なかには一辺1.2mの非常に小形のものもある。カマドは北向き・東向き・南向き・西向き・北西向き・南東向きカマドなど様々なものがあり、1棟に2基や3基持つ竪穴住居跡もある。その他の遺構では、平安時代の掘立柱建物跡や墓壙が検出された。

遺物は大コンテナで約17箱出土し、竪穴住居跡から出土した土師器、須恵器が主体である。その他には縄文土器、弥生土器、土製品、石器、石製品、鉄製品、古銭、瓦、陶器、磁器などが出土した。特筆すべき出土遺物として、平安時代の竪穴住居跡から、断片的な資料であるが、唐草文のある瓦と考えられるものが出土した点が挙げられる。



竪穴住居跡（縄文時代）



竪穴住居跡（平安時代）

むかいなか の だて
(42) 向中野館遺跡 第8次調査

所 在 地	盛岡市飯岡新田2地割124-1ほか	遺跡番号・略号	L E 26 - 0205 · OMN - 05 - 08
委 託 者	盛岡市都市整備部盛岡南整備課	調査対象面積	955 m ²
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整理事業	発掘調査面積	1,202 m ²
発掘調査期間	平成17年7月15日～11月15日	調査担当者	金子昭彦

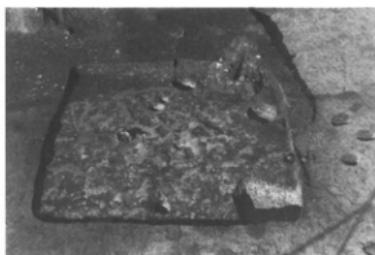
遺跡の立地

遺跡は、JR 東北本線盛岡駅から南約 2.5km、沖積段丘上と周辺の旧河道（湿地）に立地する。

調査の概要

第7次調査と合わせ、縄文時代のフラスコ状土坑1基、平安時代の竪穴住居跡3棟、土坑2基、柱穴状土坑（竪穴住居跡の残骸らしい）5個、中世の曲輪跡1箇所、堀跡4条、柱穴状土坑100個以上、古代以降時期が特定できない柱穴状土坑100個以上、土師器・須恵器大コンテナ約1箱、古代の鉄器（刀子など）3点、砥石類（自然砾をそのまま利用）約50点、中世の錢貨（永楽通宝。柱穴から出土）6枚、箆状の木製品1点（堀底から出土）が発見された。

調査区は三箇所に分かれ、北と中央の調査区は、7次の周りに8次の調査区が存在するため、遺構は両方の調査区にまたがるものが多い。カマドの焚口そばに土坑を掘って底に完形の壺を置き、埋め戻すという祭祀跡が住居跡2棟に見られた点が特筆される。南側の調査区は、8次のみだが100 m²と狭く、昨年の調査区の隣で旧河道が続き、平安時代の泥炭層の中から伐採痕のある木が発見された。



平安時代の竪穴住居跡



カマド祭祀跡？



伐採痕のある木



フラスコ状土坑

もとみやくまどう
(43) 本宮熊堂A遺跡 第29次調査

所 在 地 盛岡市本宮熊堂 69-6 ほか
 委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南開発課
 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整備事業
 発掘調査期間 平成17年6月1日～6月30日

遺跡番号・略号 L E 16-2107・OKD 05-29
 調査対象面積 283 m²
 発掘調査面積 283 m²
 調査担当者 濱田 宏・石崎高臣

遺跡の立地

遺跡は盛岡市の南西部、零石川の南方約1.5kmにあり、零石川によって形成された河岸段丘上に立地する。付近の標高はおよそ123mで、隣接する本宮熊堂B遺跡よりも2mほど低くなっている。

調査の概要

今回の調査範囲は、昨年度行われた第24次調査の東側に隣接する箇所である。検出された遺構は、前回調査時に確認された旧河道のほか、縄文時代の焼土1基、炉跡2基、晩期の遺物包含層1箇所、平安時代の溝跡2条、時期不明の土坑1基、柱穴30個である。

縄文時代の遺構と遺物包含層は旧河道の北岸にあって、時期はいずれも晩期後葉に属するものである。また、土器とともに石器剥片や未製品、残核などが出土したことから、この周辺は石器製作の場であったことも明らかとなった。平安時代とした溝跡2条は、ほぼ平行して東に延びているが、一方だけに灰白色火山灰が堆積しており、2条の溝には多少の時期差があることがわかった。旧河道からは、昨年度同様縄文時代晩期後葉の土器や土製品、奈良・平安時代の土師器・須恵器、動植物遺体などが出土した。幅は6～8m、深さは最大で2mを測り、東に向かうにつれて深さを増している。土壤の堆積状況から、この河は平安時代には埋まりきり、流れはほとんどなかったものと考えられる。



旧河道全景



石製品出土状況



旧河道断面

(44) 野古 A 遺跡 第 29 次調査

所 在 地	盛岡市下鹿妻字北 40- 2 ほか	遺跡番号・略号	L E 16 - 2155 · O N K - 05 - 29
委 託 者	盛岡市都市整備部盛岡南整備課	調査対象面積	3,455 m ²
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整理事業	発掘調査面積	3,088 m ²
発掘調査期間	平成 17 年 4 月 12 日～6 月 13 日	調査 担 当 者	八木勝枝・金子昭彦

遺跡の立地

本遺跡は標高 124～125 m 前後の砂礫段丘Ⅲ面に立地する。第 29 次調査区は 3 地点に分かれており、北・東調査区は比較的安定した高位面に立地する。南調査区には第 24 次調査区からつながる段差が認められ、微高地に古代の堅穴住居跡が位置している。

調査の概要

第 29 次調査では堅穴住居跡 5 棟、掘立柱建物跡 1 棟、住居状遺構 1 棟、陥し穴状遺構 4 基、土坑 10 基、柱穴状小土坑 157 個が検出された。

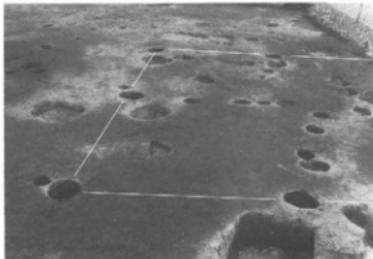
陥し穴状遺構は南調査区南西端に 4 基まとまって検出された。南調査区の南に隣接する第 19・20 次調査区でも陥し穴状遺構が 14 基調査されており、北への広がりを確認できた。陥し穴状遺構は細長い溝状の平面形で深さ 1 m 近くになり、2 基ずつのまとまりが等高線にほぼ直交して配置されている。出土遺物はないが、形態から绳文時代晚期の陥し穴状遺構と考えられる。

奈良時代の堅穴住居跡は、南調査区の陥し穴状遺構に近接する微高地で 1 棟検出された。本遺跡の奈良時代集落は過去の調査で多数検出されており、今回検出した堅穴住居は集落の南西端である可能性もあるが、調査区外の西側は標高が一段高く、野古 A 遺跡の未調査区や鬼柳 C 遺跡が位置しているため、別集落の一部を構成する可能性も否定できない。今回調査した 1 棟からは、指頭押圧により口縁部装飾が施された土師器壺が出土している。

平安時代の堅穴住居跡は北調査区で 3 棟、東調査区で 1 棟検出された。従来確認されている本遺跡の平安時代集落の一部を構成すると考えられる。北調査区で検出された 3 棟の堅穴住居跡の中間に住居状遺構 1 棟が検出された。床面の硬化やカマドが検出されなかつたため住居状遺構としたが、焼土や遺物が大量に投げ込まれており、堆積土も人為堆積の様相を呈していたため、周辺の堅穴住居構築の際に生じた土の廃棄や遺物廃棄に用いられた可能性が指摘できる。掘立柱建物跡は北調査区で 1 棟検出された。一部調査区外だが、2 間 × 2 間と考えられる。9 世紀末～10 世紀初頭の土師器壺が出土している。



RA077 (奈良時代住居跡)



RB004 (掘立柱建物跡)

(45) 新平遺跡

所 在 地	北上市新平2地割190番地ほか	遺跡番号・略号	ME 55-0081・N P - 05
委 託 者	北上地方振興局農林部農村整備室	調査対象面積	4,934 m ² (うち確認調査 1,750 m ²)
事 業 名	経営体育成基整備事業江釣子第1地区	発掘調査面積	4,934 m ² (うち確認調査 1,750 m ²)
発掘調査期間	平成 17 年 4 月 13 日～7 月 15 日	調査担当者	西澤正晴・横井猛志・水上明博

遺跡の立地

遺跡は北上市の北西部、新平地区に所在する。遺跡の中心は村崎野段丘上にあり、古代駅家跡擬定地として岩手県指定史跡となっている。今回の調査はこの段丘より一段低い面となっている。遺跡北と東側には河川改修された黒沢川が流れている。今回の調査区の標高は 85 ~ 88 m であり、西から東に向けて傾斜している。

調査の概要

今回の調査では、竪穴住居跡 2 棟、溝跡 20 条、土坑 24 基、井戸跡 1 基、土器捨て場 1 箇所などが検出された。遺物は大コンテナ数で 22 箱分が出土している。

は場整備事業に関連した調査のため、調査区が非常に細長くなつてお完掘した遺構は少ない。今回の調査は遺跡本体がある段丘より一段低いため集落が存在する可能性は低いと思われたが、竪穴住居跡等の発見により平安時代の集落が一段下の段丘面にも広がっていることが確認された。これは 10 世紀後半と考えられる多量の土器群が出土したこととあわせて重要な成果のひとつといえよう。また、隣接して近世の新平屋敷が存在することから、それに関連すると思われる遺構・遺物も発見されている。



航空写真（南から）

よしがや
(46) 芦薈遺跡

所 在 地	北上市新平第4地割、藤沢9地割ほか	遺跡番号・略号	ME 55-0068・YG-05
委 託 者	北上地方振興局農林部農村整備室	調査対象面積	200 m ²
事 業 名	経営体育根基盤整備事業江釣子第1地区	発掘調査面積	200 m ²
発掘調査期間	平成17年7月1日～7月22日	調査担当者	水上明博・西澤正晴

遺跡の立地

遺跡は北上市北西部にあり、市北部の東西に広がる村崎野段丘上に立地する。調査区はこの段丘から一段低い面にかけての斜面部であり、標高は87～88mである。現況は畑地と水田である。

同じ段丘上には古代の大集落である藤沢遺跡や向かい合う西側の段丘には新平遺跡が存在する。調査区は水路付け替え分であり、幅が5mである。現状ではその中に水路が2本横断しており実際の調査面積はさらに少ないものとなっている。

遺跡の概要

検出された遺構は、土坑1基、溝路1条、不明遺構1基であるが、遺物は古代の土器を中心に入コンテナ8箱分出土している。これは調査区全域から出土するものであり、広義の遺物包含層が厚く存在していたと考えられる。遺構はこの包含層を除去後に検出されている。調査区の幅が狭小のため、この最下位面でしか遺構が確認できなかったが、上位層中に遺構があった可能性も残る。

いずれにせよ、今回の調査はその縁辺にあたるため、本遺跡の評価はその地点の調査をまって決定すべきと思われる。



航空写真（南から）

(47) 里古屋遺跡

所 在 地	住田町世田米字里古屋 11 番地ほか	遺跡番号・略号	N F 14 - 2005 · S G Y - 05
委 託 者	大船渡地方振興局土木部	調査対象面積	916 m ²
事 業 名	国道 397 号地域活性化支援事業	発掘調査面積	916 m ²
発掘調査期間	平成 17 年 4 月 8 日～ 6 月 28 日	調査担当者	北田 黒・中村絵美

遺跡の立地

本遺跡は気仙郡住田町の北西部、町役場から西に約 8 km に位置する。気仙川の支流である大股川北岸の山体裾部、南向き緩斜面上に立地しており、標高は 218 ~ 233m である。

調査の概要

本遺跡の調査は平成 15・16 年度の過去 2 カ年行っており、今年度は調査最終年である。

今回は前年度に引き続き縄文時代中期の竪穴住居跡 3 棟、土坑 5 基、中世の堀跡 1 条、時期不明のピット 34 個が検出された。出土遺物は大コンテナで縄文土器約 2 箱、石器約 0.5 箱、石製品、錢貨少量である。

本遺跡は前年度までの調査で、縄文時代前期後葉から後期前葉を主体とした集落であることが分かっている。竪穴住居跡はいずれも重複して検出されており、長期にわたって同一箇所に占地していたことが分かる。また、中世の堀跡は前年度に引き続き検出され、全長 45m・幅 2m と長大であり、断面は V 字形を呈している。



竪穴住居跡堆積状況



堀跡



調査区全景（南から）



土器出土状況

平成 17 年度（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所長 相原 康二 副所長 小野寺 満寿

〔管理課〕

課長	圭澤 正吾	主査	高橋 俊幸	正子
課長補佐	中嶋 賢一	主事	猿橋 橋	
主任主査	高橋 清助			

〔調査第一課〕

首席文化財専門員兼 調査第一課長	三浦 謙一
文化財専門員	小山内 透
文化財調査員	阿部 勝則 (世界遺産登録支援派遣)

文化財調査員	木戸口 俊子
文化財調査員	千葉 正彦
文化財調査員	杉沢 昭太郎 (柳之御所支援派遣)

期限付調査員	村上 拓
期限付調査員	西澤 正直
期限付調査員	丸山 美熏
期限付調査員	北田 美絵
期限付調査員	中村 絹志

〔調査第二課〕

課長	佐々木 清	文紀介子
主幹兼課長補佐	中川 重義	宏彦人之博
課長補佐	高橋 佐	熱治
文化財専門員	金子 漢	昭直

文化財調査員	田子 金	雅明
文化財調査員	柴星 濱	泰浩
文化財調査員	吉水 上	二郎
文化財調査員	田溜 (県教委研修派遣)	

期限付調査員	木村 敬和
期限付調査員	島福 正忠
期限付調査員	村根 忠貴
期限付調査員	北戸 勝
期限付調査員	須八 浩弘
期限付調査員	木又 勝
期限付調査員	川原 高伸
期限付調査員	丸山 勝
期限付調査員	島村 弘
期限付調査員	石原 勝
期限付調査員	荒谷 大輔
期限付調査員	藤原 臨

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第490集
平成17年度発掘調査報告書

印 刷 平成18年3月20日

発 行 平成18年3月27日

発 行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話(019)638-9001
FAX(019)638-8563

印 刷 第一印刷有限会社
〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ四丁目6-40
電話(019)646-6001

